岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 151

津島遺跡2

武道館建設当初予定地の発掘調査

2000

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 151

津島遺跡2

武道館建設当初予定地の発掘調査

2000

岡山県教育委員会

1　現在の岡山県総合グラウンド〈星印が武道館建設当初予定地〉（北から）

2　昭和43年の調査区〈武道館建設当初予定地〉（南から）

巻頭図版2

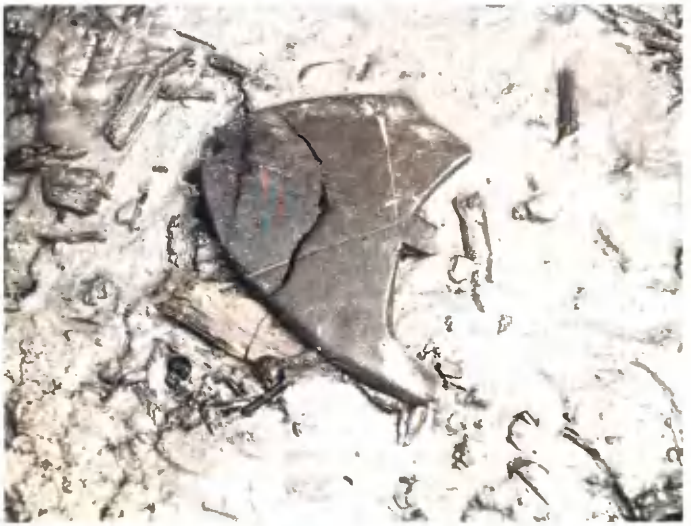
1　C区の竪穴住居２
（西から）

2　D区の舟形土壙３
（北から）

3　C区の杭列２
（南から）

1　C区の土壙２
（南西から）

2　土壙２の弥生土器
出土状態



3　鋤の出土状態

巻頭図版4

1　舟形土壙４
　　出土土器

2　A区の包含層
　　出土土器

3　石製品
　　土製品

序

岡山県下三大河川の一つであります旭川は、県中央部をほぼ南北に貫流し瀬戸内海に注ぎますが、河口近くの両岸には広大な岡山平野を形成しています。そこには多数の遺跡が知られており、重要な遺跡も少なくありません。西岸に所在する岡山県総合グラウンドを中心とする津島遺跡も、弥生時代の遺跡として戦前から知られていましたが、昭和36年の岡山国体の整備に伴う調査でおびただしい遺構・遺物が発見され、改めて重要さが認識されました。

昭和43年、岡山県総合グラウンド内に岡山県が武道館建設を計画し、周知の遺跡であったにもかかわらず工事着工したことに端を発し、県教育委員会の不手際などもあり、遺跡の保護・保存が全国的に高まる中で、遺跡そのものと行政による保存処置について強い注目が集まりました。その間、文化庁を始めとする関係諸機関、研究者、遺跡保護団体などの尽力によって遺跡の重要性が明らかにされ、ついに武道館建設当初予定地を含む約5.6haが国指定史跡として保存されることとなりました。

ところが平成17年開催の岡山国体主会場をめぐって、県財政の悪化から指定地の近隣にある陸上競技場の整備を図ってその開催が可能かどうか、検討せざるを得なくなりました。県教育委員会としましては、遺跡の重要性とかつての保存運動の経緯から、ことの重大さを認識して、岡山県文化財保護審議会に諮って意見を聴すことはむろんのこと、さらに、岡山県遺跡保護調査団から推薦された研究者各位をもって、津島遺跡検討委員会を設け、議論をいただきながら、平成９年度から調査を進めることといたしました。

一方、刊行されないまま現在にいたり、懸案となっていた過去の調査報告書につきましても、調査と併行して作成すべきではないかとの強い意向もあがってきました。そこで過去の調査参加者の意見を拝聴するとともに、協力が得られるかどうか打診いたしたところ快諾が得られましたので、ここに、念願の報告書刊行にこぎつけることができました。

報告書刊行にあたっては、文化庁、奈良国立文化財研究所を始めとする関係諸機関、津島遺跡検討委員会、過去の調査に参加された研究者各位、岡山県遺跡保護調査団の諸先生に、繰り返しご討議いただくとともに、およそ30年前の記録類を整理し、あるいは記憶を呼び起こすなど多大のご苦労をおかけしました。上記の諸機関・諸氏のご協力なくしては、とうてい刊行にいたらなかったものと思う次第で、末筆ながら、衷心より厚くお礼申し上げます。

平成12年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　葛　原　克　人

例　言

1　本報告書は、岡山武道館建設予定地の発掘調査をまとめたもので、津島遺跡の報告書としては２冊目にあたる。

なお、予定地の名称は、最初の建設地を「武道館建設当初予定地」、現在武道館が建設されている場所を「武道館建設予定地」とする。

2　遺跡は岡山市津島一帯に広がるが、中心は岡山市いずみ町２番１号に所在する岡山県総合グラウンドで、発掘調査地点はその北西部にあたる。

3　武道館当初予定地の発掘調査は、1968（昭和43）年度に第１次調査を岡山県教育委員会、そして第２次調査を岡山県津島遺跡発掘調査委員会が、さらに1969（昭和44）年度には第３次調査を岡山県津島遺跡発掘調査委員会が実施した。

また、武道館建設予定地の発掘調査は、1969（昭和44）年度に岡山県教育委員会が行った。

4　報告書の作成は、主に岡山県古代吉備文化財センター職員平井勝が担当し、４月から６月までは岡本泰典が担当に加わったほか、高畑知功、島崎東の協力を得て1999（平成11）年度に行った。なお、全般にわたり岡山県教育庁文化課参事正岡睦夫の指導を得ている。

5　報告書の作成にあたっては、津島遺跡検討委員会から指導・助言を得たほか、文化庁、奈良国立文化財研究所、岡山大学考古学研究室、岡山理科大学、瀬戸内考古学研究所、倉敷考古館、調査に参加された研究者諸氏、岡山県遺跡保護調査団などの関係諸機関、諸氏から指導・協力を得た。記して感謝の意を表します。

6　報告書の執筆は、第３章を正岡が、付載は高畑が、それ以外は平井が行った。なお、第４章第２節は岡山県教育委員会編（昭和44年津島遺跡調査団「昭和44年岡山県津島遺跡調査概報」昭和44年５月17日）『岡山県津島遺跡調査概報』昭和45年３月の文章を引用した。また、第４章第３節の文中で『概報』と略しているのは前記の文献をさす。

7　報告書で使用した高度は海抜高であり、方位は磁北であるが、挿図にこれらの記載の無いものは実測図に記載の無いものである。

8　報告書の第２図に使用した地図は、国土地理院発行の1/25000地形図「岡山北」・「岡山南」を複製・加筆したものである。

9　報告書の編集は平井が担当した。

10　本報告書に関係する出土遺物ならびに図面・写真類は、表１のとおり岡山県古代吉備文化財センターを始め、奈良国立文化財研究所、岡山大学考古学研究室、瀬戸内考古学研究所、倉敷考古館に保管している。

本文目次

序
例　言
本文目次
第1章　地理的・歴史的環境 …… 1
第2章　報告書の作成 …… 7
A　報告書作成の契機 …… 7
B　報告書作成の経過 …… 7
C　報告書作成の体制 …… 9
第3章　発掘調査の経緯 …… 11
第1節　武道館建設問題の経過 …… 11
第2節　調査の経過 …… 17
A　武道館建設当初予定地の調査 …… 18
B　武道館建設予定地の調査 …… 20
第3節　調査の体制 …… 21
第4章　調査の概要 …… 23
第1節　遺構の名称と全体図 …… 23
A　遺構の名称 …… 23
B　全体図について …… 23
第2節　層　　序 …… 25
A　層序の名称 …… 25
B　微高地の層序 …… 25
C　低湿地の層序 …… 28
第3節　遺構と遺物 …… 31
A　遺構の概要 …… 31
B　弥生時代前期 …… 36
C　弥生時代中期 …… 65
D　弥生時代後期 …… 70
E　古墳時代の遺構 …… 78
F　古代以降 …… 80
G　時期不明の遺構 …… 82
H　包含層・その他の遺構出土遺物 …… 86
第5章　ま　と　め …… 97
付載　武道館建設予定地の確認調査 …… 123

挿図目次

第１図　遺跡の位置（星印）…… 1
第２図　調査地点と周辺の主要遺跡分布図
(S=1/25000)…… 2
第３図　調査区（武道館建設当初予定地）の位置
(S=1/2500)……11
第４図　第１・２次調査の基準線（S=1/800）…17
第５図　トレンチおよび調査区の位置（S=1/800)…17
第６図　第３次調査の基準線（S=1/800）……18
第７図　各種全体図の比較……24
第８図　土層断面図の位置……25
第９図　ＴⅡの土層断面１（S=1/60）……26
第10図　ＴⅡの土層断面２（S=1/60）……27
第11図　ＴⅡの土層断面３（S=1/60）……28
第12図　西南調査区のＣ－Ｄ土層断面(S=1/60)…29
第13図　北調査区のＥ－Ｆ土層断面（S=1/60）…29
第14図　微高地の基本層序と出土遺物……30
第15図　トレンチおよび調査区配置図（S=1/800)…31
第16図　遺構全体図（S=1/500）……32
第17図　第１次・２次の遺構全体図（S=1/500)…33
第18図　Ｄ区の遺構配置と遺構名（S=1/400）…34
第19図　Ｃ区の遺構配置と遺構名（S=1/400）…34
第20図　Ｂ区の遺構配置と遺構名（S=1/400）…35
第21図　Ａ区の遺構配置と遺構名（S=1/400）…35
第22図　弥生時代前期の遺構全体図（S=1/600)…36
第23図　矢板状杭痕跡の平面と断面図(S=1/40)…37
第24図　ＴⅢ－３東壁断面（S=1/40）……38
第25図　竪穴住居２（S=1/80）と柱穴出土土器…39
第26図　建物１（S=1/80）……40
第27図　建物２（S=1/80）……40
第28図　建物３（S=1/80）……40
第29図　壁立建物１（S=1/80）……41
第30図　舟形土壙１（S=1/40）……42
第31図　舟形土壙１の出土遺物（１）……43
第32図　舟形土壙１の出土遺物（２）……44
第33図　舟形土壙１の出土遺物（３）……45
第34図　舟形土壙２（S=1/40）……46
第35図　舟形土壙２の出土遺物（１）……47
第36図　舟形土壙２の出土遺物（２）……48
第37図　舟形土壙２の出土遺物（３）……48
第38図　磨製石包丁の出土状態……48
第39図　舟形土壙２の出土遺物（４）……49
第40図　舟形土壙３（S=1/40）……50
第41図　舟形土壙３の出土遺物（１）……51
第42図　舟形土壙３の出土遺物（２）……52
第43図　舟形土壙３の出土遺物（３）……52
第44図　舟形土壙４（S=1/40）……53
第45図　舟形土壙４の出土遺物（１）……54
第46図　舟形土壙４の出土遺物（２）……55
第47図　舟形土壙４の出土遺物（３）……56
第48図　舟形土壙４の出土遺物（４）……56
第49図　舟形土壙５（S=1/40）と出土遺物……57
第50図　土壙32（S=1/30）と出土遺物……58
第51図　土壙33（S=1/30）……58
第52図　土壙34（S=1/30）と出土遺物……59
第53図　土壙35（S=1/30）……59
第54図　土壙36（S=1/30）……59
第55図　土壙36の出土遺物（１）……60
第56図　土壙36の出土遺物（２）……61
第57図　土壙37（S=1/30）と出土遺物……61
第58図　土壙31の出土遺物（１）……62
第59図　土壙31の出土遺物（２）……63
第60図　土壙の出土遺物……63
第61図　炉１（S=1/30）……64
第62図　ピットの出土遺物……64
第63図　弥生時代中期の遺構全体図（S=1/600)…65
第64図　ＴⅣ－２南半の東壁土層断面(S=1/40)…66
第65図　東南Ｔの杭痕跡４（S=1/30）と西壁土層
断面（S=1/60）……67
第66図　杭列１（S=1/30）……68
第67図　Ｃ区南東部の杭痕跡２と杭列２
(S=1/30)……69
第68図　溝７の出土遺物……70

第69図　各地点の断面（A・C＝1/60，B＝1/30）…71
第70図　ＴⅢ－３の西壁土層断面（S=1/60）……72
第71図　弥生時代後期の遺構全体図（S=1/600）……72
第72図　ＴＡの北東壁断面（S=1/30）……73
第73図　竪穴住居１の出土遺物……73
第74図　土壙２（S=1/30）と出土遺物　……73
第75図　土壙28（S=1/30）と出土遺物　……74
第76図　土壙29（S=1/30）と出土遺物　……74
第77図　ＴⅢ－２西壁断面（S=1/60）……75
第78図　ＴⅣ－２南壁断面（S=1/30）……75
第79図　溝３の出土遺物……76
第80図　溝４の出土遺物……77
第81図　溝13・14・15・16の断面（S=1/80）……77
第82図　溝15・16・17の出土遺物……78
第83図　古墳時代の遺構全体図（S=1/600）　……79
第84図　溝５の断面（S=1/30）……79
第85図　溝６の断面（S=1/30）……79
第86図　溝６の出土遺物……80
第87図　古代以降の遺構全体図（S=1/600）　……80
第88図　畦状遺構（S=1/60）……81
第89図　土壙列（S=1/60）……82
第90図　土壙24（S=1/30）……83
第91図　土壙25の出土遺物……84
第92図　土壙30の出土遺物……84
第93図　その他の遺構（名称は調査時のもの）出土遺物……85
第94図　包含層出土遺物＜１＞（弥生時代前期）…86
第95図　包含層出土遺物＜２＞（弥生時代前期）…87
第96図　包含層出土遺物＜３＞（弥生時代中期）…88
第97図　包含層出土遺物＜４＞（弥生時代中期）…89
第98図　包含層出土遺物＜５＞（弥生時代中期～古墳時代前期）……90
第99図　包含層出土遺物＜６＞（弥生時代後期～中世）……91
第100図　Ｅ層出土の遺物（弥生時代前期）……92
第101図　その他の遺構および包含層出土の土製品……92
第102図　その他の遺構（名称は調査時のもの）および包含層出土の石製品＜１＞　……93
第103図　その他の遺構（名称は調査時のもの）および包含層出土の石製品＜２＞　……94
第104図　包含層出土の石製品＜１＞……95
第105図　包含層出土の石製品＜２＞……96
第106図　包含層出土の鉄製品　……96

表　目　次

表１　武道館建設当初予定地出土遺物の保管先と資料の種類
表２　土器観察表
表３　土製品一覧表
表４　石製品一覧表
表５　鉄製品一覧表
表６　新旧遺構名称対照表

巻頭図版目次

巻頭図版１－１　現在の岡山県総合グラウンド＜星印が武道館建設当初予定地＞（北から）
２　昭和43年の調査区＜武道館建設当初予定地＞（南から）
巻頭図版２－１　Ｃ区の竪穴住居２（西から）
２　Ｄ区の舟形土壙３（北から）
３　Ｃ区の杭列２（南から）
巻頭図版３－１　Ｃ区の土壙２（南西から）
２　土壙２の弥生土器出土状態
３　鋤の出土状態
巻頭図版４－１　舟形土壙４出土土器
２　Ａ区の包含層出土土器
３　石製品・土製品

図版目次

図版１－１　現在の岡山県総合グラウンド
＜星印が武道館建設当初予定地＞
(北東から)
２　現在の津島遺跡
＜武道館建設当初予定地＞（北から）
３　作業風景（昭和43年）
図版２－１　調査区の近景（Ｃ・Ｄ区）（南から）
２　調査区の近景（Ａ・Ｂ区）（南西から）
図版３－１　掘立柱建物１（西から）
２　掘立柱建物２（北東から）
３　壁立建物１（北から）
図版４－１　舟形土壙１（西から）
２　舟形土壙１の東半部遺物出土状態
(東から)
３　舟形土壙２の遺物出土状態
(南西から)
４　舟形土壙２（南から）
図版５－１　舟形土壙３（北から）
２　舟形土壙４（北から）
３　舟形土壙４の遺物出土状態
(北から)
図版６－１　舟形土壙５の遺物出土状態
(北東から)
２　東南トレンチの微高地と杭痕跡４
(南から)
図版７－１　杭列１の断面（南から）
２　杭列１（東から）
３　杭列２（東から）
図版８－１　ＴⅢ－２の矢板状杭痕跡２（南から）
２　矢板状杭痕跡２の拡大（東から）
３　木器の出土状態
４　木器の出土状態
図版９－１　土壙24（北から）
２　祭祀土壙（南から）
３　溝13～17（南西から）
図版10－１　土壙墓１・２（西から）
２　畦状遺構（東から）
３　畦状遺構と土壙列（西から）
図版11－１　舟形土壙１出土の土器（１）
図版12－１　舟形土壙１出土の土器（２）
図版13－１　舟形土壙１出土の土器（３）
２　舟形土壙２出土の土器（１）
図版14－１　舟形土壙２出土の土器（２）
２　舟形土壙３出土の土器（１）
図版15－１　舟形土壙３出土の土器（２）
２　舟形土壙４出土の土器（１）
図版16－１　舟形土壙４出土の土器（２）
図版17－１　舟形土壙４出土の土器（３）
図版18－１　舟形土壙５出土の土器
２　土壙31出土の土器（１）
図版19－１　土壙31出土の土器（２）
２　包含層出土の土器(弥生時代中期)(１)
図版20－１　包含層出土の土器(弥生時代中期)(２)
図版21－１　包含層出土の土器(弥生時代中期)(３)
図版22－１　包含層出土の土器(弥生時代後期)
図版23－１　土製品
２　石製品（１）
図版24－１　石製品（２）
図版25－１　石製品（３）
図版26－１　石製品（４）
図版27－１　石製品（５）
２　舟形土壙２出土の磨製石包丁
(実物は現存していない)
３　土壙２出土のきぬた状木器
(実物は現存していない)
図版28－１　土壙２出土のカゴと木製品
(実物は現存していない)
２　石製品（実物は現存していない）

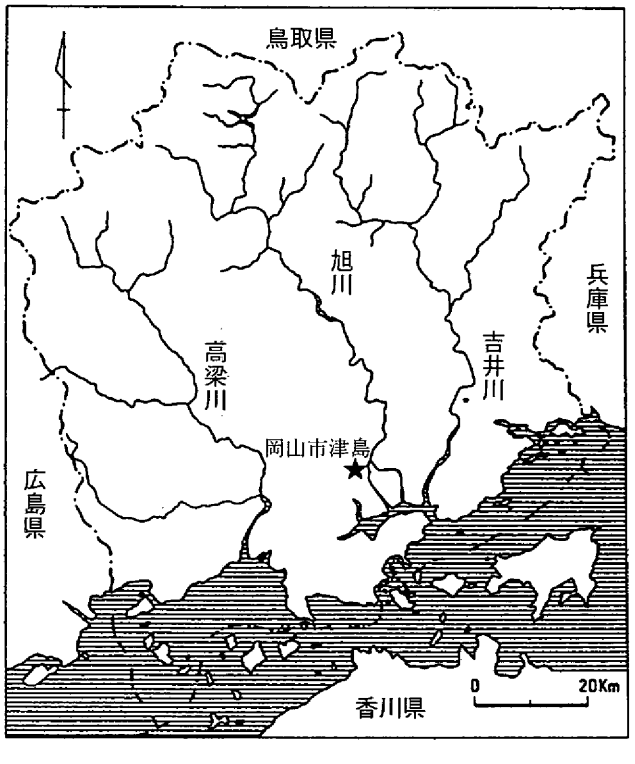
第１章　地理的・歴史的環境

岡山県のほぼ中央を南北に貫流する旭川は、下流部に岡山平野を形成し、瀬戸内海に注ぐ。岡山平野は、旭川が県中・北部で丘陵を深く削りながら多くの土砂を運び、平野の北側を画する山塊から平野に出る岡山市中原で、一気に吐き出された土砂が堆積した東南方向へ緩く傾く扇状地と、その南側に形成された三角州低地とからなる。そして三角州地帯が弥生小海退に伴う浅谷の開削作用を受け、分断されたものが微高地になったとされる（註１）。

微高地はさらに洪水などの河川の堆積作用によって高くなるとともに、微高地を分断していた小河川や低位部も埋没し、時代を経るとともに平野は広がっていき、現在のような広大な岡山平野が形成された。しかし、およそ東西６km、南北５kmの平野も、操山山塊から南側は近世の干拓によるものであり、さらに西側の岡山市大安寺や東側の岡山市長利一帯では平野の奥深くまで海が入り込んでいたと思われることから、弥生時代や古墳時代の生活の舞台は狭く、旭川を中心に東西４km、南北３kmあまりと推定される。

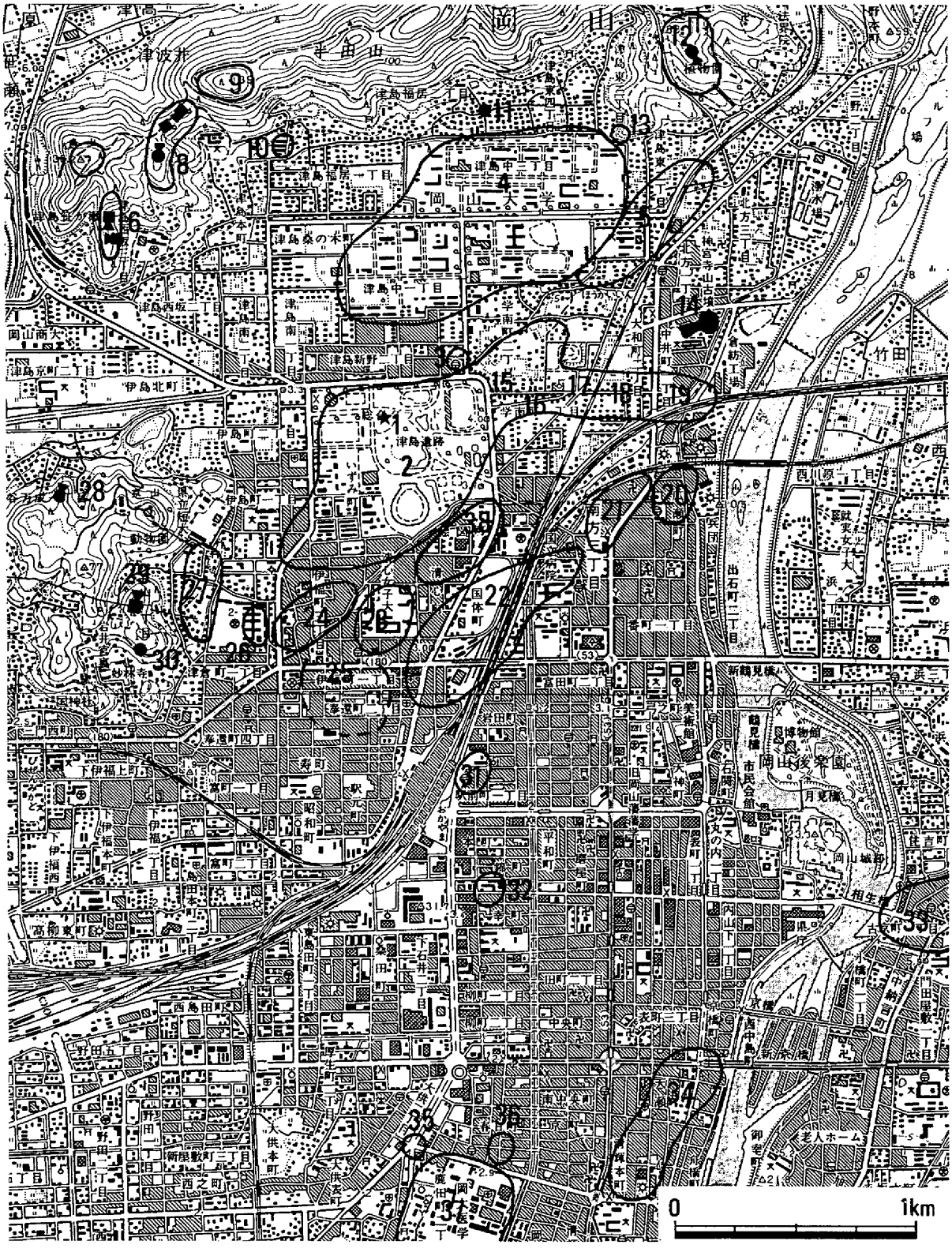
さて、旭川は現在１条の大きな流路となっており、津島遺跡はその西岸に所在するが、かつては岡山市中原から放射状に南流するいく条もの河川に分かれていた。その河川間には多くの微高地が認められ、そこにはたいがい遺跡が所在するが、特に東岸部では岡山市雄町から原尾島や沢田、そして兼基・今谷一帯、西岸部では岡山市津島から南方、そして伊福町一帯に微高地が発達し、弥生時代や古墳時代の大集落が形成されている。

旭川西岸に所在する津島遺跡は、岡山平野の北部にあたり、北側には平野の北側を画する半田山山塊が、西側には京山があり、南側には平野が開けている。津島遺跡の主要部が所在する岡山県総合グラウンド（岡山市いずみ町）一帯は、1908（明治41）年に置かれた陸軍第17師団の練兵場であったが、1948（昭和23）年５月に都市計画法による岡山都市計画事業津島運動公園に決定されて以後、公園として整備され今日にいたっている。



第１図　遺跡の位置（星印）

津島遺跡一帯は遺跡が集中するが、そのほとんどは弥生時代以後の遺跡であり、旧石器時代の遺跡は皆無、縄文時代の遺跡は朝寝鼻貝塚と津島岡大遺跡が知られているに過ぎない。朝寝鼻貝塚（註２）は半田山の山裾に立地する小規模な貝塚で、前期から後期までの遺物が発見されているが、前期の層から稲のプラント・オパールが検出されたことで注目を集めている。津島岡大



１．武道館建設当初予定地　２．津島遺跡　３．津島新野遺跡　４．津島岡大遺跡　５．津島江道遺跡
６．七つ坑古墳群　７．鳥山城跡　８．都月坂墳墓群　９．半田山城跡　10．津島福居遺跡　11．お塚様古墳
12．一本松古墳群　13．朝寝鼻貝塚　14．神宮寺山古墳　15．北方下沼遺跡　16．北方横田遺跡
17．北方中溝遺跡　18．北方地蔵遺跡　19．北方藪ノ内遺跡　20．広瀬遺跡　21．南方遺跡　22．南方遺跡
23．上伊福九坪遺跡　24．上伊福遺跡　25．未命名　26．伊福定国前遺跡　27．上伊福西遺跡
28．青陵古墳　29．津倉古墳　30．妙林寺古墳　31．未命名　32．未命名　33．未命名　34．天瀬遺跡
35．未命名　36．未命名　37．鹿田遺跡　38．絵図遺跡

第２図　調査地点と周辺の主要遺跡分布図（S=1/25,000）

遺跡（註３）は津島遺跡の北側に所在し、中期から晩期までの遺物が出土しているが、とりわけ後期では竪穴住居や炉、そして貯蔵穴などが豊富に検出されており、集落構造の一端がうかがえる。

水稲農耕は弥生時代の始まりを告げる重要な資料の一つで、津島遺跡の北東側に所在する津島江道遺跡（註４）は、弥生時代早期の水田が発見されたことで注目されている。しかし、この水田については疑問も投げかけられており（註５）、今後の課題であろう。また、津島岡大遺跡からも水田こそ検出されてはいないが、早期の遺物が多く出土している。

弥生時代前期になると津島岡大遺跡（註６）、津島江道遺跡（註７）、津島遺跡（註８）、北方下沼～北方地蔵遺跡（註９）、南方遺跡（註10）などで遺構・遺物の出土が知られているが、いずれもわずかな資料である。その中において、用排水路を整備し、畦畔で画された水田は広範囲に検出されており、技術的に完成された初期水稲農耕の様相がうかがえる。微高地縁辺に形成された水田に対し、微高地上には津島遺跡のように住居などが営まれていたと思われるが、南方（中電）遺跡（註11）ではさらに人骨が残存した土壙墓・木棺墓が発見されており、住居の近くに墓域を設けていたものと推定される。

中期の遺跡は津島遺跡の南側に多く見られる。特に南方遺跡（註12）や上伊福九坪遺跡（註13）では多くの遺構・遺物が出土し、集落の拡大がうかがわれる。とりわけ南方遺跡は拠点集落の様相を彷彿とさせ、河道からは多量の精巧な木製品が出土することに加え、石器未製品や剥片の存在から石器の生産をも行っていたことが見て取れる。また、微高地では竪穴住居など多くの遺構とともに、埋葬人骨も発見されている。そのほか絵図遺跡（註14）からも遺構・遺物が出土しているが、調査範囲がわずかであることから性格は不明である。また、北方中溝遺跡（註15）では水田が検出されており、前期から継続されていたものと考えられるが、前期ほどの広がりは確認されていない。集落の発展から推定して、著しい縮小は考えにくく、削平など、何らかの理由で検出できないと見るべきであろう。

後期の遺跡は津島遺跡を始め、その一帯の微高地にはたいがい認められるほか、さらに南側の平野にも遺跡が形成されるようになり、集落の一層の発展がうかがわれる。津島一帯では津島岡大遺跡（註16）で竪穴住居が検出されているが、前半を中心とする短期間の小規模な集落と推定される。津島江道遺跡（註17）では後期前半から古墳時代初頭の竪穴住居や土壙、そして溝などが発見されており、大規模ではないが長期間集落が営まれていたと考えられる。この集落の特異性は、多くの竪穴住居から鹿角や骨が出土することである。未加工品や加工品の存在から、ここで骨角製品が製作されたことは確実で、その製作集団の集落と考えられる。なお、弓を射る人と鹿および水鳥が描かれた後半の絵画土器が出土しており、精神生活の一端が垣間見られる。絵図遺跡（註18）は後期の溝や土壙が認められるが、調査範囲が狭いため詳細は不明であるが、南方遺跡の中国電力電線地中化埋設調査区（註19）では土器棺や土壙墓（人骨が残存）が発見されるなど、中期と同じく住居周辺に墓域の形成が見られる。中期に大集落を形成した南方遺跡から上伊福遺跡、あるいは上伊福九坪遺跡一帯は、後期になると衰退が著しい。おそらく後期になると津島遺跡から北側の微高地群に、集落が移動したのではなかろうか。

南部には天瀬遺跡や鹿田遺跡が所在し、いずれも中期末から後期にかけて集落の形成が見られる。このうち鹿田遺跡（註20）は中期末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居、井戸、土壙、溝などが発見されており、後期を中心に長期間集落が営まれていたことがうかがわれる。遺構の中には多くの炭

化物と製塩土器が廃棄された土壙が見られることから、海浜の集落であることを併せて考えると、塩の生産にかかわっていたものと思われる。天瀬遺跡（註21）は後期から古墳時代初頭の竪穴住居、土壙、井戸、溝などが発見され、長期間の集落形成が推定されるが、それに加えて龍を描いた線刻器台や装飾高杯、さらには各種の手捏土器などの多種多様で多量の祭祀用土器の存在は、この集落が単なる海浜集落ではなく特別な機能を担っていたことをうかがわせる。

ところで、後期終末から古墳時代になると半田山や京山など、平野周辺の丘陵上に墳丘墓や古墳が築造されるようになる。まず、後期末になると半田山には長辺約20m、短辺約16mの長方形をなす都月坂二号弥生墳丘墓（註22）が出現する。これに続く古墳は、岡山平野における最古の古墳の一つと考えられる七つ坦一号墳（註23）や都月坂一号墳（註24）で、京山では津倉古墳が築造されている。七つ坦一号墳は9基からなる七つ坦古墳群の中の中核的な古墳で、全長48mの前方後方墳である。埋葬施設は後方部と前方部に竪穴式石室が認められるが、長さ約5mの後方部石室は破壊が著しく副葬品は少なかった。前方部の石室は小形の粗雑なもので、副葬品は無かった。なお、墳丘からは特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪が出土している。都月坂一号墳は全長33mの前方後方墳で、埋葬施設は長さ約4mの竪穴式石室である。墳丘から発見された特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪は、最古の埴輪として「都月型」なる名称が与えられている。津倉古墳は調査されていないため詳細は不明であるが、墳丘の形から最古の一群に属するものと考えられている。その後、全長約65mの前方後円墳である一本松古墳（註25）などもつくられるが、概して中期古墳は少ないと言えよう。さらに、古墳時代後半期の古墳は前半期に比べると見る影もない。

以上に述べた丘陵上の古墳に対し、全長約150mの前方後円墳である神宮寺山古墳（註26）は、大形古墳としては唯一平野に築かれた古墳である。津島遺跡の北東部に位置する神宮寺山古墳は、副室から盗掘によって農具、工具、武器などの鉄器が多数発見されているが、中心的な埋葬施設は明らかではない。築造時期は4世紀末から5世紀前半頃と推定される。おそらく旭川西岸を掌握した首長の墓であろう。

古墳時代の集落としては津島遺跡を始め津島岡大遺跡、津島江道遺跡、北方下沼遺跡、南方遺跡、上伊福九坪遺跡、上伊福西遺跡（尾針神社南遺跡）、鹿田遺跡などが知られており、このうち南方遺跡（註27）のような前半期に属するものもあるが、多くは後半期のものである。津島江道（岡北中）遺跡（註28）は後半期の竪穴住居や土壙、溝などが検出されており、その中には鍛冶炉をもつものもあることから、鉄生産に係わる集落と推定される。同様のことは北方下沼遺跡（註29）でも見られる。以上の集落に対し、上伊福西（尾針神社南）遺跡（註30）では祭祀に係わる須恵器埋納土壙が発見されており、状況から考えて地鎮に係わるものとされている。

古代は津島遺跡、津島岡大遺跡（註31）、北方下沼～地蔵遺跡（註32）で条里関係と推定される溝が検出されている。集落の実態は今後の課題であるが、鹿田遺跡（註33）で掘立柱建物や井戸が発見されている。一般の集落とは異なり、津島江道遺跡では倉庫と考えられる総柱建物や掘立柱建物が規格的に配置されており、硯などの出土も併せて考えると、官衙的性格をもつものと推定される。

中世になると伊福定国前遺跡（註34）で掘立柱建物や溝が、鹿田遺跡（註35）では掘立柱建物や井戸、溝などが検出されており、集落の形成もうかがえるが、一方では広範囲に水田が認められることから、水田化が著しく進んだものと推定される。

註

註１　藤原健蔵・白神宏「岡山平野中部の沖積層と海水準変化」『瀬戸内海地域における完新世海水準変動と地形変化』　1986年

註２　富岡直人ほか「岡山市津島東３丁目　朝寝鼻貝塚発掘調査概報」『加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書』２　1998年

註３　山本悦世ほか「津島岡大遺跡３」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第５冊　1992年
阿部芳郎ほか「津島岡大遺跡４」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第７冊　1994年
土井基司ほか「津島岡大遺跡６」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第９冊　1995年
小林青樹ほか「津島岡大遺跡10」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第14冊　1998年

註４　神谷正義「最古の水田」『吉備の考古学的研究』（上）　1992年

註５　平井　勝「弥生時代への移行」『吉備の考古学的研究』（上）　1992年

註６　山本悦世ほか「津島岡大遺跡３」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第５冊　1992年
土井基司ほか「津島岡大遺跡６」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第９冊　1995年
横田美香ほか「津島岡大遺跡９」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第13冊　1997年

註７　高畑知功「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』18　1988年
草原孝典「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1997（平成９）年度　1999年

註８　考古学研究会「岡山県津島遺跡保存の訴えと遺跡の概要」『考古学研究』58　1968年
近藤義郎「津島遺跡と武道館事件」『岡山史学』第22号　1968年
岡山県教育委員会『岡山県津島遺跡調査概報』　1970年

註９　岡田博ほか「北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地蔵遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126　1998年

註10　柳瀬昭彦・岡本寛久「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』40　1981年
神谷正義ほか『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』（岡山市教育委員会）　1981年
扇崎由・安川満「上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区）Ⅰ」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1994（平成６）年度　1996年
扇崎由・安川満「上伊福・南方(済生会）遺跡（南方蓮田調査区Ⅱ)」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995（平成７）年度　1997年

註11　神谷正義ほか「南方（中電）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995（平成７）年度　1997年

註12　註10、註11に加え、下記の文献がある。
出宮徳尚・伊藤晃『南方遺跡発掘調査概報』（岡山市遺跡調査団）　1971年
内藤善史「南方遺跡・絵図遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』110　1996年
扇崎由・安川満「上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区）Ⅰ」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1994（平成６）年度　1996年
扇崎由・安川満「上伊福・南方（済生会）遺跡（上伊福立花Ⅲ調査区)」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1996（平成８）年度　1998年

註13　中野雅美・根木修「上伊福九坪遺跡」『岡山県史』第18巻　1986年
中野雅美「上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』14　1984年

註14　内藤善史「南方遺跡・絵図遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』110　1996年

註15　岡田博ほか「北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地蔵遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126　1998年

註16　松木武彦「津島岡大遺跡第10次調査＜保険管理センター予定地＞」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』11　1993年度　1995年

註17　註７に加え、下記の文献がある。

草原孝典「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1996（平成８）年度　1998年

註18　註14に同じ。

註19　註11に同じ。

註20　山本悦世ほか「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第３冊　1988年

松木武彦ほか「鹿田遺跡３」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第６冊　1993年

註21　出宮徳尚「天瀬遺跡」『岡山県史』第18巻　1986年

註22　近藤義郎「都月坂二号弥生墳丘墓」『岡山県史』第18巻　1986年

註23　七つ坑古墳群発掘調査団編『七つ坑古墳群』　1987年

註24　近藤義郎「都月坂一号墳」『岡山県史』第18巻　1986年

註25　近藤義郎「一本松古墳」『岡山県史』第18巻　1986年

註26　鎌木義昌「神宮寺山古墳」『岡山県史』第18巻　1986年

註27　柳瀬昭彦・岡本寛久「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』40　1981年

註28　草原孝典「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1996（平成８）年度　1998年

註29　註９に同じ。

註30　「尾針神社南遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995（平成７）年度　1997年

註31　家田淳一ほか「岡山大学津島北地区　小橋法目黒遺跡（ＡＷ14区）の発掘調査」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第１集　1985年

山本悦世ほか「津島岡大遺跡３」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第５冊　1992年

土井基司ほか「津島岡大遺跡６」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第９冊　1995年

小林青樹ほか「津島岡大遺跡10」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第14冊　1998年

註32　註９に同じ。

註33　註20に同じ。

註34　杉山一雄ほか「伊福定国前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』125　1998年

註35　註20に加え、下記の文献がある。

山本悦世ほか「鹿田遺跡Ⅱ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第４冊　1990年

山本悦世ほか「鹿田遺跡４」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第11冊　1997年

第２章　報告書の作成

A　報告書作成の契機

2005（平成17）年に開催される第60回国民体育大会の主会場をめぐっては、一旦は岡山市から要望のあった岡山市上道地区に新設する方針が決まった。ところが、その後県財政の悪化が深刻化する中で、既存施設を整備することによって経費節減を図る指針が大きく浮上し、岡山市いずみ町の岡山県総合グラウンド陸上競技場が有力な候補の一つとなった。1997（平成９）年６月、それが可能かどうかの問い合わせが国体準備室から文化課にあったが、文化課では津島遺跡の重要性とかつての保存運動の経緯から、極めて困難との判断を国体準備室に伝えた。しかし、財政再建団体への転落も念頭に置かざるを得ないという逼迫した県財政を背景に、知事は1997（平成９）年８月６日、国体主会場は県総合グラウンドの活用も検討せざるを得ない旨の意向表明を行った。知事の意向表明を受け、再度国体の開催が可能かどうか求められた県教育委員会は、慎重を期して、まずボーリング調査に着手し、引き続きトレンチ調査を計画する方途をとらざるを得なくなった。むろん多くの研究者や遺跡保護団体から意見を聴することが重要であると判断して、県遺跡保護調査団から推薦された研究者各位をもって、津島遺跡検討委員会を設けて、議論をいただきながら進めることとした。調査は1997（平成９）年度から津島遺跡検討委員会の指導、助言をできる限り尊重しつつ取り組んでいる。

全国有数の重要遺跡と認識されながら、いまだ報告書の刊行がなされないまま今日にいたり、懸案となっていた過去の調査報告書の作成についても、国体主会場に係わる調査と併行して行なうべきではないか、という強い意向も挙がって来た。そこで過去の調査参加者や文化庁の意見を拝聴する一方、過去の調査参加者の協力が得られるかどうか打診するとともに、津島遺跡検討委員会（検討委員会と略す）の指導を得ながら1999（平成11）年度に本報告書作成を行った。当初過去の調査を１冊にまとめることも考えたが、遺物の多さに加え資料収集にもかなりの時間を割かなければならないことから、２冊に分割し、とりあえず1999（平成11）年度は1968（昭和43）・1969（昭和44）年度に実施した、岡山武道館建設当初予定地の整理と報告書の刊行を行うこととなった。報告書の作成は主として岡山県古代吉備文化財センター職員平井　勝が担当し、岡山県教育庁文化課および文化財センターの先輩・友人から種々の助言と協力を受けたことを申し添えておきたい。

B　報告書作成の経過

岡山武道館に係わる資料は調査に参加した研究者個人、あるいはその研究者の属していた機関に保管されている現状から、まず保管先とその資料の内容を把握するとともに、収集につとめた。

今更いうまでも無いことながら、1960（昭和40）年代の初め頃には、県教育委員会の側にまったく遺物収蔵施設がなかったことに起因して、上記のように様々な管理方式をとらざるを得なかったのであって、長期にわたって保管いただいた各機関、各位に対し、深く感謝いたしたい。

その結果、表１に記した保管先とその内容が判明し、多くの資料提供を受けた。

なお、西川宏氏から1968（昭和43）年度の発掘調査の際、出土遺物の一部を山陽学園、石井中学校、

表１　武道館建設当初予定地出土遺物の保管先と資料の種類

保　管　先	資料の種類（内容）	数　量
岡山県古代吉備文化財センター	遺　物（土器・石器・土製品・植物遺体）	160箱
	図　面（遺構図・土層図）	25枚
	マイクロフイルム（遺構図・土層図）	53枚
	写　真（白黒・カラー・カラーR）	8冊
瀬戸内考古学研究所	遺　物（土器・石器・木器・土壌）	6箱
岡山大学考古学研究室	遺　物（土器・土壌）	10箱
	図　面（土層図）	21枚
	写　真	1冊
倉敷考古館	図　面（土層図）	10枚
	写　真	1冊
奈良国立文化財研究所	図　面（遺構全体図・土層図）	89枚
	写　真	3冊

香和中学校、関西高校、操山高校、岡山工業高校へ搬入して展示したらしく、その遺物が保管されている可能性があると言う話を聞いたので、探索を行った。その結果、山陽学園には現在でも保管されていることが判明したが、それ以外についてはおよそ30年余経過した今日、当時とは人的にも管理方式も大きく相違し、津島遺跡関連の遺物保管について確認することはできなかった。

遺構・遺物の整理は４月から岡山県古代吉備文化財センター（文化財センターと略す）と奈良国立文化財研究所（奈文研と略す）の資料を中心に進めた。遺構についてはまず調査区全体の配置を把握するため、奈文研の図を基に岡山県が作成した全体図と照合したが、かなりの食違いが認められることに加え、遺構名の不明なものあるいはいくつもの遺構名をもつものなどがあり、理解するまでにかなりの時間を要した。また、致し方ないことではあるがこれまでに報告されたものと、実測図等の土層名が異なったりしているため、検討に時間を費やしたが基本的には当時の見解を尊重して、そのままトレースを行って掲載している。

遺物の整理は文化財センター保管分から始めた。ほぼすべて洗浄と注記は終了しているため、復元作業から取り掛かったが、いろいろな名称の注記があるため各遺構との対応関係を明確にし得ないものが多い。できる限り混在をなくすように勤めるとともに、混在しているものや不明なものについてもなるべく多く復元して実測した。

実測は復元作業の終了したものから順次取り掛かり、文化財センター分は土器900点、石器92点、土製品６点、鉄器２点、玉類１点を実測した。10月には瀬戸内考古学研究所（瀬戸考研と略す）保管分の整理を行ったが、土器は実測するものが無く、石器１点が対象となった。

報告書の作成については調査に参加された県内外の主だった方々に相談し、賛意を得るとともに協力いただける旨の言葉をいただいた。こうした見通しの基に、検討委員会でも協議いただき報告書を進めていたが、当時の岡山県津島遺跡調査団団員近藤義郎氏から、個別に説明するのではなく、すべての団員を集めて意見を聞く会を開催してほしいとの申し入れが県文化課になされた。文化課として

も報告書作成にあたって調査状況などの情報を収集したいと考えていたが、検討委員会の意見を聞いて最終的に判断することにした。９月17日に開催された検討委員会に近藤義郎氏から報告書に関する会議開催の申し入れがあったことを報告するとともに意見を求めた。検討委員会の大方の意見は、調査に参加された研究者に意見を聞くことはむしろ当然のことで、可能な限り正確を期すべきだとの認識で一致し、文化課としてはこうした意見を踏まえ、遅まきながら1999（平成11）年11月20日に「津島遺跡発掘調査報告書打ち合わせ会議」を開催した。出席者は団員諸氏と文化課および文化財センター職員で、報告書作成にいたる経緯と現在の進捗状況および今後の作業について説明が行われた。出席者からは、これまで県教育委員会側から報告書作成についての積極的な呼びかけは一度も無かったが、我々としても報文未刊であることは気になっていた、との発言があった。そうして、報告書作成には協力をおしまない旨の意見とあわせ、保存運動の経緯についても正確な総括をするよう要請された。引き続いて調査状況や図面などについて、当時の見解や図面掲載の注意事項が述べられた。

団員の協力を受けて、12月から岡大保管分の整理、実測に取りかかった。さらに、平成12年１月には瀬戸考研に一部残っていることが判明した木器の整理、実測を行った。

原稿の執筆にあたっては、当時の見解を尊重しつつも、遺構毎の詳細な記述は困難と思われることから、概略的な記載とならざるを得なかったが、それでも理解不足から齟齬をきたしているという感は否めない。多くの助言をいただきながら、生かし切れなかったことを付言するしだいである。

C　報告書作成の体制

報告書作成にあたっては津島遺跡検討委員会をはじめ、文化庁、奈良国立文化財研究所、岡山大学考古学研究室、岡山理科大学、瀬戸内考古学研究所、倉敷考古館、当時の岡山県津島遺跡発掘調査団、岡山県遺跡保護調査団の諸機関・諸団体・諸氏からは有益なる指導・助言を得た。記して感謝の意を表したい。

1999（平成11）年度

津島遺跡検討委員会

顧　問

佐原　真	国立歴史民俗博物館館長	田中　琢	元奈良国立文化財研究所所長
坪井 清足	(財)大阪府文化財調査研究センター理事長		

委　員

稲田 孝司	岡山大学文学部長	亀田 修一	岡山理科大学助教授
小林 博昭	岡山理科大学教授	新納　泉	岡山大学教授
西川　宏	岡山理科大学非常勤講師	間壁 忠彦	倉敷考古館館長
松木 武彦	岡山大学助教授	山本 悦世	岡山大学助教授

幹　事

松井 英治	岡山県教育庁文化課課長	佐々部 和生	岡山県教育庁文化課課長代理
正岡 睦夫	岡山県教育庁文化課参事	葛原 克人	岡山県古代吉備文化財センター所長
松本 和男	岡山県教育庁文化課課長補佐（埋蔵文化財係長）		

岡山県教育委員会

教育長	黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長	宮野 正司
文化課	
課　長	松井 英治
課長代理	佐々部 和生
参　事	正岡 睦夫
課長補佐（埋蔵文化財係長）	松本 和男
主　任	奥山 修司

岡山県古代吉備文化財センター

所　長	葛原 克人
次　長	大村 俊臣
総務課	
総務課長	小倉　昇
課長補佐（総務係長）	安西 正則
主　査	山本 恭輔
調査第一課	
調査第一課長	高畑 知功
課長補佐（第一係長）	中野 雅美
文化財保護主幹	平井　勝（報告書担当）
文化財保護主幹	島崎　東
文化財保護主事	岡本 泰典（４月～６月報告書担当）

報告書作成については下記の方々より指導・助言を得ました。記して厚くお礼申し上げます。

文化庁記念物課

岡村 道雄

当時の岡山県津島遺跡調査団

近藤 義郎　水内 昌康　岡本 明郎
出宮 徳尚　間壁 葭子

奈良国立文化財研究所

工楽 善通

当時の岡山県教育庁社会教育課職員

高橋　護　河本　清

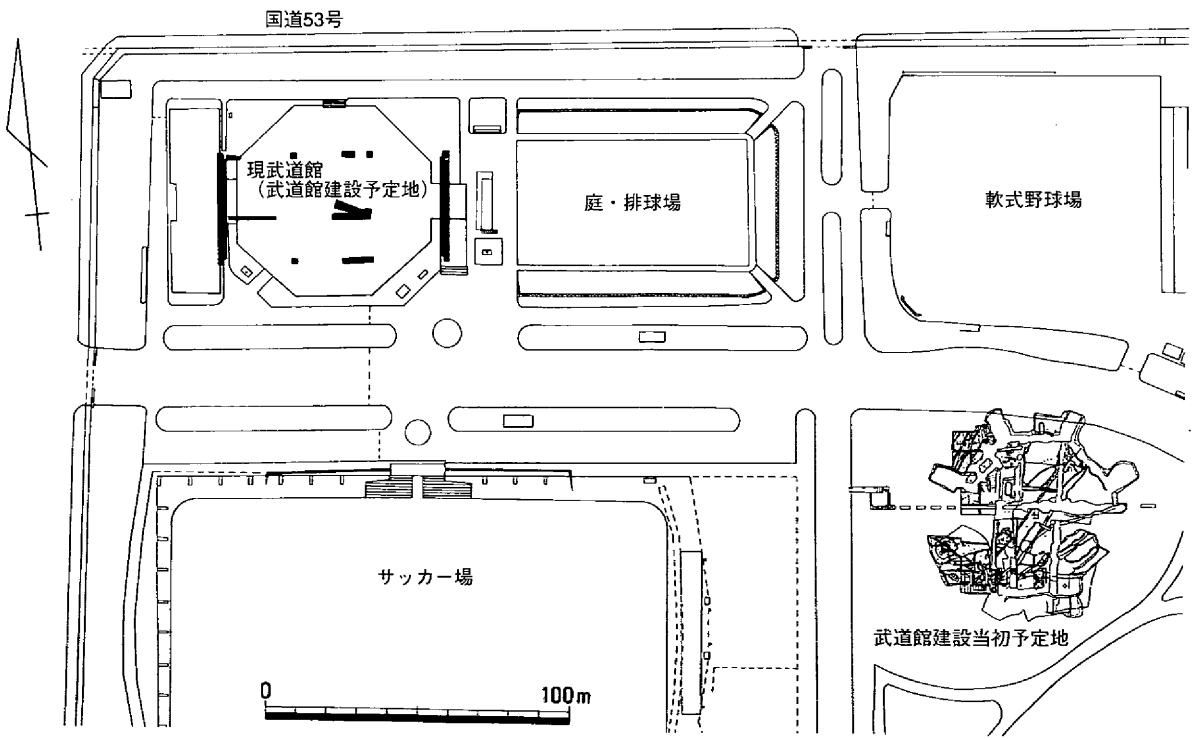
第３章　発掘調査の経緯

第１節　武道館建設問題の経過

津島遺跡は、戦前から知られていた著名な弥生遺跡であったが、1962（昭和37）年に行われた岡山国体の会場整備等に伴って、弥生時代の遺物が多数出土したことにより、さらに広く知られるようになっていた。

ところが、1968（昭和43）年５月18日、岡山県総合グラウンド内に建設中であった県営武道館の建設現場から新たに弥生土器が出土したことを機に、いわゆる武道館事件が起きたと言える。すなわち、本来周知の遺跡において土木工事を行うにあたっては、文化財保護法に基づく発掘届を文化財保護委員会（現文化庁）へ提出し、これを受けて、文化庁は、文化財保護の観点に立って必要な指示を行うことができるような法的流れになっている。それにもかかわらず、発掘届を提出しないまま工事着工に及んだのであって、今からすれば、この点がまずもって猛省すべき第一歩であった。ともかく、予定地に武道館を建設しようとした岡山県と、遺跡を保存すべきだとする諸団体の対立が２年にわたって続き、1971（昭和46）年１月５日、武道館建設当初予定地とその周辺が国指定史跡とされることによって、一応の決着を見た。その間の経緯についてまとめ、将来に備えたいと思う。

岡山県総合グラウンド内に武道館を建設することが発表されたのは、1968（昭和43）年１月12日で、５月10日から基礎工事に着手（武道館建設当初予定地）した。学生が工事現場で土器片を表採し、岡



第３図　調査区（武道館建設当初予定地）の位置（S=1/2,500）

山市教育委員会を通じて岡山県教育委員会へ報告されたことから、県教育委員会の係員が現地確認を行い、一時工事を中止して関係者と協議が行われた。一方、研究者から文化財保護委員会への問い合わせにより、文化財保護法第57条に基づく工事着手前の発掘届が提出されていないことも明らかになった。岡山県教育委員会は、工事着手前に提出すべきであった発掘届について文化財保護委員会と協議し、５月24日、発掘届を提出した。

５月20日に一時工事を中止して岡山県及び県教育委員会の関係者は協議を行い、「工事と併行して調査を行う」という方針が出され、工事を再開し、また、ボーリング調査を開始した。これによって遺跡の破壊は著しく進んだ。５月24日、この状況を知った文化財保護委員会から「工事を中止して必要な調査」を行うよう指示した。一方、岡山県遺跡保護調査団・岡山県考古学研究者の会・岡山県文化財を守る会の代表から岡山県及び岡山県教育委員会に対し、「工事を中止して、津島遺跡を保護し、武道館を他へ移すこと」などの抗議と要望を行った。このようにして工事は５月25日まで続けられた。

５月26日、文化財保護委員会文部技官の現地視察があった。５月28日、県教育委員会は単独の発掘調査に着手したが、発掘経験のない多くの人々、さらに周辺学校の生徒まで動員し、遺跡現場は「潮干狩り」といわれるほどの状況を呈した。一方、県内研究者は、全国の学術団体へも運動を広げ、各種団体から保存決議が出された。６月10日、岡山史学会・岡山史談会・岡山県教職員組合・岡山県高等学校教職員組合・岡山県遺跡保護調査団・岡山県勤労者音楽協議会・岡山勤労者演劇協議会・岡山映画サークル協議会・古代吉備研究会・岡山大学職員組合・岡山県歴史教育者協議会・日本科学者会議岡山支部・岡山県民主主義科学者協議会歴史地理部会・考古学研究会の14団体名で、県知事及び県教育長に対する「津島グランド遺跡保存要請」が提出された。しかし、県教育委員会単独の調査は６月25日まで行われた。

６月25・26日、文化庁（６月15日文化庁設置）から文化財保護専門委員杉原荘介明治大学教授と横山浩一文化庁調査官が来岡し、現地視察を行った。６月28日、文化庁重要遺跡緊急指定調査研究委員会が開かれ、続いて、７月５日、７月12日にも継続して審議され、７月12日、文化庁に対して、「重要な遺跡であることは確かだが、史跡指定のための資料をさらに整える必要がある」という趣旨の答申を行った。これを受けて、文化庁は県教育委員会に対し、「武道館敷地北西部の周辺を含め、さらに学術的な調査をし、十分な解明が必要である」との指示をした。

岡山県教育委員会は、７月16日、文化庁の指示を了承し、発掘調査のための専門家の派遣を要請する一方、岡山県遺跡保護調査団に対し、文化庁の指示に基づいて発掘調査への協力を要請した。岡山県遺跡保護調査団からは、「地元研究者の意見を十分反映するような体制をつくる」ことを条件に協力する旨の回答があった。

８月5日、文化財保護審議委員会専門委員上智大学教授八幡一郎、明治大学教授杉原荘介両氏が来岡し、津島遺跡発掘調査委員会を組織し、第１回委員会が開催された。八幡一郎氏を調査委員会委員長とし、発掘調査団を設置して、杉原荘介氏を団長、鎌木義昌氏を副団長とすることが決められた。また、調査期間を８月16日から９月25日までとすることも決められた。

８月15日、杉原荘介団長のほか、地元研究者で組織した津島遺跡発掘調査団が編成され、８月16日から発掘調査を開始した。まず、全体の平板測量を行い、６月に県教育委員会が単独で掘削した南北方向のトレンチ３本の断面を検討するとともに地形の変遷を明らかにする目的で新たに東西方向のト

レンチを設定した。

杉原荘介調査団長の来岡を得て、８月24日、９月８日の常任調査委員会に引き続き、９月15日に開かれた同委員会で報告書の作成方針が検討された。９月16日から22日の間、毎日、調査後に集まって討議を行い、「津島遺跡調査概要」がまとめられた。９月23日、発掘調査団会議を開催し、「津島遺跡調査概要」を検討し、津島遺跡調査委員会へ提出した。

９月25日、衆議院文教委員会の委員が来岡し、県教育委員会と発掘参加の研究者から、津島遺跡について事情聴取された。９月26日、津島遺跡調査委員会が開かれ、発掘調査団から提出された「津島遺跡調査概要」の審議を行い、岡山県教育委員会を経て文化庁へ提出された。９月27日、文化庁重要遺跡緊急指定調査研究委員会埋蔵部会が開かれ、遺跡の評価について審議された。10月４日、第59回衆議院文教委員会で、津島遺跡の保存問題が取り上げられ、今までの経緯について問題点を指摘された。

また、津島遺跡発掘調査団が作成した報告書とは別に、県教育委員会は内容の異なる「調査結果」を９月26日に文化庁へ提出していたことが11月19日の参議院文教委員会において明らかになった。この中に先の「津島遺跡調査概要」と異なって、「弥生時代前期の水田跡であることを示す確証は認められなかった」などの記述があり、諸団体は強く抗議を行い、津島遺跡発掘調査団は、「抗議および公開質問状」を文化庁と県教育委員会へ提出した。11月、先に津島グラウンド遺跡の保存を要望した15団体（後に１団体追加）は、津島遺跡保存の会を結成し、保存運動をいっそう強力に進めた。

10月29・30日に開かれた文化財保護審議会第三専門調査会での討議の結果、「重要な遺跡であることは分るが、史跡指定するには、なお若干の資料が不足しているから再調査を実施し、史跡指定の資料を整えるべきだという意見」が多数をしめた。これを受けて、文化庁は、再調査する方向で岡山県と協議を進め、昭和44年１月31日、文化財保護審議会の承認のもとに合意した。調査は、上智大学教授八幡一郎氏を団長として、文化庁、奈良国立文化財研究所、東京・京都・奈良国立博物館の職員で調査団を編成した。岡山県遺跡保護調査団は再調査に抗議し、参加を取りやめた。

２月17日、文化庁関係者の現地視察があり、調査計画が検討された。再調査に対して、奈良国立文化財研究所職員組合をはじめ先の津島遺跡発掘調査団等から反対の意見が出された。しかし、それに抗して、２月24日から再調査が開始された。調査は武道館建設当初予定地内を中心とし、周辺部へも拡張して進められた。北西部の微高地において、弥生時代前期の掘立柱建物、住居跡、土壙などが検出され、微高地から低湿地へも調査が進んだ。

４月５日、調査団の顧問である坂本太郎、有光教一、斉藤　忠、清水潤三、坪井清足の各氏と文化庁文化財保護部内山　正部長は現地視察を行い、八幡一郎調査団長から説明をうけた。４月20日、岡山大学で行われた第15回考古学研究会において、津島遺跡に関する研究報告および討議が行われ、遺跡の重要性が再認識された。4月21日、発掘調査を終了し、全体の埋め戻しが行われた。

４月28日、津島遺跡保存の会は文化庁に対し、42の歴史学・考古学関係諸学会の要望書を提出し、遺跡保存の要望を行った。今回の調査結果の報告書は、県教育委員会を経て、６月３日、文化庁へ提出された。その後、文化庁は、重要遺跡緊急指定調査研究委員会埋蔵部会に諮って史跡指定を検討し、武道館を岡山県総合グラウンドの北西部へ建設（武道館建設予定地）する方向で調整をはかった。８月１日、庁保記第160号で、文化庁次長安達健三から岡山県教育委員会委員長三宅熊男へ「津島遺跡について」の通知を出し、史跡指定の方針を示した。

文化庁の指示に基づく北西部の発掘調査は、岡山県教育委員会によって９月18日から開始された。調査の結果、弥生時代以後の低湿地であることが判明した。低湿地が埋没した後、古代に掘られた可能性がある溝が東西方向へ延び、埋土中から中世の土器片が出土している。さらに、溝は近代まで継続していることが分かった。調査中の９月22日、文化庁文化財保護審議会委員の八幡一郎氏らによる現地調査があった。文化庁は、八幡一郎氏らの報告に基づき、北西部については、記録調査の後、武道館建設を承認した。北西部の調査は９月30日に終了した。

９月24日、武道館建設の方向が確定したとして、県教育委員会は武道館問題に関連した処分を行った。処分の理由は、周知の津島遺跡に文化財保護法に定められた発掘届を提出しないまま武道館建設に着手し、また、必要な文化財の保護措置をとらず、文化財保護を担当するものとして職務を怠ったということである。これをもって、責任問題については、一応の決着を見た。1971（昭和46）年１月５日、武道館建設当初予定地とその周辺の56,370㎡を国指定史跡とされた。

岡山県において、埋蔵文化財への取り組みが本格的に始まった最初に起こった問題であり、その後の保護行政にも大きな影響を与えた。問題の決着を見るまでの間に生じた多くの課題については、今後も生かされるような文化財保護行政が必要である。

武道館建設に伴い、遺跡保存問題で岡山県内外の諸団体・個人から遺跡保存の要望・声明が表明され、全国的な広がりとなった。以下に、当時発表された文献を明記し、その動向を窺っていただくこととしたい。この経緯をまとめるにあたっては、『考古学研究』の57号から62号へ６回にわって掲載された津島遺跡保存の会「岡山県武道館事件の経過」や同誌上に掲載された「声明文」「抗議文」、近藤義郎「津島遺跡と武道館事件」『岡山史学』第22号を主に参考にしたが、理解が不十分な点もあったと思われるがご寛恕願いたい。文献目録作成にあたっては、西川　宏・春成秀爾両氏らのご教示をいただいて作成したものである。なお、多数のビラがくばられ、文献に収録されたものもあるが、一部に把握できなかったもののあることをお断りしたい。また、この経緯をまとめるにあたっては、県保管の資料以外に下記に記した文献も参考にさせていただいたこともあわせて、関係者に感謝申し上げたい。

津島遺跡武道館問題関係文献

1　考古学研究会編集部「岡山県武道館建設の経過」『考古学研究』57　考古学研究会　1968年7月

2　考古学研究会「声明　岡山県武道館事件について」同上

3　津島遺跡発掘調査団『岡山県津島遺跡調査概報』（「津島遺跡発掘ニュース」№３）　1968年

4　間壁忠彦「県自ら重要遺跡を破壊した岡山県武道館事件」『日本史研究』100号　日本史研究会　1968年９月

5　篠井孝夫、杉原荘介、和島誠一「昭和43年10月4日の会議に付した文化財保護に関する件」　第59回国会衆議院文教委員会議録５』衆議院事務局　1968年10月（『考古学研究』59に抜粋再録）

6　考古学研究会編集部「岡山県武道館事件の経過（二）」『考古学研究』58　考古学研究会　1968年10月

7　考古学研究会「岡山県津島遺跡保存の訴えと遺跡の概要」同上

8　岡山県遺跡保護調査団「岡山県津島グラウンド遺跡保存について再び訴える―経過と現状―」同上

9　考古学研究会ほか14団体「岡山市津島グラウンド遺跡の保存を」同上

10　津島グラウンド遺跡を守る会「岡山市津島総合グラウンド遺跡保存へ向けての声明』同上

11　明治大学考古学研究会津島総合グラウンド遺跡を守る特別委員会「岡山市津島総合グラウンド遺跡破壊問題

に関する声明」同上

12　文化財保存京都学生会議「声明　岡山県津島総合グラウンド遺跡の保存に関して」同上

13　津島遺跡保存の会、岡山史学会、考古学研究会『岡山県津島遺跡の保存を訴える』 1968年10月

14　「津島遺跡と映画製作」『えんげきの友』144　岡山労演　1968年10月

15　吉原和子「歴史の真実を見つめて（発掘参加記）」『生活と教育』113　郷土教育全国協議会

16　篠井孝夫「岡山県武道館建設地と弥生時代遺跡」『教育時報』20巻11号　岡山県教育庁　1968年11月

17　岡本明郎「埋蔵文化財の破壊は第三の「焚書」である」『歴史学研究』342　歴史学研究会　1968年11月

18　今井　堯「明治百年と文化財保護行政―岡山市津島遺跡保存問題―」『歴史評論』219　歴史科学協議会　1968年11月

19　「昭和43年11月29日の会議に付した文化財保護に関する件」『参議院文教委員会議録４』参議院　1968年11月

20　西川　宏「「明治百年」が文化財を破壊する（1）」『歴史地理教育』149　歴史教育者協議会　1968年11月

21　岡山大学グラウンド遺跡を守る会、考古学同好会、考古学専攻生有志の会『津島遺跡保存運動の総括』1968年11月

22　近藤義郎「津島遺跡と武道館事件」『岡山史学』22　岡山史学会　1968年12月

23　武井則道「津島遺跡を守る講演会報告」『連絡誌』22　文化財保護対策協議会、関西文化財保存協議会　1968年12月

24　文化財保護対策協議会、関西文化財保存協議会事務局「津島事件の現段階」同上

25　考古学ジャーナル編集部「岡山市津島遺跡の保存問題をさぐる」『考古学ジャーナル』27　ニューサイエンス社　1968年12月

26　西川　宏「「明治百年」が文化財を破壊する（2）」『歴史地理教育』150　歴史教育者協議会　1968年12月

27　佐竹靖彦、春成秀爾「遺跡破壊と〝明治百年〟（上）」『社会新報』1192　1969年1月

28　同上「遺跡破壊と〝明治百年〟（中）」同上　1193　1969年1月

29　同上「遺跡破壊と〝明治百年〟（下）」同上　1194　1969年1月

30　西川　宏「「明治百年」が文化財を破壊する（3）」『歴史地理教育』152　歴史地理教育者協議会　1969年２月

31　津島遺跡保存の会事務局「岡山県武道館事件の経過（3）」『考古学研究』59　考古学研究会　1969年２月

32　文化財保護対策協議会「「津島遺跡を守る講演会」―東京を中心とする動き―」同上

33　上原雄吉「津島遺跡保存運動に対する攻撃の特徴点」同上

34　考古学研究会ほか41団体「声明」同上

35　考古学研究会「調査団報告書、県教委作成文書対比表」同上

36　岡山県津島遺跡発掘調査団団長杉原荘介「抗議および公開質問状」（岡山県教育委員会教育長あて）同上

37　岡山県津島遺跡発掘調査団団長杉原荘介「抗議および公開質問状」（文化庁長官今日出海あて）同上

38　「第59回衆議院文教委員会議録第５号から（抜粋）津島武道館事件の発端と経過」同上

39　「第59回国会閉会後参議院文教委員会議録第４号から（抜粋）津島・四つ池・池上・宮ノ原」同上

40　西川　宏「「明治百年」が文化財を破壊する（3）」『歴史地理教育』152　歴史教育者協議会　1969年２月

41　津島遺跡保存の会「岡山県武道館事件の経過（4）」『考古学研究』60　考古学研究会　1969年３月

42　奈良国立文化財研究所職員組合「津島遺跡の再調査に反対する声明」同上

43　津島遺跡発掘調査団団長「声明」同上

44　和島誠一「津島遺跡の地形的変遷」（発表要旨）同上

45　間壁忠彦「津島遺跡の弥生時代水田の問題」（発表要旨）同上

46　岡本明郎「弥生時代における乾田利用」（発表要旨）同上

47　佐竹靖彦「変造された調査報告書」『歴史学研究』376　歴史学研究会　1969年３月

48　昭和44年津島遺跡調査団『津島遺跡昭和44年調査現地説明資料』1969年４月

49　杉原荘介、鎌木義昌、和島誠一、近藤義郎、間壁忠彦、間壁葭子「岡山県津島遺跡1968年度調査概要」『1969年度日本考古学協会総会研究発表要旨』日本考古学協会　1969年４月

50　西川　宏「「明治百年」が文化財を破壊する（4）」『歴史地理教育』154　歴史地理教育者協議会　1969年４月

51　昭和44年津島遺跡調査団『昭和44年岡山県津島遺跡調査概要』1969年５月

52　梅田敏郎「岡山・津島遺跡を守れ」『科学朝日』29巻5号　1969年５月

53　津島遺跡保存の会「岡山県武道館事件の経過（5）」『考古学研究』61　考古学研究会　1969年６月

54　和島誠一「岡山県津島遺跡の地形的変遷」同上

55　津島遺跡保存の会「岡山県武道館事件の経過（6）」『考古学研究』62　考古学研究会　1969年10月

56　津島遺跡保存の会「津島遺跡史跡指定にあたって」同上

57　藤　則雄「岡山県津島遺跡の花粉学的研究」同上

58　春成秀爾「津島遺跡保存運動のその後と２、３の教訓」『連絡誌』27　文化財保護対策協議会、関西文化財保存協議会、全国組織結成準備委員会　1969年12月

59　歴史教育者協議会岡山支部「津島遺跡から何がわかるか」『考古学研究』63　考古学研究会　1970年１月

60　松井　健「岡山県津島遺跡における弥生時代の灌漑水利用水田の存在について」『考古学研究』64　考古学研究会　1970年3月

61　岡山県文化財を守る会事務局「岡山県における最近の文化財問題―津島遺跡、東高月遺跡群、「風土記の丘」」『考古学研究』66　考古学研究会　1970年９月

62　八賀　晋「古代の水稲耕作の土地利用―岡山県津島遺跡の半乾田―」『案山子』日本考古学協会生産技術特別委員会農業部会連絡誌４　1970年

63　笠原安夫・黒田耕作「岡山市津島遺跡（弥生前～後期）の作物および雑草種子について」『日作記』39（別２）1970年

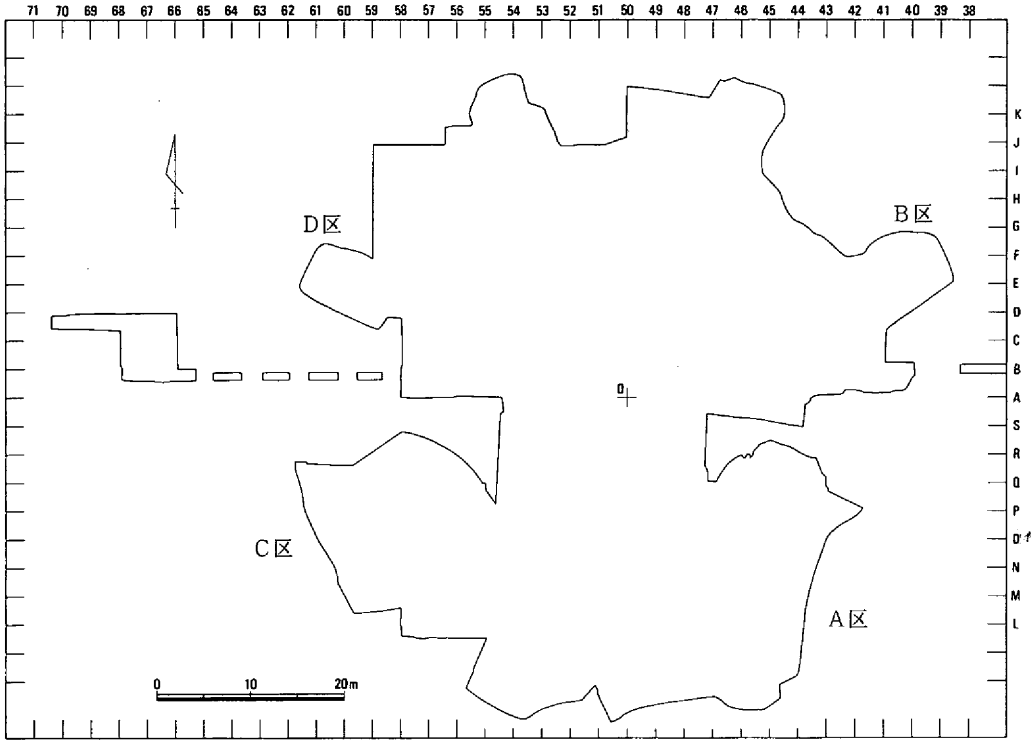
64　西川　宏「地層に刻まれた地域の歴史―岡山市津島遺跡の調査と保存運動から―」『月刊社会科教室』132　中教出版株式会社　1972年７月

65　春成秀爾「津島遺跡ノート―弥生時代水田址に関して―」『歴史手帳』２－２　1974年２月

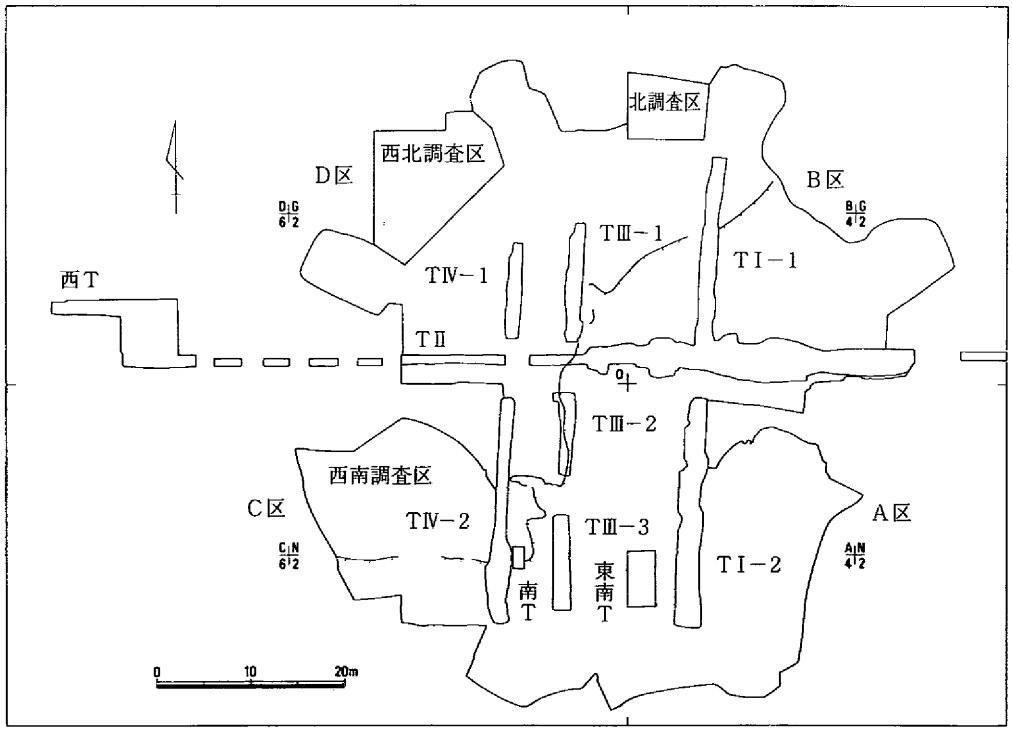
66　笠原安夫「岡山県津島遺跡の出土種実の種類同定の研究―日本各地遺跡間の残存種実の比較とそれから見た農耕の伝播と形態の推定―」『農学研究』58　1979年

第2節　調査の経過

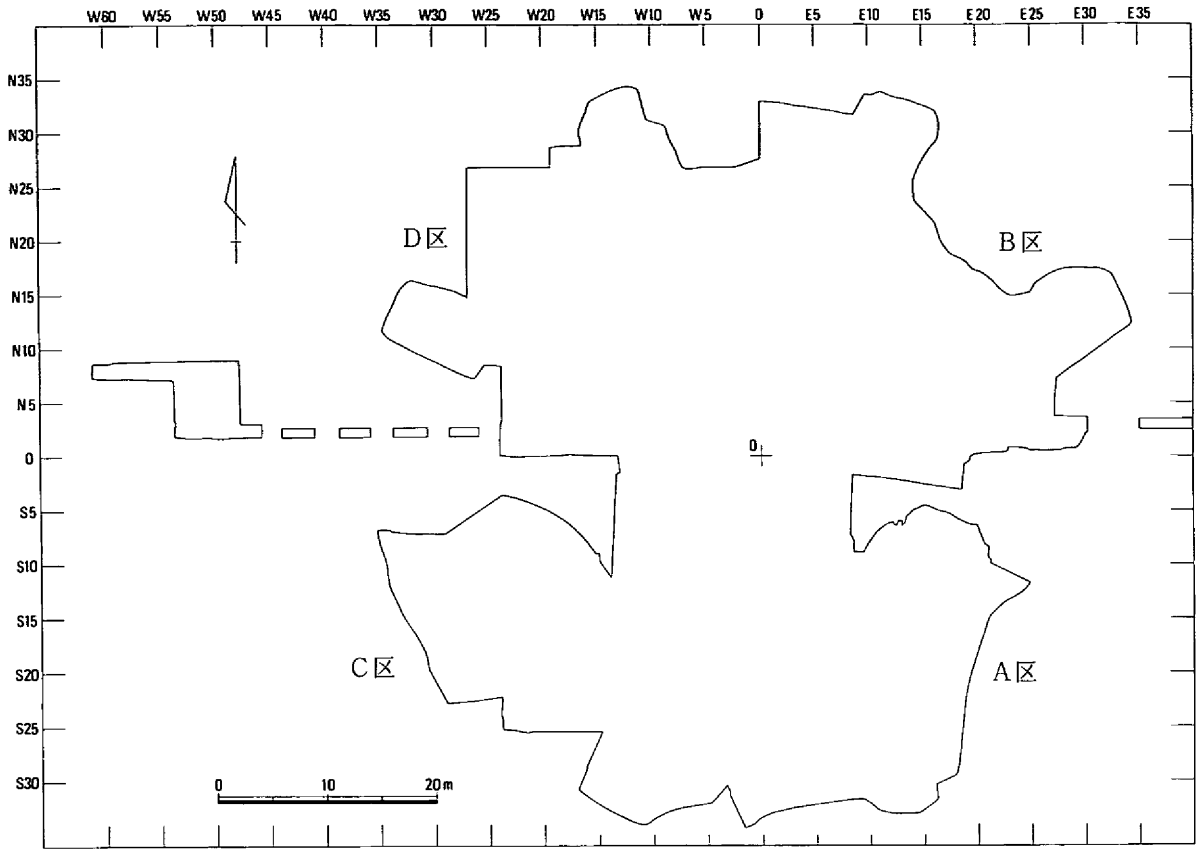
武道館建設当初予定地の発掘調査は、下記の通り3回実施された。さらに、岡山県総合グラウンド



第4図　第1・2次調査の基準線（S=1/800）



第5図　トレンチおよび調査区の位置（S=1/800）



第６図　第３次調査の基準線（S=1/800）

北西部を新たな武道館建設予定地とした発掘調査が１回行われた。調査の契機と経過については、前項に述べているので、発掘調査期間等を明記しておきたい。

A　武道館建設当初予定地の調査

第１次　1968（昭和43）年５月28日から同年６月24日　調査担当者　岡山県教育委員会

第２次　1968（昭和43）年８月16日から同年９月25日　調査担当者　岡山県津島遺跡調査委員会発掘調査団（団長　杉原荘介）

第３次　1969（昭和44）年２月24日から同年４月22日　調査担当者　岡山県津島遺跡調査委員会発掘調査団（団長　八幡一郎）

調査方法として、武道館建設当初予定地では、建物の中心にあたるところを０とし、南北、東西の軸線を設定（第４図）した。以後の調査も基準線は同じである。

第１次の調査では、南北方向のトレンチ（ＴⅠ・ＴⅢ・ＴⅣ）を３本掘り下げた（第５図）。平面では中世の耕作土を除去したところで遺構面の検出を行った。南東部については、一部深く掘り下げている。北西部の弥生時代前期微高地上に位置する遺構の一部は掘り下げている。

第２次の調査では、第１次の調査において掘り下げられたトレンチ断面の調査と東西方向のトレンチ（ＴⅡ）を新たに設定し、深く掘り下げている。そのほかに、小トレンチを補足し、若干の遺構調査を行っている。ほかに、土壌、花粉、種子など関連分野の調査も合わせて実施した。

第３次の調査では、新たに規準線（第６図）を設定するとともに、武道館建設当初予定地に接する

北部、西北部、西南部についても、調査区を拡張（第５図）して弥生時代前期微高地上の遺構を調査している。さらに、南西部の低湿地を深く掘り下げ水田の追求が行われた。また、再度専門家による土壌学的観察、花粉分析、水田雑草と植物遺体、動物遺体の調査も実施された。

調査区内の名称については、東西、南北の軸線をもとに決めているが、地点名としては、各調査次ごとに異なっている。

日誌抄

第１次　５月28日（火）　発掘調査開始

29日（水）　Ｂ地区の上層掘り下げ

６月１日（土）　Ａ地区、Ｂ地区の遺構検出。Ａ地区で弥生前期の溝状遺構、Ｂ地区で古墳時代の溝を検出。

２日（日）　Ｂ地区の溝から多量の弥生土器を検出。ＴＩとＴⅢ間に所在する弥生後期の溝の検出作業。

６日（木）　Ａ－ＮＷ－４のＰ４実測。Ａ－ＮＣ－１～４表土剥ぎ。

11日（火）　Ｄ６の掘り下げ。Ｂ－Ｃ－１～４表土剥ぎ完了。Ｂ・Ｄ地区表土剥ぎ。

18日（火）　Ｐ20で杭列検出。Ｂ－Ｓ２のＤ６、Ｈ２の追求。

19日（水）　Ｐ20は杭を斜めに打ちこんでいて、中心を囲むように配列。埋土中には炭・焼土を含む。Ｄ５の埋土中に土器、木器、植物の実含む。

20日（木）　Ｐ13は炭層が２層あり、上層に焼土面が確認される。下層の炭層からは土器出土。Ａ－Ｗ遺構検出。Ｂ－ＳＥ－３～５遺構検出。Ｄ６を追求。

24日（火）　Ｄ６の追求。

第２次　８月16日（金）　調査開始。調査計画打ち合わせ。基準線設置。

班の編成を行う。

鎌木班　　市川　水田　高見（学生）

和島班　　岡本　出宮（学生）

近藤班　　春成　神原　渡辺（学生）

三杉班　　出石　池葉須（学生）

西川班　　角田　根岸　土居（学生）

間壁班　　間壁　大重（学生）

高橋班　　河本　葛原　正岡（学生）

17日（土）　東西トレンチ（ＴⅡ）の設定。

18日（日）　ＴＩ、ＴⅢ、ＴⅣの崩壊土清掃作業。

24日（土）　ＴⅢ－２で矢板列の痕跡を検出。

９月１日（日）　ＴＩ－２（南）は掘り下げ。ＴＩ－２（北）は実測。ＴＩ－３は清掃。

２日（月）　笠原氏、植物種子検出用のサンプル採取。

５日（木）　藤氏、花粉分析資料採集。トレンチ掘り下げ。ＴＩ－３・ＴＩ－２実測。

６日（金）　東南端に新たなトレンチを設定。後期ピットが南側で発見。

９日（月）　トレンチ掘り下げ。ＴⅡとＴＩは特に深く掘り下げ。ＴＩ－２できぬた状木器出土。ＴⅡでは連日多量の木片、木の枝等が出土。ＴⅡの東端で

弥生前期の包含層を発見。ＴＩ－２の下部発掘。

14日（土）東南トレンチＥ14ラインが大きく崩れ、多量の弥生中期土器が出土。

18日（水）トレンチ掘り下げ。実測。補足調査。

20日（金）埋め戻し作業。

25日（水）調査終了。

第３次　２月24日（月）調査開始。

４月１日（火）Ａ区　ＡＭ49、ＡＬ49地区の掘り下げ。

Ｂ区　ＢＪ48、ＢＫ48はＥ層上半を発掘。

Ｃ区　ＣＭ55はＥ層を掘り下げ弥生前期の溝を追求。

Ｄ区　西端拡張区はＤ層を剥ぎ、Ｅ層上面に達する。

３日（木）Ａ区　トレンチ掘り下げ。杭列の続きと思われる杭を１本発見。

Ｂ区　北側拡張区の炉跡周辺の柱穴検出のため掘り下げを行う。

Ｃ区　砂質土層（Ｏ層の下の層）から淡水性貝類を発見。

Ｄ区　西側拡張区の北側をさらに西に３ｍ延長しトレンチ状掘り下げ。

７日（月）Ａ区　トレンチ掘り下げ、青粘土層下に多数の杭痕跡発見。

Ｂ区　東と南半分の土手を取り去る。

Ｃ区　住居跡の柱穴の清掃。

Ｄ区　土壙47の写真。

10日（木）Ａ区　トレンチの写真。

Ｂ区　北側拡張区の発掘を終了。小屋と溝を発見。

Ｃ区　住居跡の写真。

11日（金）Ｂ区　乾田土壌の分布範囲調査。トレンチの壁面清掃。

Ｄ区　西端拡張区の西端側はまだ落ちない。

15日（火）Ａ区　実測。

Ｂ区　実測。

Ｃ区　杭列の清掃。一番南の横倒しになった杭は杭列とは時期が別。

Ｄ区　埋め戻し。

18日（金）Ａ区　実測の補足。

Ｂ区　実測の補足。弥生後期の住居付近から石包丁を発見。

Ｃ区　杭列付近の調査。

Ｄ区　西脚の南北壁の断面実測。

22日（火）埋め戻し。調査終了。

Ｂ　武道館建設予定地の調査

第１次　1969（昭和44）年８月18日から同年10月10日　調査担当者　岡山県教育委員会

新武道館建設予定地の調査では、８か所の坪掘り調査を行い、これを繋ぐトレンチを設けている。ここでは、集落遺跡が検出されなかったことから、全面的な掘り下げは実施していない。

日誌抄

第１次　８月19日（火）テニスコート南側に２×２ｍのグリッドを４箇所設定し掘り下げ。
20日（水）　Ｂ１～Ｂ３の壁を清掃し、写真・実測。Ｂ４～Ｂ６を掘り下げ開始。
22日（金）　Ｂ６～８の壁面清掃。Ｔ１、Ｔ２掘り下げ。Ｂ８は中世の土器出土。
９月３日（水）　Ｔ１－ＳのＤ２掘り上げ完了、写真。Ｔ１－Ｎは土層の線入れ。
８日（月）　Ｔ１は西壁面の削り。Ｔ２は掘り下げ。
20日（土）　Ｔ２は土層の線入れ。Ｔ３は掘り下げ。Ｔ４は掘り下げ。
22日（月）　Ｔ３は微砂層下面にて掘り下げ完了。Ｔ４は微砂層上面まで掘る。Ｔ５は明治期まで掘り下げ。Ｔ６は明治期の水田面まで掘り下げる。Ｔ７を設定。
30日（火）　Ｔ６、Ｔ７実測。
10月10日（金）　調査を終了する。

第３節　調査の体制

武道館建設予定地の発掘調査は、いずれも岡山県教育委員会が調査主体となり、武道館建設当初予定地においては、1968（昭和43）年６月の第１次調査を県教育委員会が直接実施し、1968（昭和43）年８月から９月の第２次調査、1969（昭和44）年２月から第３次調査は、それぞれ岡山県津島遺跡発掘調査委員会を設置し、そのもとに発掘調査団が編成された。1969（昭和44）年８月から10月に行われた武道館建設予定地（現在の武道館建設地）の調査は、県教育委員会が直接実施した。県教育委員会及び発掘調査団の組織は以下の通りである。

1968（昭和43）年度

岡山県教育委員会

教　育　長	篠井 孝夫

岡山県教育庁

教育次長	小野 啓三

社会教育課

課　　長	富張　昇
主　　幹	神野　力
課長補佐	是近 五六
係　　長	桐野 嘉雄
文化財保護主事	森　忠彦
〃	高橋　護
主　　事	河本　清
〃	葛原 克人

1969（昭和44）年度

岡山県教育委員会

教　育　長	篠井 孝夫

岡山県教育庁

教育次長	小野 啓三
〃	三村 克一

社会教育課

課　　長	富張　昇
主　　幹	神野　力
課長補佐	花房 芳忠
係　　長	桐野 嘉雄
文化財保護主事	森　忠彦
〃	高橋　護
主　　事	河本　清
〃	葛原 克人
〃	枝川　陽
〃	正岡 睦夫
〃	泉本 知秀
〃	栗野 克己

第２次発掘調査の組織（調査期間　1968（昭和43）年８月16日～同年９月25日）

岡山県津島遺跡発掘調査委員会

委　員　長　八幡　一郎

委　　員　杉原　荘介　鎌木　義昌　和島　誠一　近藤　義郎　篠井　孝夫　富張　昇

岡山県津島遺跡発掘調査団

団　　長　杉原　荘介

副　団　長　鎌木　義昌

常任調査員　和島　誠一　近藤　義郎　間壁　忠彦　三杉　兼行　西川　宏　角田　茂
岡本　明郎　高橋　護

調　査　員　池葉須藤樹　市川　俊介　根岸　純一　土井　秋夫　出宮　徳尚　土居　徹
春成　秀爾　神原　英朗　中田　啓司　渡辺　健治　間壁　葭子　小野　一臣
今井　堯　高見　周夫　平田　英文　水田　浩人　出石　収　水内　昌康
大重　美敏　河本　清　葛原　克人　正岡　睦夫

第３次発掘調査の組織（調査期間　1969（昭和44）年２月24～同年４月22日）

岡山県津島遺跡発掘調査委員会

調査顧問　坂本　太郎　宝月　圭吾　駒井　和愛　有光　教一　斉藤　忠　末永　雅雄
杉原　荘介　水野　清一　清水　潤三　滝口　宏　内藤　政恒　三木　文雄
坪井　清足

調査団長　八幡　一郎

調　査　員　横山　浩一　亀井　正道　田村　晃一　岡田　茂弘　松下　正司　三輪　嘉六
三宅　敏之　村井　嵓雄　野口　義磨　鈴木　博司　稲垣　晋也　田中　琢
佐原　眞　八賀　晋　工楽　善通　西谷　正　佐藤　興治　阿部　義平
佃　幹雄

第４章　調査の概要

第１節　遺構の名称と全体図

Ａ　遺構の名称

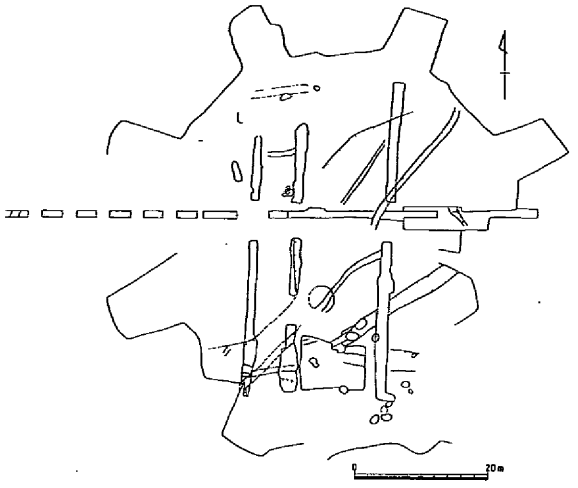
新しい遺構の名称は報告書作成の際付け直したもので、遺構の性格を検討し、同じ性格と推定される遺構毎に１から順次付けていった。調査時における遺構名称は、奈文研や県が作成した遺構配置図には記載されておらず、遺構実測図や各種の文献から名称の一端がうかがえるものの、同一の遺構に異なる名称が付されるなど、混乱も見られる。たとえば本報告書で舟形土壙１とした遺構の名称は、遺構実測図に「Ｄ１」と記されているが、『調査概要』では「溝状遺構」、『調査概報』は「舟形土壙」、また舟形土壙３は「土壙１」と「第10土壙」と言うように、いくつもの名称が認められる。こうした名称の不統一が遺物の注記にも影響を及ぼしており、遺構と遺物の対応関係の不明確さをきたす大きな要因の一つとなっている。

Ｂ　全体図について

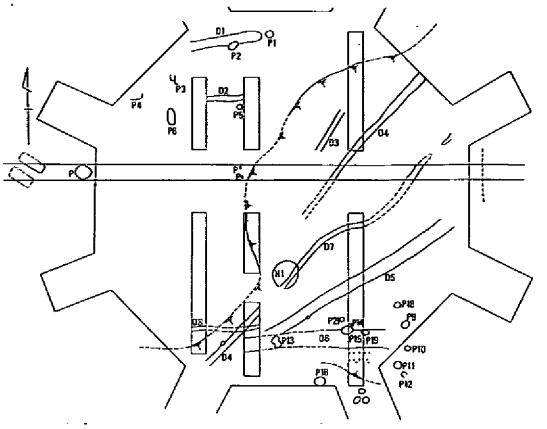
全体図（遺構配置図）については完全なものは無く、それぞれが少しずつ異なっている。ほぼ正確な図としては、奈良国立文化財研究所を中心とした第３次発掘調査において作成されたＳ＝１／20の平面図、および県が調査終了後に作成したと考えられるＳ＝１／200の全体図があり、本報告書の全体図は他の概略図を参考にしながらこれを合せて作成した。

第７図の全体図は主なものを取り上げて比較したものである。Ａは第１次調査で県の職員が実測したもので、東西トレンチの両端が異なる。ＢはＡの１か月後に発刊された発掘ニュースの概略図であるが、東西トレンチは切れ目が無く遺構の配置も異なっている。遺構名称は付されているが本来付されていたものであるかどうかは不明である。Ｃは第３次発掘メモであるが、調査区の東側を斜めに走る溝が異なっていることに加え、住居跡が認められない。Ｄは『考古学研究』に掲載された図で、南東側の溝や土壙が異なっている。Ｅは現地説明会の資料で、３次調査の成果が取り込まれているが、南東側は省略が目立つ。また、東西トレンチ、特に西側の形状が描かれていないため、Ａの追認ができない。Ｆは1969年の第３次調査終了後に作成されたものと推定され、Ｓ＝１／200の図である。他の図が概略図であるのに対し、実測図をトレースしており、信頼性の置ける図ではあるが、南東側の土壙群が省略されているなど、注意を要する。

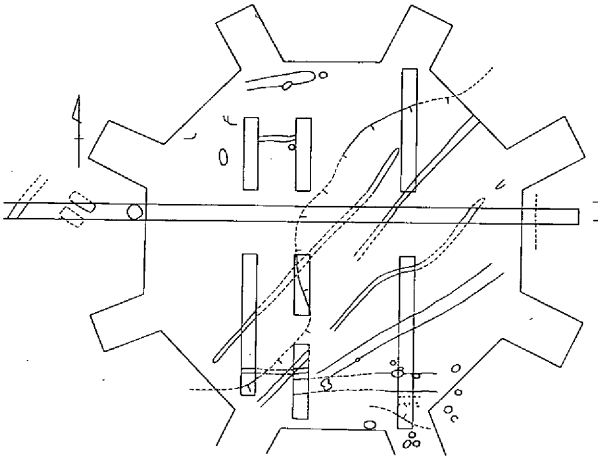
このように主な図だけを見ても遺構の配置や調査区の形状、またトレンチの形状などで大きな食違いが認められる。したがって本報告書の全体図もかなりあいまいな点があると思われるが、それを検証するべく正確な図がないことから、第７図に掲げた図を比較しながら修正を加えたが、なお明確にし得なかった遺構も少なからず存在する。これも当時の状況から考えていたし方ないことで、そうした限界性を踏まえた上で第４章を読んでいただきたい。



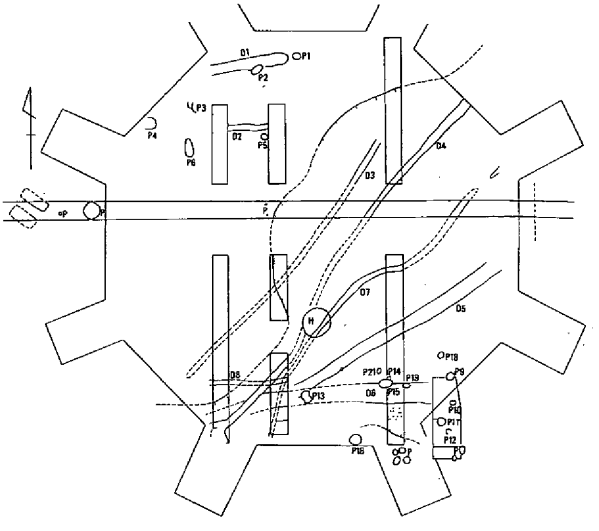
A．1968年８月18日の実測図



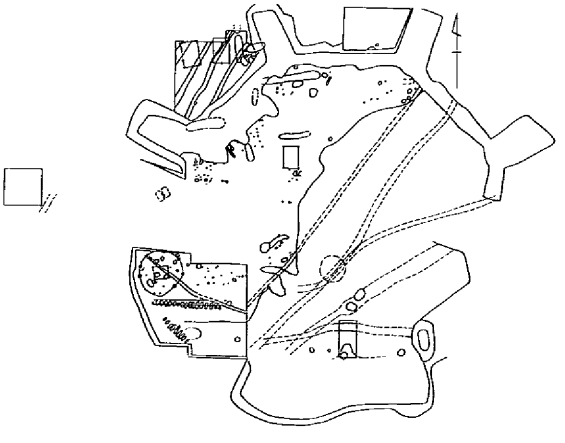
B．1968年９月19日の
『津島遺跡発掘ニュース』　N0.2



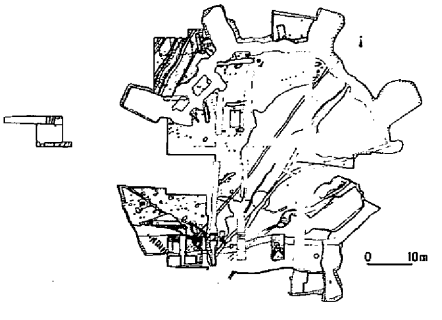
C．1969年の第３次発掘メモ４



D．岡山県武道館事件の経過(2)
『考古学研究』第15巻第２号　1968年10月



E．『津島遺跡昭和44年調査現地説明資料』
昭和44年津島遺跡調査団　1969年４月５日



F．1969年の調査修了後

第７図　各種全体図の比較

第2節　層　　序

第3次にわたる発掘調査によって、地形的な変遷と層序が明らかにされた。その概要は、第3次にわたる発掘調査をまとめた昭和44年津島遺跡調査団「昭和44年岡山県津島遺跡調査概報」昭和44年5月17日に報告されているので、層序について引用させていただくことにしたい（岡山県教育委員会『岡山県津島遺跡調査概報』昭和45年3月所収　25～29頁）。

A　層序の名称

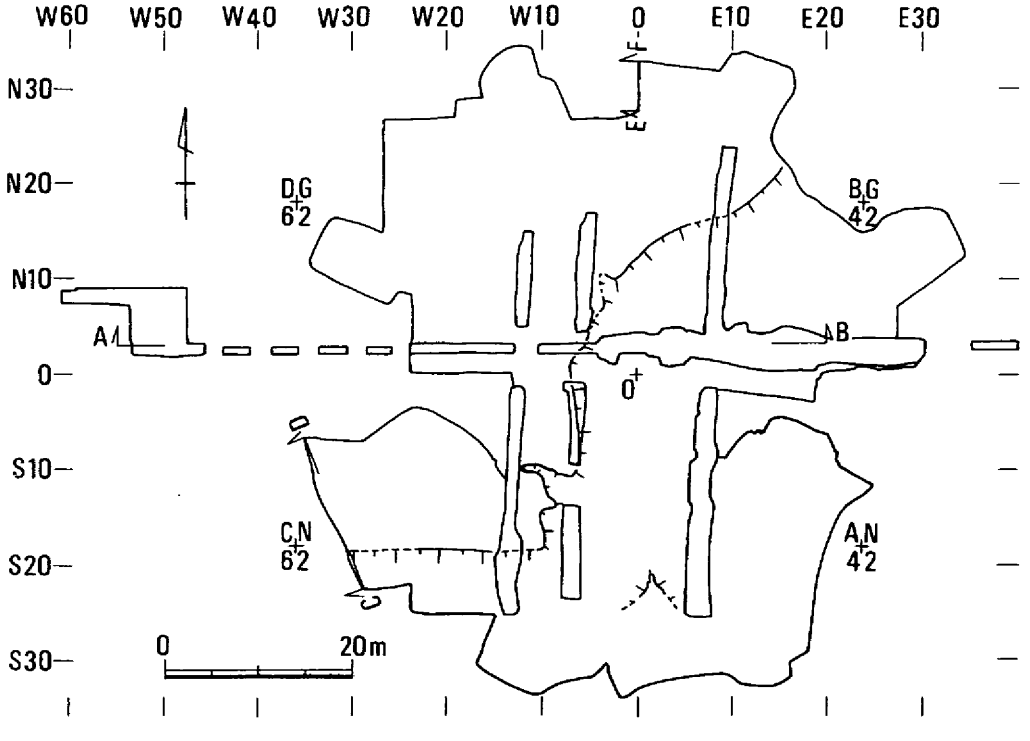
武道館予定地の地層は、微高地と低湿地では状況が違っている。ここでは、両地域にわけて基本的な層序について述べよう。なお、今回の調査では、層を上部からA・B…と大きくわけ、さらにおのおのをC1・C2…というふうに細分し、命名することにした（第14図）。

B　微高地の層序

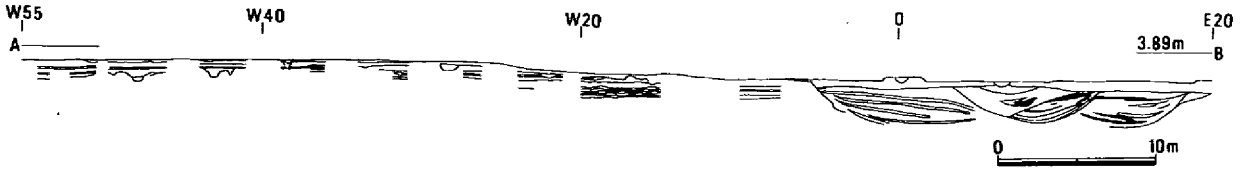
微高地における基本的層序は、第14図に示したとおりである。その概要を説明しよう。微高地の上部は、黄褐色土（F・H層）と黒褐色土（G層）からなっている。この地層は、まったく礫を含まず、ほとんど水平に堆積しており、静かなる状態で堆積したデルタ状沖積層と考えられる。遺物はまったく含まれていない。

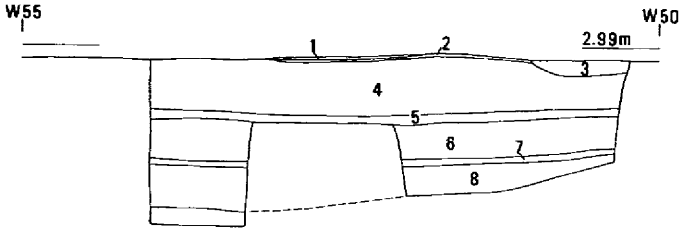
この上にある黒褐色土のE層は、弥生時代前期前半の遺物を包含している。しかしその層の下半部では遺物は出土していない。

このE層上には、D層すなわち弥生時代後期に形成された、暗灰褐色土層がある。包含する遺物は

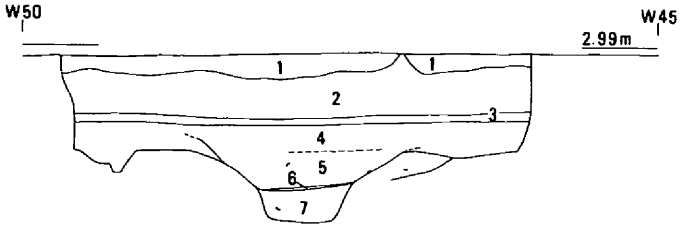


第8図　土層断面図の位置

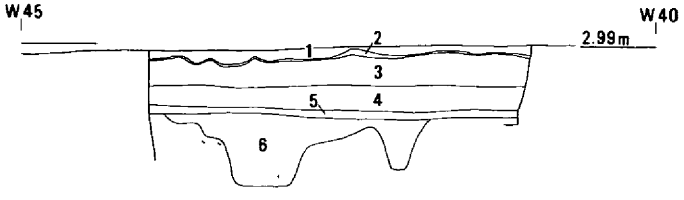




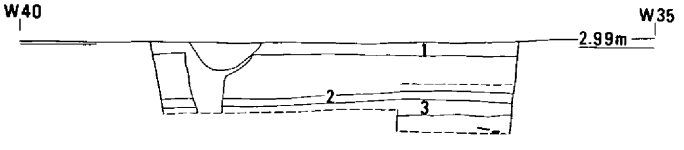
1．淡灰色シルト
2．酸化鉄
3．撹乱
4．灰褐色粘質シルト
（マンガン含む）
5．酸化鉄
6．茶褐色酸化鉄
（マンガン含む）
7．酸化鉄
8．暗褐色シルト



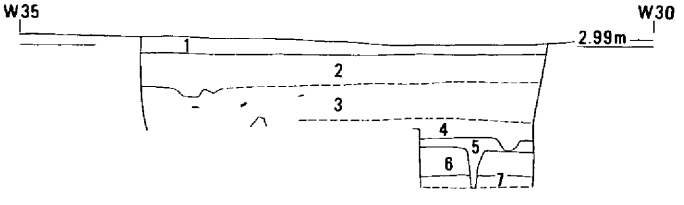
1．撹乱
2．灰褐色
（マンガン含む）
3．酸化鉄
4．茶褐色シルト
5．灰色シルト
6．細砂ブロック
（薄い層）
7．暗灰色シルト



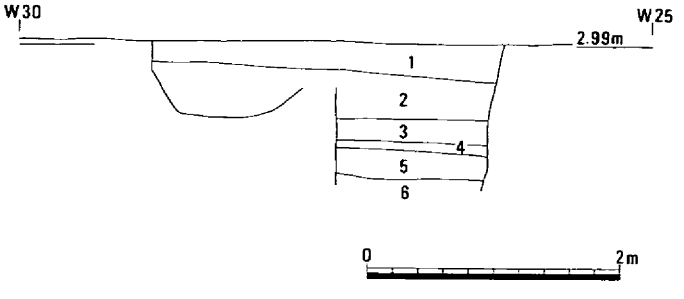
1．？
2．？
3．灰褐色微砂
4．灰褐色微砂
（マンガン含む）
5．酸化鉄
6．淡褐色
（マンガン少）



1．淡灰色
2．条里整地
3．後期

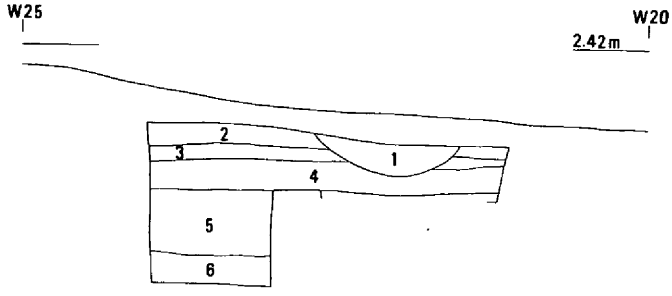


1．淡灰色微砂
（マンガン含む）
2．灰褐色微砂
3．暗灰色
（マンガン多く含む）
4．黒褐色（前）
5．灰褐色シルト
6．黒（無）
7．灰褐色シルト

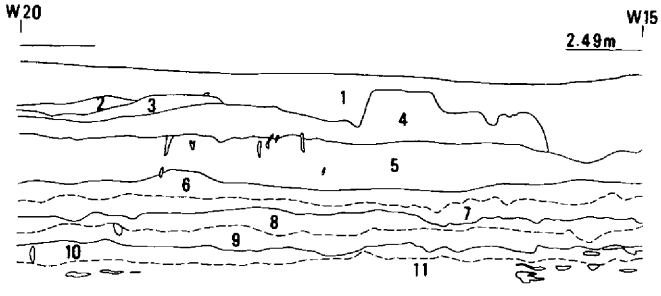


1．撹乱土
2．淡褐色
（マンガン含む）
3．黒褐色シルト
4．灰褐色シルト
5．黒褐色シルト
6．灰褐色シルト

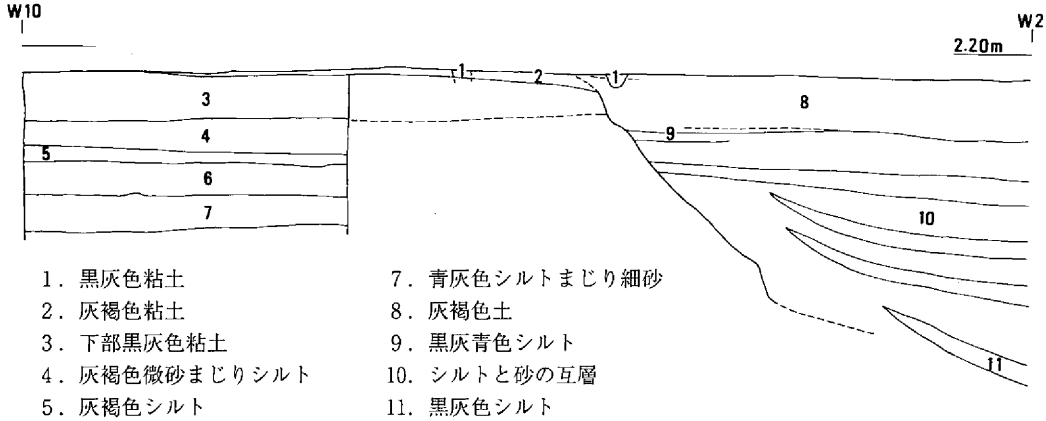
第９図　ＴⅡの土層断面１（S=1/60）（鎌木・市川・水田・高見・三杉・出石・池葉須・西川・角田・根岸・土井・間壁・間壁・大重・高橋・河本・葛原・正岡）



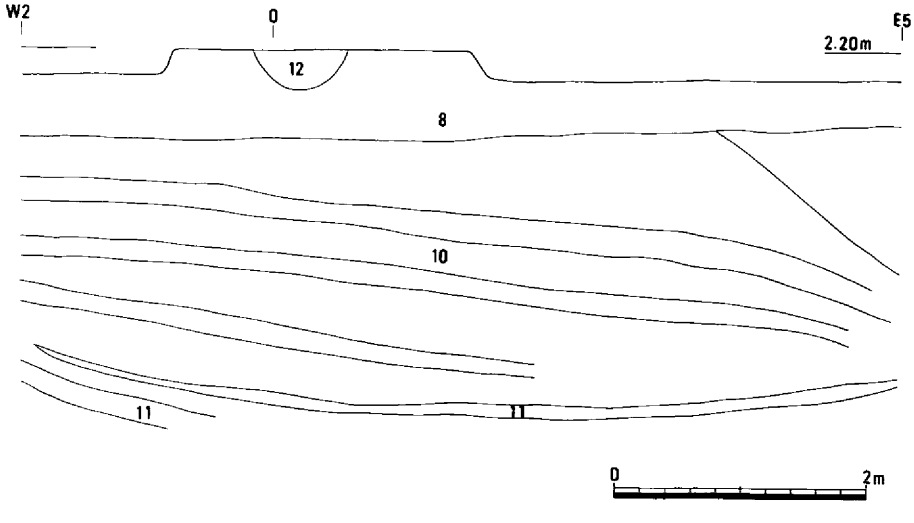
1．淡灰色
2．黒褐色
3．灰褐色シルト
4．黒褐色（無遺物）
5．灰褐色シルト
6．青灰色シルト



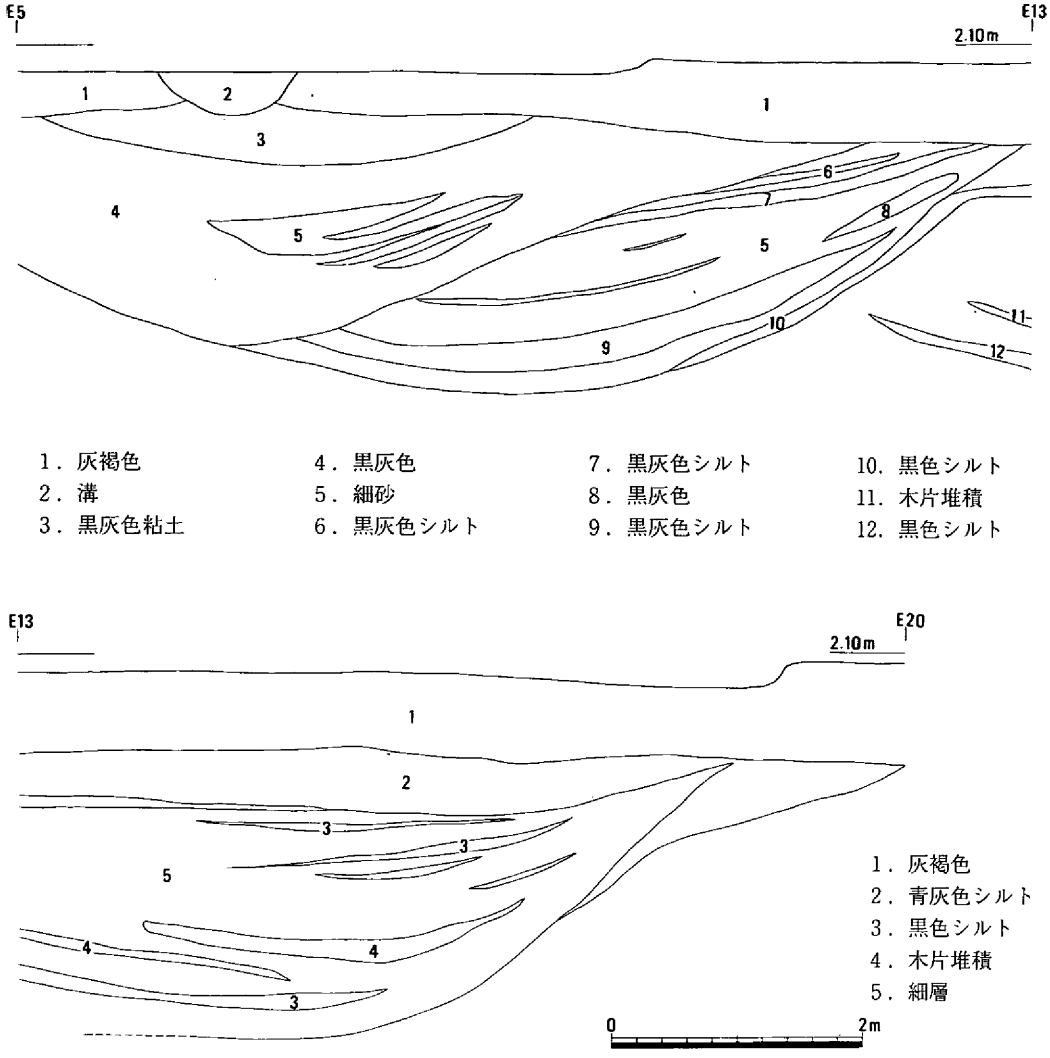
1．撹乱土
2．上部黒褐色粘土
3．灰褐色微砂まじり粘土
4．下部黒褐色粘土
5．灰褐色微砂まじりシルト
6．灰褐色シルト
7．帯褐・青灰色シルト
8．帯褐・青灰色まじり微砂
9．青灰色シルトまじり微砂
（黒灰色粘土ブロック混入）
10．青灰色細砂（黒灰色粘土ブロック混入多し）
11．黒灰色細砂（黒灰色粘土ブロック混入多し）



1．黒灰色粘土
2．灰褐色粘土
3．下部黒灰色粘土
4．灰褐色微砂まじりシルト
5．灰褐色シルト
6．青灰色シルト
7．青灰色シルトまじり細砂
8．灰褐色土
9．黒灰青色シルト
10．シルトと砂の互層
11．黒灰色シルト
12．溝中



第10図　TⅡの土層断面2（S=1/60）（鎌木・市川・水田・高見・三杉・出石・池葉須・西川・角田・根岸・土井・間壁・間壁・大重・高橋・河本・葛原・正岡）



第11図　TⅡの土層断面３（S=1/60）（鎌木・市川・水田・高見・三杉・出石・池葉須・西川・角田・根岸・土井・間壁・間壁・大重・高橋・河本・葛原・正岡）

前期から後期におよぶ。後期の溝はＤ層中もしくはその下面から掘りこまれている。

Ｄ層の上部を削平整地にした上に、条里制以降の水田が営まれている。その水田床土（Ｃ４層）は多量の酸化鉄が沈着する土であり、水田耕土（Ｃ３層）は暗青灰色の砂質土である。ともに奈良・平安時代の遺物を包含する。この水田耕土の上面は平坦ではあるが、全体にみると東北から西南へゆるく下っている。さらに上層には、酸化鉄とマンガン粒の帯状の沈着が幾層もみられる灰褐色土（Ｃ１・Ｃ２層）が堆積している。この土層は、土師器や土釜・灯明皿などの遺物を包含しており、古代末期から中世の水田土壌と推定される。Ｃ層の上には、近世から明治時代にかけての水田耕土（Ｂ層）と練兵場、さらにはグラウンド造成時の整地層（Ａ層）が順次観察できる。

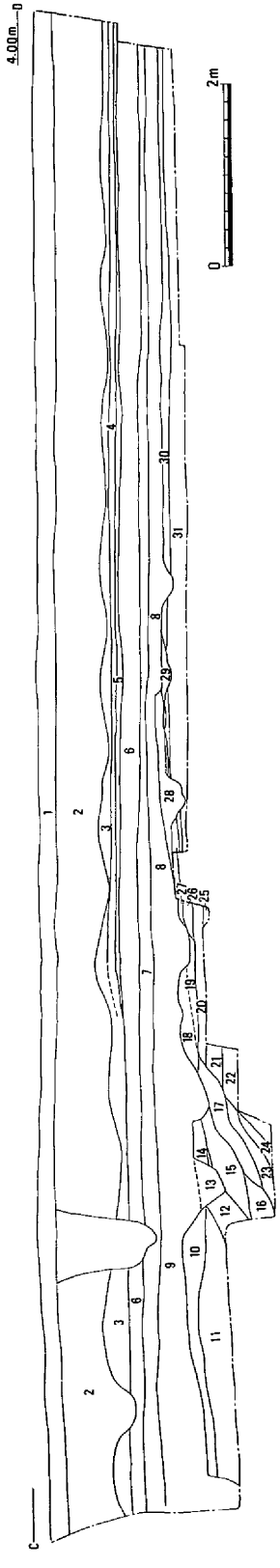
Ｃ　低湿地の層序

低湿地における地層の状況は、地層の形成過程における局部的な浸蝕と堆積によって、かなり複雑な様相を呈している。今回までに調査した武道館建設当初予定地南部における観察結果によると、以下のとおりである。

低湿地の地山はE層上面から約1.4m下にひろがっている暗青色砂質土からなっている。この層上に、昨夏の調査で弥生時代前期前半に属する水田耕土と認定された黒灰色粘土層がある。この耕土は厚さ40～50cmある。

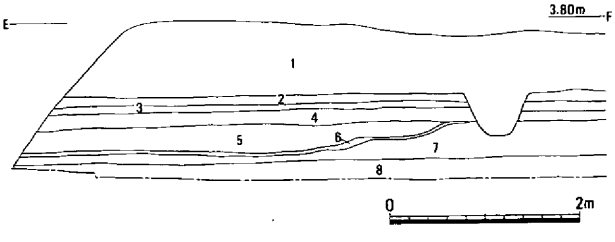
この前期前半の耕作土上には、前期から中期にかけて、暗灰色から灰褐色を呈する粘土質や砂質の土層がほぼ60cmの厚さに順次堆積している。また、中期には前期の黒灰色粘土が水流によって大きくえぐりとられた部分がある。このえぐられた部分では、その後複雑に土が堆積している状況が観察できた。この複雑な堆積土には、弥生時代中期の土器片とともに多量の植物遺体を包含している。この堆積土層の下半部をなす暗灰色粘土層には、後に述べるように杭が打ちこまれており、それが水田耕作土であった可能性が高い。またタニシなどの淡水産の貝もみられた。これらの土層は弥生時代中期末までに堆積したものである。

低湿地の最上部には、厚さ約40cmの褐色微砂層が全面に堆積している。この微砂層は微高地上の暗褐色のD層に相当し、弥生時代中期末から後期に堆積したものである。後期の遺構は、この層の上面あるいは層中から掘りこまれている。褐色微砂層より上には、微高地上と同じC層以上の土層が連続して堆積している。



1．昭和整地　7．C2灰色微砂　13．青灰色砂質土　19．Eのながれか　24．青色粘土　30．C4酸化鉄集積帯
2．A　明治整地　8．C3青灰色粘土　14．黄褐色微砂　20．F　25．G　31．E黒褐色粘質土
3．B1青灰色砂質土　9．青灰色粘土　15．灰褐色微砂　21．?　26．E
4．B2灰色砂質土　10．褐色微砂　16．灰色砂　22．H黄褐色微砂　27．C4
5．B3青灰色砂質土　11．L　17．灰褐色微砂　23．黒色ブロック状粘土　28．C3.5
6．C1灰色微砂　12．灰褐色微砂　18．鉄分多し　29．砂

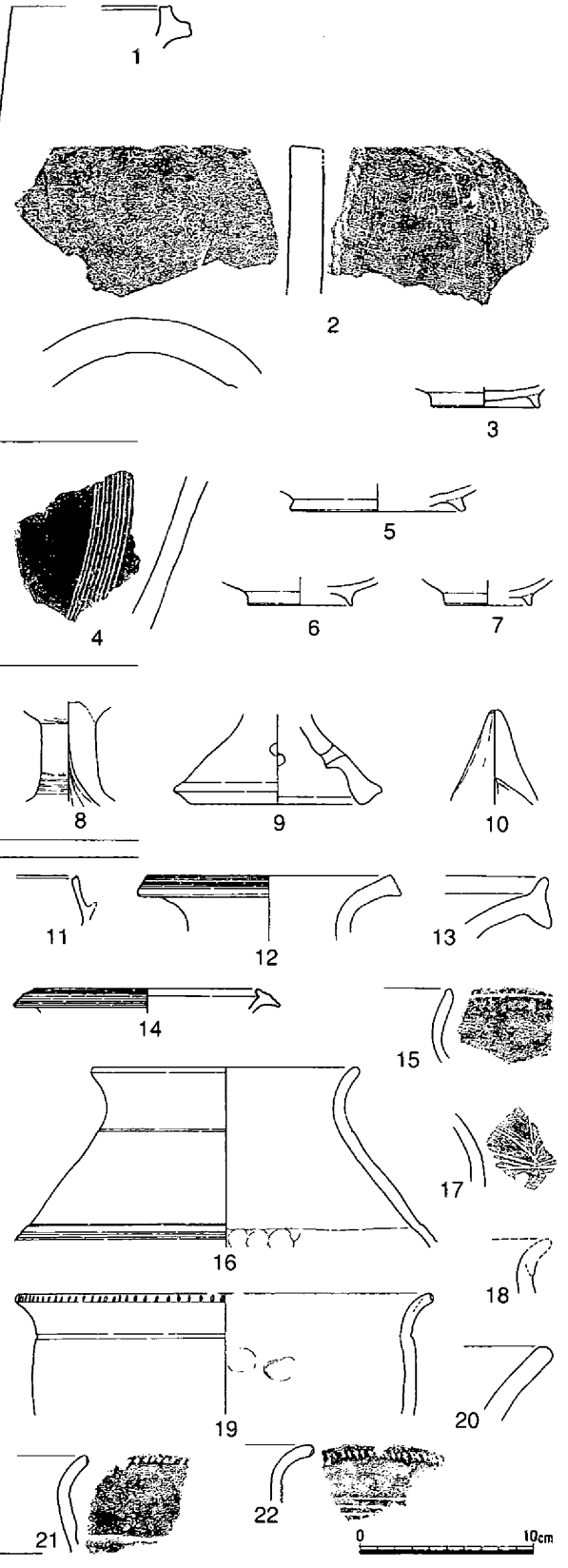
第12図　西南調査区のC－D土層断面（S=1/60）



1．角礫山土を含む整地　5．C3灰青色粘土
2．B　6．C4
3．C1　7．D
4．C2黄灰色　8．E

第13図　北調査区のE－F土層断面（S=1/60）

地層名	土質 色調	性格	層厚 (cm)	
A1	黄褐色含細礫土	総合グランド整地層	20	120
A2	暗青色砂質土	昭和20年代開墾土層	10	
A3	褐色含角礫土	岡山連隊練兵場整地層	80 ～100	
B	暗灰色砂質土	近世～明治時代耕土層	20	
C1 C2	暗灰色砂質土 (酸化鉄・マンガン粒を含む)	古代末・中世水田耕土層	30 ～50	40 ～ 120
C3	暗青灰色砂質土	条里制当初の水田耕土層	10 ～40	
C4	褐色砂質土 (酸化鉄沈着)	条里制当初の水田床土層	5 ～30	
D	暗灰褐色土	弥生時代後期遺物包含層	10 ～30	
E	黒褐色土	弥生時代前期遺物包含層	10 ～20	
F	黄褐色土	自然堆積層	20	
G	黒褐色土	自然堆積層	20	
H	黄褐色砂質土	自然堆積層		



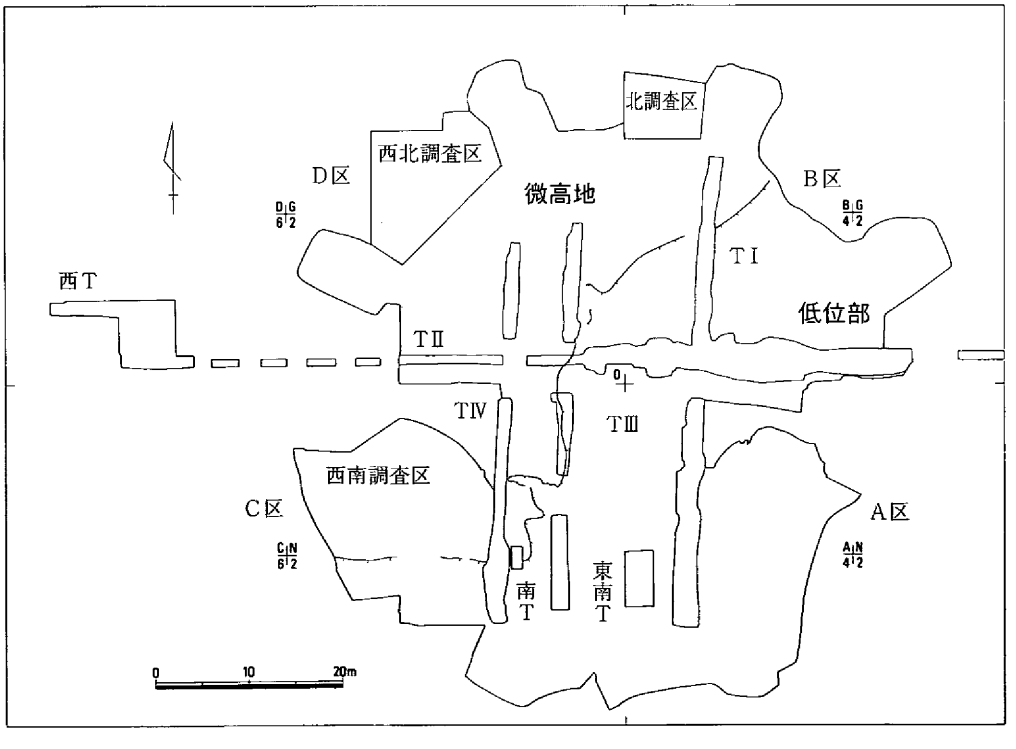
第14図　微高地の基本層序と出土遺物

第３節　遺構と遺物

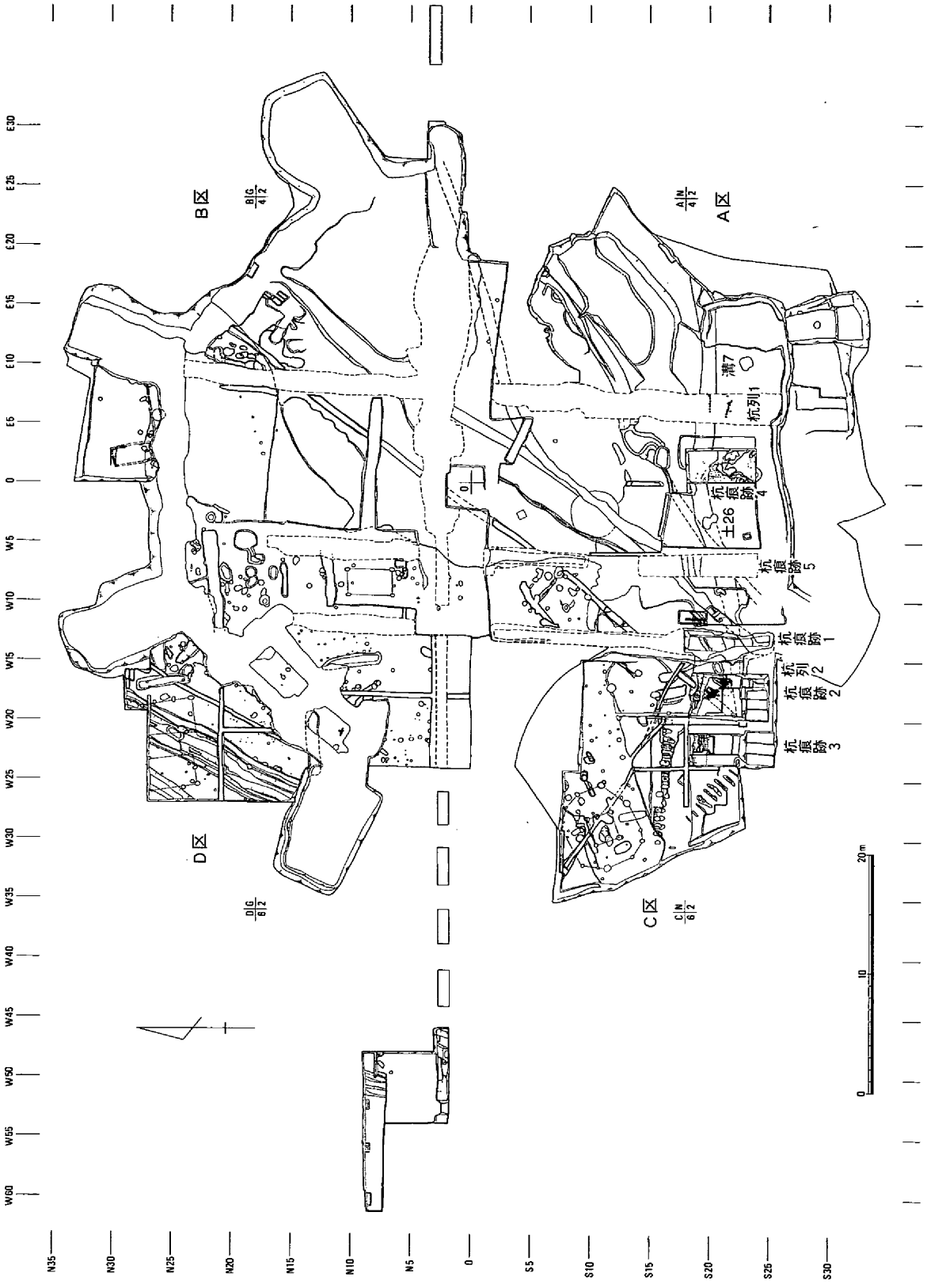
Ａ　遺構の概要

武道館建設当初予定地の調査は、建設工事が始まった後という事もあり、調査が始まった段階には、調査区は武道館の形状に合せて遺構が検出される深さにまで削平され、無数のパイルが打ち込まれていた。調査は調査区全体に東西をＡライン、南北を50ライン、その交点を０とする基準線を設けているが、１・２次調査と３次調査では設定が異なっており、混乱をきたす要因の一つになっている。さらに調査区はこの基準線に合せて４分割され、南東をＡ区、北東をＢ区、南西をＣ区、北西をＤ区としている。トレンチは南北に３本設定し、東側のものをＴＩ、西側のものをＴⅣ、両者の間のものをＴⅢとし、ほぼ中央には東西にＴⅡが設定され、西端の西トレンチまで途切れ途切れに延びる。３次調査では武道館の用地外に北調査区、西北調査区，西南調査区が拡張して設けられた。

これらのトレンチおよび拡張された調査区の成果から、西側は微高地が、東側は低位部が広がっていることが判明した。微高地はあまり大きくないものと推定され、弥生時代後期の遺構もあるものの、もっぱら弥生時代前期前半の居住域であった。この時期の遺構としては、西南調査区から住居、西北調査区およびＤ区では掘立柱建物が３棟、北調査区からは壁立の建物などが検出されている。また、建物の方位に沿って舟形土壙が発見されており、必ずしもすべて建物に伴っているわけではないが、建物と組み合わさるものと考えざるを得ないものもある。東側に広がる低位部には微高地との境に矢板を打ち込んでおり、弥生時代前期から水田として利用されていたとされる。このことを裏付けるように花粉分析ではイネの花粉、土壌分析では稲穂や水田雑草が検出されている。さて、この低位部も

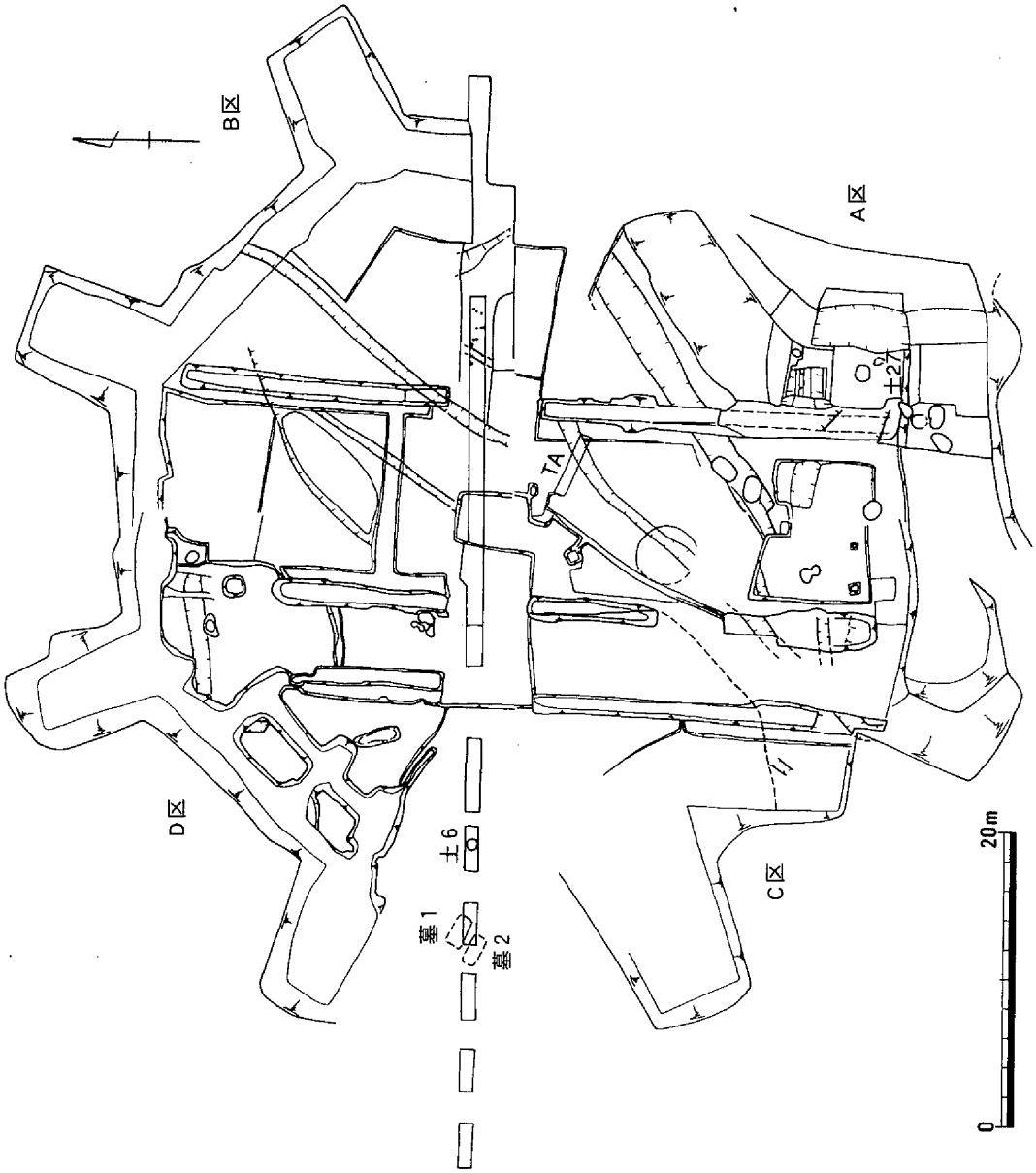


第15図　トレンチおよび調査区配置図（S=1/800）



図に記してある基準線は第３次調査で設定したものである。なお、図中の＋は第１次・第２次調査で設定された基準線の一部を記したものである。

第16図　遺構全体図（S=1/500）

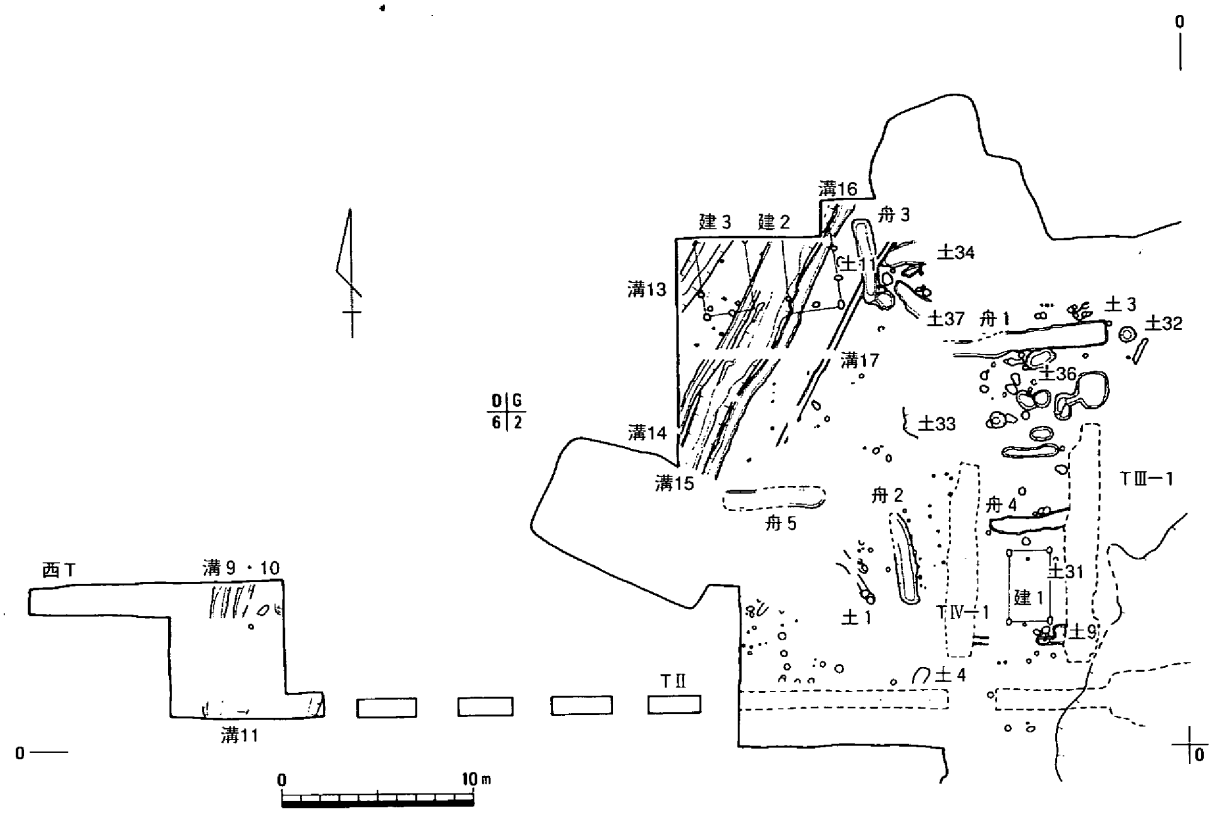


第17図　第１次・２次の遺構全体図（S=1/500）

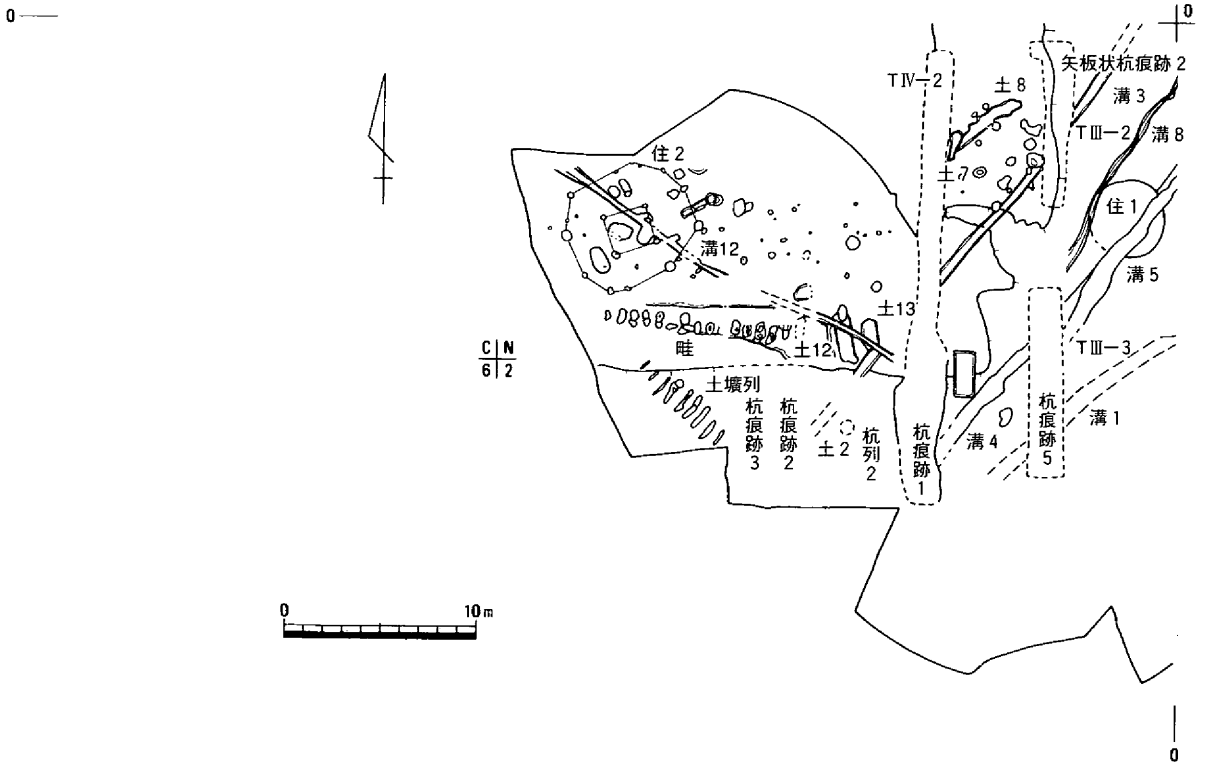
水田として利用されながら徐々に埋没して行き、弥生時代中期には溝などが掘り込まれるが、本格的に利用されるようになったのは弥生時代後期からである。

弥生時代後期から古墳時代の溝は、南東部においては４条がいずれも北東から南西方向に流走しており、用排水路と推定されるが、溝の中を掘り下げていないため性格については明確でない。西北調査区でも北東から南西に流走する５条の溝が検出されており、用排水路と考えられる。このうちのいくつかは西ＴやＴⅡの溝と繋がる可能性がある。Ａ区では溝と切り会う竪穴住居も１軒認められるが、内部を掘り下げていないため詳細は不明である。Ａ区の南端付近では祭祀遺構と称される、炭と焼土を多量に含む土壙群が検出されている。

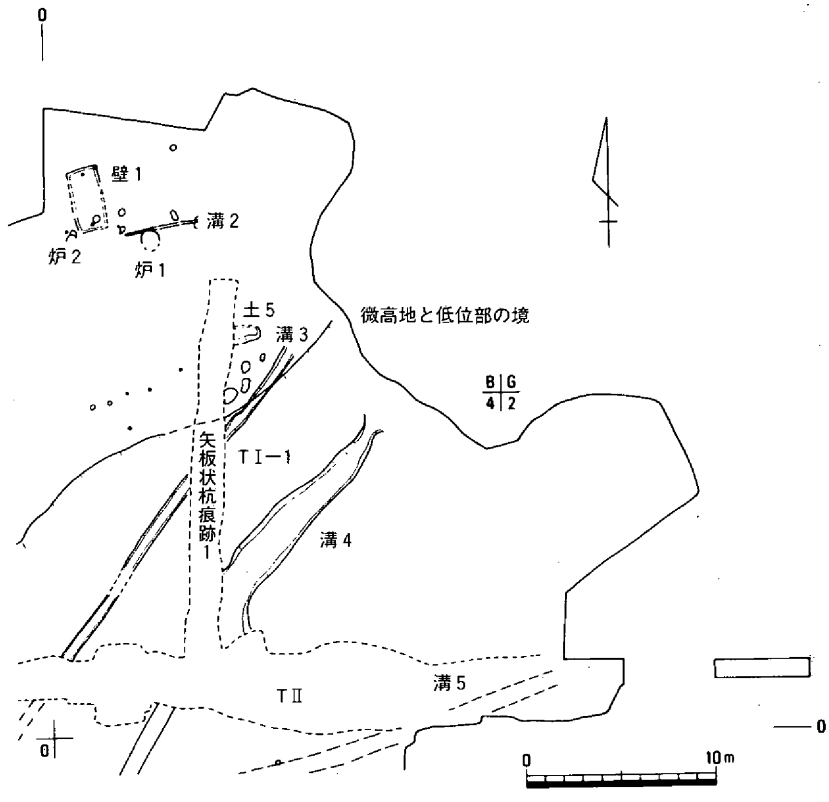
古代以降の遺構は、Ｃ区で条里に係わる遺構が、ＴⅡの西側からは古代の土壙墓が発見されているが、概して少ないと言えよう。ただ、調査区全体が微高地上面まですでに削平されていたことを考慮すると、浅い遺構は消滅した可能性も考えられる。



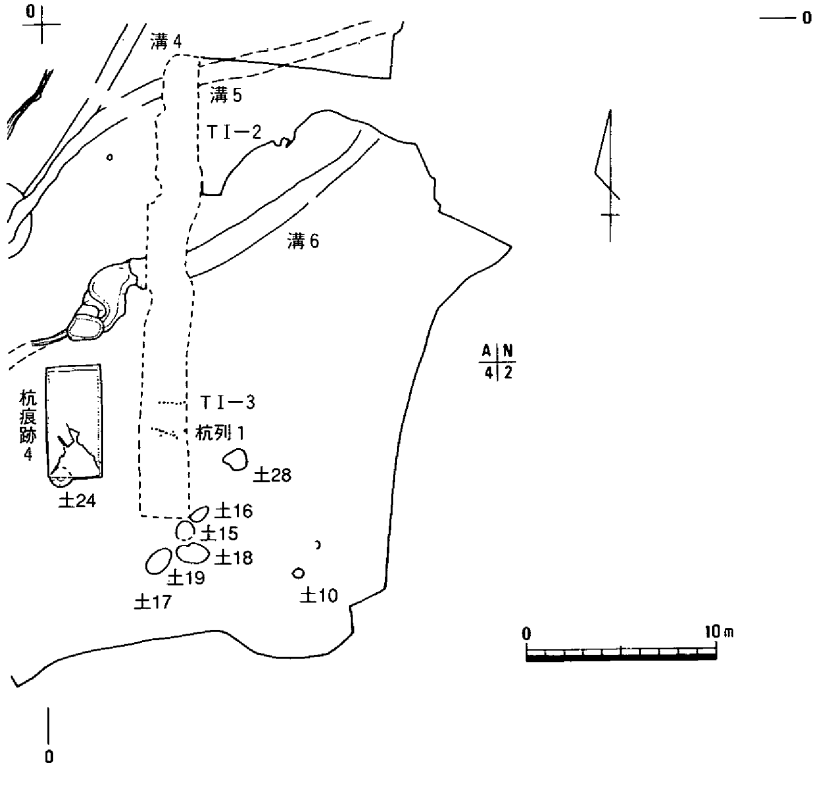
第18図　Ｄ区の遺構配置と遺構名（S=1/400）



第19図　Ｃ区の遺構配置と遺構名（S=1/400）



第20図　Ｂ区の遺構配置と遺構名（S=1/400）



第21図　Ａ区の遺構配置と遺構名（S=1/400）

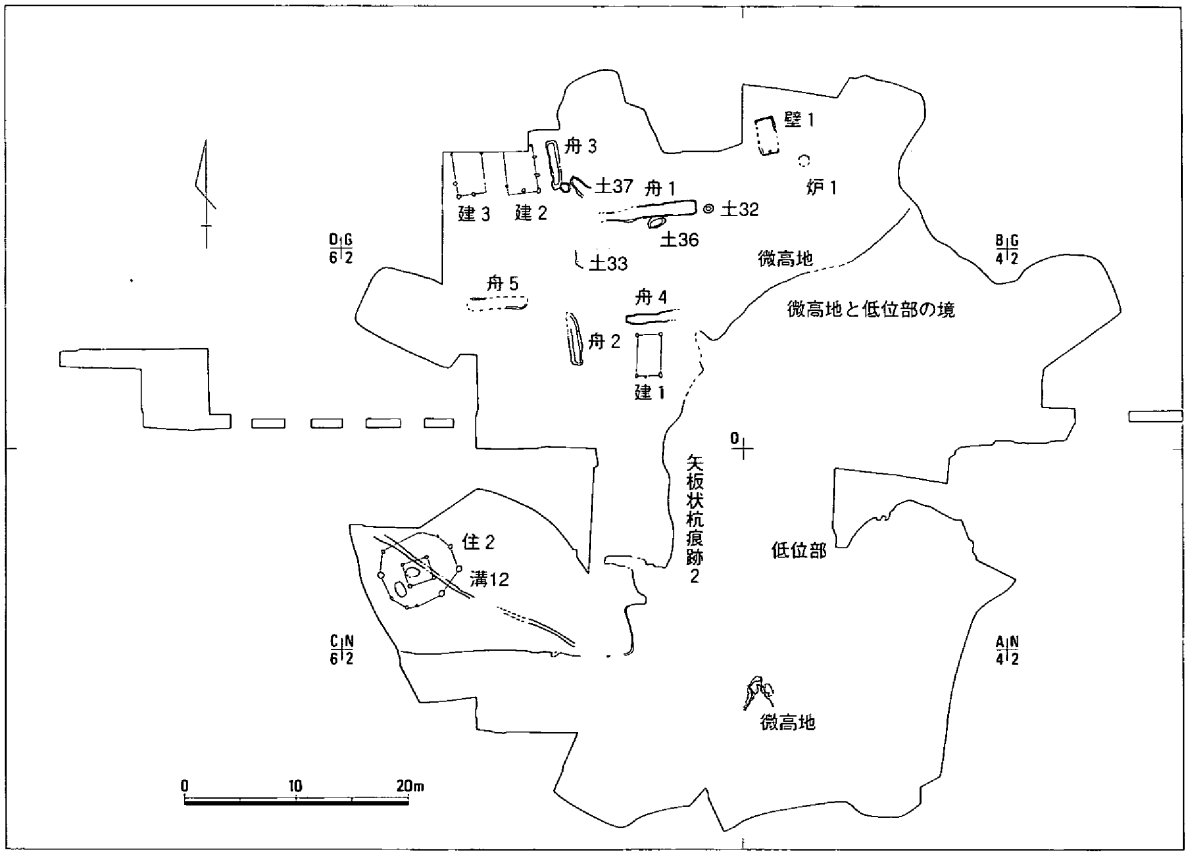
Ｂ　弥生時代前期

前期の遺構は低位部の水田を除けば、西から北西側に広がる微高地から検出されている。微高地は居住域とされ、建物や住居が点在しているがその密度は薄い。微高地の東側から南東側に広がる低位部には、微高地に接して水田が発見されている。こうしたことから、当時は水稲農耕開始期の集落を、居住域と生産域を一体的に捉えられたことから、注目を集めることとなった。

１　水田

水田は微高地に接して認められ、その境をなす斜面には水田を保護するためと考えられる矢板状杭の痕跡が、ＴＩ－１とＴⅢ－２で発見されたらしい。ＴＩ－１は微高地から低位部にかかるトレンチで、矢板（矢板状杭痕跡１）が発見された可能性は高いが、図面としては残っていない。ＴⅢ－２のトレンチでは矢板状杭痕跡２がかなり明瞭に認められる。第23図平面図の線が何を意味するものかは明確ではないが、断面図を見ると杭（柵）が打ち込まれていた様子がうかがえる。さらに写真（図版８－１・２）で見ると、粘土化して周囲の土色と明らかに異なる部分が列をなしていることからも、その杭が打ち込まれた時期を別にすれば、ほぼ間違い無いであろう。

ところで耕土となる水田層は微高地から1.5ないし２ｍ下がった低位部に水平堆積する、厚さ20～30cmの黒灰色粘土層で、微高地に接して幅４～８ｍの広がりをもつらしい。こうした状況が確認できるトレンチはＴＩ－１とＴⅡ、そしてＴⅣ－２やＴⅢ－３などであるが、現在それを追認できる資料



第22図　弥生時代前期の遺構全体図（S=1/600）

は少ない。第10図に掲げたＴⅡ北壁の土層断面のうち、Ｗ２からW10の断面図が微高地から低位部の場所であるが、低位部に黒灰色粘土層は見当たらない。色調が違うのかも知れないが、Ｗ２からＥ５まで見通してもほぼ水平に堆積する層は認められない。

ＴⅢ－３（第24図）は低位部に設けられたトレンチで、その東壁断面には41の黒褐色粘土層が水田層であると注記されている。ほぼ水平に堆積するこの層には前期の土器を含む他、笠原安夫氏によって稲穂、稲の茎と葉、水田雑草の果実と葉が検出され、さらに藤則雄氏による花粉分析でもイネの花粉が検出され、水田であることが追認された。

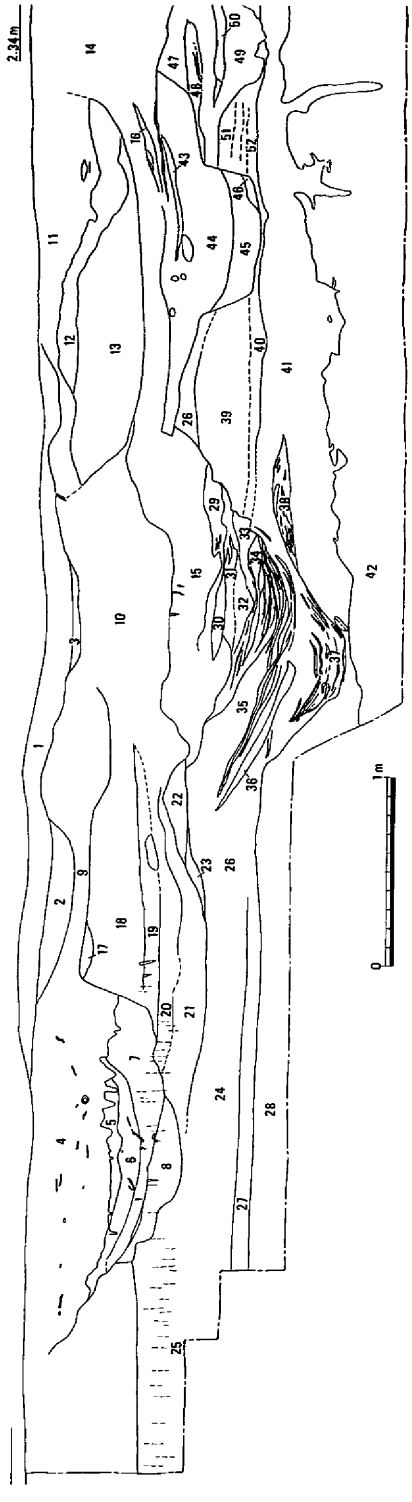
2　矢板状杭痕跡

『概報』によると矢板状杭痕跡はＴＩ－１、ＴⅢ－２、ＴⅣ－２の断面で認められることから、微高地と低位部の境界に連綿と続いていたものと考えられている。なお、微高地と低位部の境界はＴⅡにも係るが、ここでは杭痕跡が認められなかったらしい。

矢板状杭痕跡１

Ｂ区のＴＩ－１に係る微高地と低位部の境界で確認されたということであるが、図が残されていないため詳細は不明である。

第23図　矢板状杭痕跡の平面と断面図（S=1/40）
（近藤・春成・神原・渡辺）



1．攪乱
2．白灰色細砂
3．灰褐色粘土
4．茶褐色粘土
5．うすい黒灰色細砂
6．黒灰色細砂
7．黒褐色中砂
8．淡黒灰色微砂
9．黄褐色中砂
（部分的に粗砂を含む）
10．灰褐色細砂
11．灰褐色シルト
12．褐色粗砂
13．黄褐色粗砂
（上下の褐色粗砂層より粒子粗い）
14．茶褐色土（細砂を含む）
15．黒灰色細砂
（鬼管状斑紋随所に認められる）
16．黄灰色砂
17．砂
18．茶褐色中砂
19．褐灰色細砂
（部分的に粗砂を含む）
20．褐灰色細砂（１）
（部分的に粗砂を含む）
21．褐灰色細砂（２）
22．褐色粗砂
23．黄灰色粗砂
24．黒灰色シルト
25．青味かかった黒灰色シルト
26．灰黒色微砂
27．淡黒灰色粘土
28．黒褐色粘土
29．灰黄色粗砂
（灰黒色細砂を含む）
30．灰黒色細砂（灰黄色砂を含む）
31．黄灰色粗砂（灰黒色細砂を含む）
32．灰黒色中砂（細砂含む）
33．黄灰色砂粗
34．灰黒色細砂（粗砂を含む）
35．黄灰色粗砂
36．黄灰色粗砂
37．粗砂と粘土の互層
38．黒褐色細砂層に黄灰色粗砂層混在
39．灰黒色シルト（部分的に中砂を含む）
40．灰黒色粘土
（シルト層よりやや灰色かかっている）
41．黒褐色粘土（稲の花粉を含む）
42．青灰色粗砂
43．黄灰色砂
44．暗灰黒色細砂
（木片及び多量の炭化物を含む）
45．灰黒色微砂
46．灰黒色シルト
47．灰黒色粗砂
48．黄灰色粗砂
49．灰黒色細砂
50．黄灰色中砂

第24図　ＴⅢ－３東壁断面（S=1/40）（近藤・春成・神原・渡辺）

矢板状杭痕跡２（第23図、図版８－１、２）

Ｃ区に設けられたＴⅢ－２はほぼ微高地と低位部の境に平行しており、杭痕跡が平面と断面で明瞭に検出されている。『概報』によると、木質が黒褐色粘土となった杭痕跡は、断面の長辺が約10cmの角材らしいものも含まれているが、角材と丸木との比率などは明らかでない。ただいずれの杭も下端は尖っているらしい。時期については、杭痕跡および傾斜面を覆う茶褐色微砂層に前期の土器を含むことから、前期に属すると考えられているが、実測図（第23図）にはその層が認められない。

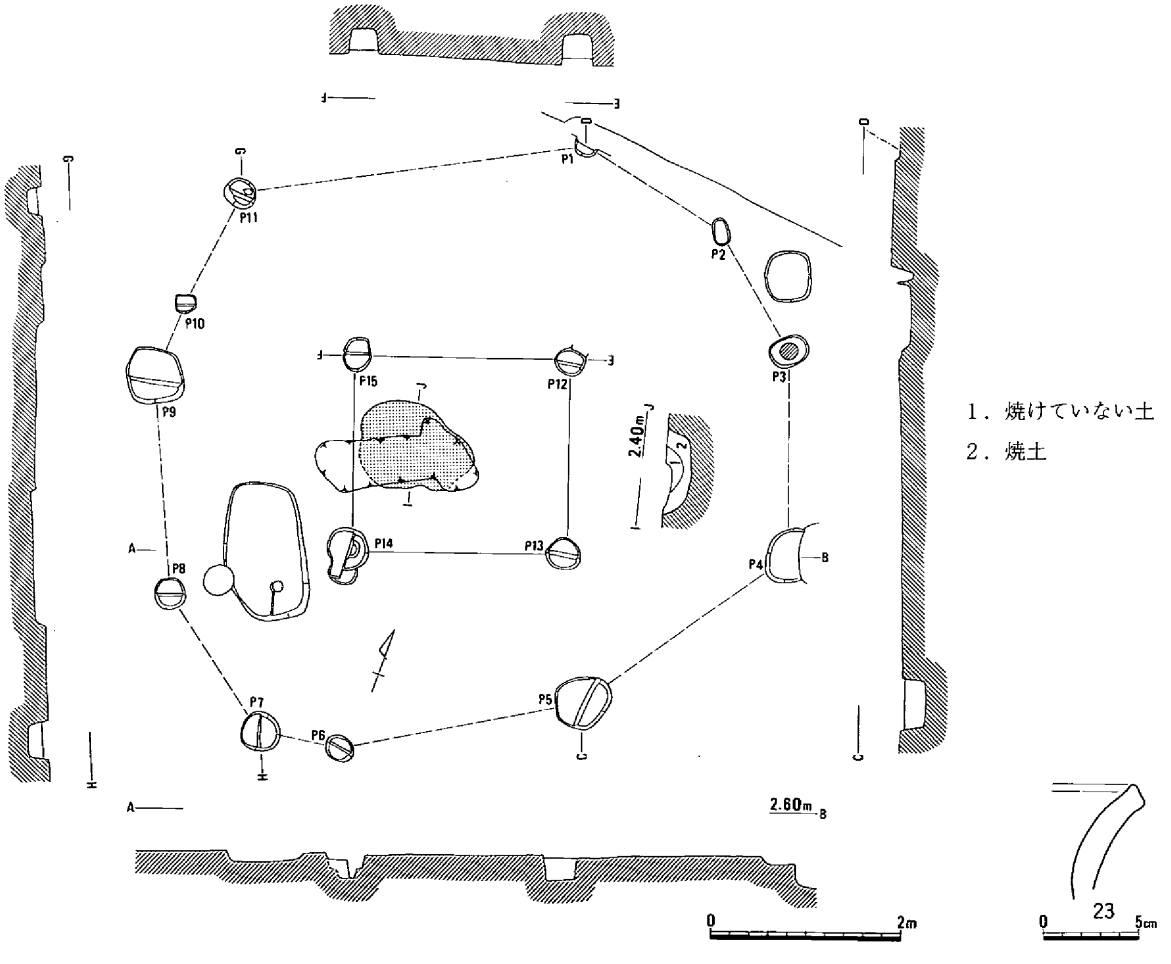
3　竪穴住居

竪穴住居２（第25図）

Ｃ区の西南調査区微高地で検出された住居であるが、竪穴住居になるか平地住居になるかは不明である。『概報』によると住居は中央に４本の柱穴を配し、その周囲に12本を円形にめぐらしている。中央西寄りには炉があり、住居西南部には貯蔵穴とも見られる土壙があるということである。

現存するＳ＝１／20の図によると、径30～40cm、深さ30cm前後の柱穴を方形に配し、その西寄りには焼土が詰まった炉が設けられている。柱穴間の距離は東西が2.2m、南北２ｍと、やや東西が長い。この方形柱穴を取り囲むように11本の柱穴がめぐっているが、図に柱穴の埋土が記録されていないため同じ遺構であるかどうかを検討する材料に欠ける。しかし、柱間隔は不均等で、柱穴の径も大きいものは70cm、小さいものは20cmあまりと格差が大きいことから、これらの柱穴を結び付けて考える必要は無いとも言えよう。住居の西南側には長さ1.5ｍ、幅0.8ｍ、深さ20cm前後の長方形を呈する貯蔵穴とも見られる土壙があり、内部から太形蛤刃石斧が出土したとされるが、実物は不明である。

出土遺物はどの柱穴からのものかは不明であるが、土器がわずかにある。その中で唯一P11からの出土が明らかな23は、壺の口縁部で、前期に属する。



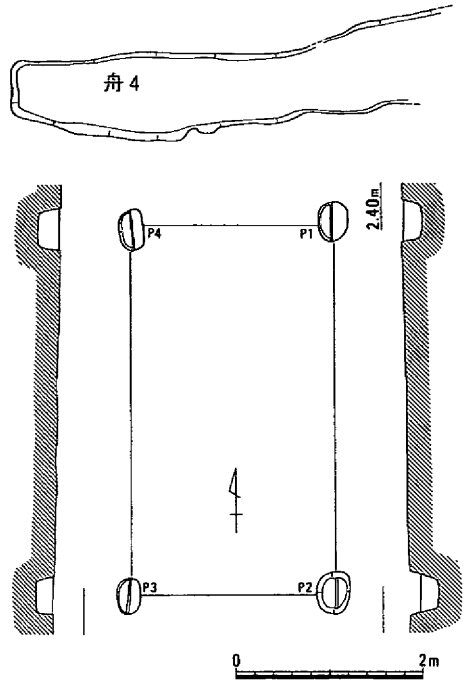
第25図　竪穴住居２（S=1/80）と柱穴出土土器

4　掘立柱建物

掘立柱建物１（第26図）

D区の南東寄りで検出された、桁行１間、梁間１間の掘立柱建物で、北側の梁間に平行して舟形土壙が穿たれているが、確実に伴うものであるかどうかは不明である。『概報』では４本の柱を長方形に配したもので、柱間は桁行3.7m、梁間2.1mを測る高床構造の倉庫と考えられている。

出土遺物は確認したが、該当するものは無かった。したがって時期については判断できないが、調査時の所見を尊重して前期の遺構と考えておく。

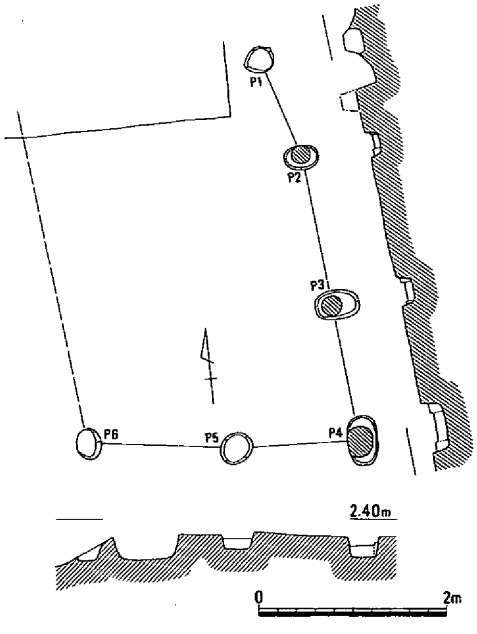


第26図　建物１（S=1/80）

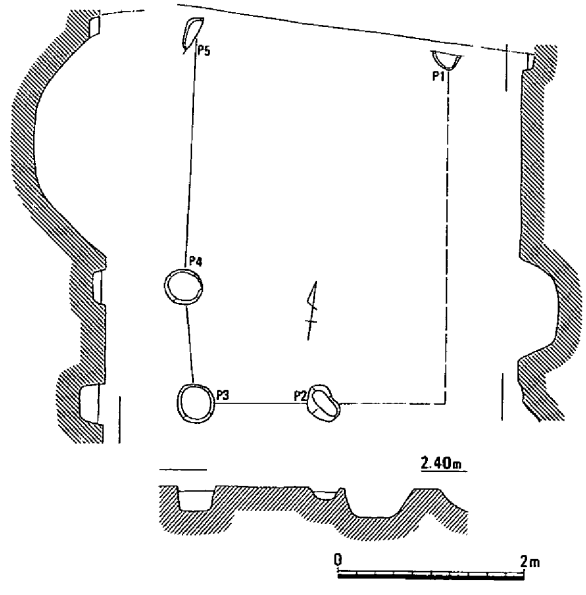
掘立柱建物２（第27図）

D区の西北調査区で検出した掘立柱建物で、掘立柱建物３とほぼ主軸を揃えている。『概報』によると桁行３間、梁間２間、計測値で示せば桁行４m、梁行2.8mの高床構造の倉庫と考えている。しかし、東側の３本の柱穴は柱痕もありほぼ等間隔に並ぶものの、全体的にいびつであることは否めない。さらに、西側の桁行を構成する柱穴が溝によって削平されたとはいえ、南から３番目の柱穴は溝の無い場所にあたることから、１本も柱穴が検出されないのは奇異な感じを受ける。なお、東側には桁行と平行して舟形土壙３が穿たれているが、掘立柱建物１の舟形土壙同様、一体的に捉えて良いかどうかは明確でない。

出土遺物は無いものと思われ、調査時の所見から前期の遺構と考えられる。



第27図　建物２（S=1/80）



第28図　建物３（S=1/80）

掘立柱建物３（第28図）

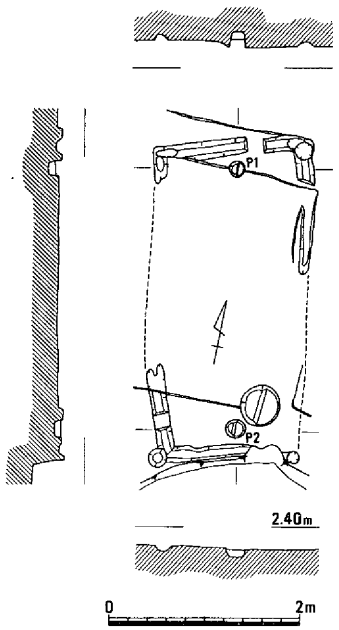
D区の西北調査区で検出されたもので、掘立柱建物２の西側に主軸を揃えて並ぶ。『概報』によると規模もほぼ同じということである。しかし、東側桁行の柱穴が溝の無いところでも検出されていないなど、やや不自然さを感じさす。

出土遺物は無いが、調査時の所見から前期の遺構と推定される。

5　壁立建物

壁立建物１（第29図）

B区の北調査区で検出された壁立建物で、主軸をほぼ掘立柱建物２・３と揃えている。『概報』によると４本の柱を桁行3.3m、梁間1.7mの長方形に配し、その柱穴を繋ぐように浅い溝がめぐり、両短辺中央のやや内側にも柱穴を穿っているということである。この建物がどういう構造であったのかは明確にし得ないが、浅い溝に壁を立てていたものと推定される。また、両短辺のＰ１・Ｐ２は建物内に設けられた棟持柱であろうか。



第29図　壁立建物１（S=1/80）

6　舟形土壙

舟形土壙はD区でまとまって検出され、主軸の方位をほぼ東西あるいは南北に揃えるとともに、その配置にも方形の区画を思わせるもの、あるいは建物と係わりをもつようなものなど、規格性が認められる。しかし、その性格についてはなお明確にするまでには至っていないことから、ここでは個々の遺構毎に説明を加えておく。

舟形土壙１（第30～33図）

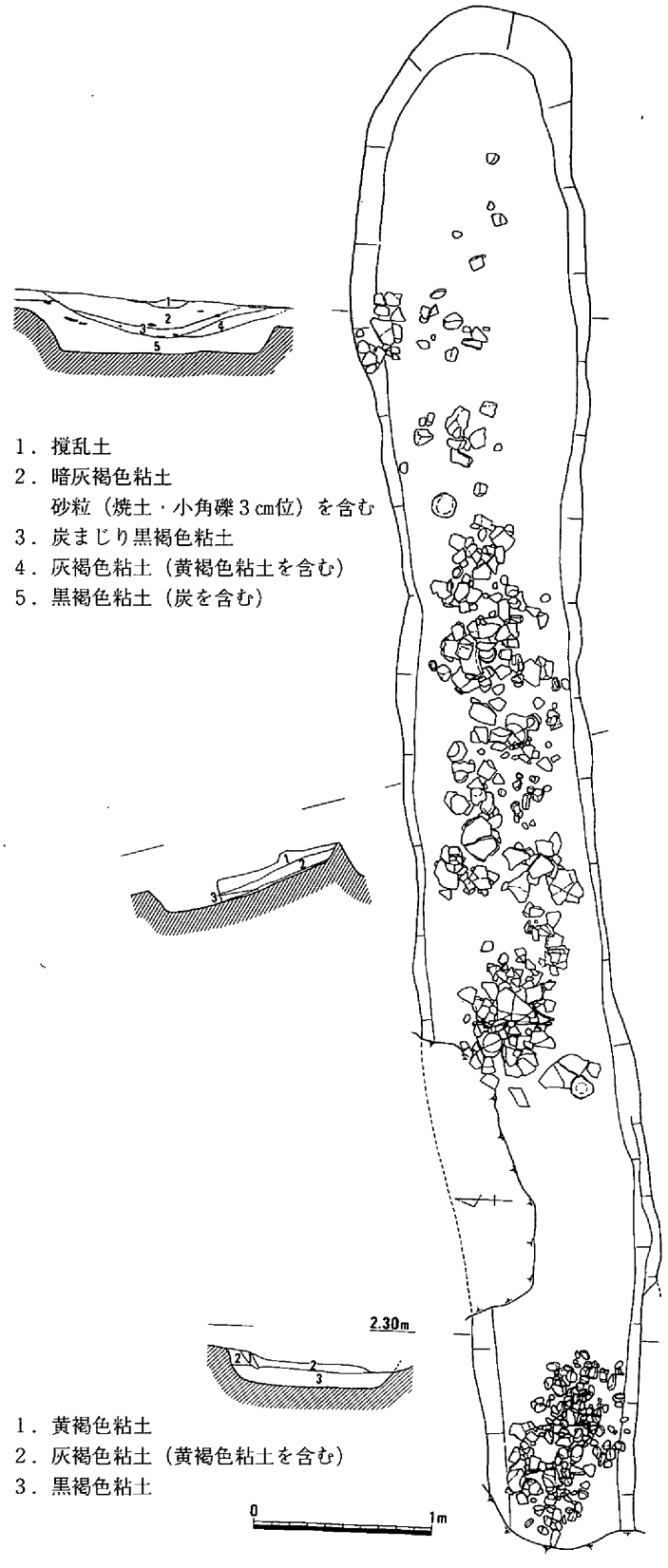
D区の北東寄りで検出されたもので、調査時にはＤ１、すなわち溝として認識されていた。全体の形状は溝状をなし、床面は平坦で壁は急傾斜で立ちあがる。主軸を東西方向に向け、西端は削平されているが、現存長8.7m、中央幅1.1m、深さ0.2mを測る。舟形土壙内には多くの遺物が廃棄されていたが、それらは２群に分かれている。中央付近から東側の一群は少量の礫とともに多くの土器が廃棄されているが、完形に近いものはなく、どちらかと言えば小片がほとんどである。西端の一群はわずかに土器を含むものの、10cm前後の円礫をまとめて廃棄している。

出土遺物は弥生土器と石器が認められた。弥生土器の器種には壺と甕があり、その量比は口縁部で３：７の割合である。第31図24から第32図85は壺である。形態は球形の胴部にハ字状の頸部が付き、その上端は外反して口縁部となる。口縁部はわずかに段がつくものが目立つが(25・26・27・29など)、沈線をめぐらすもの（28・30)、突帯をめぐらすもの（33）などがある。頸部の下端、胴部との境界には段が見られるものもあるが、多くは胴部の肩ないし肩からやや下がった位置に沈線をめぐらすものである。沈線は２本のもの（36・37・38・39など)、３本のもの（45・51など）などがあり、その下側には箆描文（重弧文、木葉文など）が施されるものがある（46～48・52～82など)。54は４条の沈線をめぐらし、その上側には重弧文、下側には低い突帯をめぐらせ刻みを施している。83は削り出し突帯に刻みを施したもので、84は削り出した突帯、85は貼り付けの突帯である。

色調は概して明るいものが多く、胎土には砂粒を多く含む。粘土帯の接合は砂粒の流れから外傾接合と推定されるが、剥離面を持つわずかな資料（55・59・60）も外傾接合であった。

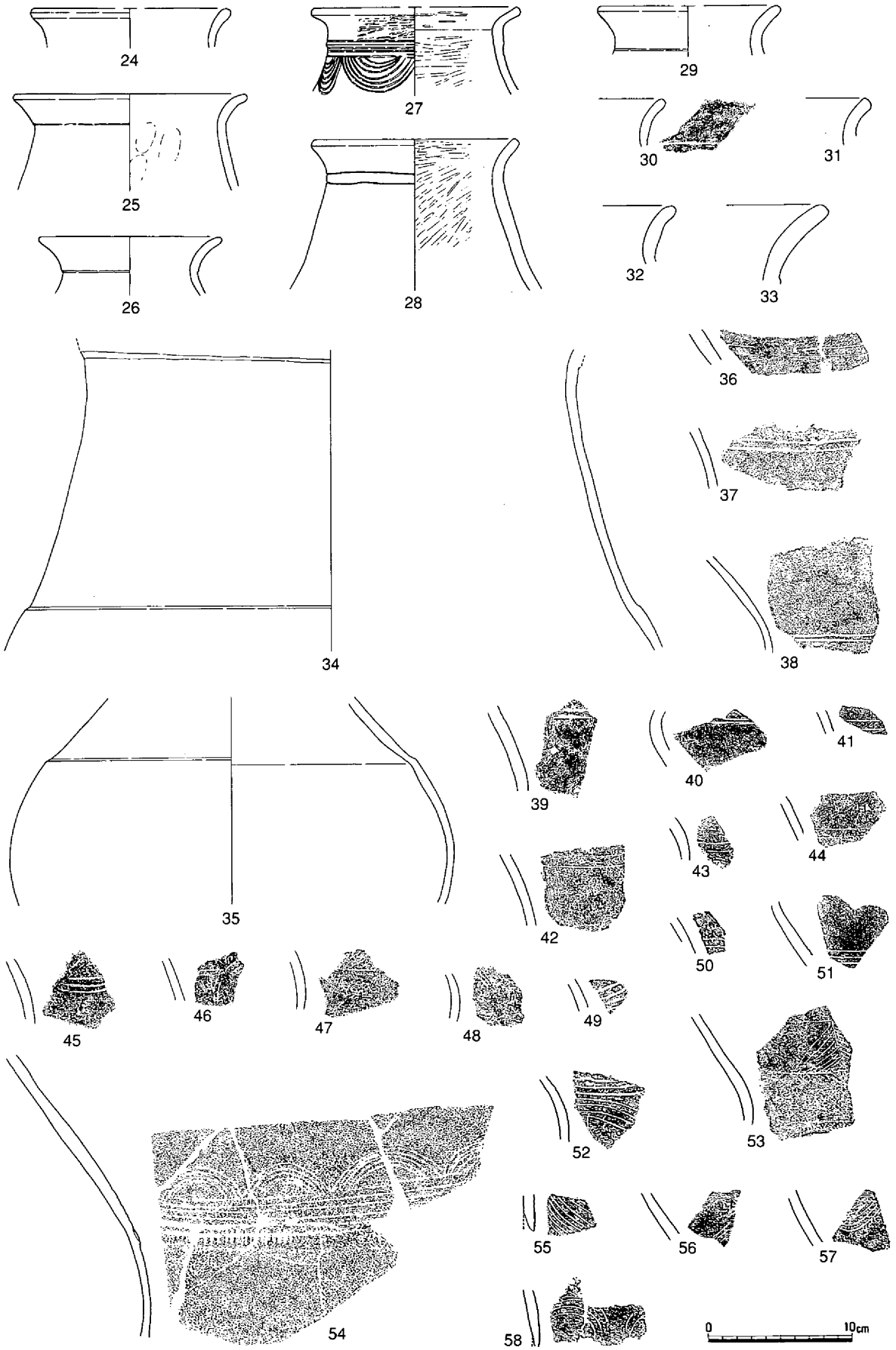
86から113は倒釣鐘状の胴部に、外反する口縁部が付く甕である。口縁部の多くは単純に外反するだけであるが、胴部との境界にわずかに段を持つもの（110）、突帯に刻みを施すもの（112）、沈線をめぐらすもの（111）などがあり、その端部には基本的に刻みをめぐらすが、無いものも（102～104）わずかにある。また、刻みは端部の下端に施すものと、全面に施すものとが認められるが、その量比は不明である。倒釣鐘状を呈する胴部は、胴部の上半が少し膨らむものと、口縁部から徐々に幅を減じながら底部にいたるものとがある。後者はいわゆる如意状口縁甕で、前者は環瀬戸内地域の甕と考えられる。前者の胴部上半あるいは口縁部近くには段が施されるもの（108・109）がある。114・115は鉢であろう。116～130は壺ないし甕の底部である。127には刷毛目が顕著に見られる。

胎土には砂粒を多く含む。粘土帯の接合は、判明したものはすべて外傾接合であった。



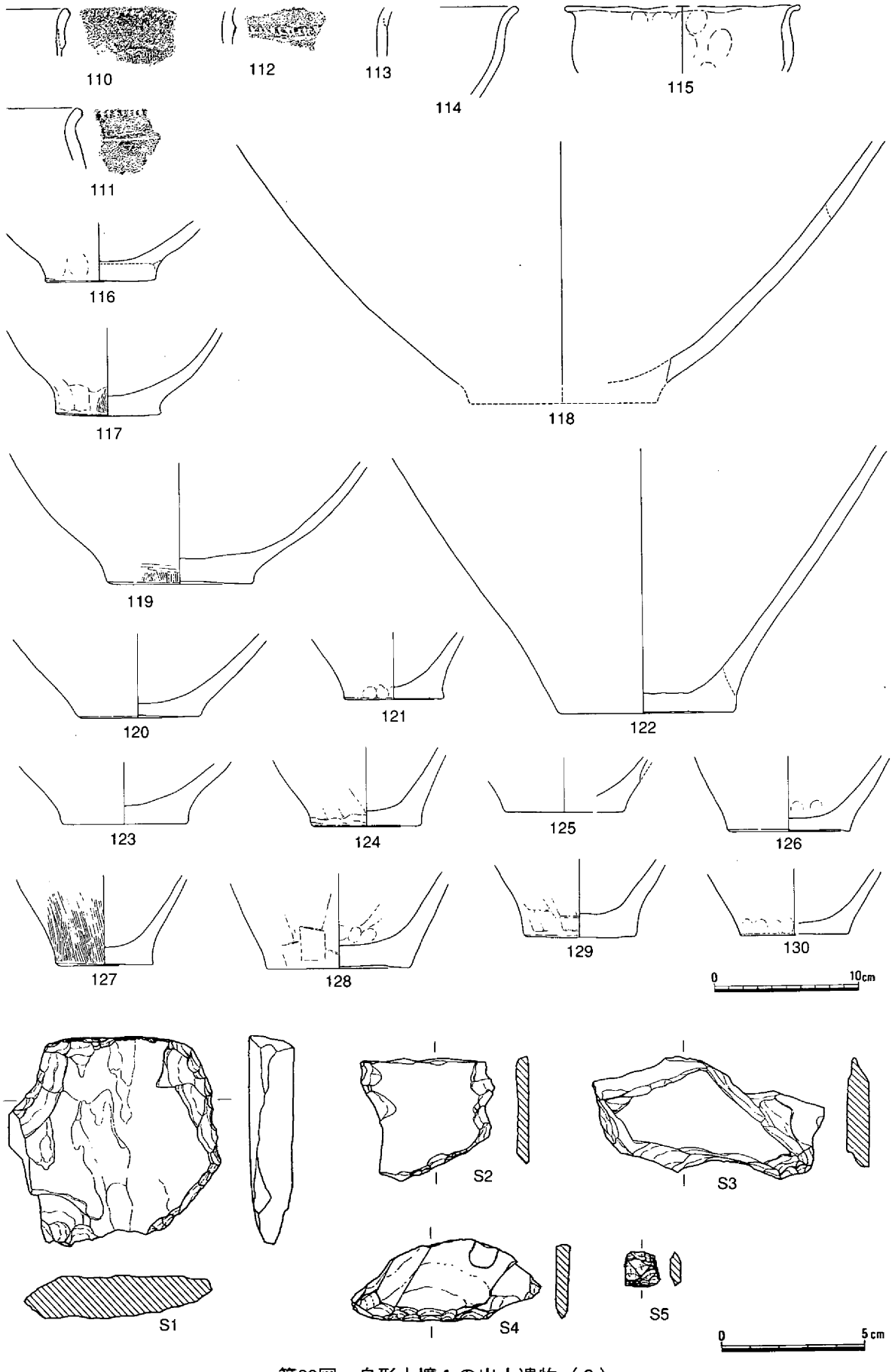
第30図　舟形土壙１（S=1/40）

石器は頁岩を用いた未製品とその砕片を中心に、わずかにサヌカイト製も認められた。Ｓ１は頁岩で、周辺の調整が施されていることから未製品と推定されるが、器種は不明である。強いて言えば石製円板か。Ｓ２～Ｓ４も頁岩を用いており、磨製石包丁の未製品である可能性が高い。Ｓ５はサヌカ



第31図　舟形土壙１の出土遺物（１）

第32図　舟形土壙１の出土遺物（２）



第33図　舟形土壙１の出土遺物（３）

イト製の楔形石器である。

遺構の廃絶時期は、出土した土器が前期の中でも古い段階のものであることから、前期前半と考えておく。

舟形土壙２（第34～39図）

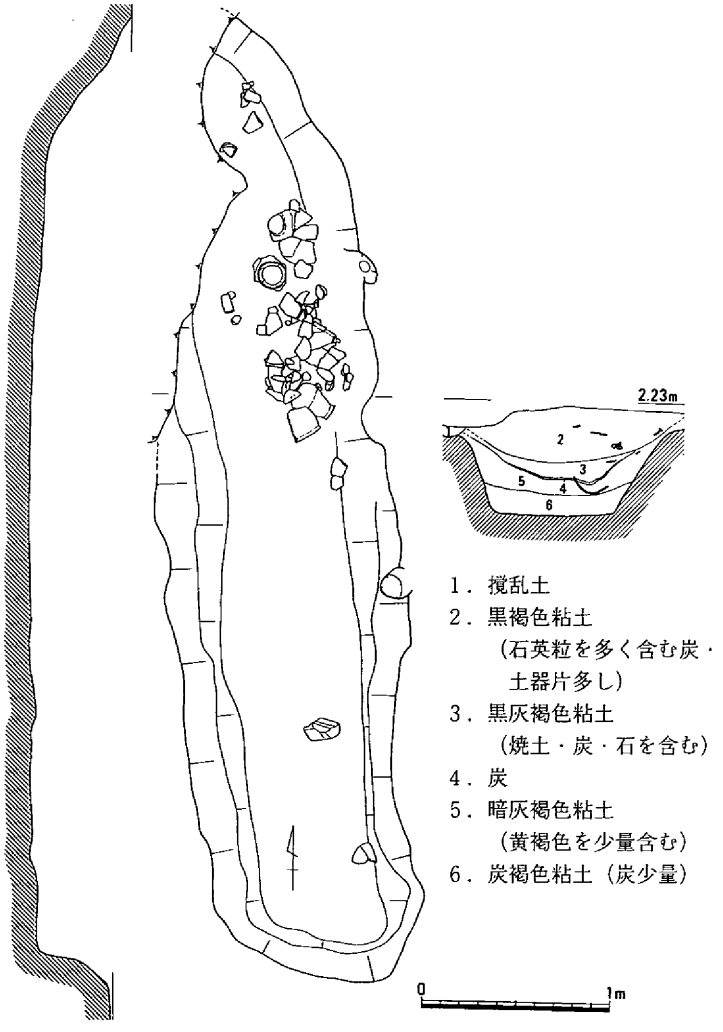
D区の南寄りで検出された舟形土壙で、主軸を南北方向に向ける。北西端を一部削平されており、現存長5.1m、中央幅1.25m、深さ0.4mを測る。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ちあがる。遺物は北側に集中しており、比較的大きな破片も認められるが、これらの幾つかは出土状態の実測図に記されてはいるものの、現存していないものも見られる。また、磨製石包丁の完形品も出土状況が写真（第38図）で残されているが、これも実物は現存していない。

出土遺物は弥生土器と土製品、そして石器が認められた。弥生土器の器種は壺と甕、そして蓋が見られる。その量比は統計を取っていないので明確でないが、壺よりやや甕が多い感じを受け、これに蓋がわずかに加わる。第35図131から135は壺の口縁部で、段をもつもの（131・133など）ともたないもの（134など）がある。139は断面がカマボコ状になる突帯がめぐる。140から166は胴部の破片である。低い突帯をめぐらすもの（140）、段をもつもの（141・156）、肩部に１～数条の沈線をめぐらすものあるいはその下に篦描文を施すものなどがある。篦描文は細くて浅い暗文状のものが多い。

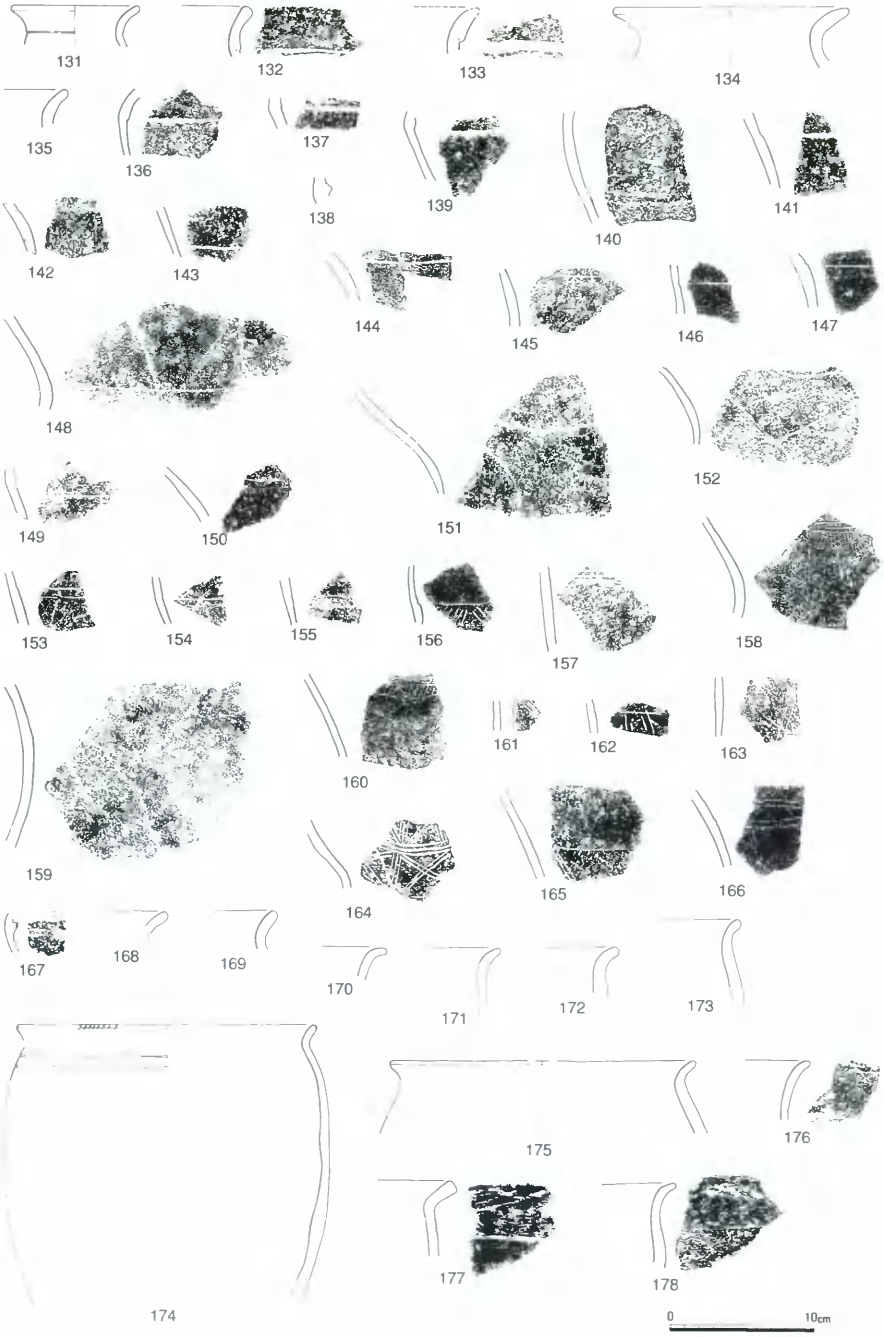
色調は明るいものが多く、胎土には砂粒を多く含む。粘土帯の接合は、剥離した接合面で見る限り外傾接合である。特に口縁部の段はこの接合部を利用して作ることが特徴的である。

167は突帯文土器で、口縁部下に刻み目突帯がめぐる。168から186は甕である。甕の器形は倒釣鐘状の胴部に外反する口縁部が付くが、胴部は上半が膨らむものが主体を占めている。口縁端部には基本的に刻み目を施すが，無い物も見られる。口縁部直下には１、２条の沈線（178・185など）をめぐらすものがある。186は胴部に低い段を形成し、そこに刻み目を施している。

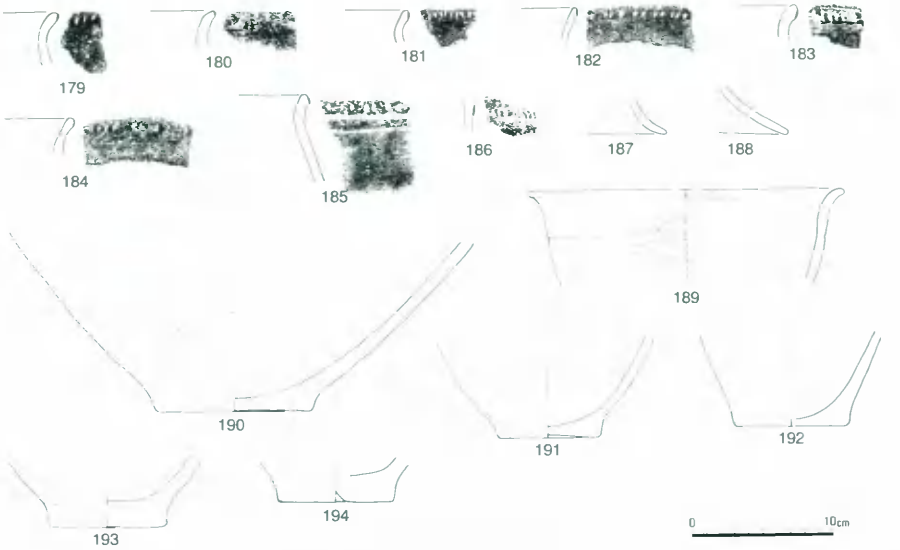
甕の色調は明るいものもあるが、どちらかといえば壺に比較して暗いといえる。調整は内面に押圧痕をのこすものの、比較的丁寧なナデあるいはミガキで仕上げている。外面もハケメを残すものはわずかで、多く



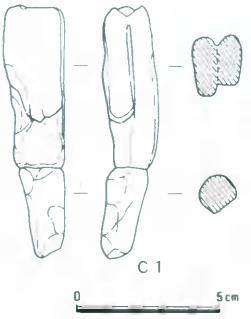
第34図　舟形土壙２（S=1/40）



第35図　舟形土壙２の出土遺物（１）



第36図　舟形土壙２の出土遺物（２）



第37図　舟形土壙２の出土遺物（３）

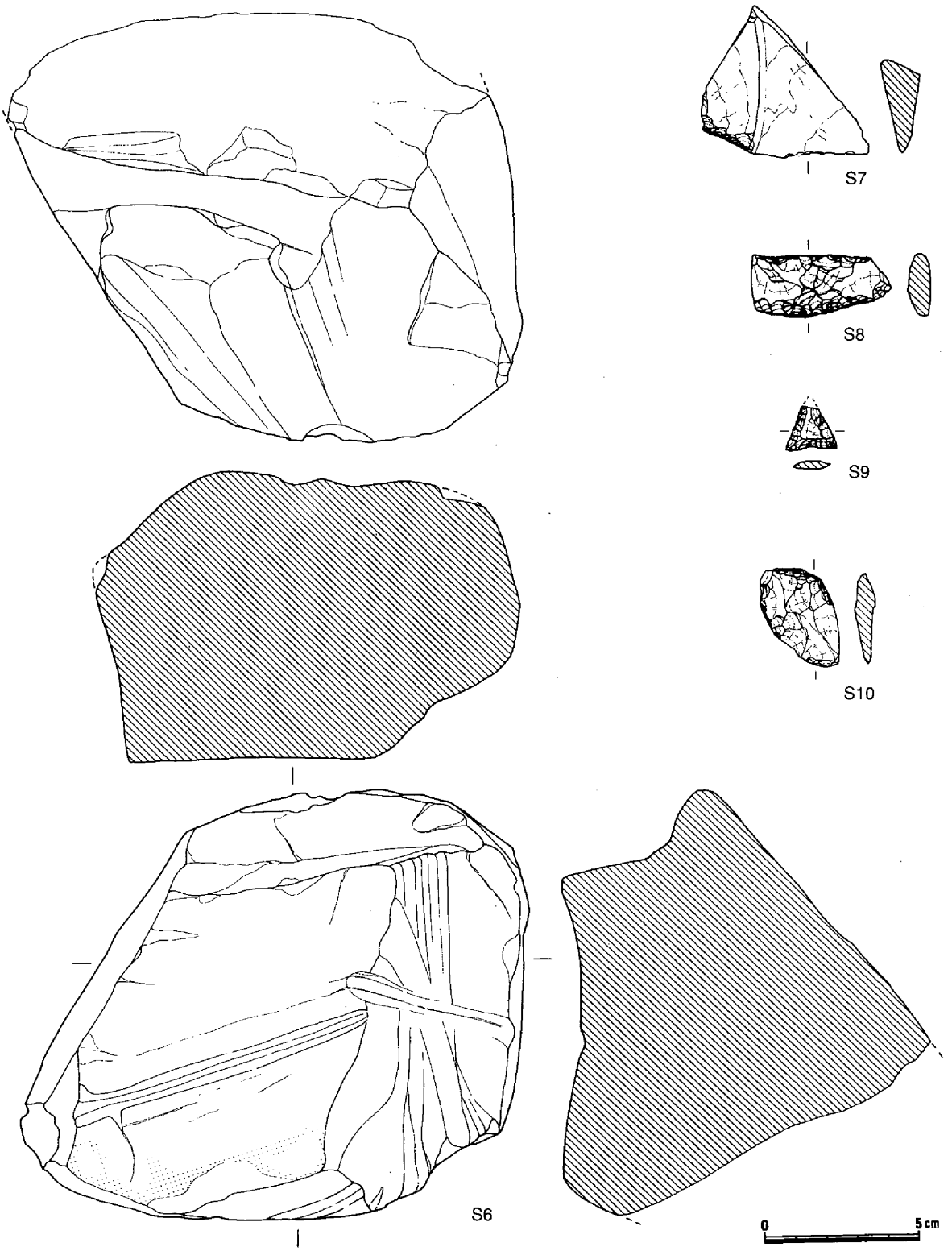
第38図　磨製石包丁の出土状態

は丁寧なナデを行っている。粘土帯の接合は、接合面で剥離した資料が少ないため即断できないが、外傾接合と推定される。

187と188は蓋と推定されるが、187は小片のため明確でない。189は鉢であろう。口縁部下には沈線がめぐる。190から194は壷と甕の底部である。190は外面を丁寧に磨いており、壷の底部であろう。

土製品（Ｃ１）は粘土紐を折り曲げたようなもので、形あるものを作ろうと言う意識があったかどうか疑問である。

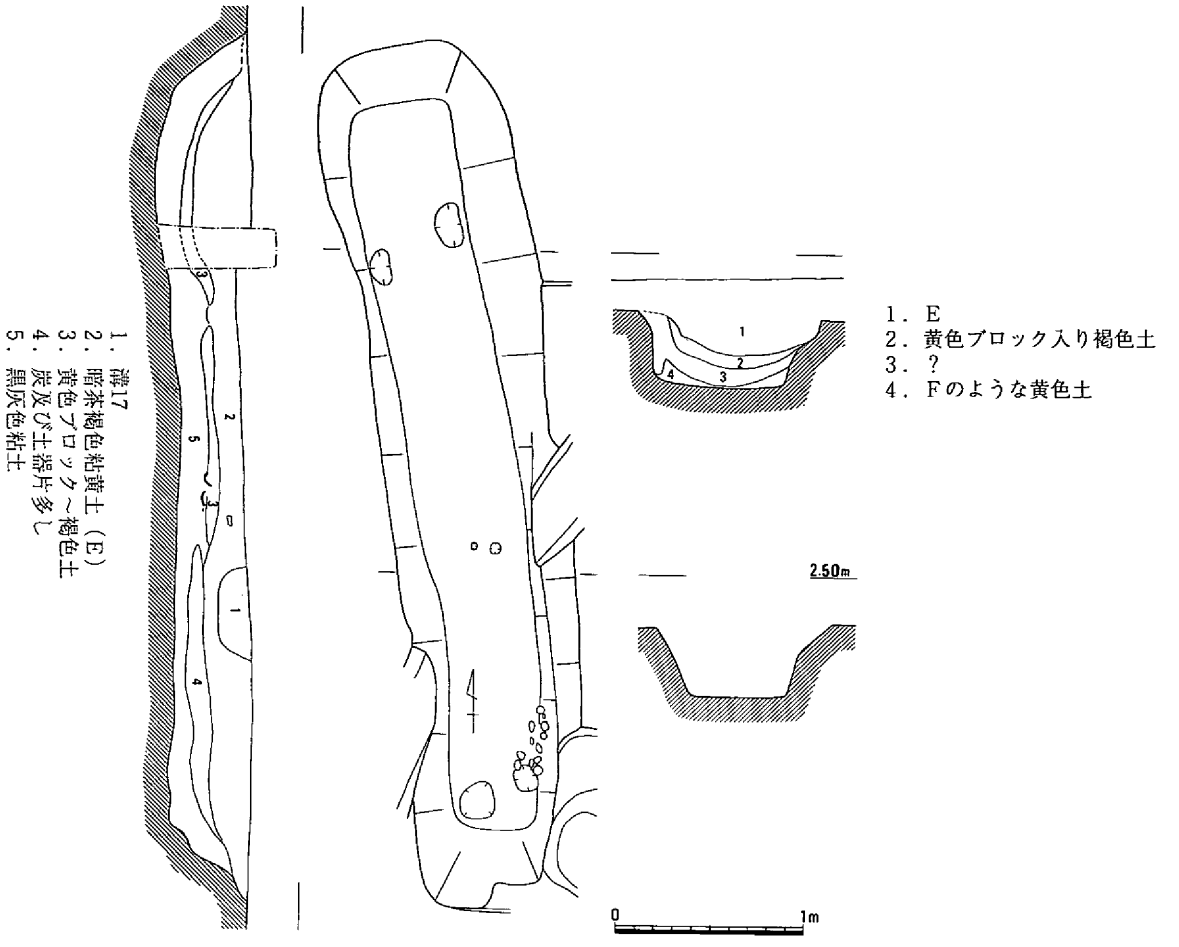
石器は磨製石包丁、砥石、スクレイパー、石鏃、楔形石器がある。磨製石包丁は写真から判断すると外湾刃半月形を呈し、結晶片岩系の石材を用いていると思われる。砥石は細い溝が２条見られる。



第39図　舟形土壙２の出土遺物（４）

なお、砥石の機能と係わるものではないが、使用面に薄緑色を呈するガラス質（図の網目）が付着している。

Ｓ７からＳ10はサヌカイト製の石器で、Ｓ７は剥片の縁辺をわずかに調整している。遺構の廃絶時期は、出土した土器から推定すると前期前半と考えられる。



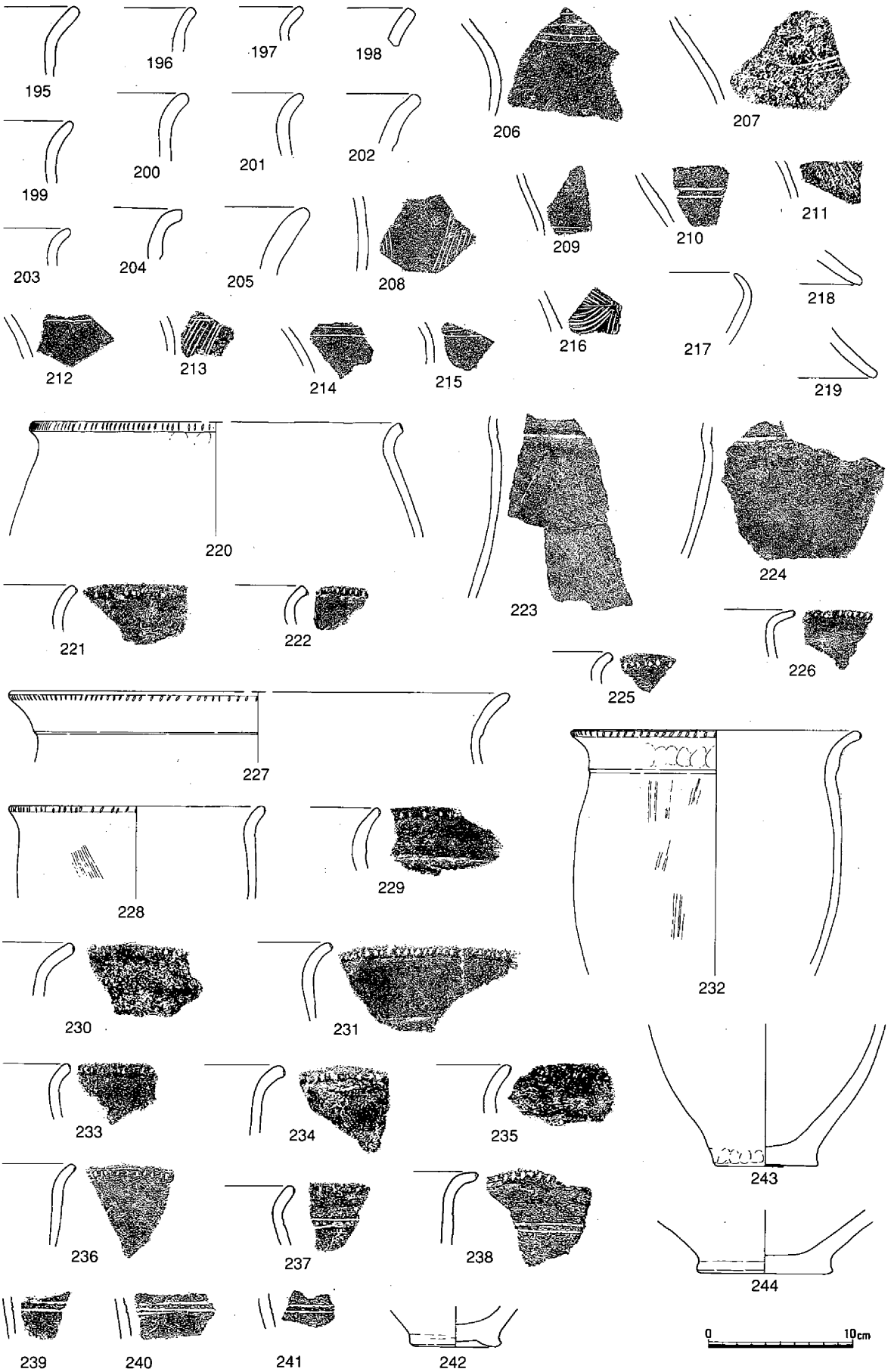
第40図　舟形土壙３（S=1/40）

舟形土壙３（第40～43図）

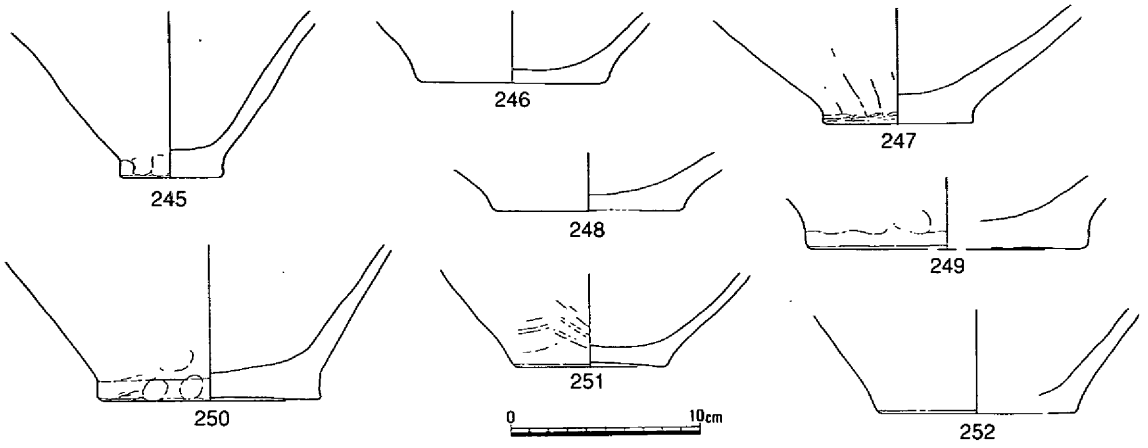
D区の北寄りで検出された舟形土壙で、主軸を南北に向けるが、建物２の東側に平行することから、建物に係わる遺構ではないかという意見もある。調査時の名称は土壙Ｉと第10土壙という二つの名称が付されていたようである。ほぼ全体が残っており、規模は長さ4.6m、中央の幅0.9m、深さ0.4mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ちあがる。遺物はあまり多いとは言えず、また細片が主体を占める。

出土遺物は弥生土器と石器、そして土製品が認められる。弥生土器は壺、甕、鉢、蓋が認められるが、その数量比は明らかではない。ただ感触で言えば、壺と甕では甕が多いと思われ、鉢と蓋はわずかである。195から216は壺である。口縁部は段をもつもの（195・202・204など）と、外反しただけのもの（197・199・200など）とがある。201や203などは口縁端部に刻み目がなく、図だけ見ると甕の口縁部と間違いそうであるが、調整が壺と共通するので壺に含めた。しかし、甕でないとは断言できない。206から216は胴部の破片で、数条の平行沈線や箆描文が施される。

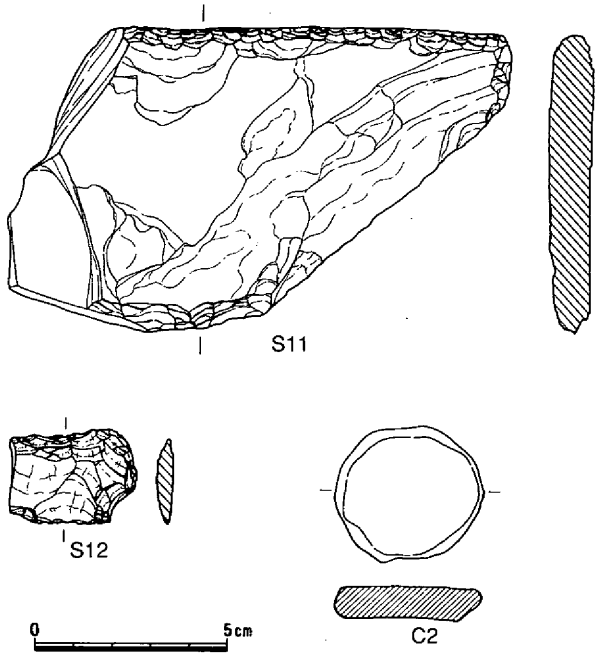
220から241は甕である。甕にも段を施すものがある（223・224・227・232など）が、何も施さないもの（220・228・236など）や２条の平行沈線をめぐらすもの（237・238）がある。口縁端部には原則的に刻み目を施すが、端部下端に施すものと（221・222・236など）、全面に施すものと（220・231・238など）が見られる。 217は鉢で、口縁部は内湾する。218と219は蓋と考えているが、小片の



第41図　舟形土壙３の出土遺物（１）



第42図　舟形土壙３の出土遺物（２）



第43図　舟形土壙３の出土遺物（３）

ため確実性に欠ける。243から252は壺ないし甕の底部である。245は底部の大きさや胴部の開き具合から、蓋である可能性が考えられる。

石器は石包丁の未製品とスクレイパーが認められた。S11は結晶片岩系の石材を用い、一辺を直線的になるように調整し、その対になる側にも調整を施している。図の左側は折れているが、おそらく外湾刃半月形の磨製石包丁を作成する途中で折れたため、廃棄されたものと推定される。S12はサヌカイト製のスクレイパーである。

土製品（Ｃ２）は、土器片の周囲を打ち欠いて円形に整えた土製円板であるが、用途は不明である。

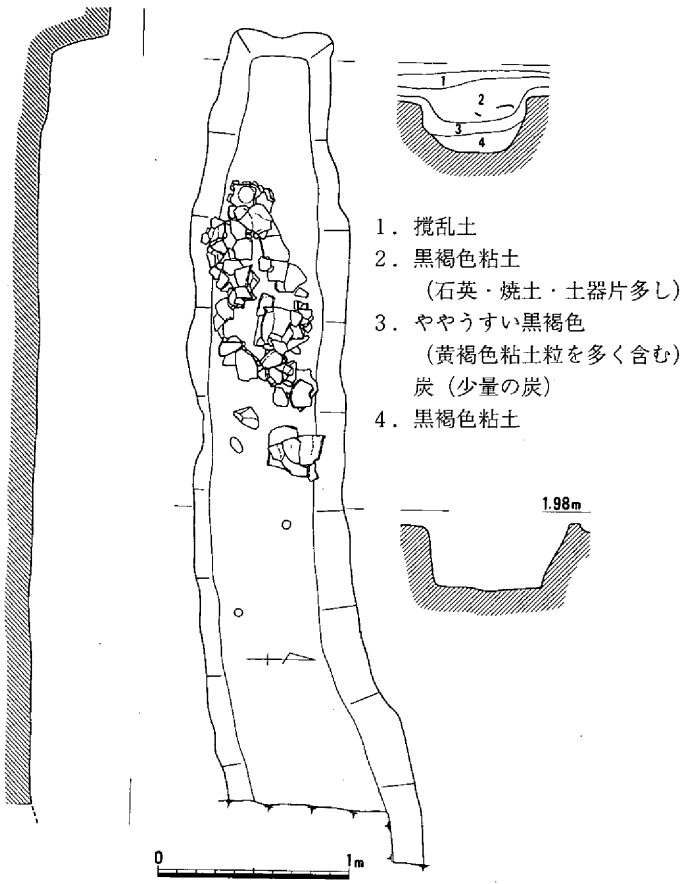
遺構の廃絶時期は、出土した土器から前期の前半と考えられる。

舟形土壙４（第44～48図）

Ｄ区の南東寄りで検出された舟形土壙で、調査時にはＤ２あるいは土壙Ⅶという名称が付されていたらしい。主軸を東西に向け、建物１の梁行と平行することから、建物１と係わる遺構ではないかという意見もある。土壙は東側を削平されており、現存長4.1m、中央幅0.8m、深さ0.3mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ちあがる。遺物は中央からやや西側にまとまっており、完形に近いものも含まれていた。

出土遺物には弥生土器と石器が認められた。弥生土器の器種は壺と甕、そして蓋が見られたが、その数量比は統計処理をしていないので明らかでない。しかし、壺より甕が多いという感じは受ける。253から282は壺である。このうち253から269は口縁部で、段をもつもの（253～256など）、外反する

だけのもの（257～260）、突帯をめぐらすもの（266）がある。253は小形の壺で、口縁部および頸部下端に段をもち、胴部には箆描の山形文を施している。調整はヘラミガキであるが、内面および口縁部外面には押圧痕を残している。口縁部の段は外傾接合の端部を調整して作り出している。269は大形の壺で、口縁部には外傾接合による段が施され、頸部と胴部の境界には２条の平行沈線がめぐる。頸部と胴部の境界は、段が施されるものと（272・277・278など）沈線がめぐるものと（270・273など）があり、その下側には箆描文が施されるものもある。272は中形の壺で、頸部と胴部の境界には段をめぐらせ、その上側には短い斜線を５条、下側にはやや弧を描く４条の斜線を施している。なお、これらの箆描文はいずれも細くて暗文状を呈している。



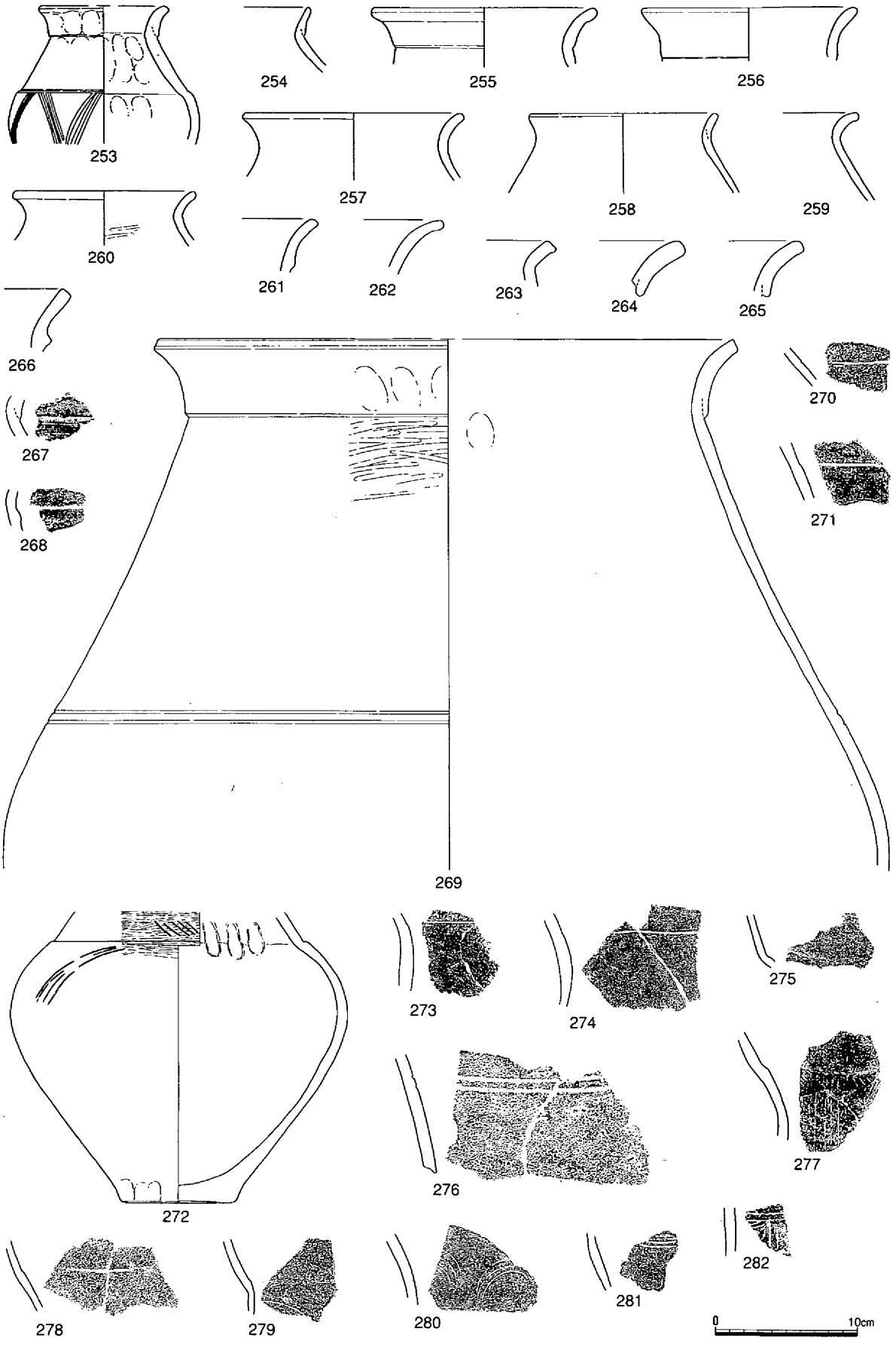
第44図　舟形土壙４（S=1/40）

色調は明るいものが多い。胎土には調整にヘラミガキを多用するため目立たないが、砂粒を多く含む。粘土帯の接合は、接合面の剥離で確認できたものはすべて外傾接合であった。

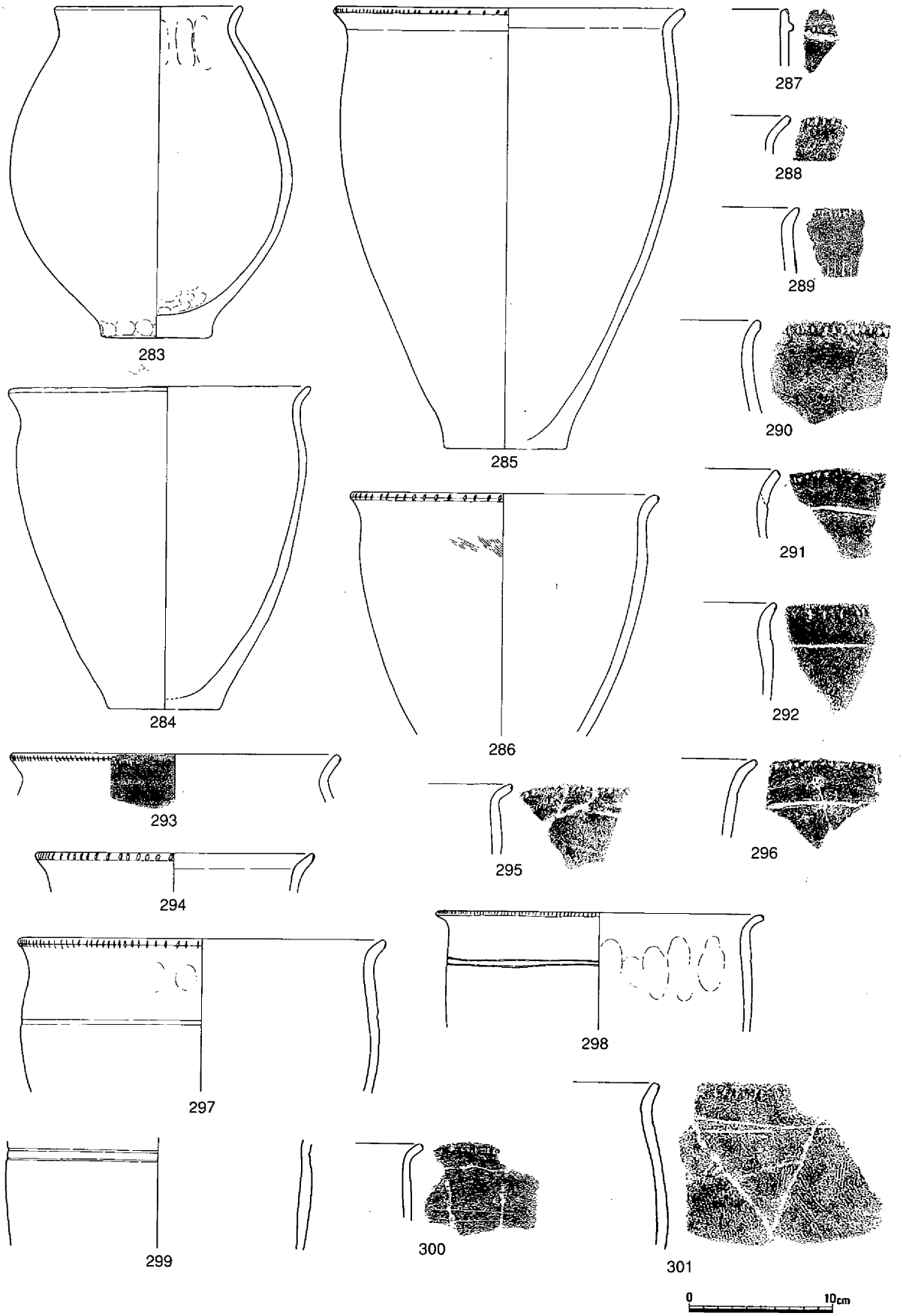
283は松菊里型の壺で、概して丁寧な作りである。低部には押圧痕が顕著に残る。285から311は甕である。外反する口縁部の端部には原則的に刻み目を施すが、ないもの（305）も少量ある。また、刻み目を施す位置は、端部の全面に及ぶもの（291・295・300・303など）と下端だけのもの（285・292・293・297・301・302・308など）があり、どちらかと言えば下端に施すものが多いように思われる。口縁部直下から胴部上半には段を作るもの（302・303・304・307・308など）、１条ないし２条の沈線をめぐらすもの（291・292・297～299・301など）、何も施さないもの（285・286など）がある。289は刻み目がめぐるが、この刻み目は303のように段の上に施されるものかどうかは不明である。287・310・311 は突帯文系の甕で、287 は口縁部に刻み目突帯、310は胴部の段状突出部に刻み目が、311は刻み目突帯がめぐる。

甕の色調は壺に比較してやや暗い感じを受ける。胎土には多くの砂粒を含む。調整は内面に押圧痕を残すものの、概して丁寧なナデないしミガキで、外面はハケメを残すものもあるが、多くはナデにより消し去っている。粘土帯の接合は、接合面の剥離した資料がわずかであることから、それだけで全体を推し量ることはできないが、判明したものは外傾接合であった。

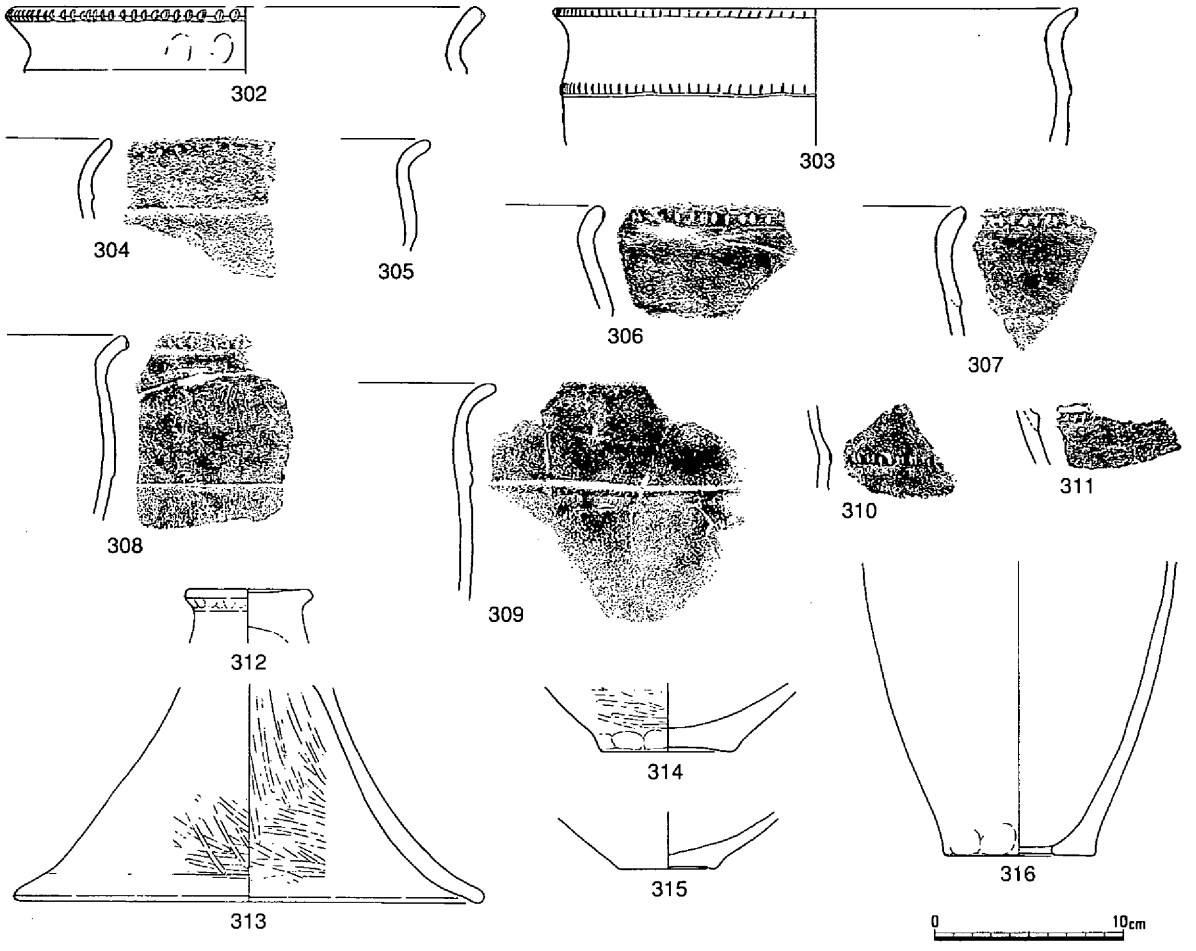
312・313は蓋で、同一固体と考えられる。調整は内外面ともにヘラミガキにより丁寧に仕上げている。314から316は底部で、316 は焼成後に円形の穴を穿っている。



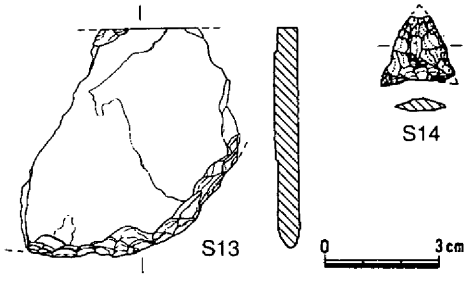
第45図　舟形土壙４の出土遺物（１）



第46図　舟形土壙４の出土遺物（２）



第47図　舟形土壙４の出土遺物（３）



第48図　舟形土壙４の出土遺物（４）

石器は２点認められた。S13は頁岩が用いられ、一辺を直線的に残し、それ以外は弧を描くように調整し、図の左側は大きく欠け、一見石製円板の未製品とも思えたが、厚みが薄いことと直線的な辺が見られることから磨製石包丁の未製品と考えた。S14はサヌカイト製の石鏃である。

遺構の廃絶時期は、出土した土器から前期の前半と推定される。

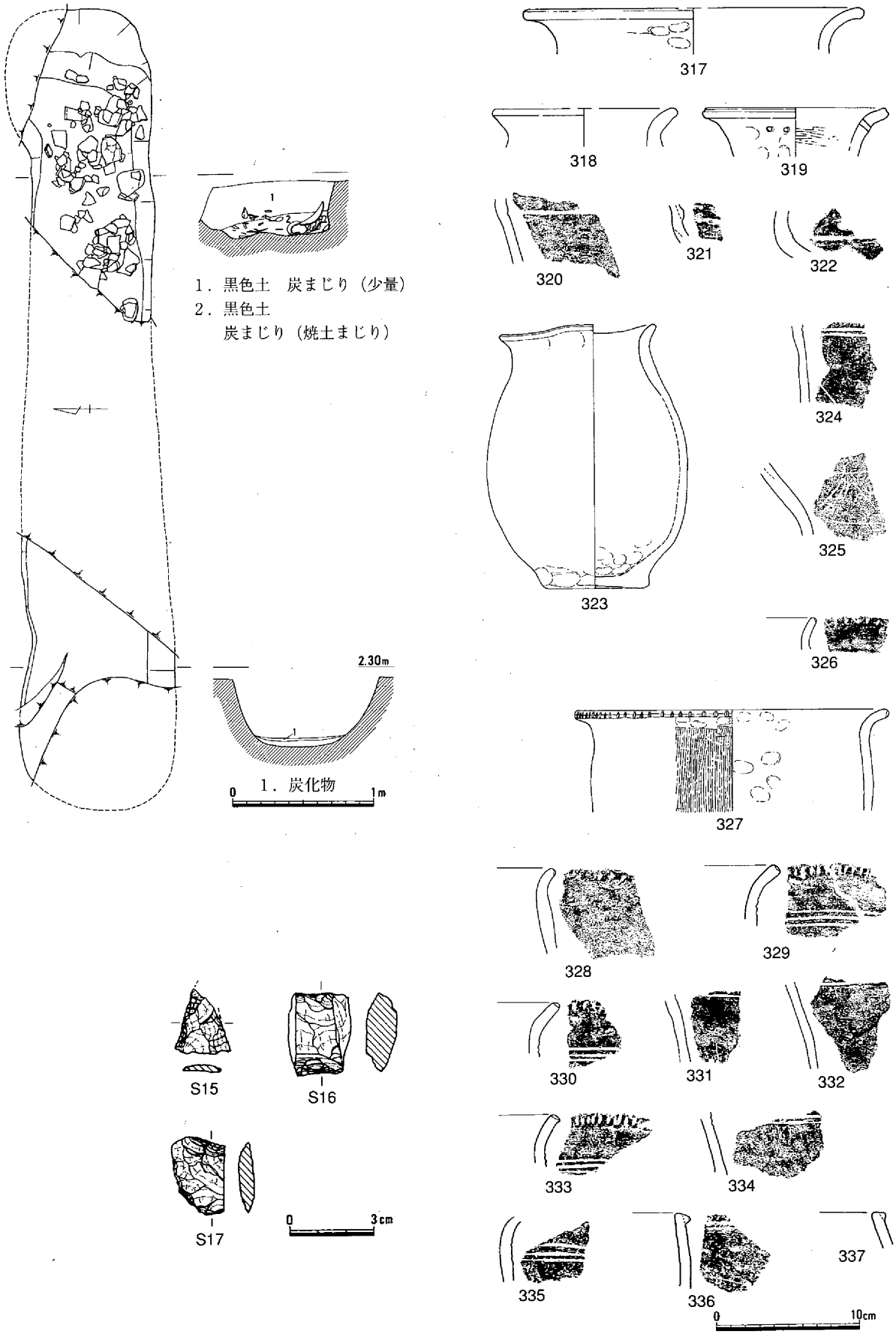
舟形土壙５（第49図）

Ｄ区の西寄りで検出された舟形土壙で、主軸を東西方向にむけ、中央と西端は削平されている。調査時の遺構名称はＰ４ないし土壙４である。規模は推定長5.5m、東側残存部の幅0.8m、深さ35cmを測る。土壙内の遺物は東側の残存部に多く認められた。

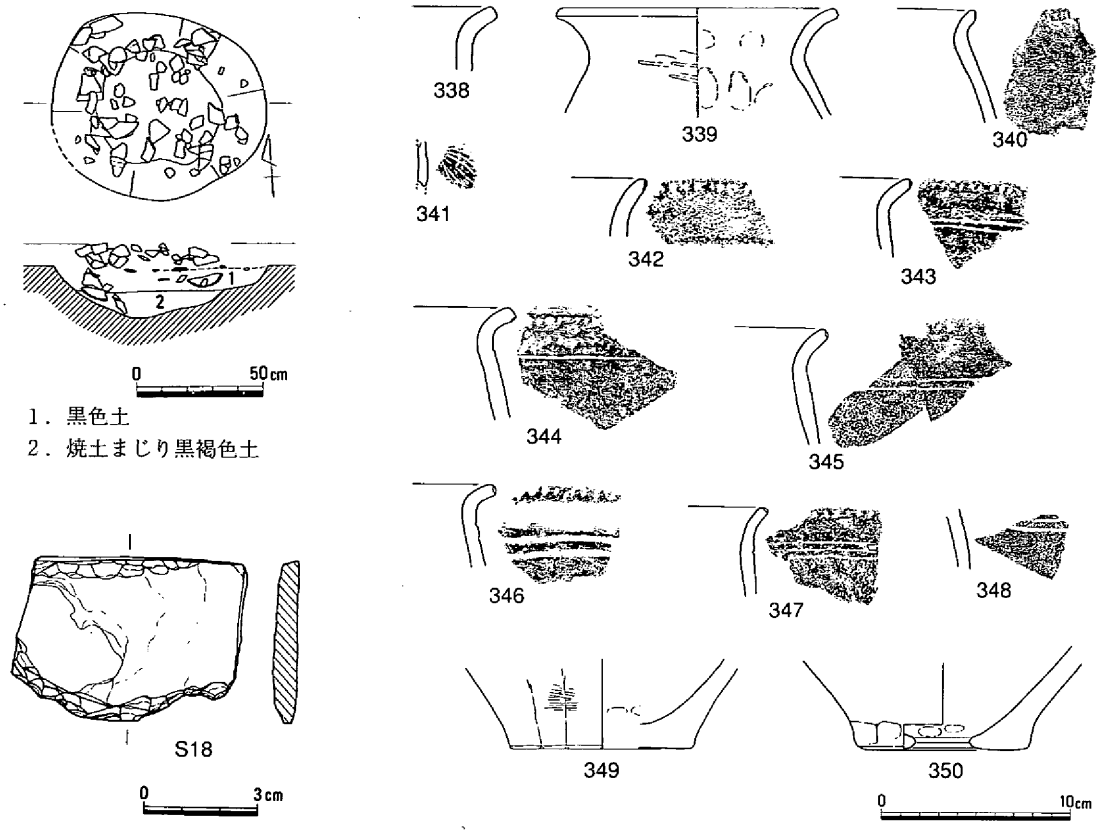
出土遺物は弥生土器と石器である。土器の器種は壺と甕が認められる。323は松菊里型壺で、概してやや粗雑な作りをしている。低部には押圧痕が残る。336・337は突帯文系の甕で、口縁端部に接して突帯がめぐる。甕は口縁部直下に沈線を施すものがあり、３条のものが目立つ。

石器は３点出土した。S15はサヌカイト製の石鏃、S16・S17はサヌカイト製の楔形石器である。

遺構の廃絶時期は、出土した土器から前期の前半であるが、他の舟形土壙よりやや新しい。



第49図　舟形土壙５（S=1/40）と出土遺物



第50図　土壙32（S=1/30）と出土遺物

7　土壙

土壙32（第50図）

Ｄ区の北東寄りで検出された土壙で、平面形は円形を呈する。底面は中央が最も深く、周辺に向かって緩やかに立ちあがる。図の断面にレベルはないが、およそ２ｍ前後と思われる。遺物は片寄ることなく、底面から上面まで認められた。

出土遺物は弥生土器と石器である。壺は少量で、いずれも口縁部が外反するものであるが、338は段が見られるものかもしれない。341は胴部に木葉文が施される。甕は口縁部直下に２条ないし３条の沈線をめぐらすものが目立つ。350の底部には焼成後の穿孔が認められる。

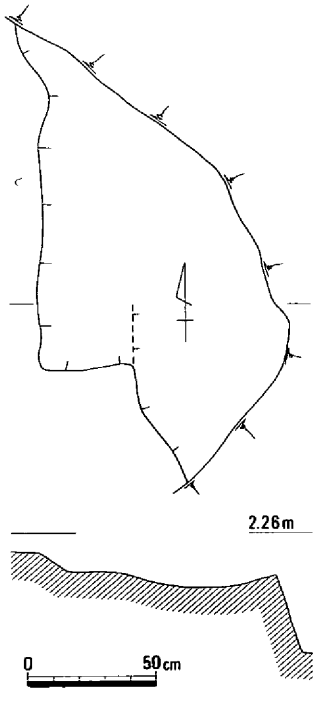
石器（Ｓ18）は頁岩を用いた磨製石包丁の未製品と考えられる。

遺構の廃絶時期は、出土した土器から前期の前半と推定されよう。

土壙33（第51図）

Ｄ区のほぼ中央で検出された土壙で、西側を残してそれ以外は削平されている。したがって本来どのような形をしていたのかは明らかでない。規模は残存部で南北方向が1.8ｍ、東西方向が１ｍ、深さ15cmを測る。

遺構の廃絶時期は前期と言われている。



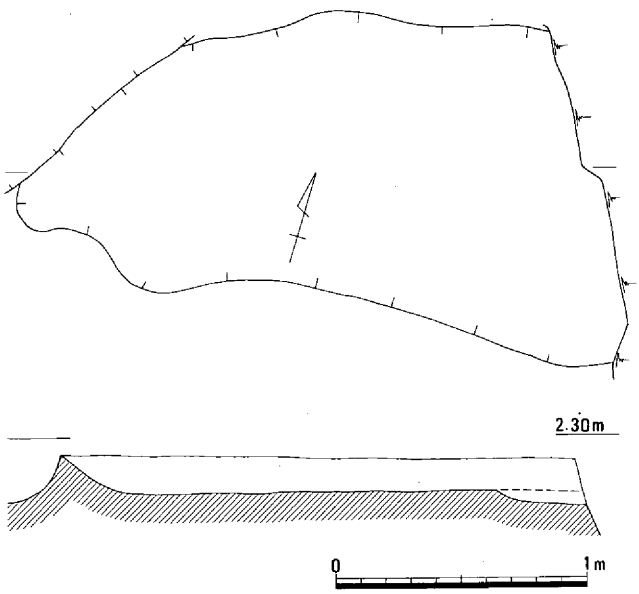
第51図　土壙33
（S=1/30）

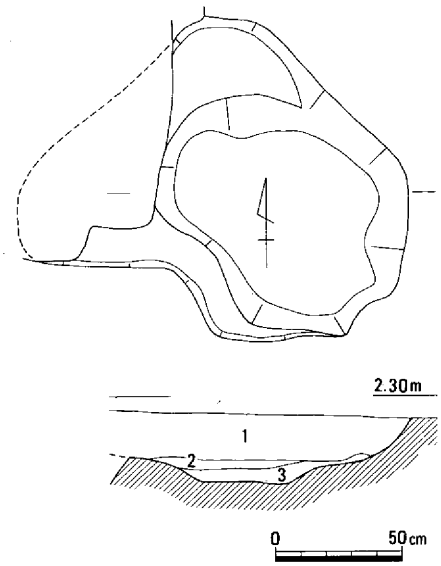
土壙34（第52図）

Ｄ区の北寄りで検出された土壙で、東側は削平され、北西側は後期の溝で切られているが、平面形は大略東西に長い楕円形を呈すると考えられる。規模は現存長2.4ｍ、幅1.3ｍ、深さ10cmを測る。

出土遺物は弥生土器と石器と土製品である。弥生土器は壺と甕が認められるが、製塩土器（351）も混在している。石器はいずれもサヌカイト製のスクレイパーである。土製品は土器片の周辺を調整して円形に仕上げた、土製円板(Ｃ３）である。

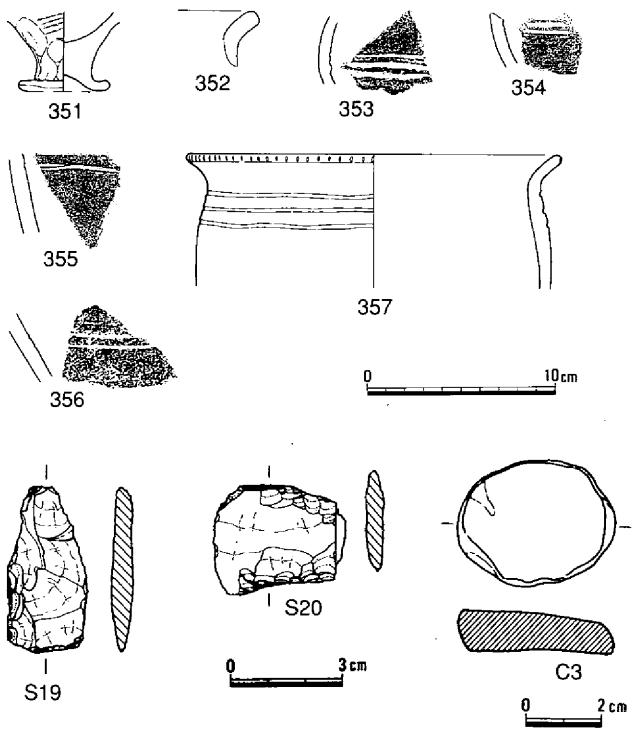
遺構の廃絶時期は、製塩土器が混在しているものの、前期と考えられている。



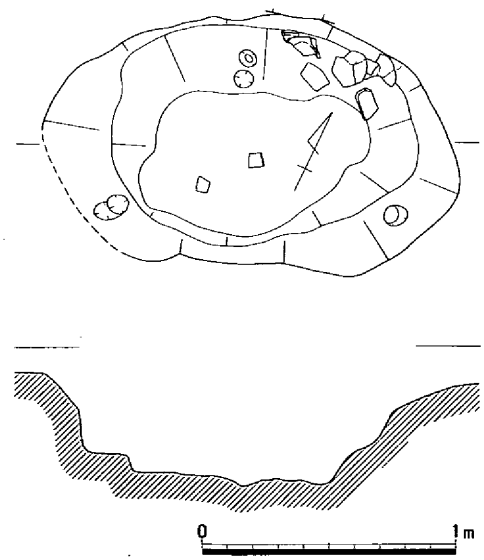


1．暗茶褐色土（炭多し）
2．黄色粘土（炭少し）
3．炭少々

第53図　土壙35（S=1/30）



第52図　土壙34（S=1/30）と出土遺物

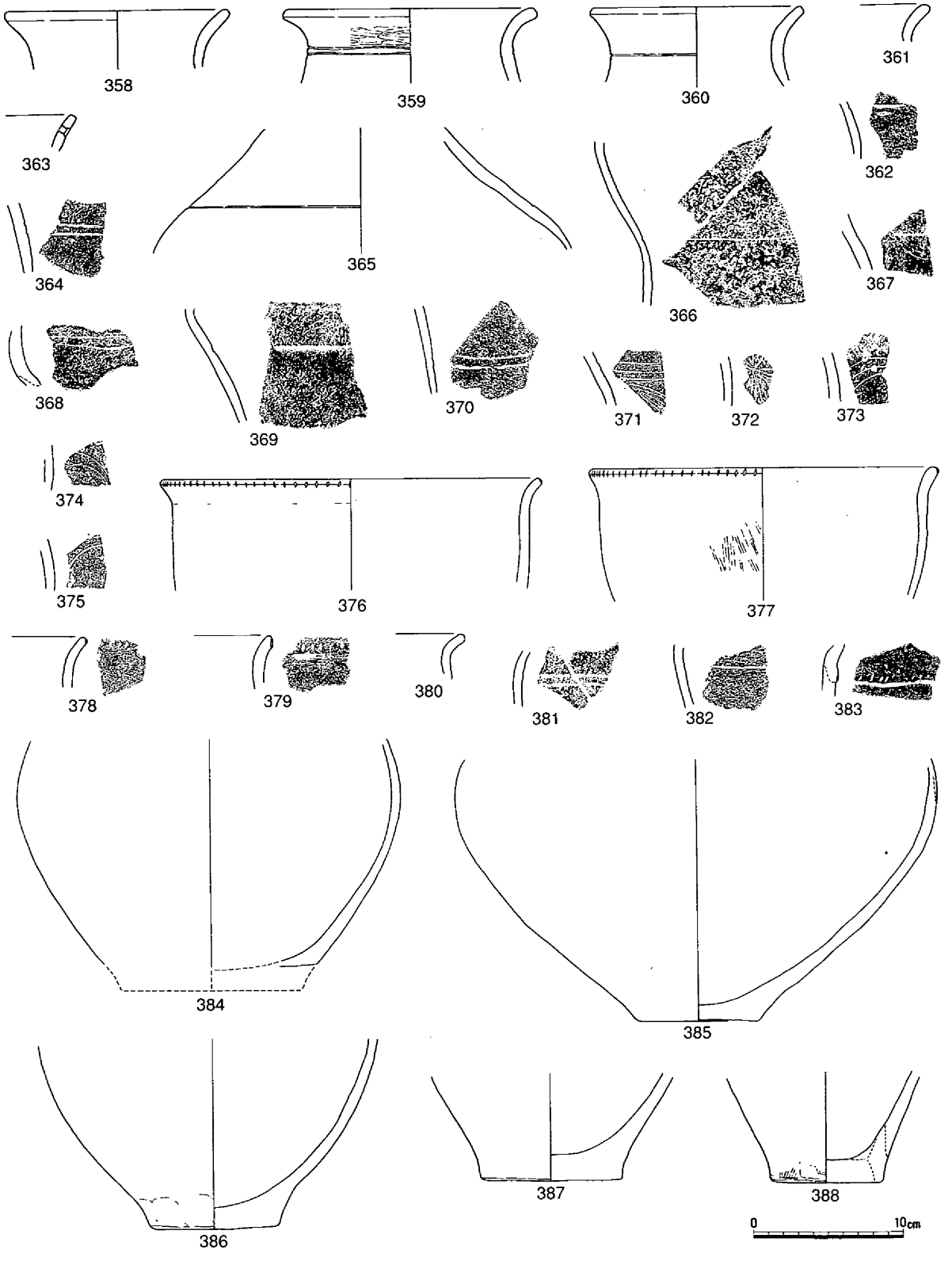


第54図　土壙36（S=1/30）

土壙35（第53図）

Ｄ区の北寄り、舟形土壙３の南端に接して検出された不定形な土壙である。規模は東西が１ｍ、南北は1.3ｍ、深さ25㎝を測る。

遺構の廃絶時期は、出土遺物が無いため明確でないが、前期と考えられている。



第55図　土壙36の出土遺物（１）

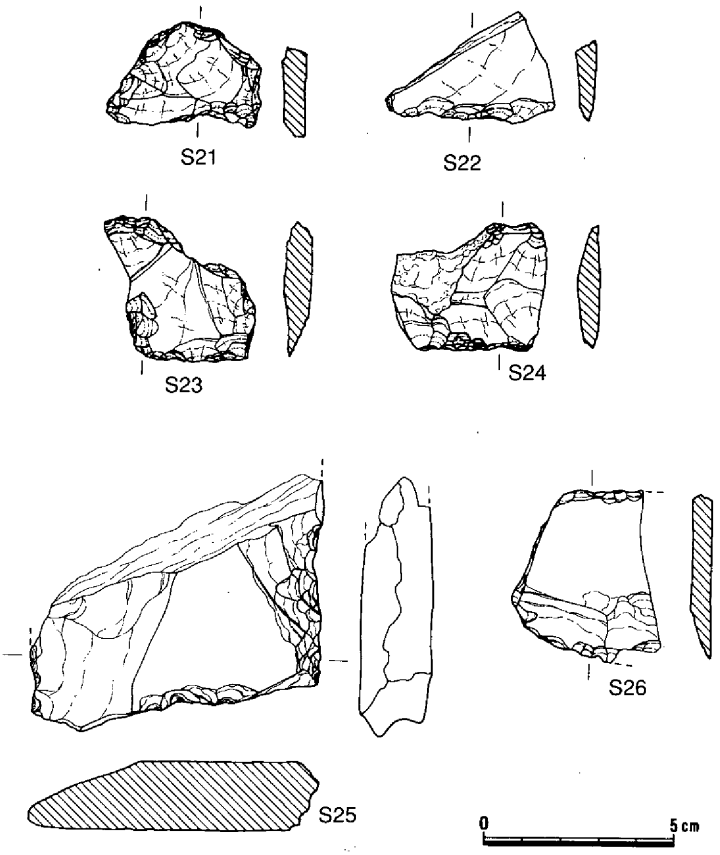
土壙36（第54～56図）

Ｄ区の北東寄り、舟形土壙１の中央南側に接して検出された土壙で、平面形は東西に長い楕円形を呈する。規模は長さ1.5ｍ、幅１ｍ、深さ40cmを測る。

出土遺物は弥生土器と石器が出土している。土器は壺（358～375)と甕（376～383）が見られる。壺の胴部には沈線をめぐらすものが多く、その下側に箆描文（木葉文、重弧文など）を施すものもある。甕には口縁部を外反しただけのもの（376・377など)、口縁部直下に沈線（381・382)や段の上に刻み目をめぐらすもの（383）がある。384から388は壺と甕の底部である。

石器にはサヌカイト製のスクレイパー（S21～S24)、結晶片岩製の打製石鏃片（S25)、頁岩製の磨製石包丁未製品（S26）がある。

遺構の廃絶時期は、出土した土器から前期の前半と考えられる。



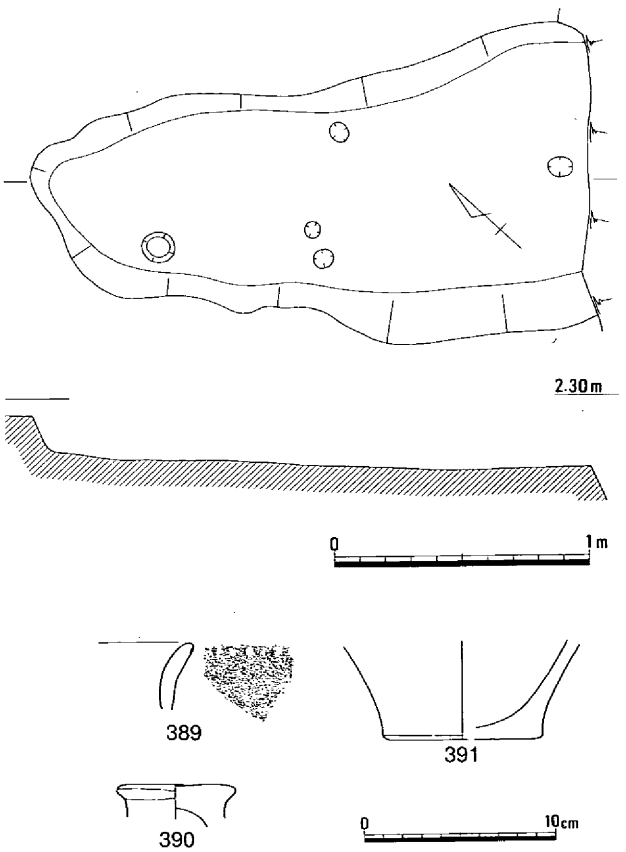
第56図　土壙36の出土遺物（２）

土壙37（第57図）

Ｄ区の北寄りで検出された土壙で、南東側の端は削平されている。調査時には土壙Ⅲないし第11土壙と呼ばれていたらしい。また土壙11と書かれた遺物はこの土壙のものである可能性もあるが、明確でない。土壙の平面形は大略長楕円形を呈するものと推定される。床面はほぼ平坦であるが、小穴が数か所穿たれている。規模は長さ2.2ｍ、幅1.2ｍ、深さ20cmを測る。

出土遺物は弥生土器で、甕と蓋が認められる。389は外反する口縁部の外端面に刻み目をめぐらすものである。

遺構の廃絶時期は、出土した土器から前期の前半と考えられる。



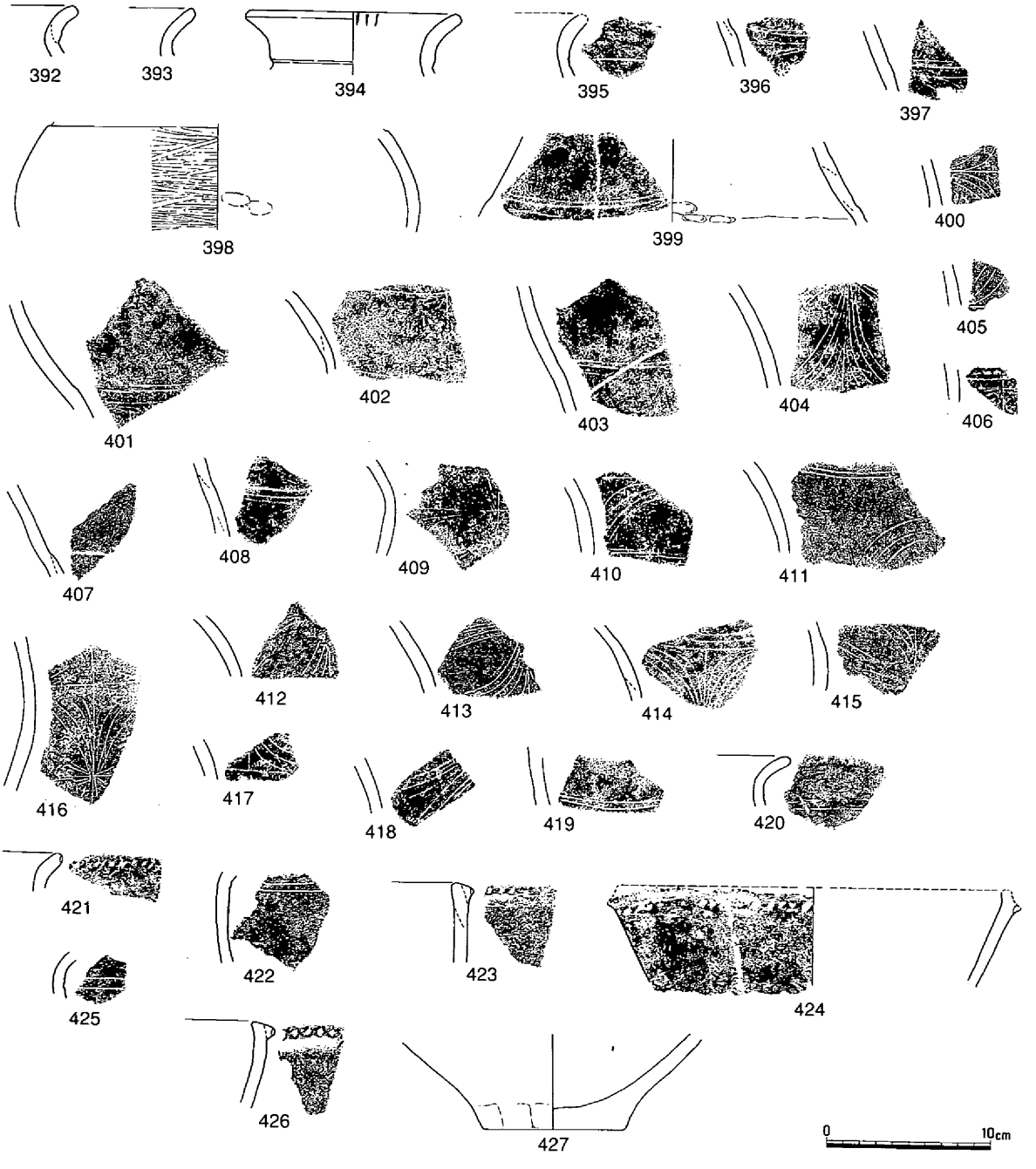
第57図　土壙37（S=1/30）と出土遺物

その他の土壙（第58～60図）

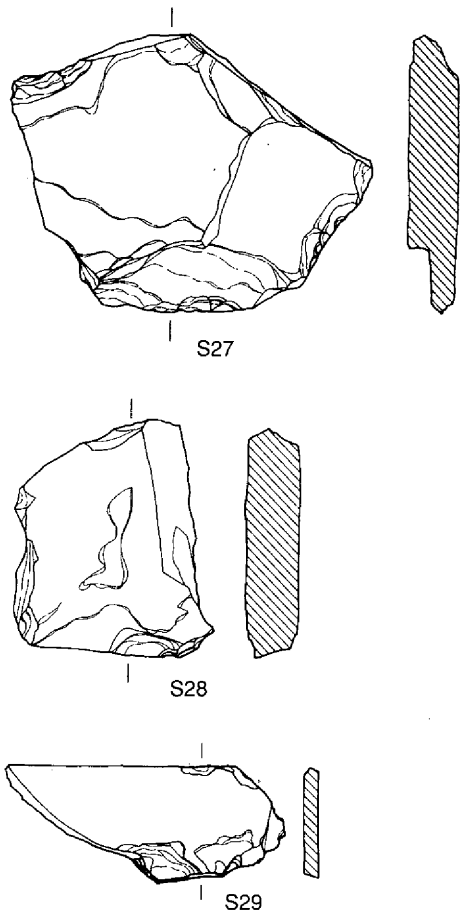
出土遺物から前期と考えられる土壙が幾つか検出されているが、土器に注記された土壙名をもつ遺構が見当たらなかったり、全体図に遺構が記入されていないかあるいは記入されていても遺構名が記されていないなどの理由で、詳細が不明となっている遺構である。

土壙31とした土壙は、調査時にはＰ５と命名されていたもので、略図によると建物１の北東の柱穴付近に所在したとされるが、全体図に記載が無いため明確にし得ない。出土遺物は多く、弥生土器と石器が認められる。土器は壺と甕が見られるが、423・424・426は突帯文系の甕である。石器はいずれも頁岩を用いたもので、S27・S28は石製円板の未製円板、S29は磨製石包丁の未製品であろう。

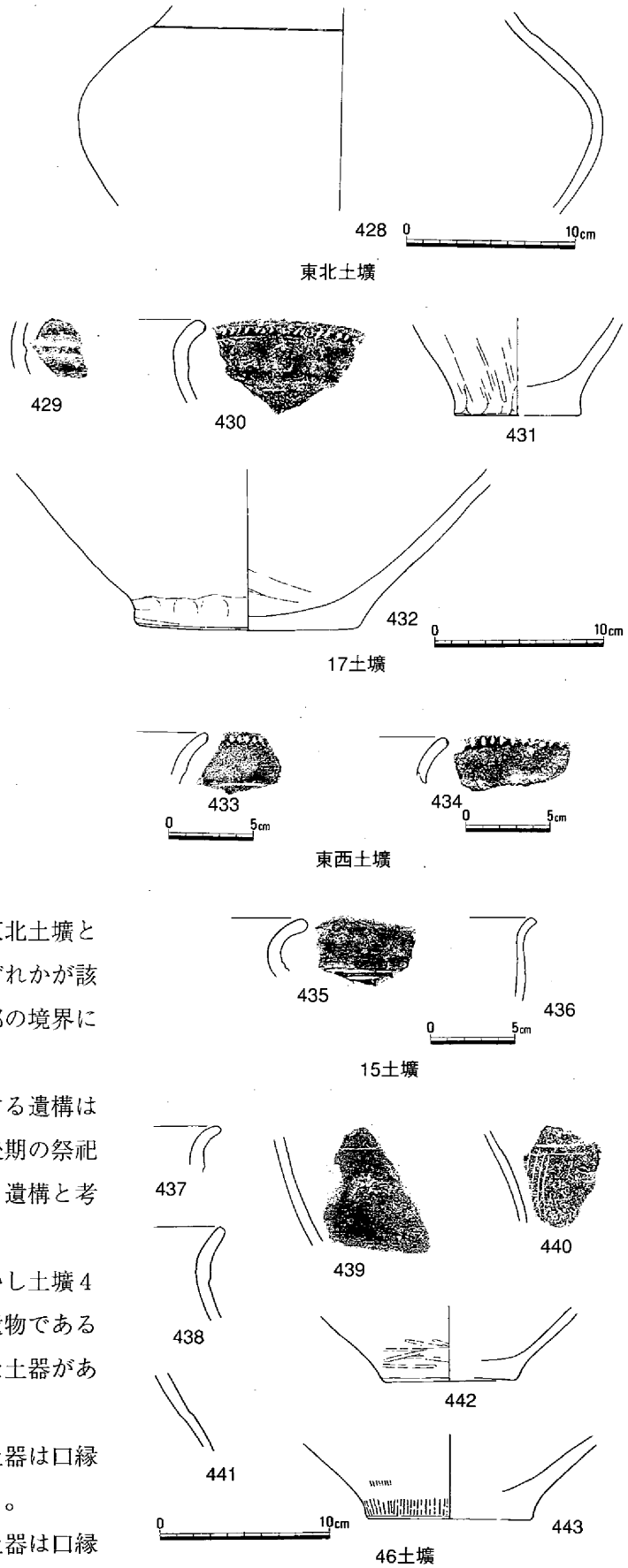
土器の時期は前期の前半の中でも、古い様相と考えられる。



第58図　土壙31の出土遺物（１）



第59図　土壙31の出土遺物（２）



第60図　土壙の出土遺物

東北土壙の所在位置は不明であるが、東北土壙と記された土器が残されていることから、どれかが該当するのであろう。土器は頸部下端と同部の境界に段をもつ壺などが出土している。

17土壙と記された土器があるが、該当する遺構は不明である。土壙17はあるが、弥生時代後期の祭祀土壙であるとされていることから、異なる遺構と考えられる。

土壙Ⅳは舟形土壙５が調査時にＰ４ないし土壙４と呼ばれていたことから、舟形土壙５の遺物である可能性も考えられる。東西土壙と記された土器があるが、それに該当する遺構は不明である。

15土壙も該当する土壙は不明である。土器は口縁部直下に沈線がめぐる壺と甕が認められる。

46土壙も該当する土壙は不明である。土器は口縁部に段のある壺などが見られる。

8　炉

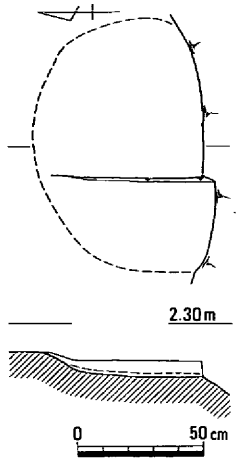
炉跡は３箇所検出されている。このうち溝６の上端で検出された炉跡は、略図に記されているだけであり、詳細は不明である。したがってここでは他の２箇所で検出されたものについて述べる。

炉１（第61図）

Ｂ区の北調査区で検出されたもので、『概報』に記された「東西２箇所で炉を検出」とあるうちの『東炉』にあたる。炉跡は南側が削平されているが、平面形はほぼ円形を呈していたものと推定される。個別の実測図が無いため詳細は不明であるが、規模は東西１ｍ、深さ10cmを測る。

炉２

炉１の西側で検出されたらしいが、詳細は不明である。



第61図　炉１（S=1/30）

9　溝

前期に属する可能性のある溝は、溝２と溝12であるが、北調査区で検出された溝２は詳細が不明である。Ｃ区で検出された溝12は溝Ｖと呼ばれていたらしいが、出土遺物の中に住居１号斜行溝と記されたものがあり、溝12の遺物である可能性がある。溝12は北西方向から南東方向へ流走しており、そのまま行くとすれば低位部に注ぐことになる。規模は幅30cm、深さ20cmを測る。

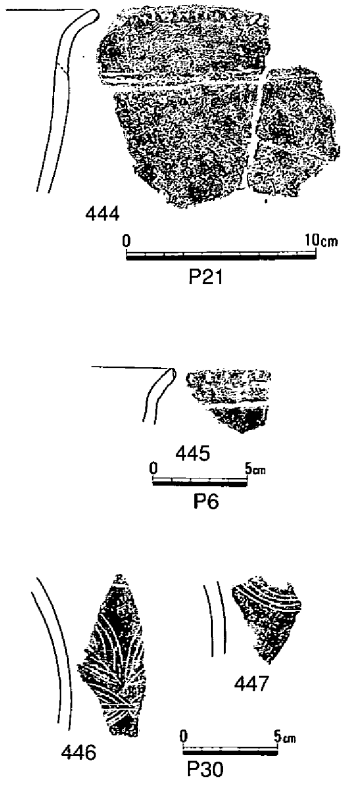
10　その他の遺構

前期の遺構は微高地に集中しており、時期の判明する主要な遺構については記載したが、それ以外にも多くの土壙やピットが認められる。このうちの多くは前期に属するものと思われるが、全体図に遺構名が付けられていないため遺物との照合ができず、また遺物に遺構名が書かれてあるとしても、どの遺構であるのかが明確でないことがほとんどである。ここでは前期の遺物が出土した遺構を取り上げておくが、記している遺構名は調査時に付されたものである。

Ｐ21はどこで検出された遺構であるのかは明確でないが、沢山あるピットの一つであろう。口縁部直下に沈線をめぐらす甕が出土している。

Ｐ６もピットの一つと考えられるが、検出された位置は不明である。口縁部直下に沈線をめぐらす甕が出土している。

Ｐ30も検出された場所および遺構の性格は不明であるが、おそらくピットの一つと考えられる。また、土壙14が該当する可能性もある。446は壺の胴部で、暗文状の篦描で木葉文が描かれている。447も壺の胴部で、暗文状の篦描で重弧文が描かれている。



第62図　ピットの出土遺物

C　弥生時代中期

中期の遺構は少ないが、水田は低位部に形成された前期の水田が埋没する課程においても不断に形成され続けたものと考えられ、水田に関係する杭列や杭痕跡が検出されている。また、低位部の埋没と軌を一にするように低位部の利用が始まり、南側には水路と推定される溝が掘削されている。

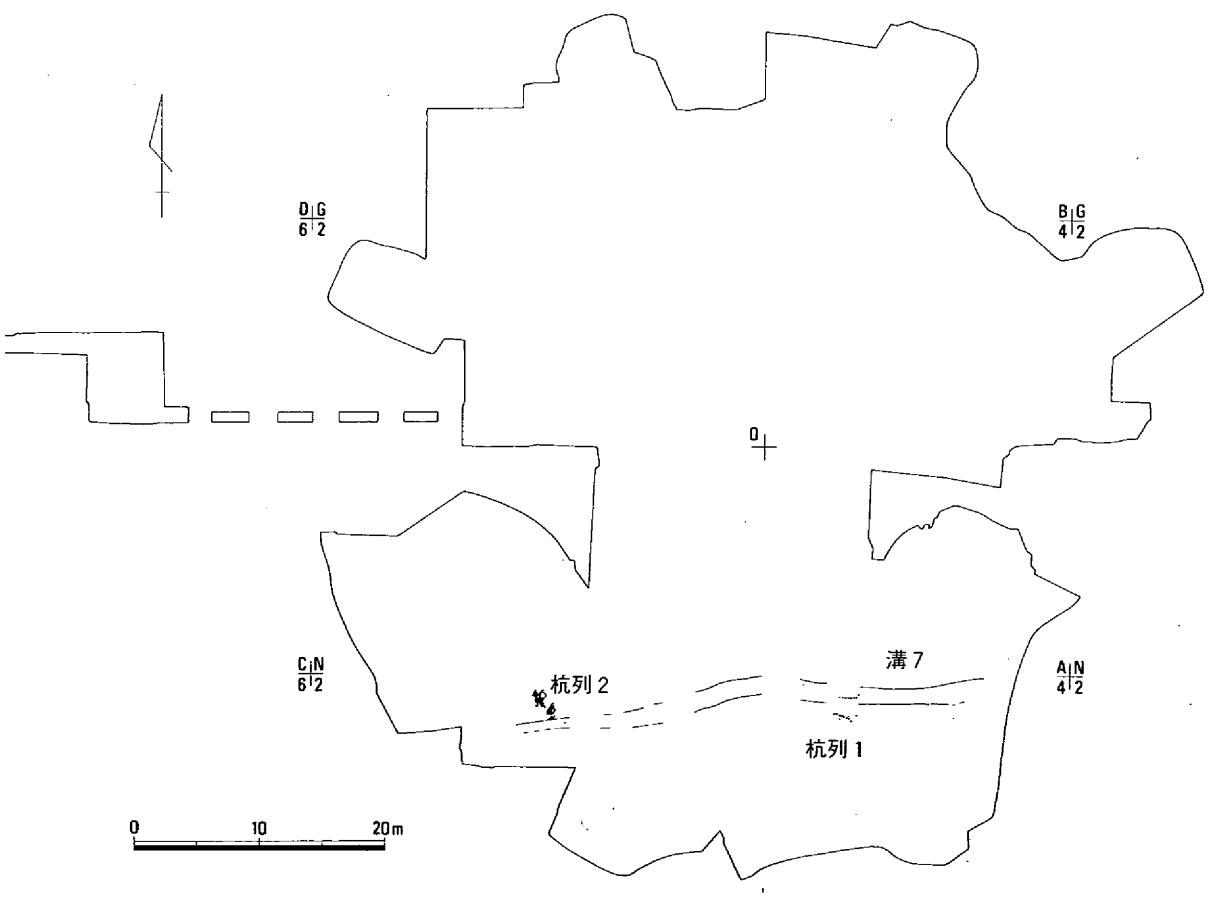
遺物は中期の前半から認められるが、量はわずかで、後半にはやや多くなる。

1　杭痕跡・杭列

杭痕跡や杭列は水田と係わる遺構である可能性は高いが、その関係については十分につかみきれているとは言い難い。また時期についても、遺構の性格による時期決定の困難さは否めず、中期ないし中期以前という幅を持たせている。したがって、これらの中には前期に遡る遺構が含まれる可能性もあるが、ここでは中期の項で記しておく。

杭痕跡１（第64図）

ＴⅣの南端近くで検出された杭痕跡（杭列）で、前期の微高地から緩やかに傾斜した基盤層に、杭または矢板を打った跡と認められる黒色粘土の幅の狭い落ち込みが観察されたらしい。また、前期水田層の南端から微砂層にかけて杭列が確認された。杭列は南北に並ぶ９本と、東西に並ぶ２本が検出されたが、さらにトレンチ外へ広がるものと思われる。杭は前期水田層南端では、水田層基盤の青色

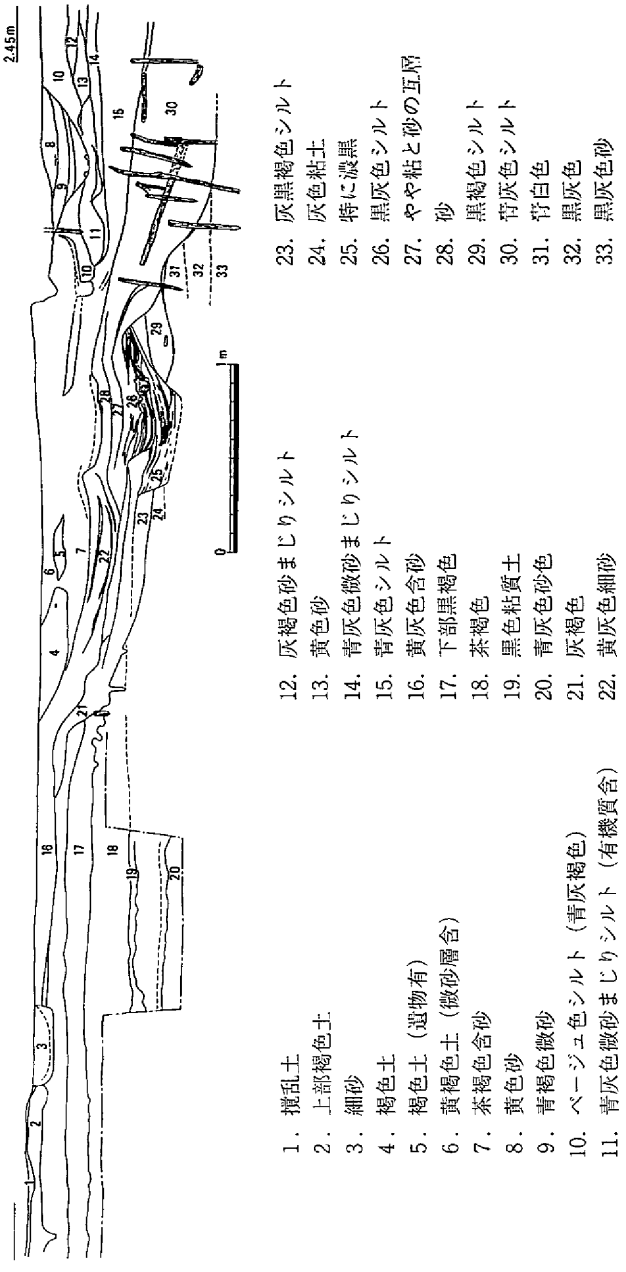


第63図　弥生時代中期の遺構全体図（S=1/600）

粘土層に深く打ち込まれており、微砂層中では層中で終わる浅いものとその下の砂層に深く打ちこまれたものとがある。なお、この微砂層中からは、前期と中期前半の土器が出土しているらしい。

杭痕跡および杭列の時期は中期前半以前、一部は前期に遡る可能性がある。その性格は前期水田層の南に広がる中期前半以前の湿地利用、言い換えれば水田に関係するものと想定され、一部は前期水田に関係する可能性も考えられている。

なお、余談ではあるが、第64図の25・26は中期後半の溝（溝７）、８・９は溝４と考えられる。



第64図　ＴⅣ－２南半の東壁土層断面（S=1/40）（間壁・間壁・大重）

杭痕跡２・３（第67図）

杭痕跡２および３はＣ区の南寄り、微高地から低位部に移行する斜面で検出された。いずれも10cm前後の小穴となっているが、詳細は不明である。

杭痕跡４（第65図）

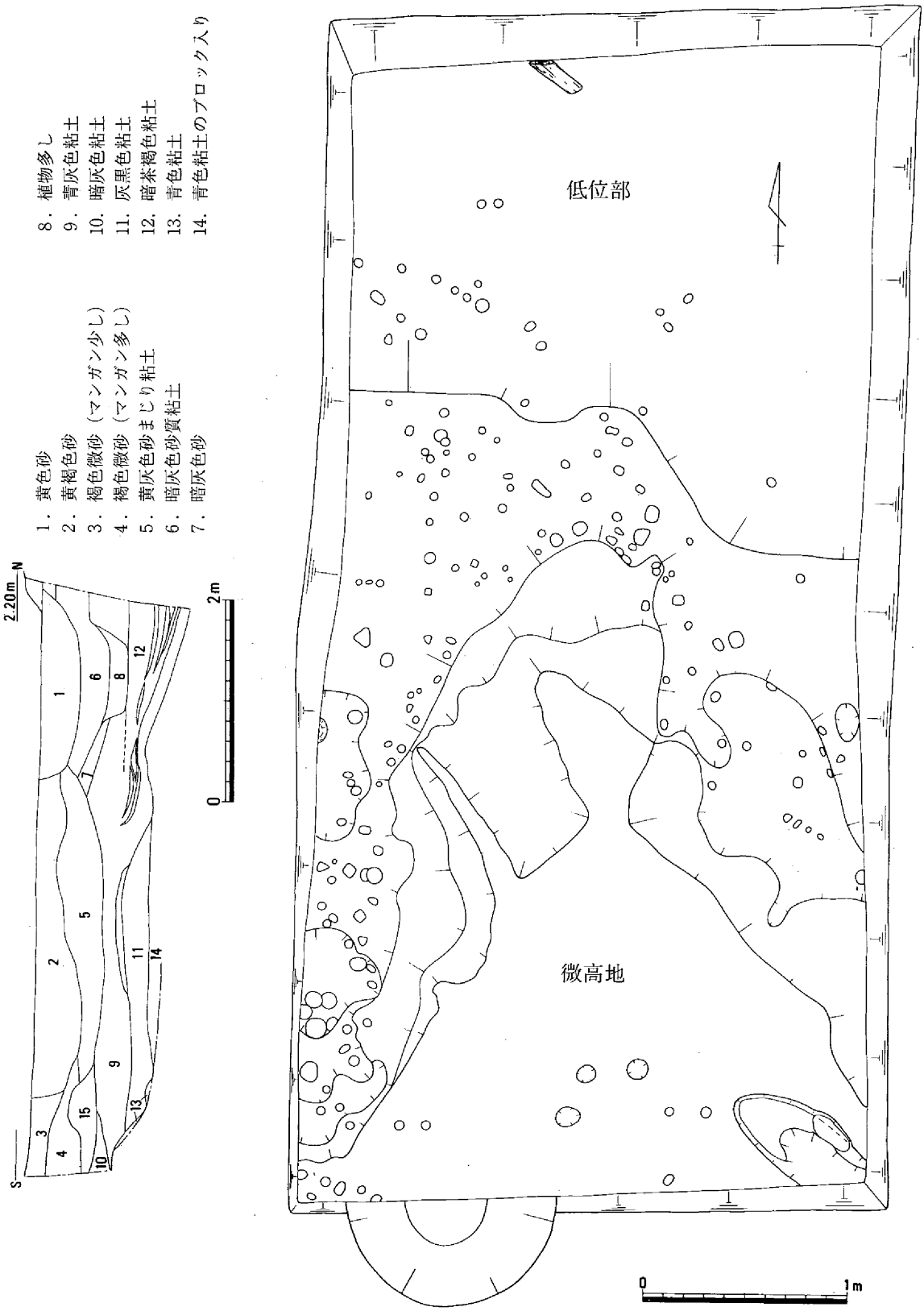
Ａ区の南西に設定された東南Ｔで検出された杭痕跡で、南側にある微高地から低位部に移行する斜面に多数認められた。杭痕跡は土質の異なる10cm前後の小穴として残っており、特に規則的な配列は見られないようである。

杭痕跡５

Ｃ区の南東端に設定されたＴⅢ－３で検出された杭痕跡である。ＴⅢ－３の下部近くにほぼ水平に広がる前期の黒褐色粘土層の上面は、南側にいたると急に傾斜し低湿地中央の低いくぼみへ続くと推定されるが、その黒褐色粘土層の平坦面が終わる角から少し微高地へ寄ったところで、黒褐色粘土層の下に杭跡と考えられる縦に伸びる黒褐色粘土が認められたらしい。痕跡は平面的には追求できなかったらしいが、東・西断面でみられ、その横断面は円形を呈していた。これらの杭痕跡は、低位部に打ちこまれた矢板状杭痕跡と対になって、前期の水田区域を画していたと言う意見もある。

杭列１（第66図）

Ａ区のＴＩ－３で検出されたほぼ東西に並ぶ２列の杭列である。『概報』によると杭列の杭は、北



第65図　東南Ｔの杭痕跡４（S=1/30）と西壁土層断面（S=1/60）

側の杭列中に割材が一本と、南側の杭列中に一本の転用材を含んでいるほかは、皮つきの丸木杭らしい。２列の杭間は約1.2mを測る。杭列の北東部に黒色粘土層をえぐったように谷頭状の凹地があり、

これを埋めた砂層、粘土層中に茎状のものが数層敷き詰めたような状態で見られるが、北側杭列の現存する杭はこれを貫いて打ち込まれているらしい。なお、杭列中に杭の抜けた痕跡があることから、現存する杭に先行する杭の存在が推定されている。

杭列の時期は、南側杭列中の一本および北側杭列によって貫かれた谷頭の岸が、中期前半の土器の出土した層位の上部まで達していることから見て、中期前半のものと考えられる。

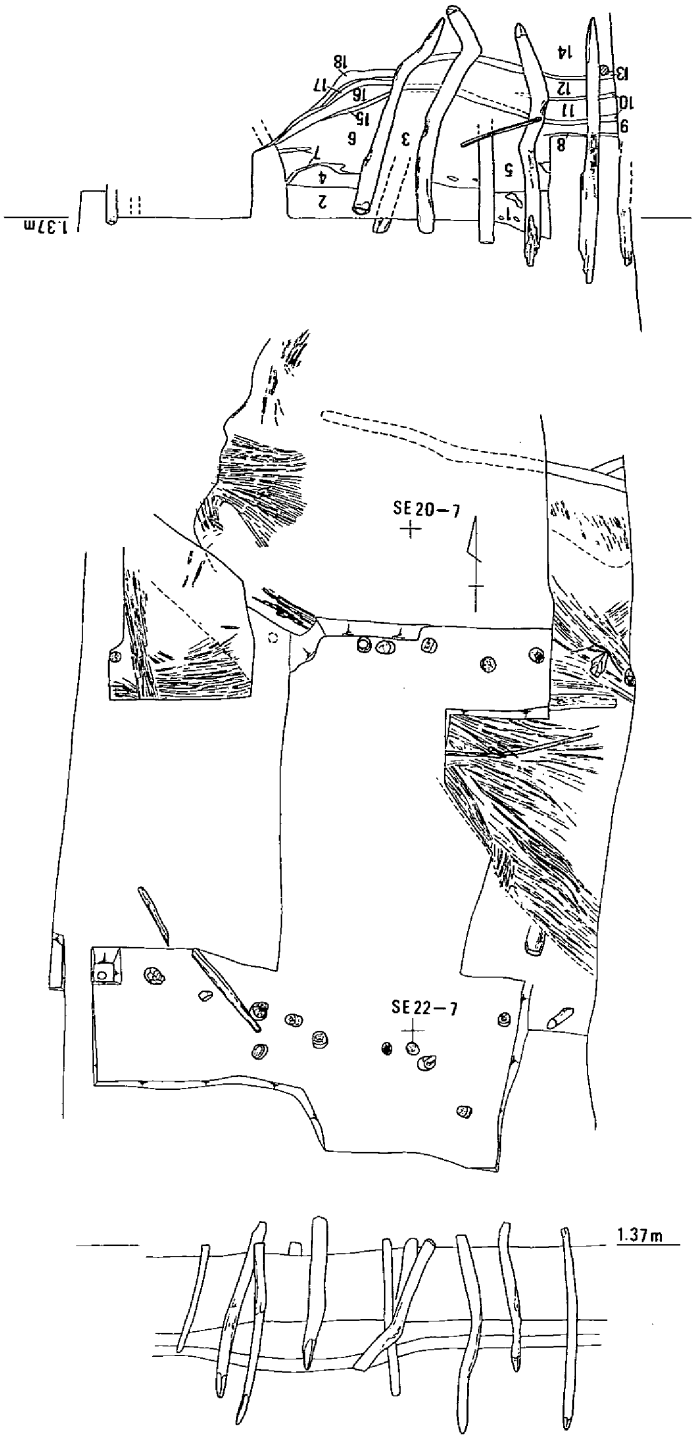
杭列２（第67図）

Ｃ区の南東寄りで検出された杭列であるが、実測図がないため詳細は不明である。全体図を見ると微高地に接する低位部にあり、その長さは約３ｍあまりと思われる。『概報』によると杭は50本前後あり、丸太状のものと板状の割り材のもので、これを密に打ちこんでいるらしい。杭を打ちこんだ暗灰色粘土層には中期の土器を含むが、その上では杭列の北には粘土と砂の互層があり、南には砂質土が堆積している。北の粘土と砂の互層には、稲の籾や葉、水田雑草の種子などが多量に混入していた。

杭列は中期の水田と関連するもので、杭を打ちこんだ暗灰色土は耕土と考えられている。

２　溝

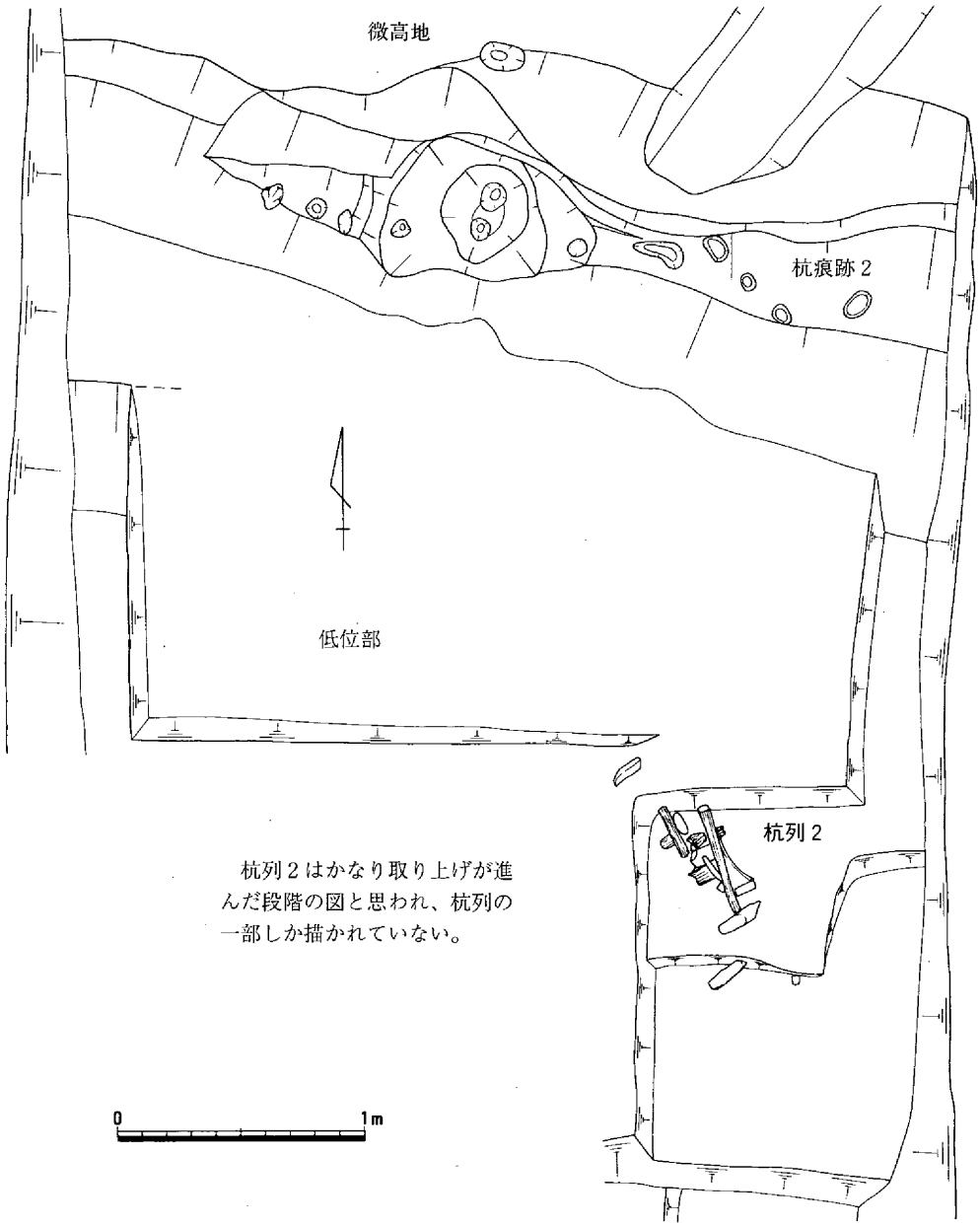
中期の溝は確実なものとしては１条であるが、『考古学研究』第15巻第２号によると、ＴⅣ－２南半には中期前半の溝が、そして掲載されている図からは南東端にも中期の溝が存在したことがうかがわれる。前者の溝は第69図



1．青灰色シルトまじり粗砂
2．青灰色シルトまじり細砂
3．撹乱土
4．純細砂
5．うすい青灰色細砂
6．青灰色シルトまじり細砂
7．青灰色シルト
8．植物堆積シルト
9．青灰色細砂
10．植物堆積
11．青灰色シルト
12．青灰色シルト
13．植物堆積
14．青灰色細
15．植物堆積
16．青灰色シルト（粘土質）
17．青灰色シルト（粘土質）（植）
18．青灰色シルト（粘土質）（植）

0　1m

第66図　杭列１（S=1/30）

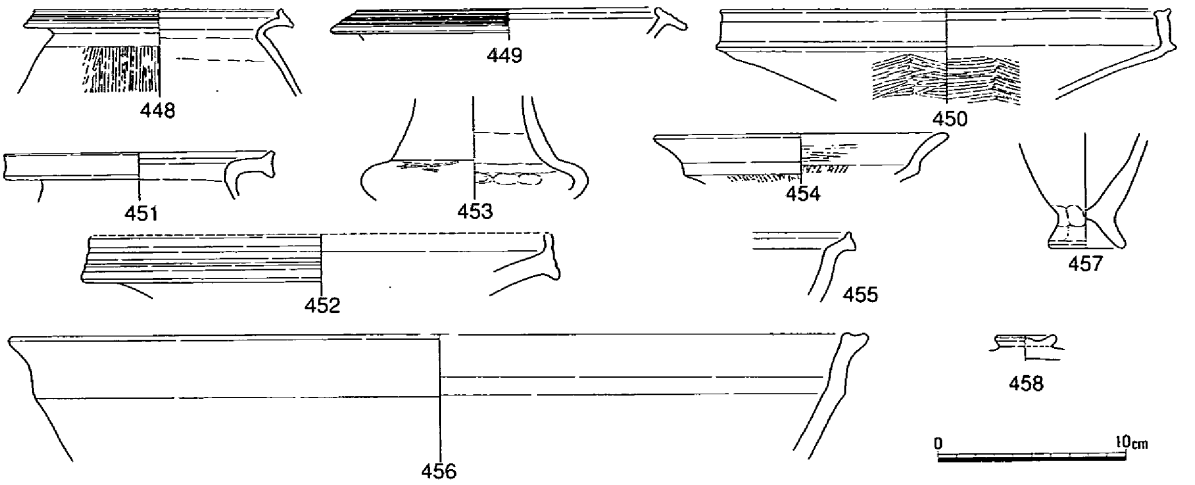


第67図　Ｃ区南東部の杭痕跡２と杭列２（S=1/30）

Ａの土層断面に見られる26から下側が該当するものと推定されるが、詳細は不明である。後者の溝は第64図の土層断面に見られる26から下側が該当するものと思われるが、これも詳細は不明である。

溝７（第64・68・69図Ｂ・70）

Ａ・Ｃ区の低位部をほぼ東西に流走する溝で、調査時にはＤ６と呼ばれていた。断面ではＴＩ－３（第69図Ｂ）、ＴⅢ－３（第70図）、ＴⅣ－２（第64図）で確認されているが、平面的に検出や掘り下げを行ったかどうか不明である。規模は幅１ｍ前後、深さ40cm前後を測る。溝の埋土は植物遺体を含む青黒色粘土であることから、常時帯水状態にあった水路と考えられている。出土遺物は弥生土器に須恵器がわずかに混在している。図示したうちの448は須恵器の蓋で、つまみが付く。以下はすべて弥生土器であるが、中期後半のもの（451・453・456）と、後期のものとがある。津島遺跡に関する文献ではすべて中期後半の溝とされていることから、出土遺物とは齟齬をきたすが、調査の所見を尊



第68図　溝７の出土遺物

重しておく。

3　その他の遺構

上記以外に明確な遺構は無いが、ＴⅡ東部で前期の黒灰色粘土層を切断した流れの跡が見られ、そこに堆積した砂層中に数層の厚い流木が堆積しており、少量の中期前半の土器や木器（鋤状木製品）などが包含されていた。

この時期の水田は検出できていないが、水田層としては黒灰色粘土層上方の青灰色シルト層などが考えられ、花粉分析の結果でもその層に稲の花粉が相当量含まれていたらしい。

また、中期後半にはＡ区の南東に住居跡らしい遺構を含む遺物包含層（褐色微砂層）が、低位部埋没後に形成されていることから、かっての低位部に居住範囲が広がっていたものと考えられている。

D　弥生時代後期

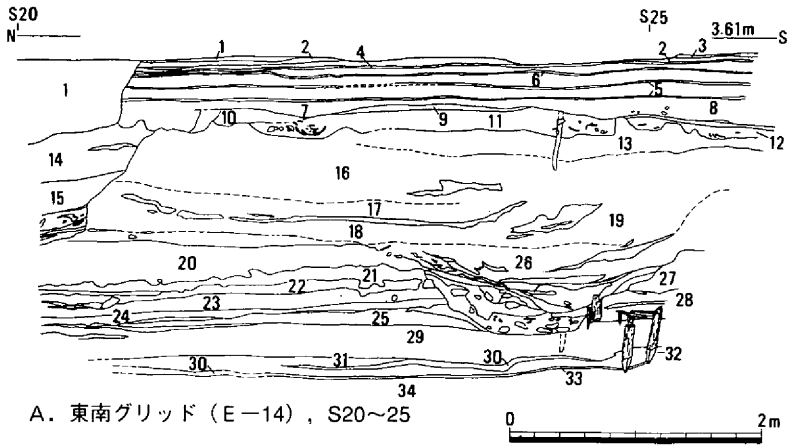
1　水田

中期に低位部を埋めた砂層の上に堆積した褐色微砂層中に、乾田下に生成される鉄とマンガンの集積層の存在が松井健氏によって指摘された。さらに、米田茂男氏によって、その上の黒味がかった層が上下の層と比較して炭素量が多いことから、乾田の耕土である可能性が示唆された。水田の時期は、水田層が後期後半の穴状遺構や溝で切られているので、それ以前には乾田が営まれていたと考えられる。

2　竪穴住居

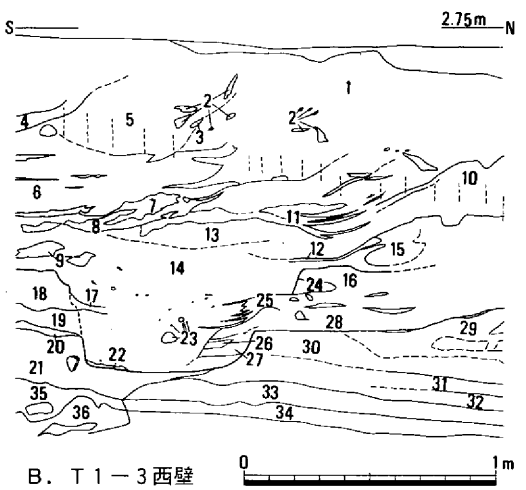
竪穴住居１（第73図）

Ｃ区の東端で検出された竪穴住居であるが、上面を検出しただけで掘り下げはしていないようである。住居の中を２条の溝が通っており、溝５は住居を切っているが、溝５より古い溝４との関係は明らかでない。規模は径４ｍ前後と思われる。時期は調査時の所見では後期末ということである。出土遺物はわずかで、手捏の土器１点である。



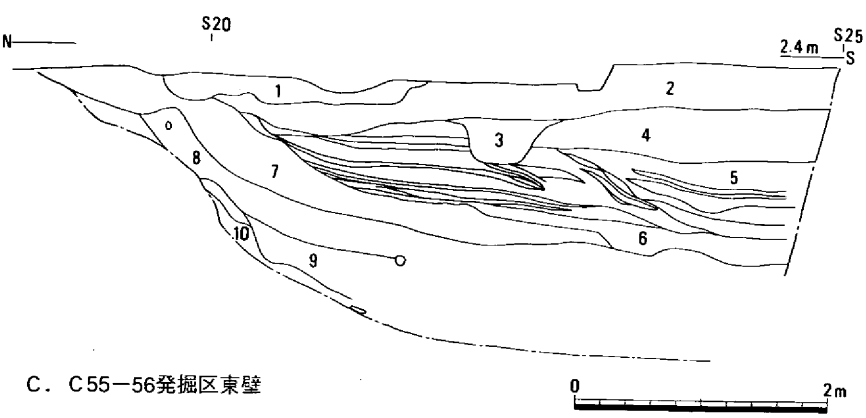
A．東南グリッド（Ｅ－14），S20～25

1．青褐色純細砂
2．灰褐色微砂まじり粘土
3．灰褐色粘土まじり微砂
4．黄褐色
5．うすい黄褐色（マンガン多し）
6．うすい黄褐色
7．灰褐色粘土まじり微砂
8．灰色微砂（土器・粘土を含む）
9．灰色細砂（炭を含む）
10．暗灰色粘土まじり微砂
11．暗灰褐色粘土まじり微砂
12．暗灰色粘土まじり微砂
13．焼土を含む
14．淡黄褐色微砂
15．黄褐色細砂
16．黄褐色微砂
17．褐色粘土まじり微砂
18．黄褐色粘土まじり微砂
19．粘土まじり微砂
20．灰色色粘土
21．青灰色純細砂
22．灰色粘土
23．青灰色微砂まじり細砂
24．灰色微砂
25．青灰色細砂
26．青灰色微砂（粘土を含む）
27．灰色粘土
28．青灰色純細砂
29．黒色粘土
30．植物堆積
31．青灰色細細砂
32．青灰色細砂
33．黒色粘土
34．青灰色細砂



B．Ｔ１－３西壁

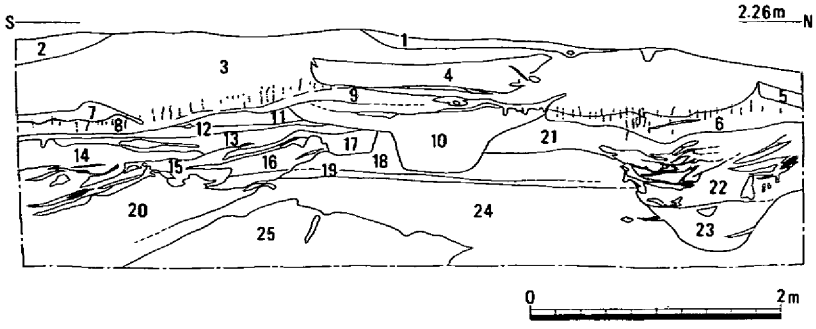
1．灰褐色→暗灰褐色シルト（微砂含む）
2．細砂
3．微砂シルト
4．淡褐色細砂
5．灰色細砂まじり微砂
6．褐色
7．微砂
8．灰色中砂
9．灰青色微砂
10．微砂
11．微砂
12．灰色細砂（うすい）
13．黒色がやや強い（木炭を含む）
14．シルト（溝７埋土）
15．細砂
16．シルト質微砂
17．シルトまじり微砂
18．灰青色微砂
19．微砂まじりシルト
20．微砂
21．暗灰色微砂まじりシルト
22．微砂
23．木質
24．微砂
25．微砂
26．青灰色シルト質微砂
27．青灰色細砂
28．シルト質微砂
29．微砂まじりシルト
30．暗灰色シルト
31．黒褐色シルト
32．シルト・微砂の互層
33．細砂
34．黒褐色シルト
35．灰青色細砂
36．やや黒っぽい灰青色微砂まじりシルト



C．C55－56発掘区東壁

1．白砂
2．褐色砂
3．仁伍式溝（溝７）
4．M_1暈管状鉄斑入り青灰色粘土質
5．M_2青灰色粘土と砂の互
6．M_3灰色粘土
7．N層黒斑灰色粘土質
8．O_1植物多し
9．O_2
10．青色粘土

第69図　各地点の断面（A・C=1/60，B=1/30）



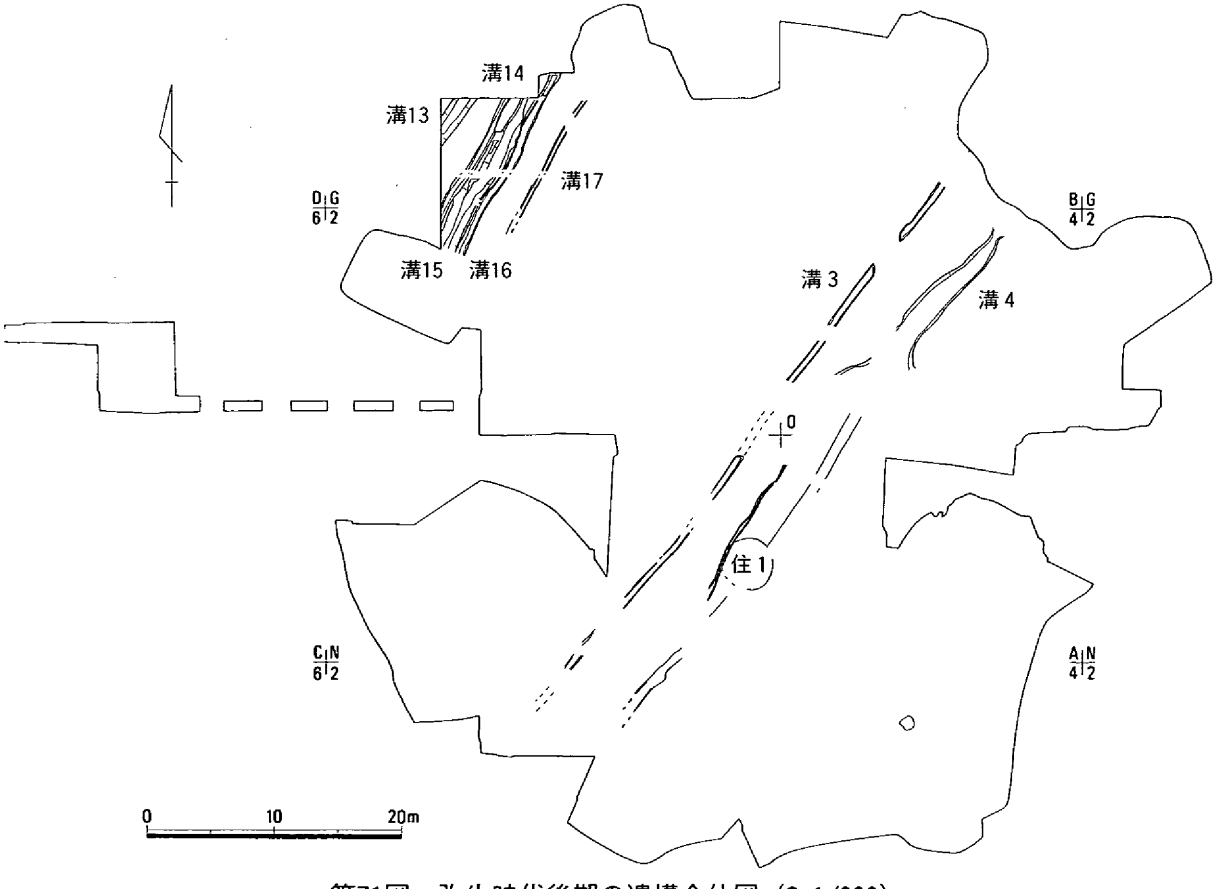
1．撹乱土
2．灰褐色粘土
3．茶褐色細砂
（マンガンを多く含む）
4．黄褐色粗砂
5．灰褐色中砂
6．黄灰色細砂
7．黄褐色粗砂
8．茶褐色砂
9．やや紫かかった灰色細砂
10．暗灰黒色色細砂
11．黒灰色細砂
12．細砂
13．灰黒色シルト
14．黒灰色粗砂
15．砂まじりシルト
16．粗砂
17．灰黒色細砂
18．灰黒色粘土（濃）
19．灰黒色粘土（淡）
20．黒灰色粗砂まじりシルト
21．灰黒色微砂
22．灰黒色粘土まじり細砂
23．灰黒色粗砂まじり粘土
24．黒褐色粘土
25．青灰色粗砂

第70図　ＴⅢ－３の西壁土層断面（S=1/60）（近藤・春成・神原・渡辺）

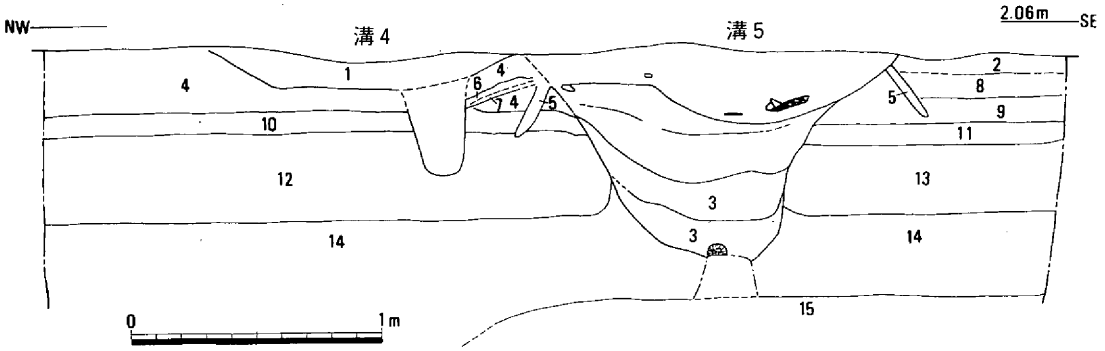
３　土壙

土壙２（第74図）

Ｃ区の南寄りで検出された土壙で、Ｓ＝１/100の遺構配置図に破線で輪郭が記されたものをこれにあてているが、確証は無い。調査時にはCL55Pitあるいは土壙Ⅸと呼ばれていたらしい。平面形はやや楕円形をなし、規模は長径70cm、短径65cm、深さ60cmを測るが、深さについては、図の注記に40cm



第71図　弥生時代後期の遺構全体図（S=1/600）



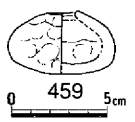
１．灰色
２．黄褐色味のシルトでMnは少ない。むしろ酸化
３．青灰色（グライ化）
４．茶褐色（マンガン）
５．杭痕
６．灰色シルト
７．黄褐色酸化
８．マンガン
９．酸化層に近い色
10．黄褐色（鉄を含む）
11．酸化鉄
12．茶褐色（マンガン）
13．マンガン
14．青灰色（グライ）
15．青灰色砂

第72図　ＴＡの北東壁断面（S=1/30）（近藤・春成・神原・渡辺）

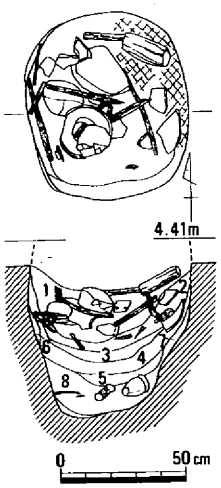
ほど上の「L層上面」から掘り込まれているとあることから、１ｍ前後の深さであったと推定される。土壙内には20cm前後の石とともに多くの遺物が廃棄されていた。遺物の種類としては弥生土器や木器のあることが写真（巻頭図版３－１・２）などからうかがえるが、図示した籠以外は残っていない。

土壙15

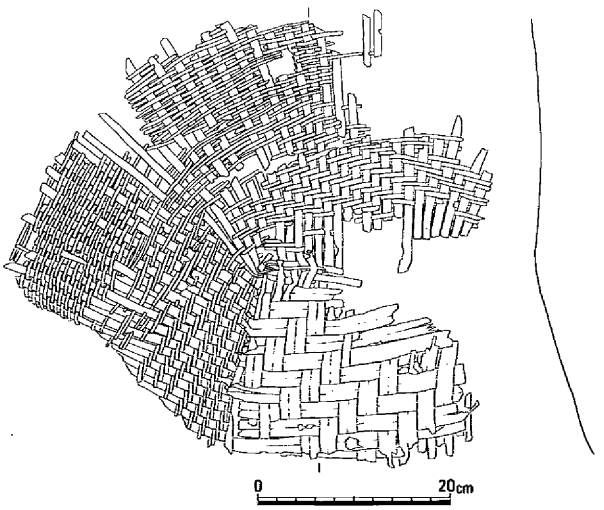
A区の南東端で検出された土壙で、『概報』に記された祭祀遺構と考えられるピット群８基のうちの一つと思われる。ただ、８基のピット群がどれどれを含むものかが明確でないことから、確実とは言えない。土壙の詳細は不明であるが、祭祀遺構の土壙は形・規模はまちまちで、壁および床面とも不整形であり、中には多量の炭と焼土が堆積している。また、ほとんどのものに桃の種子の炭化物があり、一部のものには焼けた骨片が含まれていたらしい。出土遺物は不明であるが、時期については調査時の所見であるが、広義の上東式の終わり頃と考えられている。



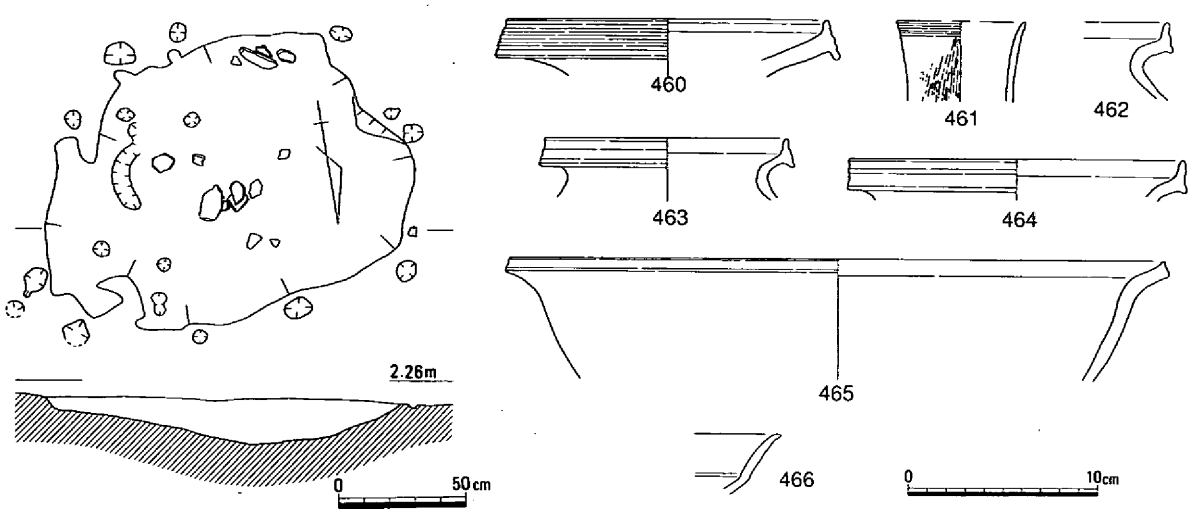
第73図
竪穴住居１
の出土遺物



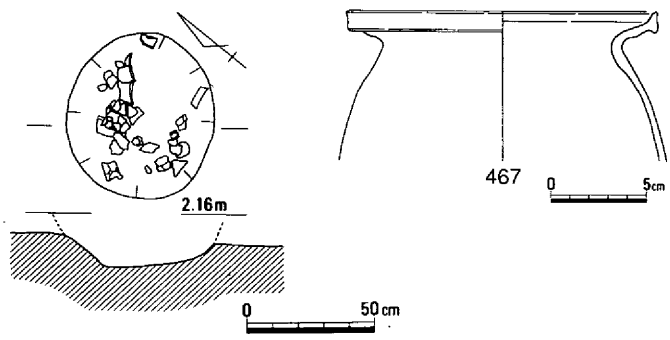
１．灰褐色粘質土
２．小枝・木葉を含む粘質土
３．
４．
５．
ともに上よりも植物質繊維の方が多い
各層間は木の葉・小枝などがフラットに貼りつき肌分かれする
６．灰砂（遺物無し）
７．焼土ブロック
８．灰色細土



第74図　土壙２（S=1/30）と出土遺物



第75図　土壙28（S=1/30）と出土遺物



第76図　土壙29（S=1/30）と出土遺物

土壙16

A区の南東部、土壙15の北東側に接して所在する土壙で、『概報』に言う祭祀遺構の一つと思われる。出土遺物は不明である。しかし、遺構の時期については調査時の所見であるが、広義の上東式の終わり頃と考えられている。

土壙17

A区の南東端で検出された土壙で、『概報』に記された祭祀遺構の一つと思われる。詳細は不明であるが、写真で見ると壁ないし床面に小ピットが多く穿たれている。出土遺物は比較的多く、すべて弥生土器である。遺構の時期は、出土した土器から後期後半と推定される。

土壙18・19

A区の南東端で検出された土壙で、『概報』に言う祭祀土壙の一つと思われる。２基の土壙が切り合っているが詳細は不明である。出土遺物はすべて弥生土器で、時期は後期の後半である。

土壙22

A区の南寄り、ＴＩ－３の東壁に接して検出された土壙で、平面形は楕円形を呈する。規模は長径60cm、短径45cm、深さ20cmを測る。出土遺物としては、わずかに弥生土器があり、後期に属するものと推定される。

土壙26

C区の南東寄りで検出された土壙で、全体図には２基が切り合っているような形で描かれているが、実測図とは大きく異なることから、同じものであるかどうかは確証がない。出土遺物としては、わずかに弥生土器が認められ、後期の土壙であることが判明した。

土壙28（第75図）

A区の南東寄りで検出された土壙で、奈文研の図によると平面形は角張った円形を呈し、規模は径

１ｍであるが、県の図では略楕円形で土壙の外周には小ピットがめぐる。出土遺物はすべて弥生土器で、後期後半と考えられる。

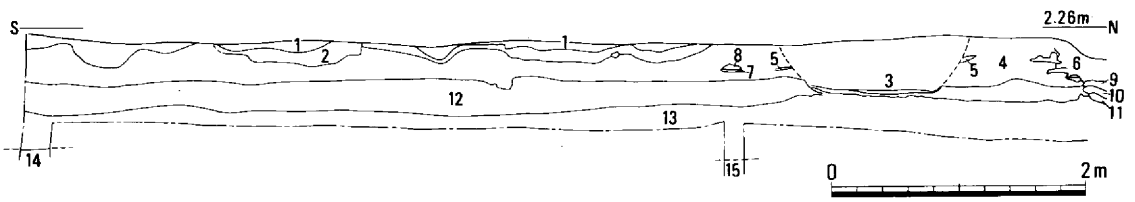
土壙29（第76図）

A区南東端で検出された土壙であるが、奈文研や県の全体図にはなく、『岡山県史』に掲載されている略図には記入されている。平面形は楕円形を呈し、長径65cm、短径55cm、深さ10cmを測る。出土遺物はすべて弥生土器で、図示し得たのは１点であるが、後期後半の特徴を示している。

4　溝

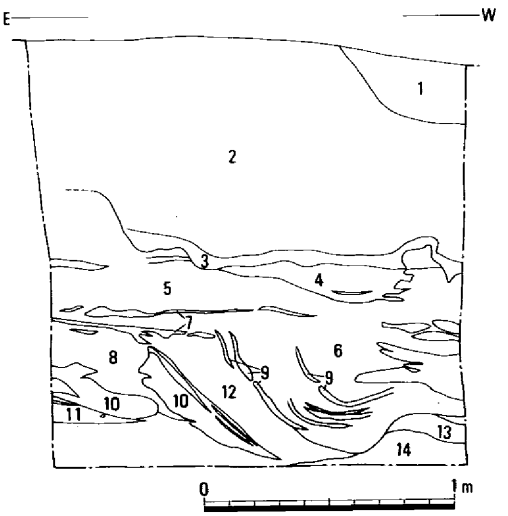
溝３（第77・78・79図）

調査区の中央を北東から南西方向にほぼ直線的に流走する溝で、詳細は不明であるが、第77図の土層断面によると規模は幅1.5ｍ、深さ45cmである。調査時にはＤ３と呼ばれていたらしい。出土遺物の中にはＤ３と注記されたものもあるが、そのほか該当する遺物としては、斜後期溝、上東溝、後期溝、斜行溝、斜溝、斜溝１、溝３、溝ⅢＡと注記されたものがあり、確実に伴った遺物は明確でない。図示（第79図）した遺物は溝３、Ｄ３、溝ⅢＡと注記されていたもので、このうちＤ３はおそらく溝３に伴うものであるが、溝３は溝14・15（旧溝ⅢＡ・Ｂ）の可能性が強く、溝ⅢＡは溝15（旧溝ⅢＡ）と



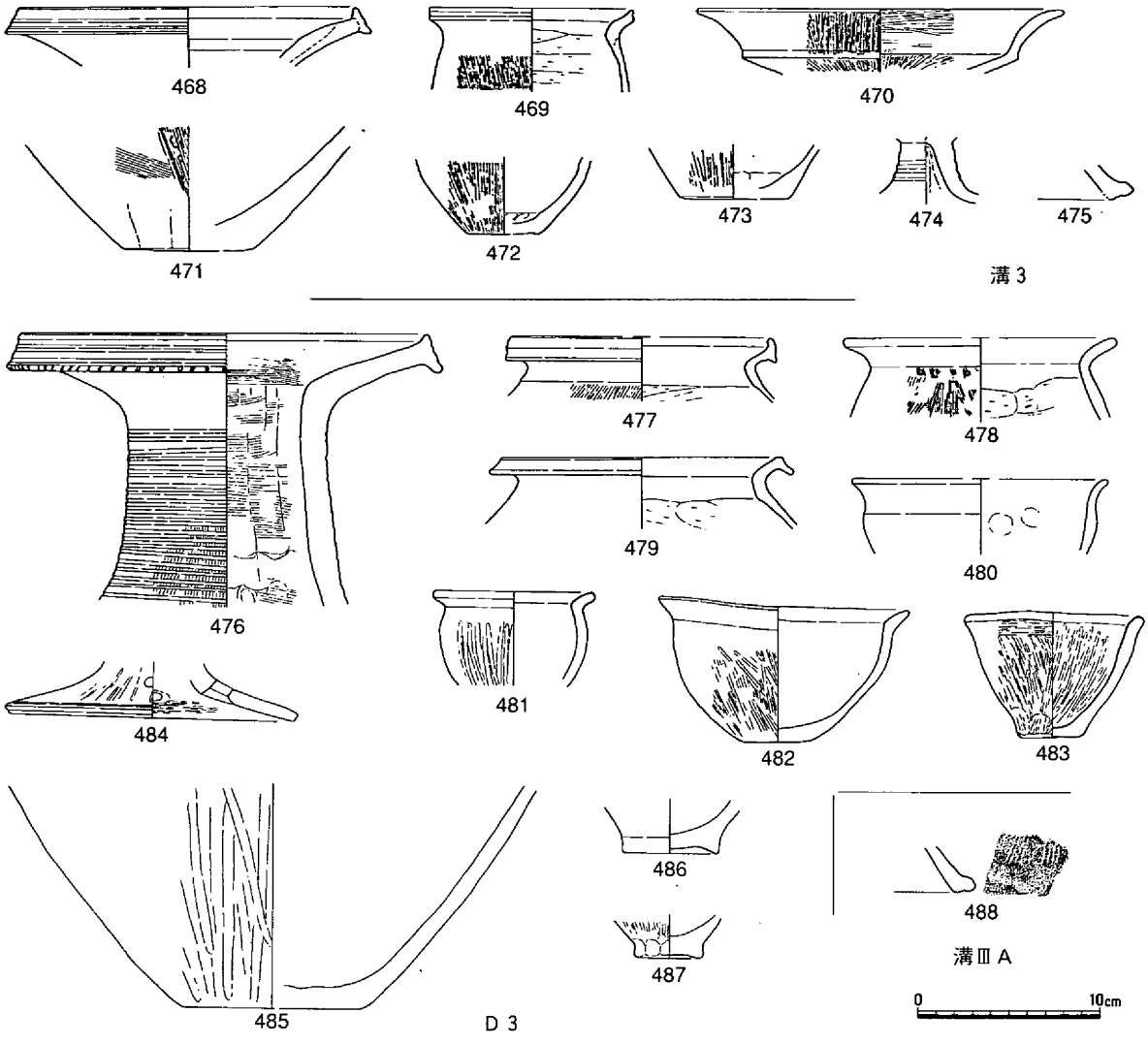
1．花崗岩のバイ乱（撹乱層）
2．木炭・灰を含む灰黒色土
3．細砂
4．灰褐色微砂まじりシルト（a）
5．黒色土
6．灰褐色微砂まじりシルト（b）（a）より砂粒大
7．黒色土ブロック（濃）
8．黒色土ブロック（淡）
9．灰褐色微砂
10．灰褐色シルト
11．灰色微砂
12．下部黒色土
13．灰褐色シルト
14．青灰色シルト（粘土に近い）
15．青灰色微砂まじりシルト（細砂に近い）

第77図　ＴⅢ－２西壁断面（S=1/60）（近藤・春成・神原・渡辺）



1．灰褐色粘土
2．茶褐色細砂（マンガンを含む）
3．茶褐色細砂
4．黒灰色微砂（粗砂を含む）
5．灰黄色粗砂（部分的に黄灰色細砂及び微細を含む）
6．灰黄色粗砂（シルト混在）
7．黒褐色粘土（中砂含む）
8．黄灰色砂
9．灰黒色シルト
10．黒褐色粘土
11．灰色粗砂（小円礫を含む）
12．黒灰色粗砂
13．灰黒色粗砂まじりシルト
14．黒灰色粗砂（シルト含む）

第78図　ＴⅣ－２南壁断面（S=1/30）（近藤・春成・神原・渡辺）



第79図　溝３の出土遺物

思われる。Ｄ３と注記された遺物が溝３のものであるとすれば、後期の中ごろには溝は廃絶したものと考えられる。

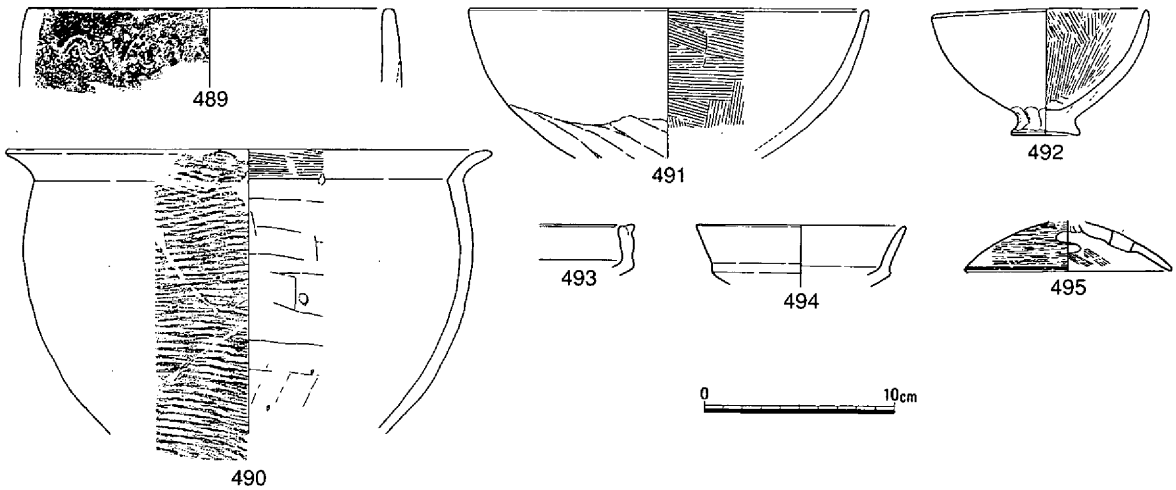
溝４（第72・80図）

溝３の南東側を溝３と平行して流走する溝であるが、南西端は南に向かって大きく向きを変える。第78図はＴⅣ－２の南端の断面であるが、どれが溝４の掘り込みかは不明である。また、第11図、第64図、第70図の断面にも掘り込みが検出されていると思われるが、注記がないので確定的なことは言えない。規模も明確でないが幅１ｍ前後、深さ10cm前後と思われる。

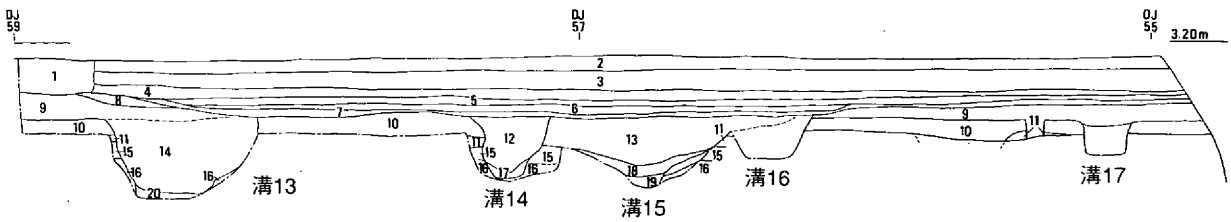
出土遺物はすべて弥生土器である。489は口縁部に櫛状工具で波状文を施している。490は外面をタタキで調整している。土器の時期はわずかに中期に属するものを含むが、ほとんどは後期の後半である。

溝８

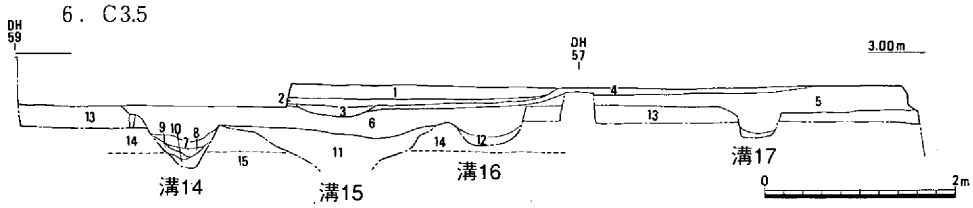
溝３と溝４の間を平行して流走する溝で、約12mほどにわたって検出された。規模等の詳細は不明である。出土遺物はないが、時期は調査時の所見から後期とされる。



第80図　溝４の出土遺物



1．A土の入った穴
2．B
3．C１
4．C２
5．C３
6．C3.5
7．C４
8．マンガン堆積のない灰色土
9．D
10．E
11．F
12．灰褐色砂質土
13．暗灰褐色土
14．灰褐色砂質土
15．G
16．H
17．グライ化した粘土
28．グライ化した粘土
19．灰色砂
20．グライ化した粘土



1．C３
2．C3.5
3．灰褐色土
4．C４
5．D
6．暗褐色土マンガン沈着
7．暗褐色土
8．灰色粘質土
9．暗褐色砂まじり土
10．灰黒色粘土
11．灰黒色粘土
12．灰黒色粘質土
13．E
14．F
15．G

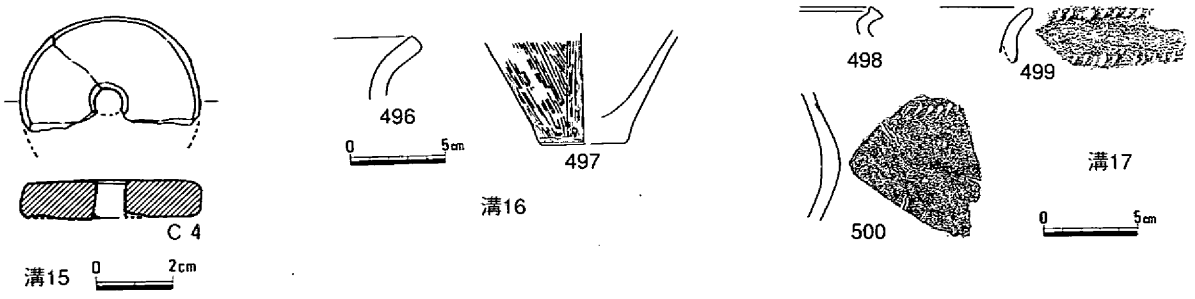
第81図　溝13・14・15・16の断面（S=1/80）

溝13（第81図）

北西調査区の北西端で検出された溝で、北東から南西方向へ流走する。南西側は西Tの溝９ないし溝10へ繋がる可能性がある。調査時には溝Ⅳないし溝４と呼ばれていたようである。規模は幅1.6m、深さ0.9mを測る。出土遺物は弥生土器がわずかにあり、後期に属する。

溝14・15・16（第81図）

北西調査区を北東から南西方向に平行して流走する３条の溝で、溝14は北西側、溝15は中央、溝16



第82図　溝15・16・17の出土遺物

は南東側で互いに接している。このまま南西に延びるとすればTⅡで確認できるはずであるが、記述が無いので不明である。規模は溝14が幅90cm、深さ70cm、溝15は幅2.6以上、深さ70cm、溝16が幅90cm、深さ40cmを測る。出土遺物は明確にし得ないが、溝３と注記された土器は溝14・15が溝ⅢA・Bと呼ばれていたことから、溝14・15のものである可能性がある。溝15は溝ⅢAと呼ばれていたことから、溝ⅢAと注記された遺物が相当することはほぼ間違い無いであろう。溝16は溝Ⅱと呼ばれていたことから、溝２と注記された土器が相当する可能性が強い。遺構の時期は土器との対応が明確でないため詳細は不明であるが、検出面と調査時の所見を尊重して、後期に属するものと考えておく。

溝１

北西調査区の溝16から南東側に少し離れた位置で検出された溝で、溝16同様に北東から南西方向に流走する。規模は幅50cm、深さ35cm前後である。出土遺物は少なく、前期の土器を含むものの、多くは後期に属するものである。溝の時期は土器に加えて、検出面や調査所見を合わせて考えると後期と推定される。

E　古墳時代の遺構

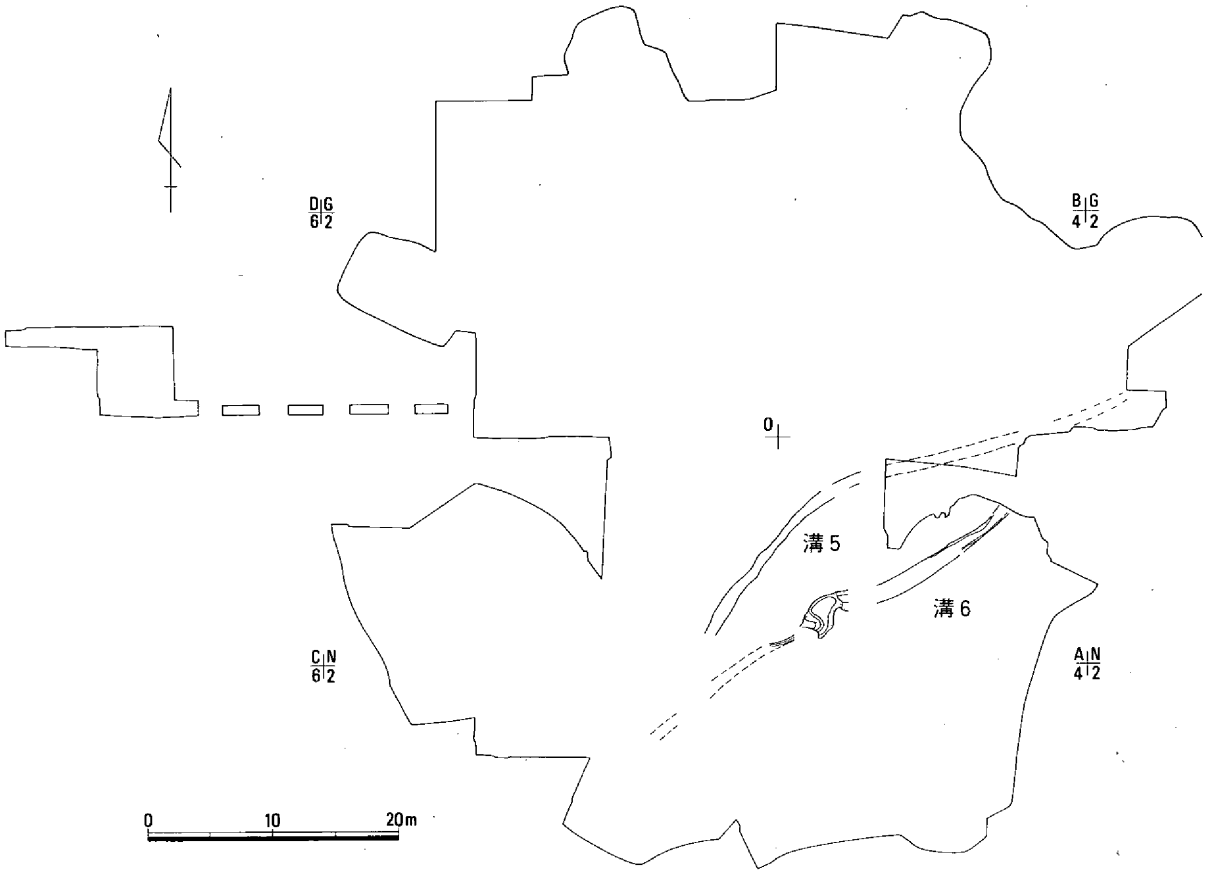
古墳時代の遺構は少ないが、調査区の北西側には酸化鉄の層が水平に広がっていることから、水田（乾田）が形成されていたものと考えられる。また、南東側には水田と係わると思われる溝が検出されている。

1　溝

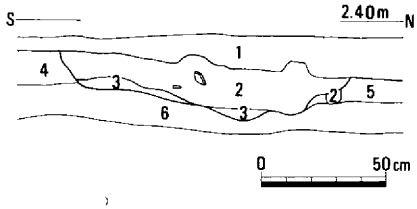
溝５（第84図）

A区で検出された溝で、調査区の東側では東から西方向に向かって流れるが、ＴＩ－２付近で大きく南西方向に向きを変えて流走する。しかし、ＴⅢ－３より南西側については明確でない。溝はＴＩ－２およびその西側に設定されたTAの断面に現れるが、両者の断面形状はとても同じ溝の断面とは思えない状況である。むしろＴＩ－２の溝５の浅い断面（第84図）は、TAの溝４の断面（第72図）に、そしてTAの溝５の断面（第72図）はＴＩ－３の溝６の断面（第85図）に良く似ている。しかし、このような断面の形状の違いが正しいものなのか、あるいは間違いであるのかについては判断する資料を欠いている。

出土遺物は残されていないが、『概報』によれば、灰白色微砂の埋土中に弥生時代後期の土器と少量の土師器および５世紀末ないし６世紀初頭の須恵器が含まれ、南端からは管玉も出土しているらし



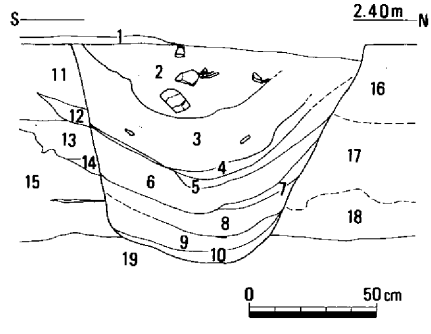
第83図　古墳時代の遺構全体図（S=1/600）



ＴＩ－２西壁

１．撹乱土
２．うすい青灰色微砂
３．こい青灰色シルト層
４．やや暗い黄褐色微砂まじりシルト
５．暗黄褐色微砂

第84図　溝５の断面（S=1/30）



ＴＩ－３西壁

１．撹乱土
２．灰褐色（砂が多い）
３．暗灰色シルト
４．灰色微砂
５．灰色微砂（木の皮含む）
６．暗灰色シルト（木炭含む）
７．灰色微砂
８．灰色シルト
９．微砂・シルト互層
10．灰色微砂
11．微砂まじりシルト（多）
12．灰褐色（焼土を含む）
13．微砂
14．細砂
15．微砂まじりシルト（少）
16．灰褐色微砂質シルト（強）
17．灰褐色微砂（弱）
18．灰褐色シルトまじり微砂
19．暗灰色シルト

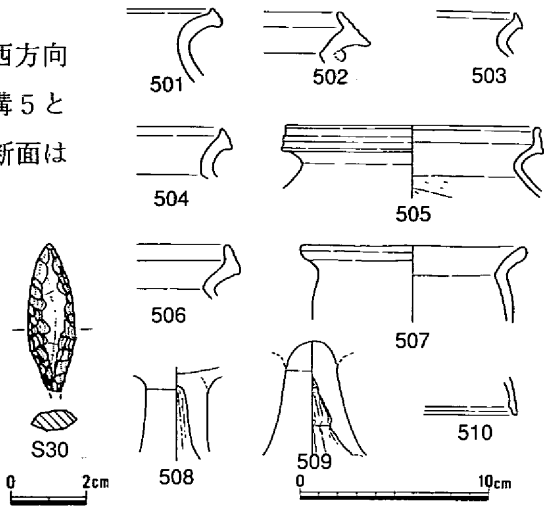
第85図　溝６の断面（S=1/30）

い。このうち管玉については１点現存しているが、注記された地点（B地区S－２）が異なっていることから、溝５出土のものであるかどうかは不明である。出土遺物から溝の時期を検証できないが、調査時の所見を尊重して古墳時代のものとしておく。

溝６（第85・86図）

A区の溝５の南東側で検出された溝で、北東から南西方向に流走する。詳細は不明であるが、『概報』によれば溝５と同じ埋土で出土遺物も同じような傾向であるらしい。断面はＴＩ－３（第85図）やＴⅢ－３（第70図）で認められるが、実測図に溝の名称が記されておらず、どの掘り込みが相当するのかは不明である。

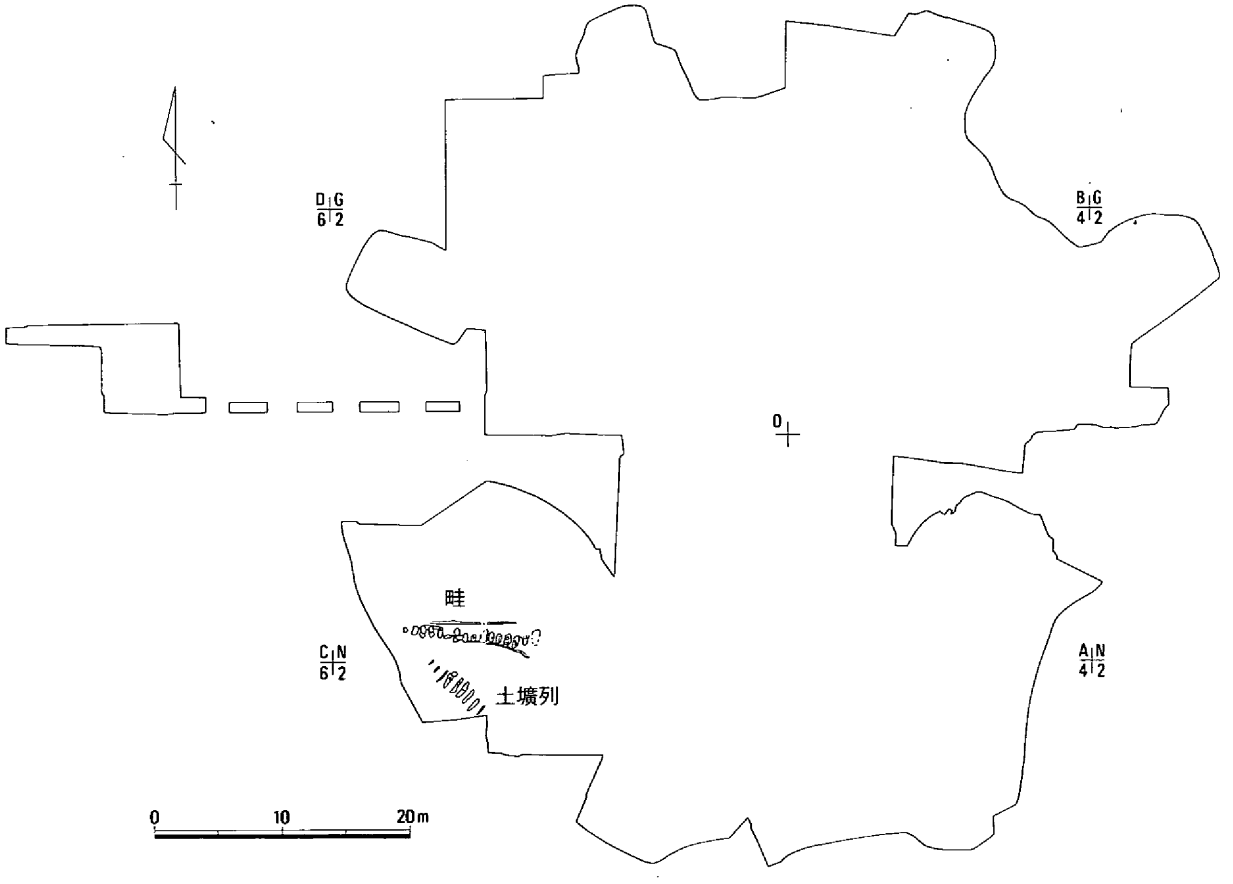
第86図は溝６の出土遺物であるが、弥生時代中期の土器をわずかに含むものの、ほとんどは後期の土器である。しかし、土師器や須恵器をわずかに含むことから、古墳時代の溝であろう。



第86図　溝６の出土遺物

Ｆ　古代以降

古代以降の遺構は少ないが、条里制施行時の整地とそれに伴う東西方向の溝や畦が存在し、それ以後の乾田土壌も確認されている。さらに土壙墓や土壙列、あるいは土壙なども見られ、平安時代を中心とする頃の水田や集落の一端がうかがえる。これらの遺構は整地層に重なる厚さ40cm前後の灰褐色土の下半部で検出されるが、この層の上半部には土師器や瓦質土器が含まれることから、中世においても水田とともに集落が営まれていたらしい。



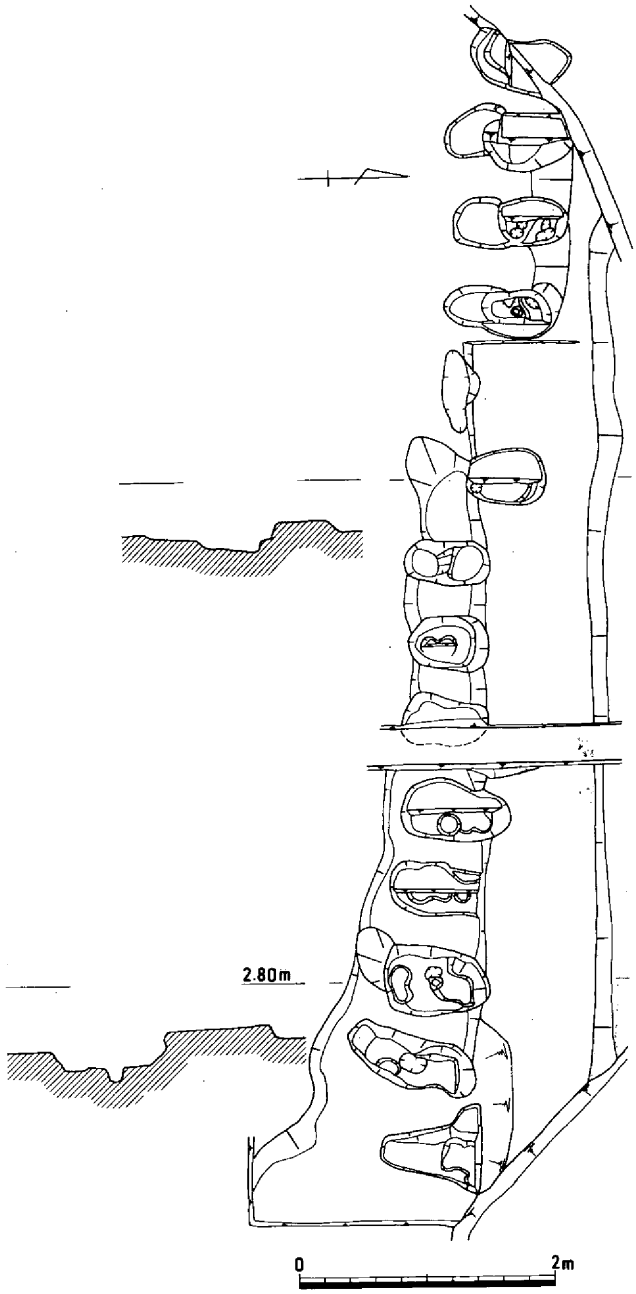
第87図　古代以降の遺構全体図（S=1/600）

1　畦状遺構

C区で検出された条里に係わる遺構で、畦状遺構としたが、適切な名称であるかどうかは検討を要する。『概報』によると、古墳時代後期以降と考えられる平坦な整地面が広範囲にわたって認められ、これを含鉄層の存在から水田面と考えていることから、条里制との関係を想起している。この層に掘り込まれた幅約80cmの東西方向に流走する溝は、この地域の条里の方向に沿ったものであり、TⅢ－３（第70図）、TⅣ－２（第64図）、C区西端（第69図C）の断面で確認されているらしいが、どの層が対応するのかが記されていないため詳細は不明である。

ところで、実測図（第88図）を見ると浅い溝は西になるほど細くそして浅くなり、立ち消えてしまうが、その中を、切り合う関係にある二つの略楕円形を呈する土壙が列をなしている。『概報』はこの土壙の列には触れられていないが、溝ないし溝の北側に認められる幅80cmあまりの東西方向の畦状の高まりと一体的な関係を持っているものと思われる。

出土遺物が明確でないため詳細な時期は不明であるが、古代と考え、その性格についても条里制に関連する遺構である可能性が強いと言う調査時の所見に従っておく。



第88図　畦状遺構（S=1/60）

2　土壙墓

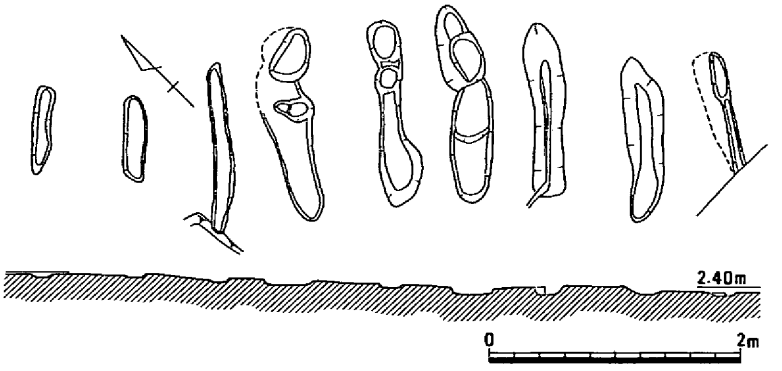
土壙墓１・２

調査区からさらに西側に延びているTⅡは長さ３ｍに区切られて設定されているが、その東側から二番目ないし一番目の西端で２基の土壙墓が検出された。詳細は不明であるが、『概報』によるとそのうちの一基は平面形が幅60cmの長方形を呈し、床面から緑釉の小片が出土したらしい。写真（図版10－１）から判断すると土壙墓１と思われるが、確実ではない。なお、緑釉は現存していない。

もう一基の土壙墓は、トレンチの端にわずかに検出されていることから土壙墓かどうかはあきらかではないが、調査時の所見では土壙墓にしている。詳細は不明である。

3　土壙列

C区の南西端で検出されたもので、細長い土壙が北西から南東方向へ並ぶ。『概報』にも記載が無いため詳細は不明であるが、土壙は大きいもので長さ1.5m、幅30cm、小さいもので長さ70cm、幅10cmを測る。出土遺物が無いため時期は明確でないが、検出面から古代に属する可能性が強い。



第89図　土壙列（S=1/60）

4　土壙

土壙６

調査区から西側に延びるＴⅡの一番目ないし調査区の西端で検出された、平面形が円形を呈する径１m前後の土壙である。詳細は不明であるが、『概報』に言う第二の遺構であるとすれば、埋土は灰色微砂で、長頸壺か杯の底部らしい須恵器と、黒色土器らしいものなどが出土したらしい。遺構の時期も古代と考えられている。

G　時期不明の遺構

1　土壙

土壙１

D区の南寄りで検出された土壙で、浅い溝状を呈する。北西側を削平されているため本来の規模は不明であるが、残存長2.5m、最大幅0.9mを測る。出土遺物は不明である。

土壙３

D区の北東寄りで検出された土壙で、北東側は一部削平されているが平面形は細長い楕円形を呈する。重機による穴と言う説もある。規模は現存長90cm、幅65cmを測る。出土遺物は不明である。

土壙４

D区の南寄りで検出された浅い土壙で、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ1.2m、幅70cmを測る。出土遺物は不明である。

土壙５

B区の北寄りで確認された土壙であるが、南東側の一部以外は重機によって削平されている。実測図に前期土壙と記されているが、該当する出土遺物が明確でないため、遺物からは検証できない。

土壙７・８

C区の北東寄りで検出された細長い２基の土壙で、土壙８の南西端を切って土壙７が所在する。実測図には未掘と記されている。規模は土壙７が長さ1.4m、幅65cm、土壙８は長さ4.5m、幅70cmを測

る。時期は弥生時代前期の可能性が高いが、出土遺物などからは検証できない。

土壙９

D区の南東寄りで検出された浅い土壙で、平面形は東西に長い掘り込みの両端に突出部がつく、コの字状を呈する。規模は東西の長さ1.6m、東端の長さ１mを測る。時期は検出面から弥生時代の可能性が強い。

土壙10

A区の南東端で確認された平面形が円形を呈する土壙で、『岡山県史』掲載の略図に見られる「壺棺」ないし「祭祀穴群」とされるものに該当する可能性がある。出土遺物は不明である。

土壙11

D区の北寄りで検出された土壙で、平面形は楕円形を呈する。規模は長径65cm、短径55cmを測る。時期は弥生時代前期の可能性が高いが、出土遺物が不明であるため検証できない。

土壙12

C区の西南調査区で検出された土壙で、平面形は隅丸長方形を呈するが、北端は小さな土壙と切り合っている。規模は長さ2.6m、幅90cmを測る。時期は弥生時代である可能性が高い。

土壙13

C区の西南調査区で検出された土壙で、土壙12の東側に位置し、平面形は長楕円形を呈する。規模は長さ1.7m、幅80cmを測る。時期は弥生時代である可能性が高い。

土壙14

B区の微高地南東端で検出された土壙で、平面形は楕円形を呈する。規模は長径55cm、短径45cm、深さ10cmを測る。遺物は明確でないが、弥生時代前期の土器片が出土していることから、弥生時代前期の可能性が高いが、確実性と言う点では問題がある。

土壙20

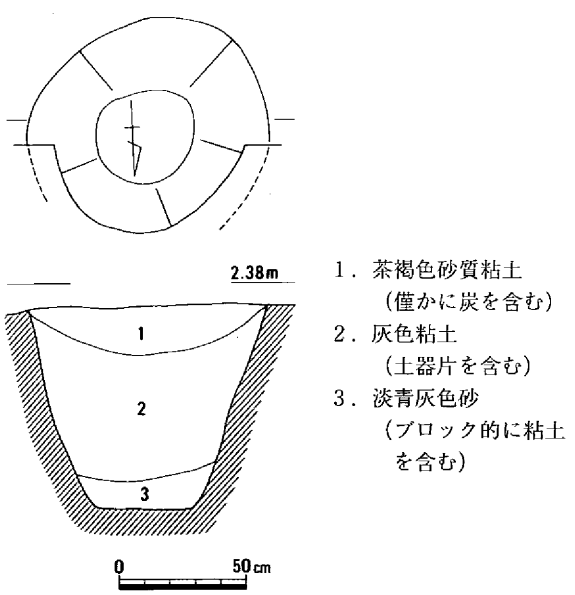
A区の西寄りで検出されたとされる土壙で、『岡山県史』に掲載されている略図にその位置が記されている。土壙の詳細は不明であるが、遺物として弥生時代前期から後期の土器が出土していることから、後期に属する可能性が高い。

土壙23

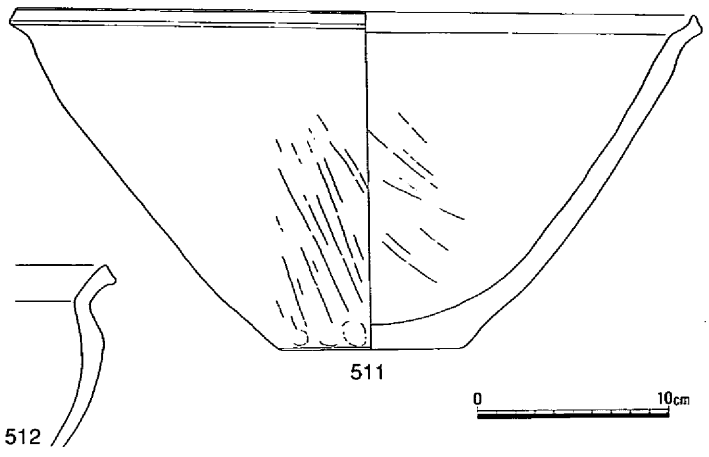
A区のほぼ中央で検出されたとされる土壙であるが、『岡山県史』に掲載された略図しかなく、詳細は不明である。遺構の時期も不明であるが、弥生時代のものである可能性が強い。

土壙24（第90図）

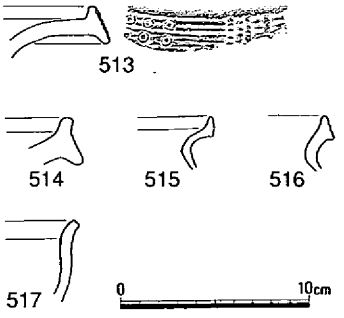
A区の東南T南端で検出された土壙で、平面形はほぼ円形を呈する。『概報』に記載が無いため詳細は不明であるが、規模は径90cm、深さ80cmを測る。埋土はほぼ３層に分かれており、２層には土器を含むとされるが、その土器が不明のため遺構の時期も不明である。しかし検出状況から弥生時代のものである可能性が強い。



第90図　土壙24（S=1/30）



第91図　土壙25の出土遺物



第92図　土壙30の出土遺物

土壙25（第91図）

A区の西寄りで検出された土壙で、溝７と切り合う関係にあるが、詳細は不明である。平面形は長楕円形を呈し、規模は現存長1.2m、幅85cm、深さ30cmを測る。遺構の時期は溝７との切り合い関係が明確でないことから不明であるが、遺物からは弥生時代後期のものと推定される。

土壙27

A区の南寄りで検出された土壙であるが、1968年８月に県が実測したS＝1/100の平面図に記載されているのみで、詳細は不明である。遺構の時期も不明であるが、『概報』に記載された「祭祀遺構と考えられるピット群８基」の中の１基にあたるとすれば、弥生時代後期に属する。

土壙30（第92図）

A区の東端で検出された土壙で、２基が切り合っている。土壙の実測図はあるが、全体図に記載されていないことから、正確な位置は不明である。大きい土壙は平面形が略楕円形を呈し、規模は長さ1.1m、幅85cm、深さ10cm、小さい土壙も平面形が楕円形を呈し、規模は長さ90cm、幅50cm、深さ25cmを測る。遺構の時期は不明であるが、弥生時代に属する可能性が高い。

2　炉

炉３

A区の溝６西端付近で検出された炉であるが、『岡山県史』に掲載された略図以外に資料が無いため、詳細は不明である。時期は溝６と重なり合っていることから、古墳時代より新しいものか。

3　溝

溝１

C区のTⅢ－３で検出された溝で、『概報』では南TとTⅣの溝に続くものとされているが、不明な点が多い。もしトレンチの溝が同じものであるとすれば、幅約１m、深さ50cmの東西方向に流走する溝と考えられる。時期は調査時の所見で前期前半とされている。

溝２

B区の北調査区で検出された東西方向に流走する幅10cmあまりの細くて浅い溝であるが、詳細は不明である。発掘日誌によれば炉１に先行するものと記されているが、遺物が不明のため確認することができない。ただ、総合的に見ると、前期である可能性は高い。

溝９

西Tで確認された幅80cmあまりの溝であるが、全体図に記入されているだけであるため詳細は不明である。遺構の時期は不明であるが、弥生時代のものである可能性が高い。

溝10

西Tで検出された幅70cmあまりの溝であるが、全体図に記入されているだけであるため詳細は不明である。時期は不明であるが、溝13と繋がる可能性も考えられる。

溝11

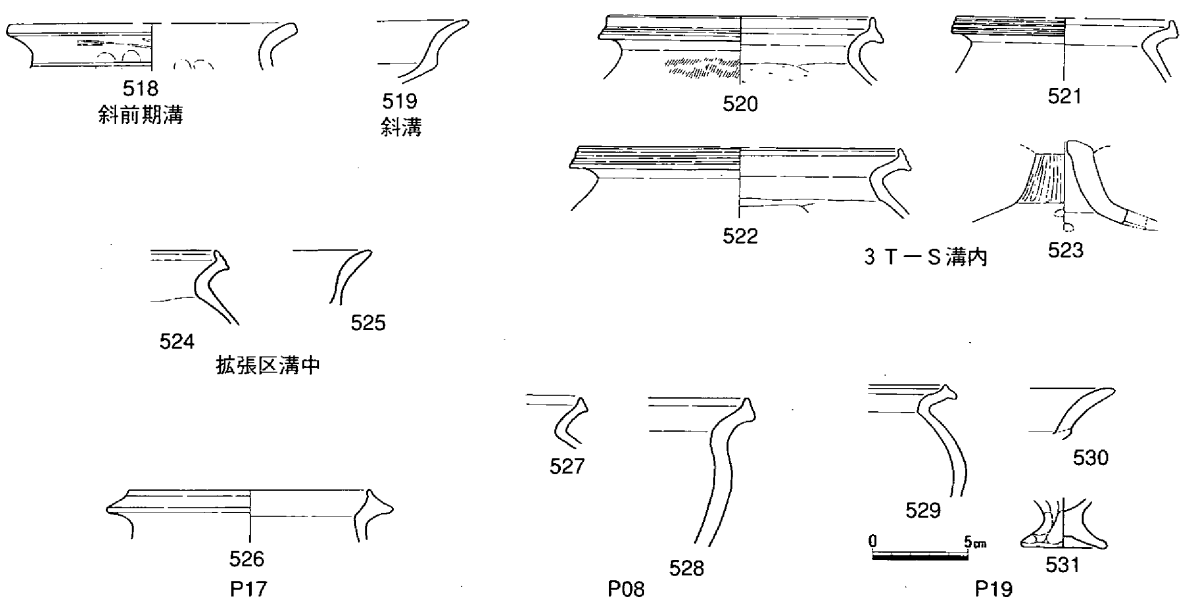
TⅡの西端で検出された幅2.4mあまりの溝であるが、全体図に記入されているだけであるため詳細は不明である。時期は不明であるが、弥生時代のものである可能性が強い。

溝12

C区を北西から南東方向に流走する幅40cmの溝で、『概報』によれば「住２廃絶時に設けられ、西方から東南に流れて低湿地に注ぐ」とある。時期は前期前半ということであるが、遺物がないため追認はできていない。

その他の溝

上記以外にもトレンチの断面には溝らしき掘り込みが多数認められるが、詳細は不明である。『岡山県史』の略図にはTⅢ－３からTⅣにかけてD８と記された古墳時代の溝が見られるが、詳細は不明である。また、A区東端には溝７とは違う弥生中期の溝が『岡山県史』の略図には記載されている。



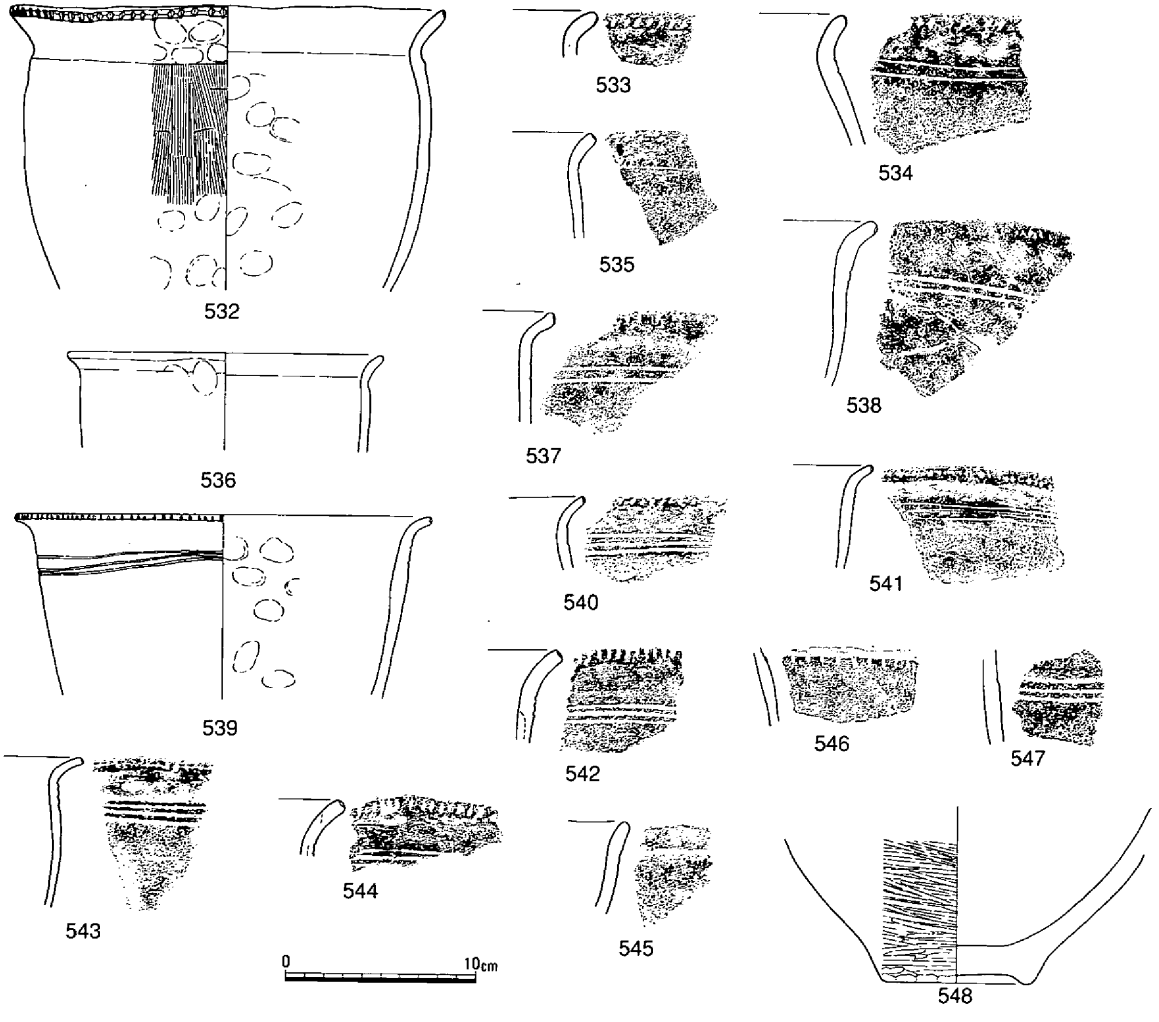
第93図　その他の遺構（名称は調査時のもの）出土遺物

Ｈ　包含層・その他の遺構出土遺物

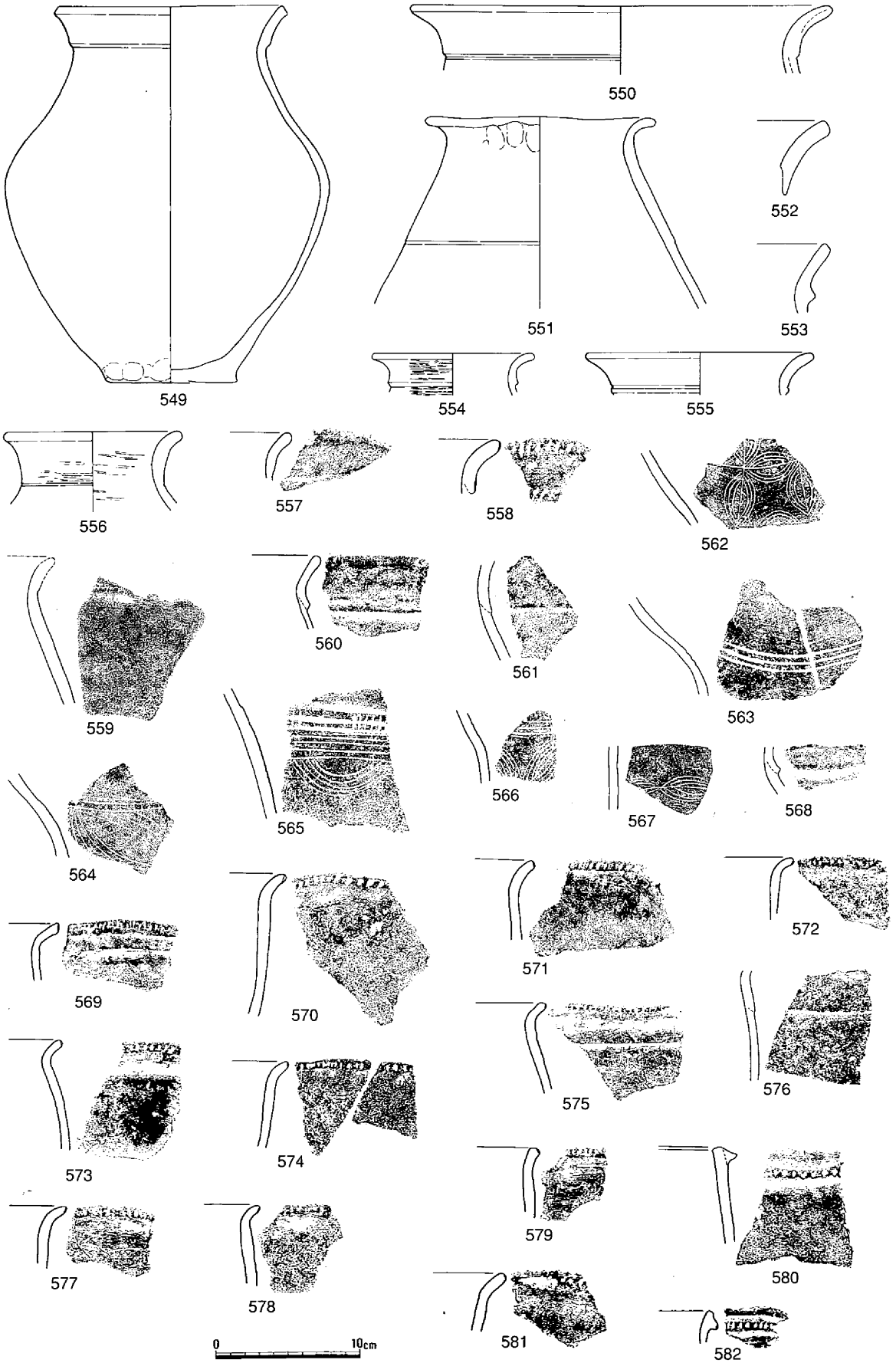
第94図から第99図は包含層出土の土器である。これらの土器には出土地点を表すと思われる記号が記されているが、どう読み取ってよいのかわからないものが多い。また、出土した層位も明確でないことから、資料的価値の低下は否めないが、図示し得たものを掲載する。

第94図と第95図は弥生時代前期の土器である。549から560は壺の口縁部で、頸部との境界に段をもつもの（549など）、削り出し突帯を施すもの（555など）、細い沈線をめぐらすもの（556など）がある。558は段に刻み目を施している。胴部には重弧文（565）や木葉文（562など）を施すものがある。532～546・569～579・581は甕、580と582は突帯文の深鉢である。

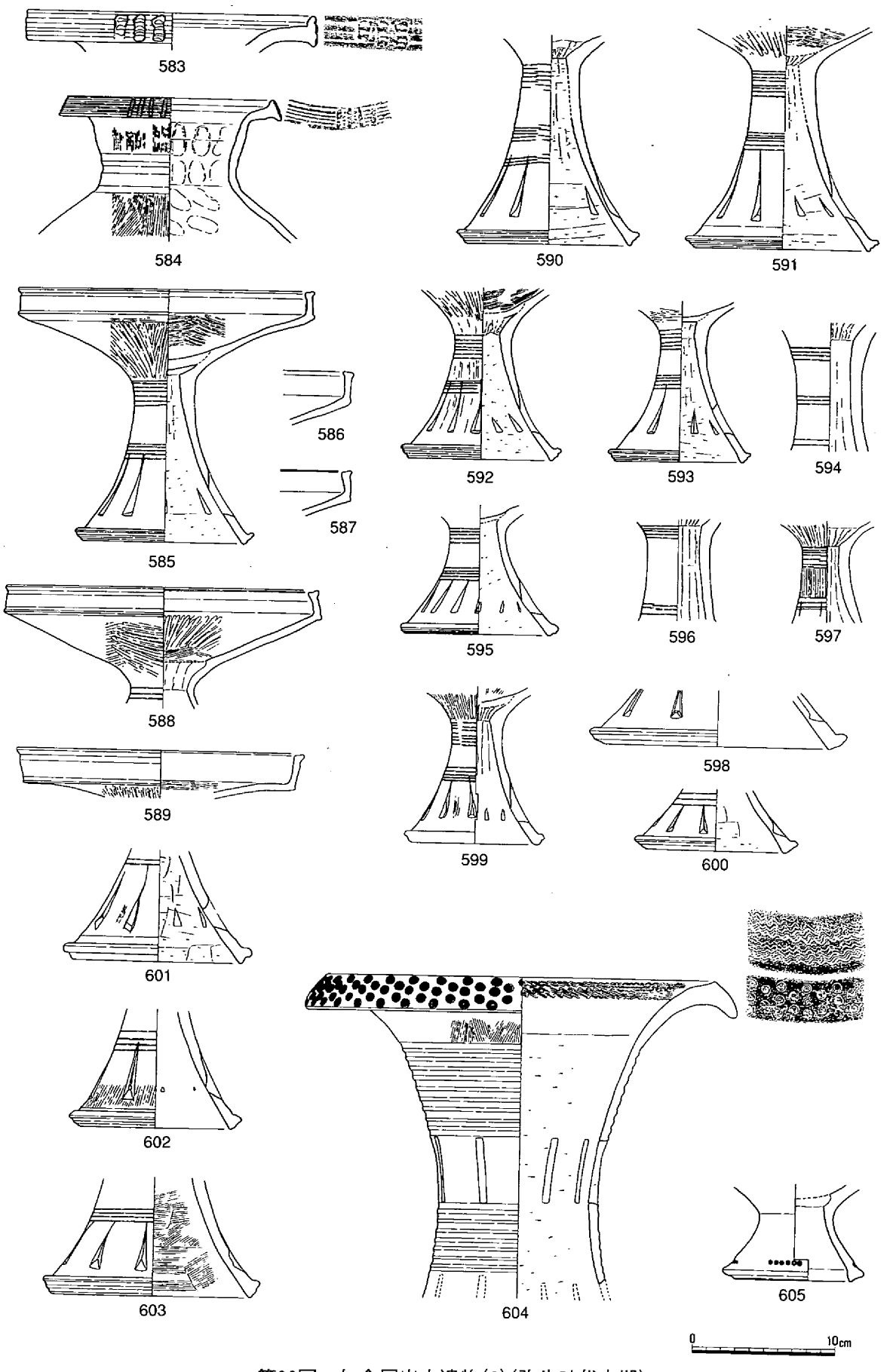
第90図と第97図は弥生時代中期の一括出土土器である。出土状況は、A区東端、溝７の南側に中期の包含層が調査区外へ広がるらしいが、それが壁の崩落とともに露呈し、崩落した土の中には多くの土器が含まれていたと言うことである。出土した当時は壺や甕がもう少しあったという事であるが、現存するものはわずかに壺（584）が認められるものの、ほとんどは高杯と器台であった。これらの土器は丁寧な作りで、最も発達した凹線文を始めとする各種の文様で飾られ、美しく仕上げられていることから、この地域で中期末の仁伍式と呼ばれる土器の一括資料と言えよう。



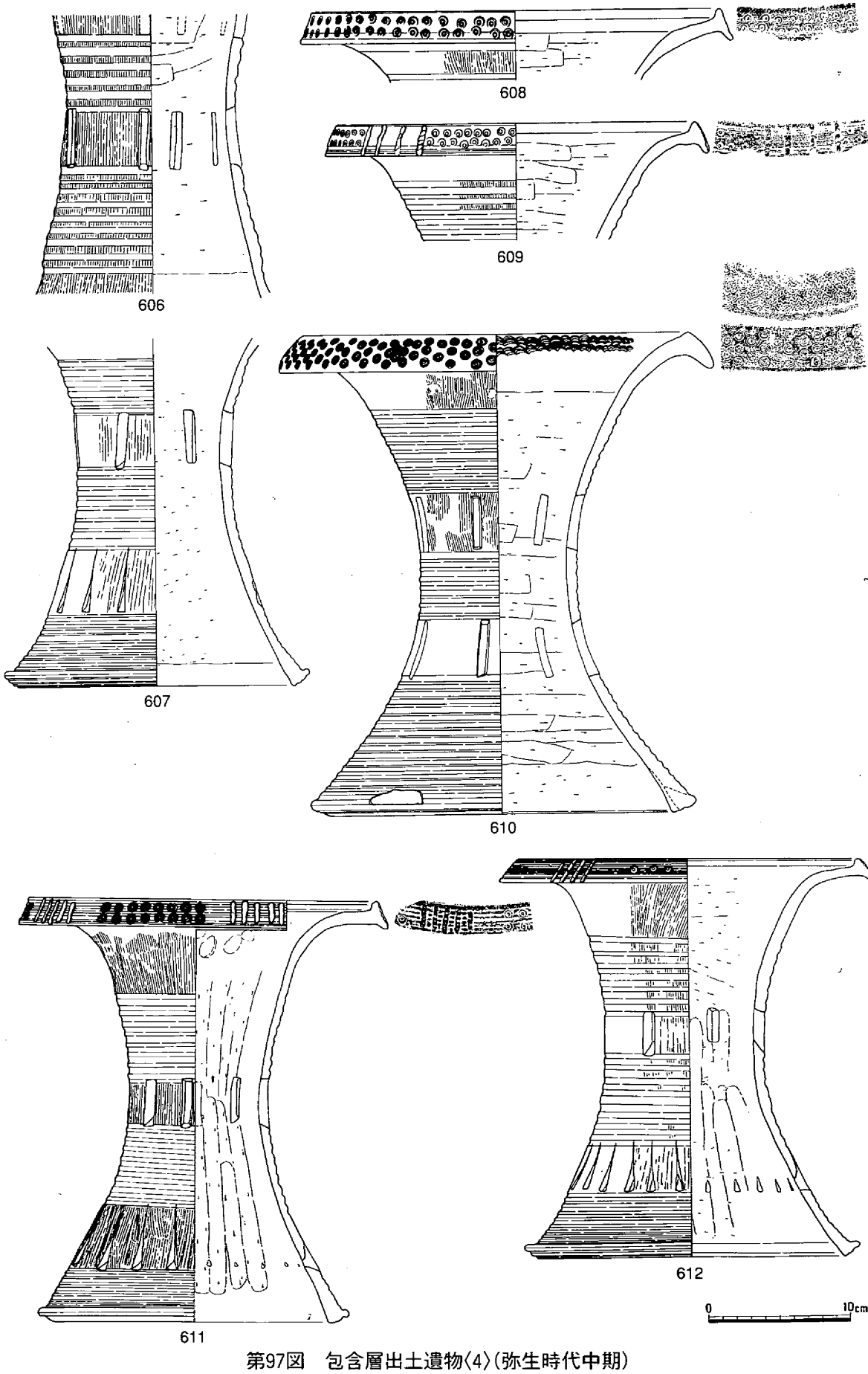
第94図　包含層出土遺物〈1〉（弥生時代前期）



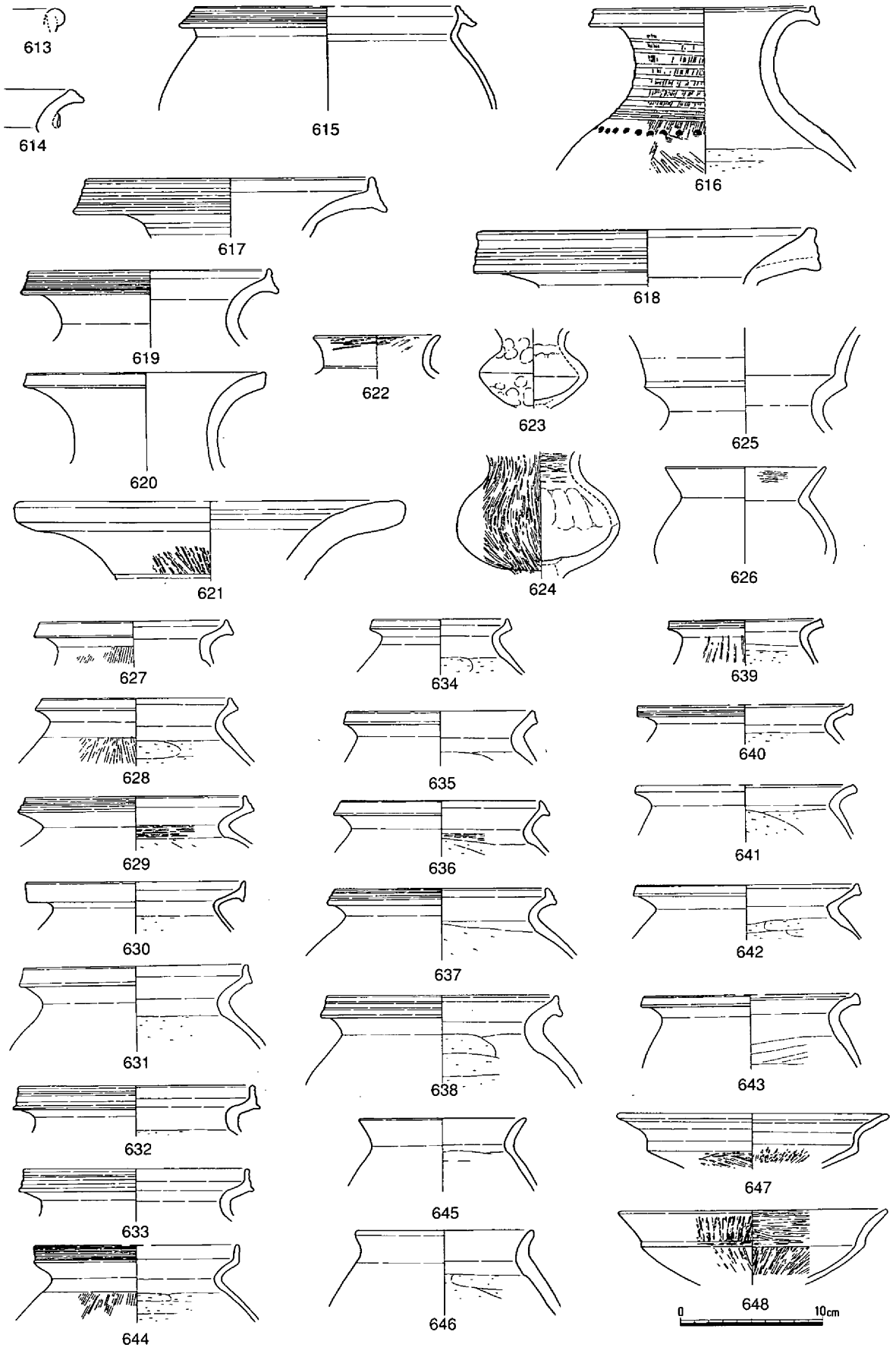
第95図　包含層出土遺物〈2〉(弥生時代前期)



第96図　包含層出土遺物〈3〉(弥生時代中期)



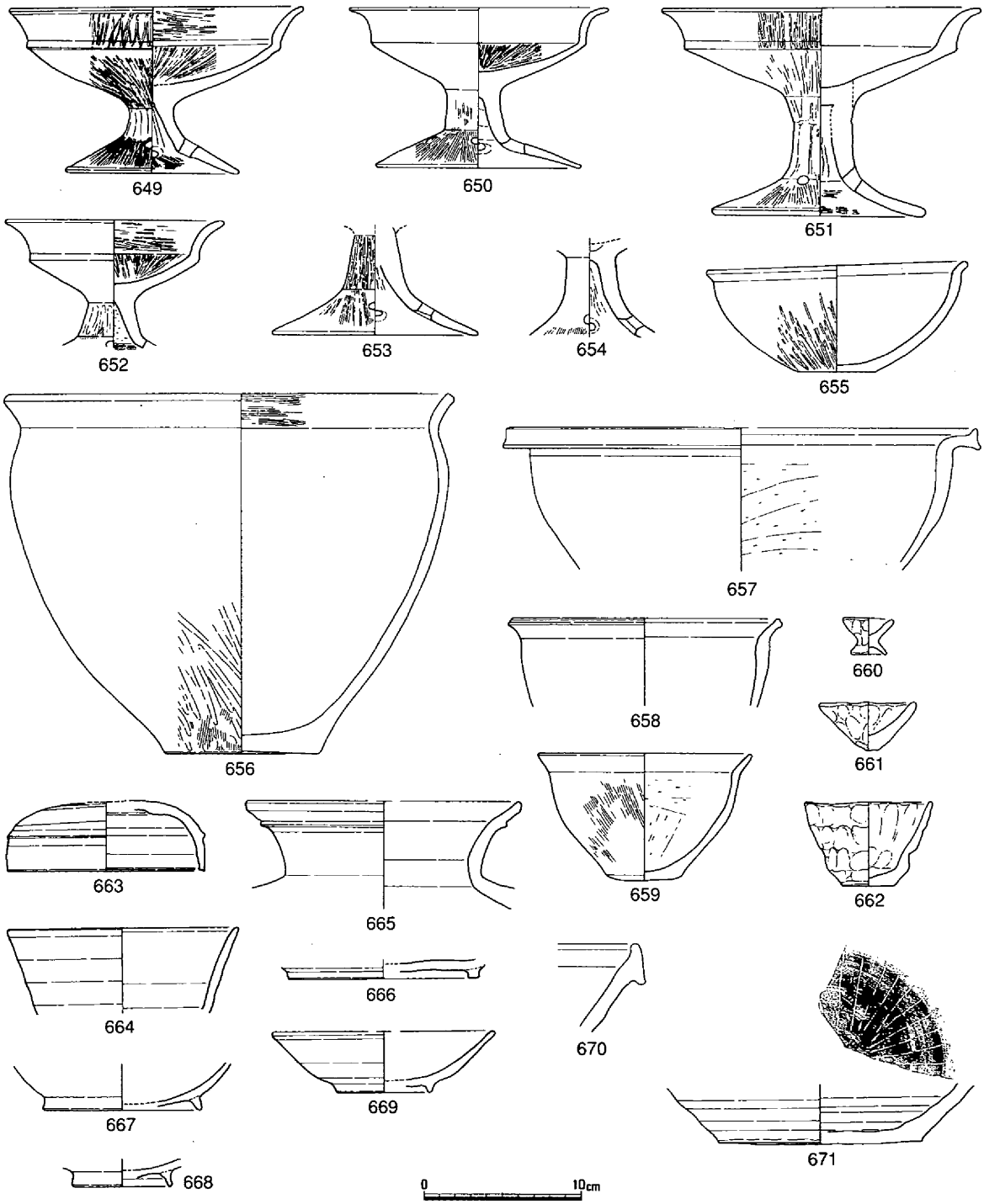
第97図　包含層出土遺物〈4〉(弥生時代中期)



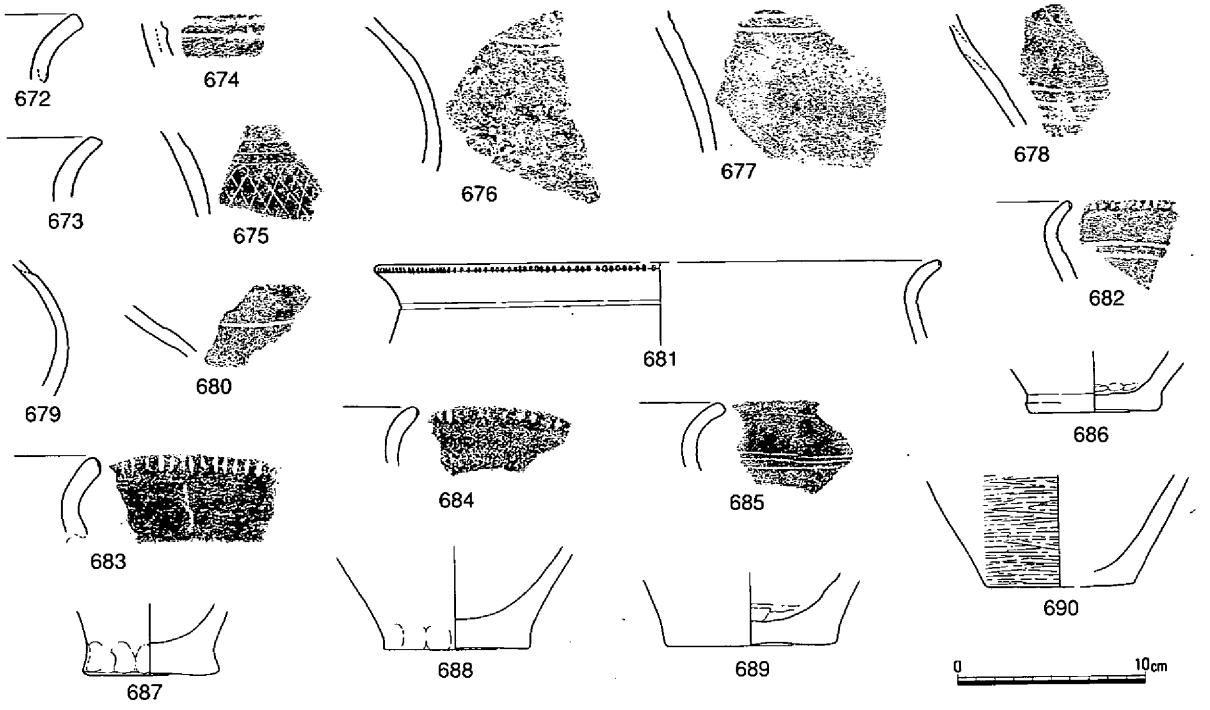
第98図　包含層出土遺物〈5〉(弥生時代中期～古墳時代前期)

第98図から第99図662は弥生時代中期の土器（614・615など）や土師器（626など）を含むものの、多くは弥生時代後期の土器である。これらの土器は出土地点や層位が明確でないが、遺構から出土した後期の土器が少ないことから、図示した。613は小片であるが、口縁部に粘土の帯をめぐらす壺と推定される。660から662は手捏ねの土器で、内外面に指の圧痕が顕著に認められる。

663から671は古墳時代（663・665)と古代（664・666）および中世（667～671）の土器である。667～669は土師質（回転台土師器）椀、670・671は東播系の須恵器擂鉢である。



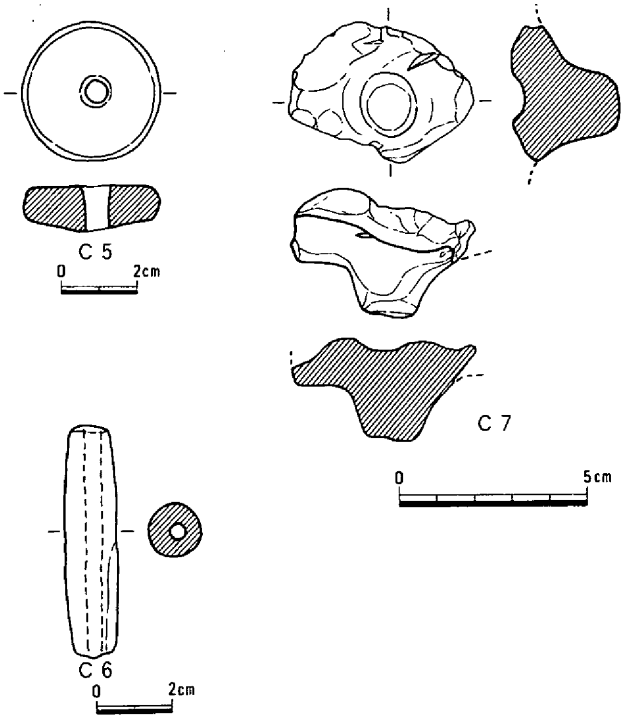
第99図　包含層出土遺物〈6〉(弥生時代後期～中世)



第100図　E層出土の遺物（弥生時代前期）

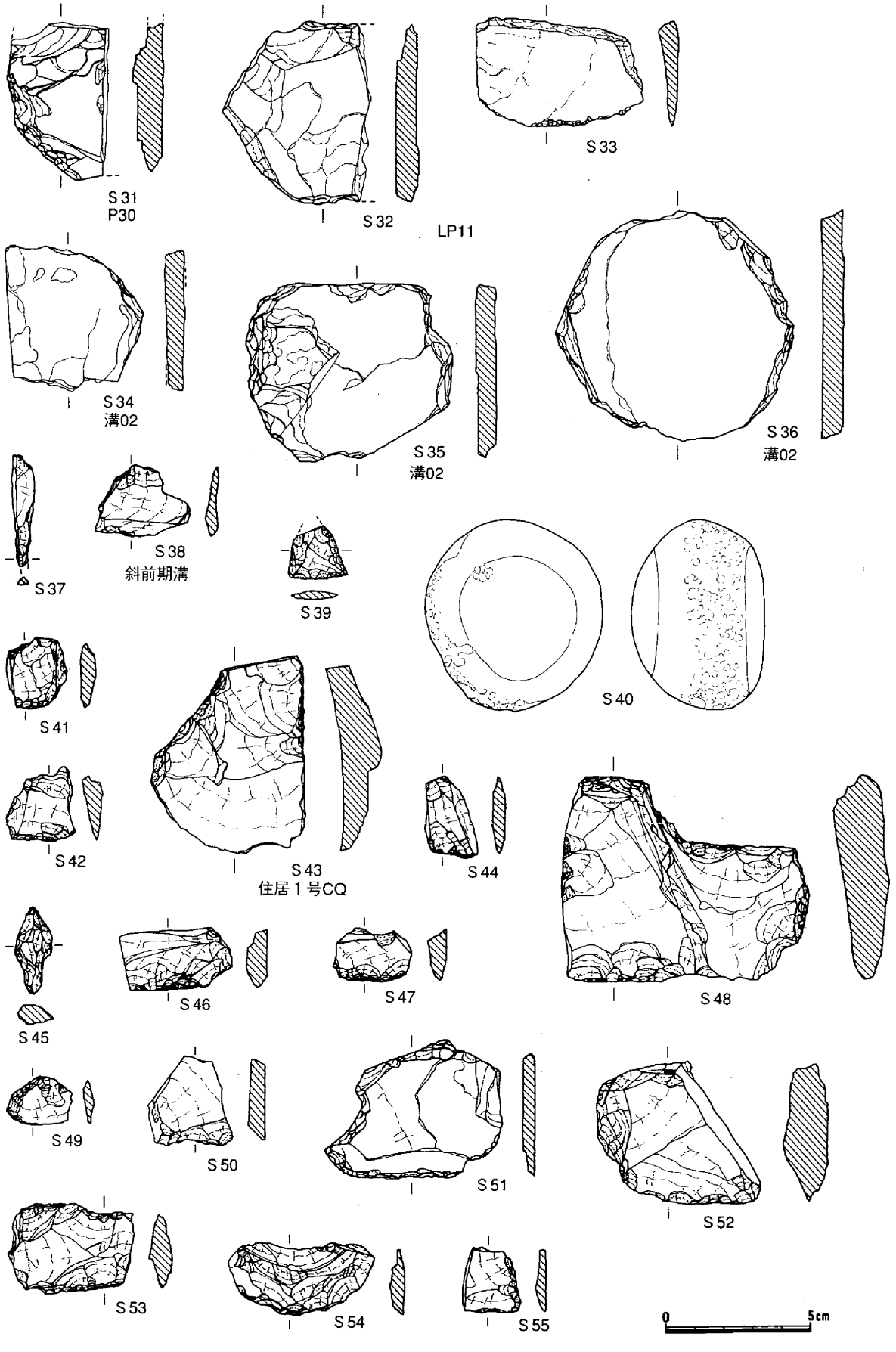
第100図はE層出土の土器である。E層は微高地の層位を上層からA・B・C・・・と命名した層位で、弥生時代前期の遺物を包含する黒褐色土である。土器を見るとわずかに前期以外のものを含むものの、圧倒的に前期の土器が主体をなしている。

672から680および685は壺で、口縁部と頸部の境は段を持つもの（672）、削り出し突帯を施すもの（674）、沈線をめぐらすもの（685）などがある。甕（681～684）は口縁部下に沈線をめぐらすもの(681・682)と、段を持つもの（683）がある。686から690は壺ないし甕の底部である。

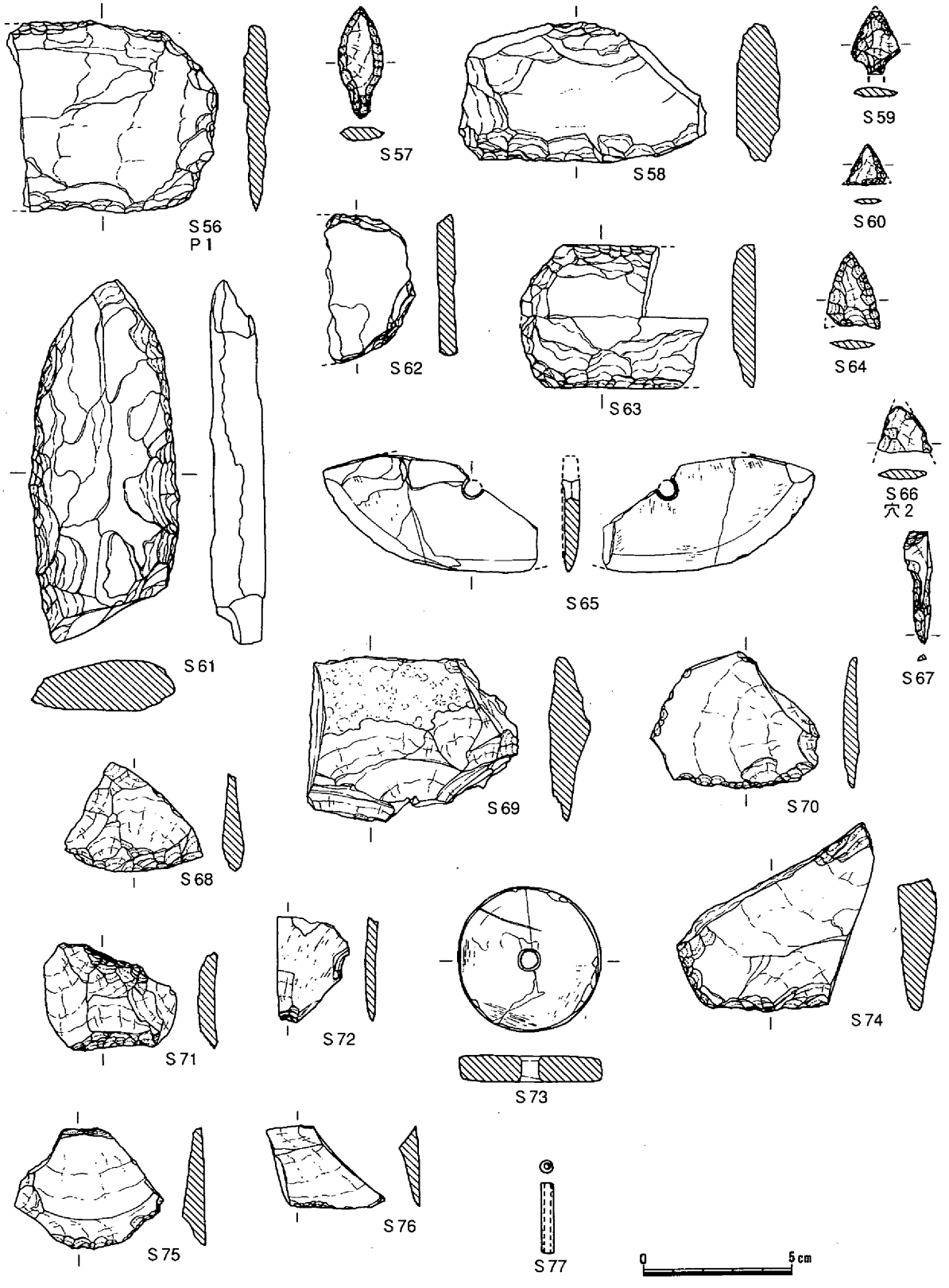


第101図　その他の遺構および包含層出土の土製品

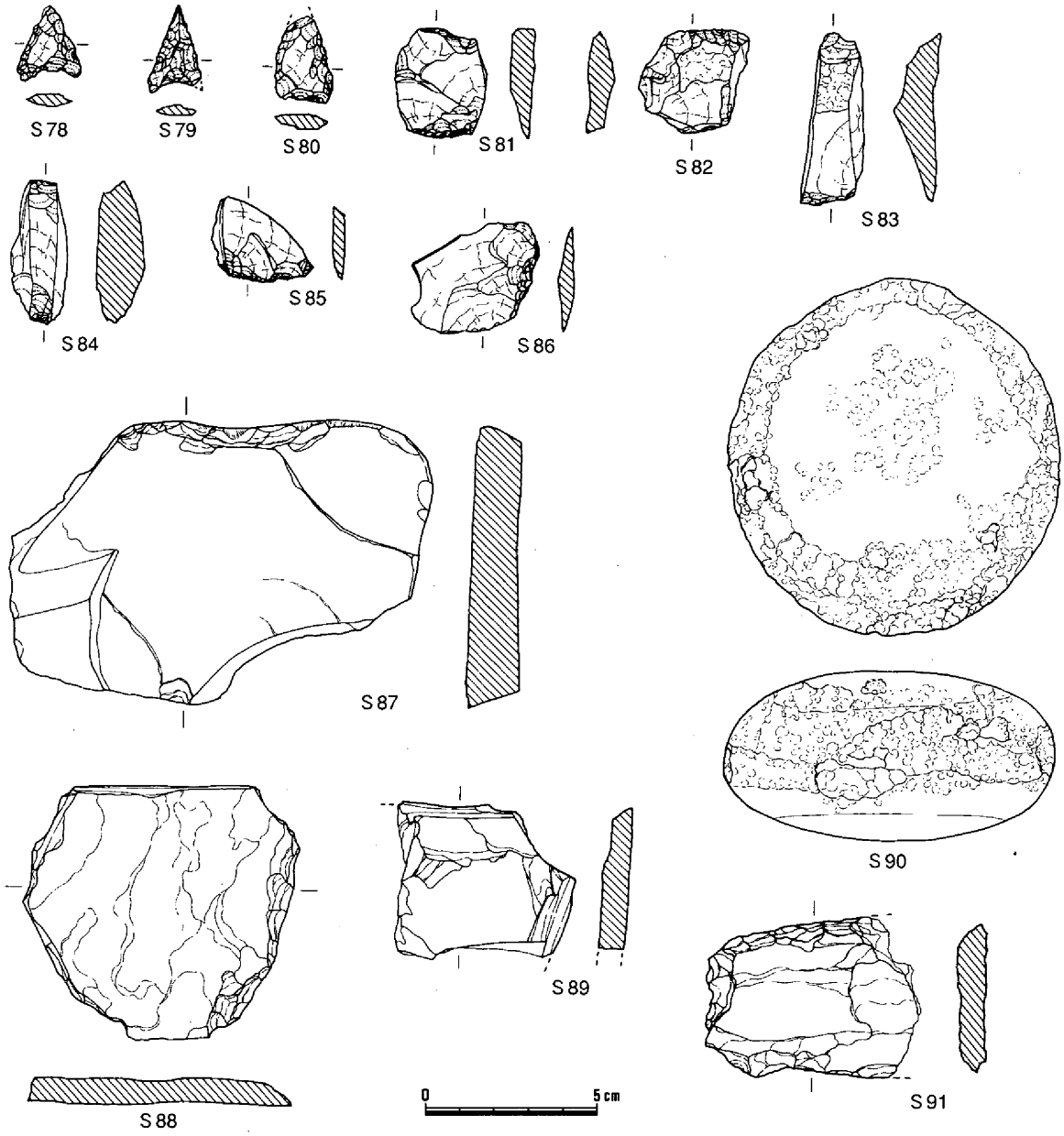
第101図はその他の遺構および包含層出土の土製品であるが、出土した場所や層位は明確でない。Ｃ５はＰ４出土と注記されており、これが正しいとすれば調査時にＰ４と呼称されていた舟形土壙５から出土したということになるが、その前に注記されている103ⅢＡ－NW－４の意味が不明のため確証は無い。Ｃ５は土製の紡錘車で、中央部は少し厚めに作られている。Ｃ６は管状の土錘である。Ｃ７は小さな円形の突起が見られるが、本来の形は明らかではない。胎土や焼成からは中世の焼き物のようにも感じられる。



第102図　その他の遺構（名称は調査時のもの）および包含層出土の石製品〈1〉



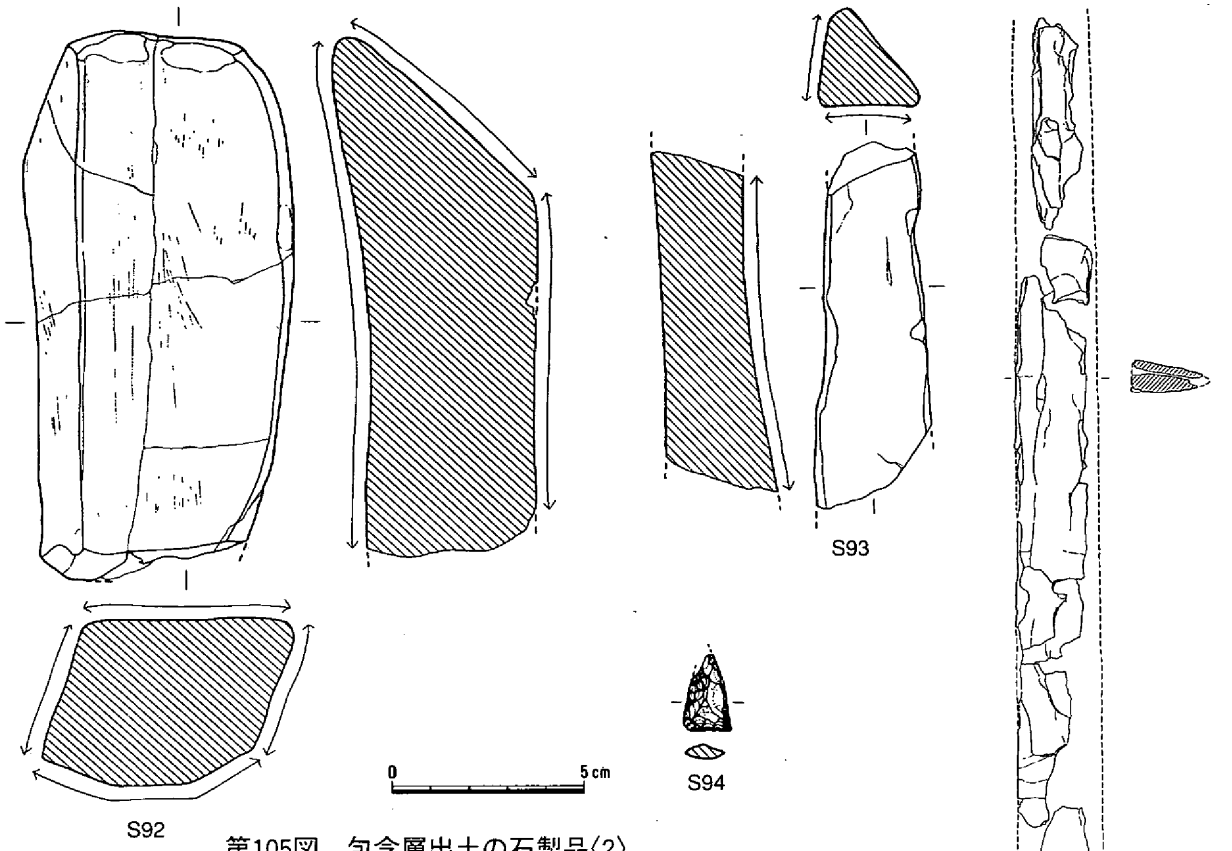
第103図　その他の遺構（名称は調査時のもの）および包含層出土の石製品〈2〉



第104図　包含層出土の石製品〈1〉

第102図と第103図はその他の遺構および包含層出土の石製品であるが、注記された遺構名が全体図に見当たらないので、出土遺構不明品として扱っている。S36は頁岩を用い、円形に周囲を調整していることから、石製円板の未製品と考えられるが、溝02という遺構は無く、DH56が第１次調査の基準線を表しているとすれば、溝Ⅱと呼称されていた溝16がそれに該当する。しかし確証は無い。出土遺物の中には頁岩ないし結晶片岩を調整した剥片が目立ち、これらは磨製石包丁ないし石製円板の未製品と思われるが、どちらの未製品か判断に苦しむものもある。いずれにしてもこの集落において、前期の段階で磨製石包丁や石製円板の製作が行われていたことは間違いないであろう。

S37～S39は斜前期溝から出土したものであるが、この名称の遺構は無いことから、出土場所を特定できない。S37は石錐であるが、全体的に数は少ない。S43は調整が施された剥片であるが、出土場所が住居１号CQ60斜行溝とあることから、おそらく溝12のことではないかと思われる。

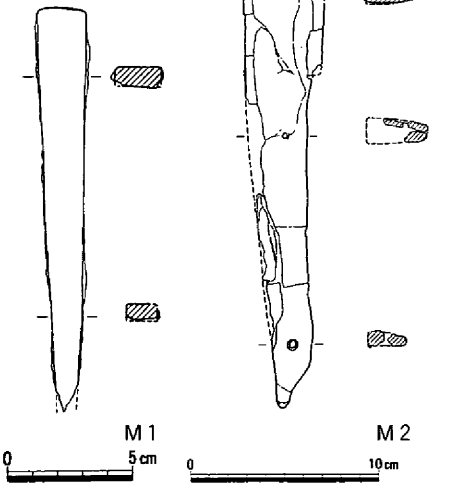


第105図　包含層出土の石製品〈2〉

S56とS63は磨製石包丁、S62は石製円板（紡錘車）の未製品であろう。S65は半月形の外湾刃磨製石包丁で、かなり使い込んでいる痕跡が見て取れる。S73は石製紡錘車としては唯一の製品である。S88は石製円板、S89は磨製石包丁の未製品であろう。S92の砥石はすべての面を使用している。

第106図は包含層出土の鉄製品であるが、出土場所および出土層位は不明である。Ｍ１は鑿状あるいは鏨状鉄器とも考えたが、頭部に打痕が認められないことから、馬鍬の歯ではないかと推定している。Ｍ２は古墳時代のものと考えられる大刀であるが、劣化が著しい。刀身は幅が４～５cmと幅広で、長さは現状で60cmであるが、欠けている先端部を復すると80cm前後になるものと推定される。関は刃関で、長さ17cmの茎には目釘穴が２か所穿たれている。

なお、自然遺物については専門家の鑑定を得ていないため詳細は不明であるが、判明する限りでは桃の核、トチの実、ドングリ、クルミ、ツバキ、シイなどが出土している。



第106図　包含層出土の鉄製品

また、『概報』によると掲載したもの以外に石製品として石錐、太形蛤刃石斧、石帯（丸鞆）、木製品として鋤状木器、細身の鍬、杵の再加工品、槌状大形木器などの出土が伝えられる。

第5章　まとめ

岡山武道館建設当初予定地（以下、調査区と呼ぶ）は約3000㎡あまりの広さで、遺跡の性格を知るため、3次にわたる発掘調査が行われたが、一部平面的な調査を含むものの、大部分はトレンチを主体にした限定的なものであった。したがって、第1次はともかく第2次、第3次の調査は慎重かつ綿密に行われたが、なお遺跡の全体を充分に把握できたとは言い難い一面も見られる。しかし、当時としては数少ない弥生時代前期前半の集落を明らかにしたことに加え、花粉分析等、自然科学との連携によって水田の実態に迫ったことは高く評価されよう。ここでは当時の調査条件を踏まえた上で、明らかにされたことをできるだけ当時の見解に沿ってまとめておく。

地形の変遷

弥生時代前期の地形は、調査区のほぼ中心から北西側および南側と東側が微高地、南東側は低湿地となっており、その境は急傾斜となる。微高地は黄褐色砂質土を基盤とし、標高2.2m前後を測る。低湿地には微高地との境に接して幅約4～8mの平坦な黒灰色粘土層があり、水田として利用されていたことは明らかである。この水田層の標高は1.2m前後を測る。

低湿地はその後徐々に埋没し、弥生時代中期末にはほぼ微高地上面と同じ高さまで埋まったようであるが、水田は断続的に営まれていた。

弥生時代後期には、中期末までに形成された平坦面をさらに微砂がおおい、調査区全域に平坦面が形成された。この面の上には、条里制施行当初の水田層から明治時代の水田層に至るまで、数層の土層がほぼ水平に堆積している。なお、条里制施行当初の水田面はほぼ標高2.5m、中世の水田面は2.8m前後と推定されている。

集落の変遷

弥生時代前期の集落は北西側の微高地上に営まれているが、南側および東側の微高地については存在を確認するのみで、遺構については明確でない。遺構や遺物が集中する北西側の微高地では住居、掘立柱建物（倉庫）、土壙、溝などが確認されており、小規模な集落が短期間営まれていたと思われる。

弥生時代中期の遺構は、低湿地が微高地と同じ高さにまで埋没した後半になると、東西方向の溝が掘削されており、低湿地の新たな利用が見て取れる。

弥生時代後期になると居住域は拡大したものと思われるが、土壙や溝が中心で住居は1軒のみであることから、集落の中心ではなかった可能性が高い。また、調査区の南東側に集中する8基の浅くて不整形な土壙は、形状や規模はそれぞれ異なるものの、内部に多量の炭と焼土を含み、手捏ねの土器を出土することから、祭祀に係わる遺構とされている。

古墳時代の遺構は少なく、溝が2条掘削されているだけであることから、居住域としては利用されなかったのであろう。

古代の遺構も少ないが、大掛りな条里制の整地が見られる。この整地の上層には平安時代から中世、さらに近世に至る遺構遺物が出土するが、極めて少ない。

水田の変遷

当時注目されたのは弥生時代前期の水田であった。その追求は主に第Ⅲトレンチ（TⅢと略す）で

行われた。TⅢ－2では微高地と低湿地の境となる急傾斜面に矢板を打ちこんだ、柵状の痕跡を検出した。この柵状遺構は低湿地の保護を目的としていることから、低湿地側に水田の存在が推定された。微高地と低湿地との関係は、その境に近接して低湿地に堆積した黒灰色粘土層を手がかりに追及されたが、それと同じ層と推定される第24図（TⅢ－3）の土層番号41からは、前期前半の土器が出土したとされる。同じ層から岡山大学農業生物研究所の笠原安夫助教授（当時、故人）によって、枝穂についたままの稲穂、稲の茎と葉、その他水田雑草の果実と葉（タカサブロウ・ヒエ・コゴメガヤツリ・クグガヤツリ・イヌノヒゲ・ホシクサ・コナギなど）を検出し、低湿地の一部に水田が営まれたことを確かなものとした。さらにTⅢ－3（第24図土層番号41）では金沢大学の藤則雄助教授（当時）によって花粉分析が行われたほか、TⅣ－2およびTⅠ－3の黒褐色粘土質シルト層から稲の花粉を検出し、水田であることを追認した。

弥生時代中期の水田は、前期の水田層となる黒灰色粘土層の上部を覆う青灰色シルト層などが考えられており、花粉分析の結果相当量の稲花粉が認められた。さらにTⅠ－3、TⅢ－3、TⅣ－2で発見された杭列は、前期から中期前半の水田に係わる遺構と推定されていることも併せ、低湿地の埋没過程においても水田耕作が断続的に行われていたことを示唆している。

津島遺跡の前期および中期の水田が湿田であったのに対し、後期の水田が乾田であることが明らかにされたことは、大きな成果の一つであったとされる。低湿地は中期末までにほぼ微高地と同じ高さにまで埋没したが、その上に堆積した褐色微砂層中に、乾田下に特徴的に生成される鉄とマンガンの集積層が認められることを、資源科学研究所の松井健博士（当時）によって指摘された。また、岡山大学農学部米田茂男教授（当時、故人）によって、その上の黒味がかった層が上下の層と比較して炭素量が多いことも、下部に見られる特徴的な層との関係において、乾田の耕土である傍証とされた。水田層の時期は後期後半の遺構で切られているが、中期末まで遡る可能性も指摘されている。

古墳時代以後は、奈良時代条里制施行時の整地面を挟んで近代にいたるまでいく層もの酸化鉄層が認められることから、居住域として利用された時もあると思われるが、主には水田であったものと推定される。

参　考　文　献

津島遺跡発掘調査団編『津島遺跡発掘ニュース』No 1　1968年

津島遺跡発掘調査団編『津島遺跡発掘ニュース』No 3　1968年

岡山県教育委員会編『岡山県津島遺跡調査概報』　1970年

近藤義郎「津島遺跡と武道館事件」『岡山史学』第22号　1968年

考古学研究会編「岡山県津島遺跡保存の訴えと遺跡の概要」『考古学研究』58　1968年

和島誠一「津島遺跡の地形的変遷」『考古学研究』60　1969年

間壁忠彦「津島遺跡の弥生時代前期水田の問題」『考古学研究』60　1969年

岡本明郎「弥生時代における乾田利用」『考古学研究』60　1969年

藤則雄「岡山県津島遺跡の花粉学的研究」『考古学研究』62　1969年

松井健「岡山県津島遺跡における弥生時代の灌漑水利用水田の存在について」『考古学研究』64　1970年

観　察　表

表2　土器観察表

掲載番号	地　区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1	CH567	C1下部	瓦質	羽釜	ヨコナデ	ヨコナデ	灰(10Y 6/1)	
2		C2層	瓦	丸瓦		布目痕あり	灰白 (5Y 7/1)	
3		C2層	土師器	椀	高台部ヨコナデ	ナデ?	淡黄 (2.5Y 8/3)	貼付高台
4		C3層	備前焼	擂鉢	横方向ナデ	横方向ナデ、9本1組による おろし目、条数不明	灰黄褐 (10YR 6/2)	
5	CN57	C3層	土師器	椀	高台部ナデ、ヨコナデ	ナデ	灰黄 (2.5Y 7/2)	貼付高台
6		C3層	土師器	椀	高台部剥落して調整不明	ナデ?	橙(5YR 6/6)	内面黒色、貼付高台
7		C3層	土師器	椀	高台部ヨコナデ		にぶい黄橙 (10YR 7/3)	内面黒色、貼付高台
8		C4層	弥生	高杯	脚柱部列点文めぐる、調整不明瞭 沈線3条?	粘土の絞り目	橙(5YR 7/6)	全体に著しく風化している 粘土の接合面あり
9	CL55	C4層	弥生	高杯	脚部透かし孔　推定4方向? 調整不明	ヘラケズリ 調整不明瞭	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
10		C4層	弥生		ナデ	ナデ? 絞り目	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
11		B−SE	須恵器	杯	口縁端部に凹線1条 ヨコナデ	ヨコナデ	灰　(N6/0)	
12		B−E層	弥生	壺	口縁部凹線3条?	ヨコナデ ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
13		B−E層	弥生	壺	口縁部ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	粘土の接合痕
14		B−SE	弥生	甕	口縁部に3条程の凹線?	ヨコナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
15	DC66	E層	弥生	甕	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰 (10YR 4/1)	
16	CS66	E層 Pit内	弥生	壺	ﾍﾗﾐｶﾞｷ層部ヘラ描沈線1条、胴部に段を形成 ヘラ描沈線2条	ナデ?、指押サエ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
17	BK48	E層上半	弥生	壺	ヘラミガキか? 木葉文	ナデ	灰黄褐 (10YR 6/2)	
18	DH58	E層	弥生	壺	ナデ	ナデ 指押サエ	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	粘土の接合痕
19	DC66	E層	弥生	甕	口縁部に刻目、ヨコナデ 頸部に沈線1条、剥落して調整不明瞭	ヨコナデ ナデ、指押サエ	灰黄褐 (10YR 6/2)	粘土の接合痕
20	D区西拡張区	E層	弥生	壺		指押サエ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
21	DC66	E層	弥生	甕	口縁部に刻目	ナデ 指押サエ	灰褐 (7.5YR 5/2)	
22	DI54	E層	弥生	甕	口縁部に刻目、ナデ、指押サエ 頸部沈線3条	ナデ	黄灰 (2.5Y 6/1)	口縁部に黒斑 粘土の接合痕
23		C住居跡	弥生	壺	横方向ヘラミガキ	横方向ヘラミガキ	黄灰 (2.5Y 4/1)	
24		D1	弥生	壺	調整不明瞭	調整不明瞭	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
25		D1	弥生	壺	口縁部下に段あり ヘラミガキ?	ナデ?	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	丹塗痕跡 (丹) 赤(10R 5/6)
26		D1	弥生	壺	ヘラミガキ、段を形成	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	
27		D1	弥生	壺	頸部に沈線4条、ﾍﾗﾐｶﾞｷ、重弧文	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
28		D1	弥生	壺	口縁部ヘラ描沈線2条 頸部ヘラミガキ	ヘラミガキ（斜め方向）	浅黄 (2.5YR 7/3)	
29		D1	弥生	壺	頸部沈線1条 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
30		D1	弥生	壺	ナデ? 頸部沈線1条	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
31		D1	弥生	壺	ヘラミガキ?	調整不明瞭	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
32		D1	弥生	壺	ヘラミガキ?	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
33		D1	弥生	壺	ナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
34		D1	弥生	壺	剥落して調整不明 口縁部下に段、頸部下に段	ナデ? 剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	接合痕 段を形成

観　察　表

掲載番号	地　区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色　調	備　考
35		D 1	弥生	壺	剥落して調整不明	剥落して調整不明	明赤褐 (2.5YR 5/8)	
36		D 1	弥生	壺	沈線２条 ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	黒斑あり
37		D 1	弥生	壺？	沈線２条	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	
38		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ？ 沈線２条	ヘラ状工具によるナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
39		D 1	弥生	甕	沈線２条	ナデ？	橙 (7.5YR 7/6)	黒斑あり
40		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ 沈線２条	剥落して調整不明	橙 (7.5YR 6/6)	
41		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ 沈線２条？	ヘラミガキ	橙 (5YR 7/6)	
42		D 1	弥生	壺	沈線２条 調整不鮮明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
43		D 1	弥生	壺	沈線３条 調整不明	荒れて調整不明	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	
44		D 1	弥生	壺	細い沈線２条 ヘラミガキ、重弧文？わずかに残存	横方向ヘラミガキ	橙 (7.5YR 7/6)	
45		D 1	弥生	壺	沈線３条 調整不明	荒れて調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
46		D 1	弥生	壺	沈線２条、重弧文？わずかに残存 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	
47		D 1	弥生	壺	重弧文？ 剥落して調整不明	剥落して調整不明	浅黄橙 (10YR 8/3)	
48		D 1	弥生	壺	重弧文？わずかに残存 調整不明	剥落して調整不明	浅黄橙 (10YR 8/3)	
49		D 1	弥生	壺	重弧文	ナデ？	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
50		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ 沈線２条	ナデ？	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
51		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ 沈線３条	横方向ヘラミガキ	橙 (7.5YR 6/6)	
52		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ、太い沈線３条 ヘラ描による重弧文	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	
53		D 1	弥生	壺	ヘラ描によるくもの巣文様	ナデ？	橙 (5YR 6/6)	
54		D 1	弥生	大型壺	剥落して調整不明　重弧文・沈線 刻目	剥落して調整不明 ナデ？	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	接合痕
55		D 1	弥生	壺	ヘラ描による重弧文？	ナデ	橙 (5YR 6/6)	粘土の接合痕跡？
56		D1	弥生	壺	ヘラミガキ 重弧文？	ナデ？	橙 (5YR 7/6)	
57		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ、沈線３条、重弧文	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
58		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ 重弧文	ナデ？	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	59，60と同一固体？
59		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ後重弧文	横方向ヘラミガキ	橙 (7.5YR 6/6)	58，60と同一個体？
60		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ ヘラ描沈線による重弧文	ナデ？	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	58，59と同一個体？ 粘土の接合痕跡
61		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ（横方向？）後重弧文	ヘラミガキ？	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
62		D 1	弥生	壺	剥落して調整不鮮明 わずかにヘラ描沈線あり、木葉文	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
63		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ？ 木葉文わずかに残る	調整不明	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	
64		D 1	弥生	壺	細いヘラ描による木葉文	剥落して調整不明	黒 (10YR 1.7/1)	
65		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ、木葉文 沈線２条	ヘラミガキ	橙 (5YR 6/6)	70，71，74，76，77、81 と同一個体か？黒斑あり
66		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ 細いヘラ描による木葉文	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
67		D 1	弥生	壺	沈線３条 ヘラ描による木葉文	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
68		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ、沈線２条 細いヘラ描による木葉文	ヘラミガキ（横方向）	橙 (7.5YR 6/6)	
69		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ、太い沈線３条 細いヘラ描による木葉文	ヘラミガキ（横方向）	黒褐 (10YR 3/1)	
70		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ、沈線３条 細いヘラ描による木葉文	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	65，71，74，76，77，81 と同一個体か？黒斑あり
71		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ ヘラ描沈線による木葉文	ヘラミガキ	オリーブ黒 (5Y 3/1)	65，70，74，76，77，81 と同一個体か？
72		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ、沈線２条 木葉文？	調整不明	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	
73		D 1	弥生	壺	太い沈線、木葉文	ヘラミガキ（横方向）	にぶい褐 (7.5YR 5/3)	
74		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ 木葉文	ヘラミガキ	灰黄 (2.5Y 6/2)	65，70，71，76，77，81 と同一個体？黒斑あり

掲載番号	地　区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
75		D 1	弥生	壺	太い沈線１条 ヘラミガキ後細いヘラ描による木葉文	ヘラミガキ（横方向）	黒 (5YR 1.7/1)	
76		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ後細いヘラ描木葉文	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	65，70，71，74，77，81 と同一個体か？黒斑あり
77		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ後木葉文	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	65，70，71，74，76，81 と同一個体？黒斑あり
78		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ後木葉文	横方向ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	
79		D 1	弥生	壺	細いヘラ描による木葉文	ヘラミガキ（横方向）	褐灰 (10YR 5/1)	
80		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ後 細いヘラ描による木葉文	ナデ後ヘラミガキ	暗灰（N 3/　）	黒斑あり
81		D 1	弥生	壺	ごく細いヘラ描による木葉文	ナデ？	暗灰（N 3/　）	65，70，71，74，76，77 と同一個体か？
82		D 1	弥生	壺	細いヘラ描による木葉文	荒れて調整不明	にぶい黄褐 (10YR 5/4)	
83		D 1	弥生	壺	ミガキ？ 削り出し突帯、刻目	縦方向にナデ？	浅黄橙 (10YR 8/4)	
84		D 1	弥生	壺	削り出し突帯 ナデ？	ナデ	灰白 (2.5Y 8/2)	
85		D 1	弥生	壺	ヘラミガキ 粘土の貼付、刻目	ナデ？ 調整不鮮明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	粘土の接合痕
86		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目 剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙 (5YR 6/6)	
87		D 1	弥生	甕	口縁部にわずかに刻目	剥落して調整不明	黒褐 (10YR 3/1)	
88		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目 粗いハケメ	粗いハケメ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
89		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目	剥落して不明	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	
90		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目 ナデ？押サエ	ナデ?	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
91		D 1	弥生	甕	口縁部にわずかに刻目 沈線１条、調整不明瞭	調整不明瞭	浅黄橙 (10YR 8/3)	スス？
92		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目	ナデ?	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
93		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目	ナデ?	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
94		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目 細い沈線	ナデ？	明赤褐 (5YR 5/6)	
95		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	スス？
96		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目 剥落して調整不鮮明	ナデ?	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	黒斑あり
97		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目	ナデ？	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	ススあり
98		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目 ハケメ？	ナデ	橙 (5 Y R 6/6)～ 灰黄褐(10YR 6/2)	
99		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目 調整不明瞭	調整不明瞭	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	ススあり
100		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目 ハケメ（斜め方向）	ハケメ、ナデ	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	
101		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目 ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
102		D 1	弥生	甕	口縁部ナデ?、指押サエ 剥落して調整不明	ナデ?	明黄褐 (10YR 7/4)	
103		D 1	弥生	甕	剥落して調整不明	ナデ	橙 (2.5YR 7/6)	
104		D 1	弥生	甕	口縁部にわずかに刻目 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	粘土の接合痕あり
105		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目 ナデ？	ヘラミガキ？	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	粘土の接合痕 ススあり
106		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
107		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目 剥落して調整不明	剥落して調整不明	黒褐 (7.5YR 3/1)	
108		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目、ヨコナデ ハケメ僅かに残る、調整不鮮明	ナデ	にぶい褐 (7.5YR 5/3)	段を形成
109		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目 指押サエ、調整不明	ナデ?	橙 (7.5YR 7/4)	粘土の接合痕、 段を形成、スス？
110		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目 ハケメ	剥落して調整不明	黒褐 (7.5YR 3/1)	粘土の接合痕あり
111		D 1	弥生	甕	口縁部に刻目、沈線１条 調整不鮮明	ナデ?	にぶい橙 (10YR 7/4)	
112		D 1	弥生	甕	体部刻目 ナデ?	ナデ?	橙 (5YR 6/6)	
113		D 1	弥生	甕	ナデ?	ナデ?	浅黄橙 (10YR 8/4)	粘土の接合痕
114		D 1	弥生	鉢	口縁部ナデ?、指押サエ 剥落して調整不明	横方向ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	

観　察　表

掲載番号	地　区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
115		D 1	弥生	鉢	指押サエ、ナデ？	指押サエ、ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	ススあり
116		D 1	弥生		調整不明瞭	調整不明瞭	にぶい橙 (10YR 7/4)	
117		D 1	弥生		底部ナデ？わずかにハケメ？ 押サエ	ナデ 工具の当たり痕	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	底部径歪んでいる 黒斑あり
118		D 1	弥生		剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	接合痕
119		D 1	弥生		剥落して調整不明瞭 ヘラミガキ、わずかにハケメ	剥落して調整不明	橙 (5YR 7/6)	
120		D 1	弥生		底部ヘラミガキ？、ナデ	ナデ? 剥落して調整不明瞭	橙 (7.5YR 6/4)	
121		D 1	弥生		底部ナデ?、指押サエ 剥落して調整不明	ナデ? 剥落して調整不明	橙 (5YR 7/6)	底部径歪んでいる
122		D 1	弥生		底部縦方向ヘラミガキわずかに残る 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	粘土の接合痕
123		D 1	弥生		底部指押サエ、荒れて調整不明	荒れて調整不明	橙 (5YR 6/6)	
124		D 1	弥生		底部ヘラ状工具によるナデ 工具による当たり痕	ナデ?	にぶい橙 (5YR 6/4)	
125		D 1	弥生		ナデ？	剥落して調整不明	浅黄 (2.5YR 7/3)	粘土の接合痕
126		D 1	弥生		底部ヘラ状工具によるナデ	指押サエ 剥落して調整不明瞭	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	ススあり
127		D 1	弥生		底部ハケメ、ナデ	ナデ？ 剥落して調整不明	橙 (2.5YR 6/6)	
128		D 1	弥生		底部ヘラ状工具によるナデ？ ミガキ？、工具による当たり痕	指押サエ、ヘラ状工具による ナデ？工具による当たり痕	橙 (5YR 6/6)	底部に強いナデ
129		D 1	弥生		底部ﾍﾗﾐｶﾞｷ？工具よる当たり痕	ﾍﾗﾐｶﾞｷ？ナデ?指押ｻｴ 剥落して調整不明瞭	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
130		D 1	弥生		底部指押サエ、ナデ 剥落して調整不明	ナデ? 剥落して調整不明	浅黄橙 (10YR 8/3)	
131		P 6	弥生	壺	頸部に段を形成 ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR 6/6)	
132		P 6	弥生	壺	頸部沈線、粘土の接合により段を形成 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
133		P 6	弥生	壺	頸部粘土の接合、段を形成 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	
134		P 6	弥生	壺	口縁部ヨコナデ	剥落して調整不明 剥落して調整不明	浅黄橙 (10YR 8/3)	
135		P 6	弥生	壺？	口縁部指押サエ、ナデ?	ナデ？	浅黄橙 (10YR 8/3)	
136		P 6	弥生	壺	頸部粘土の接合、段を形成 剥落して調整不明	剥落して調整不明	灰白 (2.5Y 8/2)	
137		P 6	弥生	壺	段を形成 ナデ？	ヘラミガキ	にぶい褐 (7.5YR 5/3)	
138		P 6	弥生	壺	貼付突帯 ナデ	剥落して調整不明	橙 (2.5YR 6/6)	粘土の接合痕
139		P 6	弥生	壺	段を形成 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
140		P 6	弥生	壺	胴部に貼付突帯、わずかに刻目 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
141		P 6	弥生	壺	段を形成 剥落して調整不明	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	粘土の接合痕？
142		P 6	弥生	壺	胴部に段を形成 ナデ	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	粘土の接合痕
143		P 6	弥生	壺	胴部に沈線１条 ヘラミガキ？	ヘラミガキ？	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	
144		P 6	弥生	壺	沈線１条 ヘラミガキ？	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
145		P 6	弥生	壺	沈線１条 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
146		P 6	弥生	壺	横方向ヘラミガキ 沈線１条	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
147		P 6	弥生	壺	胴部に沈線１条 ヘラミガキ	ヘラミガキ？	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
148		P 6	弥生	壺	ヘラミガキ 胴部に沈線１条	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	黒斑あり
149		P 6	弥生	壺	沈線１条 ナデ？	ナデ？	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	粘土の接合痕
150		P 6	弥生	壺	ヘラミガキ 沈線２条	ナデ？ 剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
151		P 6	弥生	壺	胴部に沈線１条 ヘラミガキ	剥落して調整不明	にぶい橙 (7 .5YR 6/4)	
152		P 6	弥生	壺	沈線１条 剥落して調整不明	ナデ？ 剥落して調整不明	橙 (5YR 6/6)	
153		P 6	弥生	壺	ヘラミガキ？ 沈線２条	ナデ	灰黄褐 (10YR 5/2)	ススｰ？
154		P 6	弥生	壺	ヘラミガキ？ 沈線２条	剥落して調整不明 ナデ？	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	

掲載番号	地　区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
155		P 6	弥生	壺	沈線２条 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	
156		P 6	弥生	壺	ヘラミガキ、ヘラ描沈線文 沈線１条、段を形成	ナデ？	黒褐 (7.5YR 3/1)	
157		P 6	弥生	壺	沈線３条 ナデ？	ナデ？ 剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	上下逆かも？
158		P 6	弥生	壺	沈線３条 ヘラミガキ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
159		P 6	弥生	壺	ヘラ描沈線、ヘラミガキ 剥落して調整不明	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
160		P 6	弥生	壺	ヘラ描沈線文 ヘラミガキ、剥落して調整不明	ナデ 剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
161		P 6	弥生	壺	ヘラミガキ後 ヘラ描沈線	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
162		P 6	弥生	壺	ヘラミガキ、沈線２条 ヘラ描沈線文	ヘラミガキ？	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
163		P 6	弥生	壺	斜め方向ヘラミガキ 縦方向ヘラ描沈線文２条（山形文？）	ヘラミガキ？ ナデ？	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
164		P 6	弥生	壺	ヘラミガキ ヘラ描文	剥落して調整不明	灰黄褐 (10YR 6/2)	
165		P 6	弥生	壺	胴部沈線１条、ヘラ描沈線文 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	黒斑あり
166		P 6	弥生	壺	ヘラ描沈線 ヘラミガキ	ヘラミガキ？	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
167		P 6	弥生	深鉢	貼付刻目突帯 剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙(7.5YR 6/6)	粘土の接合痕
168		P 6	弥生	甕	口縁部ヘラミガキ	ヘラミガキ？	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	口縁部歪んでいる
169		P 6	弥生	甕	口縁部にわずかに刻目 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
170		P 6	弥生	甕	口縁部ナデ？ ヘラミガキ？	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
171		P 6	弥生	甕	口縁部ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
172		P 6	弥生	甕	ナデ、指押サエ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	スス？ 丹塗痕跡
173		P 6	弥生	甕	口縁部ナデ 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
174		P 6 (内下層)	弥生	甕	口縁部に一部刻目、胴部に 沈線２条、ナデ	指押サエ、ナデ	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	
175		P 6	弥生	甕	口縁部ナデ、頸部指押サエ ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	ススあり
176		P 6	弥生	甕	口縁部ヘラミガキ 沈線１条	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
177		P 6	弥生	甕	口縁部ナデ、体部に沈線１条 ヘラミガキ（横方向）	横方向ヘラミガキ	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	
178		P 6	弥生	甕	体部に沈線１条 ヘラミガキ	ナデ？ 剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	189と同一個体？
179		P 6	弥生	甕	口縁部に刻目 ナデ	ナデ？	橙(7.5YR 6/6)	
180		P 6	弥生	甕	口縁部に刻目わずかに残存 ヘラミガキ	剥落して調整不明	橙(7.5YR 6/6)	
181		P 6	弥生	甕	口縁部に刻目	剥落して調整不明	橙(7.5YR 6/6)	
182		P 6	弥生	甕	口縁部に刻目	ナデ？	にぶい黄橙 10YR 6/3)	184と同一個体？
183		P 6	弥生	甕	口縁部刻目	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
184		P 6	弥生	甕	口縁部に刻目	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	接合痕
185		P 6	弥生	甕	口縁部に刻目、頸部粘土の接合により 段を形成、ヘラミガキ？	ナデ？	褐灰 (10YR 4/1)	
186		P 6	弥生	甕	段に刻目 ナデ？	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	
187		P 6	弥生	蓋？	ヘラミガキ	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
188		P 6	弥生	蓋	剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
189		P 6	弥生	鉢	頸部沈線１条 ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	178と同一個体？
190		P 6	弥生		底部斜め方向ヘラミガキ	剥落して調整不明	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	
191		P 6	弥生		底部ヘラミガキ？ ナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	内面に黒斑あり
192		P 6	弥生		剥落して調整不明	ナデ？	橙(5YR 6/6)	
193		P 6	弥生		底部指押サエ、調整不明	横方向、縦方向ナデ	橙(5YR 7/6)	
194		P 6 (上層)	弥生		底部ナデ	剥落して調整不明 ナデ？	灰黄褐 (10YR 6/2)	底部に穿孔？

観　察　表

掲載番号	地　区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色　調	備　考
195	DI55	A－3下層 (第10土壙)	弥生	壺	頸部に段を形成 剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙(5YR 6/6)	
196	DJ55	B-7上層 (第10土壙)	弥生	壺	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
197	DH55	A-2上層 (第10土壙)	弥生	壺	剥落して調整不明	調整不明	橙(7.5YR 6/6)	
198	DJ55	A 2 (第10土壙)	弥生	壺	剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	粘土の接合面
199	DI55	(第10土壙)	弥生	壺	頸部に段を形成 剥落して調整不明	剥落して調整不明	明赤褐 (5YR 5/6)	
200	DI55	(第10土壙)	弥生	壺	剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	
201		土壙1 (第10土壙)	弥生	壺	ナデ？ 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
202		土壙1 A3 (第10土壙)	弥生	壺	口縁部にヘラミガキ 段を形成	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	丹塗り、赤色顔料　口縁～外面にかけて橙(2.5YR 6/6)
203	DI55	(第10土壙)	弥生	壺	剥落して調整不明	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
204		土壙1 (第10土壙)	弥生	壺	口縁部にヘラミガキ 頸部段を形成	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
205		土壙1 A3 (第10土壙)	弥生	壺	口縁部にヨコナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
206		土壙1 A3 (第10土壙)	弥生	壺	ヘラミガキ 沈線4条	ナデ？ 剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
207		土壙1 B-7上層 (第10土壙)	弥生	壺	沈線わずかに3条残存 剥落して調整不明	剥落して調整不明	浅黄橙 (10YR 8/4)	
208		土壙1 B-4上層 (第10土壙)	弥生	壺	ヘラ描沈線文 ヘラミガキ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	
209		土壙1 (第10土壙)	弥生	壺	沈線2条 ヘラミガキ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
210		土壙1 (第10土壙)	弥生	壺	太い沈線2条	ナデ	灰黄褐 (10YR 6/2)	
211		土壙1 (第10土壙)	弥生	壺	斜め方向ヘラ描沈線 剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙(5YR 6/6)	
212		土壙1 (第10土壙)	弥生	壺	沈線1条 ヘラミガキ	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
213		土壙1 (第10土壙)	弥生	壺	横方向沈線2条 斜め方向沈線文、ヘラミガキ？	ヘラミガキ？	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
214		土壙1 (第10土壙)	弥生	壺	沈線2条 ナデ	ナデ	灰黄褐 (10YR 6/2)	ススあり
215		土壙1 (第10土壙)	弥生	壺	横方向沈線3条 ナデ？	ナデ？	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
216		土壙1 (第10土壙)	弥生	壺	ヘラミガキ 木葉文	ヘラミガキ？	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
217	DJ55	B-7上層 (第10土壙)	弥生	鉢	ナデ？	ヘラミガキ？	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
218	DJ55	(第10土壙)	弥生	蓋	剥落して調整不明	剥落して調整不明	褐灰 (10YR 4/1)	
219	DJ55	(第10土壙)	弥生	蓋	斜め方向ヘラミガキ ナデ	ヘラミガキ	橙(5YR 6/6)	口縁部にスス
220		土壙1 (第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目、指押サエ、ナデ 剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙(5YR 7/6)	
221	DI55	A 4 (第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目？ 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
222	DI55	A 4 (第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目 ヘラミガキ？	ヘラミガキ	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	
223		土壙1 (第10土壙)	弥生	甕	頸部沈線1条、段を形成 斜め方向ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	黒斑あり
224		土壙1 (第10土壙)	弥生	甕	頸部太い沈線1条、段を形成 斜め？ヘラミガキ	横方向ヘラミガキ	灰黄褐 (10YR 6/2)	
225		土壙1 (第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	口縁部にスス？
226		土壙1 B-5下層 (第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目 ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
227	DH55	C-11上層 (第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目 頸部に段を形成、剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
228	DH55	(第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目 ハケメ	ナデ	暗灰黄 (2.5Y 5/2)	
229	DH55	(第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目 段を形成、ナデ?	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
230		土壙1 A3 (第10土壙)	弥生	甕	口縁部にわずかに刻目あり 剥落して調整不明	剥落して調整不明	灰黄褐 (10YR 6/2)	
231		土壙1 B-5下層 (第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目 頸部に段を形成	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	口縁部にスス？
232	DI55	B-5下層 (第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目、頸部に段を形成 指押サエ、縦方向ハケメわずか	ナデ？	灰黄褐 (10YR 6/2)	全体に著しく風化している
233	DJ55	(第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目？ ナデ？	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
234		土壙1 (第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目 ハケメ、ナデ	調整不明	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	

掲載番号	地区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
235	DH55	(第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目 剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙(5YR 6/6)	
236		土壙1 土壙015(第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目 ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
237	DJ55	D17 (第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目 頸部にヘラ描沈線2条、列点文	ナデ?	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
238		土壙1 (第10土壙)	弥生	甕	口縁部に刻目、頸部太い沈線2条 ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	
239	DJ55	B-7上層 (第10土壙)	弥生	甕	ヘラ描沈線2条 ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR 5/3)	
240		第10土壙	弥生	甕	ヘラ描沈線2条 ナデ	ナデ	黄灰 (2.5Y 6/1)	
241		第10土壙	弥生	甕	沈線2条 ナデ?	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
242		土壙1 (第10土壙)	弥生		底部剥落して調整不明	ナデ	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	内面黒い 底部黒斑あり
243		土壙1 (第10土壙)	弥生		底部ナデ 指押サエ	ナデ	橙(5YR 6/6)	
244		土壙1 D17	弥生		底部ヘラミガキ	ヘラミガキ	浅黄 (2.5Y 7/3)	
245		土壙1 (第10土壙)	弥生	壺	ヘラミガキ?、ナデ	ヘラミガキ?ナデ	橙(5YR 6/6) ~にぶい黄橙(10YR 7/3)	
246		土壙1 (第10土壙)	弥生		剥落して調整不明	ナデ	橙(7.5YR 6/6)	
247		土壙1 (第10土壙)	弥生		底部ヘラミガキ 工具による当たり痕跡	剥落して調整不明 ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
248		土壙1 (第10土壙)	弥生		底部ナデ	ナデ	にぶい褐 (7.5YR 6/3)	
249		土壙1 (第10土壙)	弥生		底部ナデ	ナデ?	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	黒斑あり 粘土の接合痕
250		土壙1 A-3下層	弥生		底部ナデ 指押サエ	ナデ 剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
251		土壙1 (第10土壙)	弥生		底部ヘラミガキ	剥落して調整不明	橙(5YR 6/6)	
252		土壙1 (第10土壙)	弥生		剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	黒斑あり
253		D2	弥生	小型壺	頸部粘土の接合段を形成、体部沈線1条、 段を形成、ヘラミガキ後ヘラ描山形文	指押サエ 剥落して調整不明瞭	橙(5YR 6/4)	
254		D2	弥生	壺	頸部段を形成 剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙(5YR 6/6)	
255		D2	弥生	壺	ヘラミガキ、頸部粘土の接合により 段を形成、剥落して調整不明瞭	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
256		D2	弥生	壺	ナデ?頸部沈線1条 剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙(7.5YR 7/6)	
257		D2	弥生	壺	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	口縁部歪みあり
258		D2	弥生	壺	剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙(5YR 7/6)	粘土の接合痕
259		D2	弥生	壺	口縁部にヘラミガキ? 剥落して調整不明瞭	剥落して調整不明瞭	橙(5YR 7/6)	
260		D2	弥生	壺	ヘラミガキ?	ヘラミガキ?	橙(7.5YR 7/6)	
261		D2	弥生	壺	粘土の接合痕、頸部段を形成 剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙(7.5YR 7/6)	
262		D2	弥生	壺	口唇部に丹塗? ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	丹塗?
263		D2	弥生	壺			にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
264		D2	弥生	壺	ヘラミガキ?	ヘラミガキ?	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	粘土の接合痕 黒斑あり(内面)
265		D2	弥生	壺	口唇部に丹塗?指押サエ、ナデ? 粘土の接合により段を形成		にぶい橙 (7.5YR 7/4)	丹塗? (丹)橙(2.5YR 6/8)
266		D2	弥生	壺	剥落して調整不明 突帯	剥落して調整不明	明赤褐 (2.5YR 5/8)	
267		D2	弥生	壺	粘土の接合により段を形成 ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
268		D2	弥生	壺	ヘラミガキ 段を形成	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
269		D2	弥生	大型壺	指押ｻｴ、ﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ?胴部ﾍﾗよる 太い沈線2条、調整不鮮明	ナデ? 調整不鮮明	浅黄橙 (10YR 8/3)	粘土の貼付接合
270		D2	弥生	壺	ハケメ後ヘラミガキ 沈線1条	剥落して調整不鮮明	橙(5YR 6/6)	
271		D2	弥生	壺	段を形成 ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
272		D2	弥生	壺	体部剥落して調整不明瞭、ヘラミガキ 櫛刻文5条、斜め方向、櫛刻文3~4条 斜め方向	指押サエ、ﾅﾃﾞ 剥落して不明瞭	にぶい橙(5YR6/4) ~にぶい黄橙(10YR7/3)	粘土の接合痕
273		D2	弥生	壺	沈線1条 ヘラミガキ	剥落して調整不明	橙(5YR 6/6)	
274		D2	弥生	壺	ヘラミガキ 沈線1条	ハケメ後ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	

観　察　表

掲載番号	地　区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
275		D 2	弥生	壺	ハケメ？ 段を形成	ナデ？ 調整不明瞭	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
276		D 2	弥生	壺	沈線２条 剥落して調整不明	剥落して調整不明	浅黄橙 (10YR 8/3)	接合痕
277		D 2	弥生	壺	ヘラミガキ、段を形成 ヘラ描文	ナデ 調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
278		D 2	弥生	壺	段を形成 剥落して調整不明	剥落して調整不明	浅黄 (2.5Y 7/3)	
279		D 2	弥生	壺	ヘラミガキ 段を形成、ヘラ描文	ナデ？ 指押サエ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
280		D 2	弥生	壺	細い沈線による重弧文 ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	
281		D 2	弥生	壺	沈線２～３条 ヘラミガキ	調整不明瞭	橙(5YR 6/6)	
282		D 2	弥生	壺	ヘラミガキ ヘラ描沈線による木葉文	ヘラミガキ	黄灰(2.5Y 5/1)	
283		D 2	松菊里型土器	壺	口縁部ナデ 剥落して調整不明、指ナデ	指ナデ、指押サエ 剥落して調整不明	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	黒斑あり
284		D 2	弥生	甕	体部～底部ナデ？	ナデ？	橙(5YR 6/6)	黒斑あり
285		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目、底部ﾅﾃﾞ 剥落して調整不明		にぶい橙(7.5YR7/4) ～浅黄橙(7.5YR8/4)	黒斑あり
286		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目 細かなﾊｹﾒ（僅）、剥落して調整不明	剥落して調整不明	灰褐 (7.5YR 5/2)	
287		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目、突帯部に刻目	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
288		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	スス？
289		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目、体部段を形成し刻目 ハケメ後ナデ、	ナデ？	橙(5YR 6/6)	
290		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目 ハケメ後ナデ	剥落して調整不鮮明	橙(7.5YR 6/6)	
291		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目 頸部ヘラ描沈線、ナデ？	ヘラミガキ？	明褐 (7.5YR 5/6)	粘土の接合痕
292		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目 胴部ヘラ描沈線1条、縦方向ハケメ	剥落して調整不明	橙(5YR 6/6)	
293		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目	ナデ？	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	
294		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
295		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目 ナデ？	ナデ？	褐(7.5YR 4/4)	
296		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目、ハケメ 頸部工具で押さえて沈線１条形成	ナデ	橙(5YR 6/6)	
297		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目、体部沈線１条、段を形成 指押サエ、剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙(5YR 6/6)	黒斑あり
298		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目 胴部沈線２条、剥落して調整不明	剥落して調整不明 指頭圧痕	にぶい橙 (5YR 6/4)	
299		D 2	弥生	甕	ヘラ描沈線２条 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
300		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目 胴部沈線２条、剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙(5YR 6/6)	
301		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目 頸部沈線２条、縦方向ハケメ	剥落して調整不明	にぶい黄褐 (10YR 4/3)	
302		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目 指押サエ、頸部段を形成	ナデ	浅黄橙 (10YR 8/4)	
303		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目、体部に刻目 段を形成、剥落して調整不明	ナデ？	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	粘土の接合痕？
304		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目 段を形成、剥落して調整不明	剥落して調整不鮮明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
305		D 2	弥生	甕	段を形成 剥落して調整不明	剥落して調整不明	浅黄橙 (10YR 8/3)	
306		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目、ハケメ 体部段を形成	剥落して調整不明	橙(5YR 7/6)	307と同一個体
307		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目、ハケメ 指押サエ、粘土の接合により段を形成	剥落して調整不明瞭	橙(5YR 7/6)	306と同一個体 ススあり
308		D 2	弥生	甕	口縁部に刻目、体部沈線１条 段を形成、乾燥が進んでない段階でﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	ナデ？	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
309		D 2	弥生	甕	口縁部ヨコナデ 胴部沈線１条、ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
310		D 2	弥生	甕	刻目 ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(5YR 6/6)	
311		D 2	弥生	深鉢	刻目 ヘラミガキ	ナデ？	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	粘土の接合痕？
312		D 2	弥生	蓋	ナデ、指押サエ ヘラミガキ	ヘラミガキ	褐灰 (10YR 4/1)	
313		D 2	弥生	蓋	ヘラミガキ、剥落して調整不明瞭	縦方向ヘラミガキ 横方向ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	径歪みあり
314		D 2	弥生		底部ヘラミガキ ナデ	ナデ？	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	

掲載番号	地区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
315		D 2	弥生		ヘラミガキ？ 底ーヘラミガキ	ヘラミガキ？	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
316		D 2	弥生		ナデ 剥落して調整不明	剥落して調整不明 ナデ？	橙(5YR 6/6)	底部に焼成後穿孔 底部にススあり
317		P 4	弥生	壺	口縁部に一部補修痕？		にぶい黄橙 (10YR 7/2)	口縁部に歪みがある
318	A-NW-(4P)		弥生	壺	工具痕 全体に剥落している	全体に剥落している	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	
319	A-NW4	P 4	弥生	壺	口縁部に凹線１条、工具の痕跡穿孔 2個横並び確認、横方向ぶ？、指押サエ	ヘラミガキ	黄灰(2.5Y 4/1) ～灰白(10YR7/1)	粘土の接合痕
320	A-NW-(4P)		弥生	壺	沈線１条、縦方向ハケメ	指押サエ後ナデ	灰黄褐 (10YR 6/2)	外面黒斑、粘土の接合痕
321	A-NWP4		弥生	壺	刻目 剥落して調整不明	指押サエ後ナデ	褐灰 (10YR 4/1)	粘土の接合痕
322	A-NW4	P 4	弥生	壺	指押サエ、ナデ	ミガキ？ ナデ	橙(5YR 6/6)	
323		P 4 83Ⅲ (49Ⅲ)	松菊里型土器	壺	頸部にわずかに沈線 ナデ、表面剥落して調整不明	指押サエ、ナデ 剥落して調整不明	灰白(10YR 8/2) ～橙(2.5YR 7/6)	歪みも激しい、　黒斑あり
324	A-NW-4P		弥生	壺	沈線２条残存、指押サエ後ナデ 斜め方向に線刻文あり	指押サエ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	外面に黒斑
325		P 4	弥生	壺	ヘラ描沈線（木葉文？） 全体に剥落している	ナデ 指押サエ	橙(7.5YR 6/6)	粘土の接合痕
326	A-NW-(4P)		弥生	甕	口縁部に刻目	指押サエ	灰白 (10YR 8/2)	外面スス付着
327	A-NW-4	P 4第2層	弥生	甕	口縁部に刻目、工具痕、指押サエ 縦方向ハケメ(10本程/1cm)	指押サエ後ナデ	灰黄褐 (10YR 6/2)	
328	A-NW-4P		弥生	甕	口縁部に刻目 全体に剥落している	指押サエ、ナデ 全体に剥落している	灰黄褐 (10YR 6/2)	
329	A-NW-(4P)		弥生	壺	口縁部に刻目、丁寧なナデ 沈線３条、工具痕が残存、指押サエ	刷痕か草の種？ 指押サエ	浅黄橙 (10YR 8/3)	５４２と同一個体か?
330	A-NW-4P		弥生	甕	口縁部に刻目 指押サエ、頸部に沈線３条	指押サエ、ナデ	灰白 (10YR 8/2)	
331	A-NW-4P		弥生	甕	沈線１条のみ残存 ナデの後ミガキ？	指押サエ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	黒斑あり
332	A-NW-(4P)		弥生	甕	沈線１条のみ残存 工具による横・斜め方向ナデ	指押サエの後ナデ (斜め・横方向)	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	外面に黒斑及びスス付着？
333	A-NW4	P4	弥生	甕	口縁部に刻目 沈線３条	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	
334	A-NW-4P		弥生	甕	沈線２条残存 縦方向ナデ、草の種？	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	
335	A-NW-(4P)		弥生	甕	沈線３条 ナデの後ミガキ？	ナデ	黄灰 (2.5Y 6/1)	
336	A-NW-4P		弥生	深鉢	突帯に刻目 工具による横方向ナデ	指押サエ後ナデ	灰黄褐 (10YR 6/2)	外面にスス付着 粘土の接合痕
337	A-NW-P4		弥生	深鉢	貼付突帯に刻目？ 口唇部に凹線１条入る	ナデ？	灰白 (10YR 7/1)	粘土の接合痕
338	A-NW- 1	(P 1)	弥生	壺	ヘラミガキ？	ナデ	にぶい褐 (7.5YR 6/3)	
339	A-NW-	(P 1)	弥生	壺	頸部に工具痕あり 横方向ヘラミガキ？	指押サエ、ナデ	灰白 (10YR 8/2)	
340	A-NW- 1	(P 1)	弥生	甕	口縁部に刻目 横方向ヘラミガキ？又はナデ？	指押サエ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
341	O H55？		弥生	壺	ヘラ描沈線による木葉文	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
342	A-NW- 1	(P 1)	弥生	甕	口縁部に刻目、剥落して調整不明瞭	剥落して調整不明瞭	橙(7.5YR 7/6)	
343	A-NW- 1	(P 1)	弥生	甕	口縁部に刻目 頸部に沈線２条	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
344	A-NW-	(P 1)	弥生	甕	口縁部に刻目 頸部沈線１条、ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	粘土の接合痕 外面にスス付着
345	A-NW- 1	(P 1)	弥生	甕	口縁部に刻目？体部に沈線２条 ヨコナデ	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
346	A-NW- 1	(P 1)	弥生	甕	口縁部に刻目 頸部に沈線２条	指押サエ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	
347	A-NW-	(P 1)	弥生	甕	口縁部に刻目、頸部に沈線３条？ 剥落して調整不明瞭	指押サエ ナデ	灰褐 (7.5YR 5/2)	内面に黒斑
348	A-NW- 1	(P 1)	弥生	甕	沈線２条 調整不明瞭	指押サエ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
349	A-NW- 1	(P 1)	弥生		工具痕、ハケメ（横方向）、ナデ	工具の当たり痕あり ナデか？	にぶい橙 (5YR 6/4)	
350	A-NW- 1	(P 1)	弥生		ヘラミガキか？（少し光沢がある 方向不明）　工具の当たり痕	斜め方向ナデ 指押サエ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	底部に穿孔？ 外面少し剥落している
351		第11土壙B 土壙Ⅱ	製塩	台付鉢	タタキ目わずかに残存 指押サエ、ナデ	ナデ？	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
352		第11土壙B 土壙Ⅱ	弥生	壺	口縁部ナデ？	ナデ？	浅黄橙 (10YR 8/4)	粘土の接合面
353	D I 54	第11土壙D	弥生	壺	縦方向ヘラミガキ 頸部にヘラ描沈線３条	横方向ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
354		土壙Ⅱ 第11土壙	弥生	壺？	沈線２条 ヘラミガキ？	ヘラミガキ	灰黄褐 (10YR 6/2)	粘土の接合面

観　察　表

掲載番号	地　区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
355	D I 55	第11土壙B	弥生	壺	ヘラ描沈線２条 ヘラミガキ？	ナデ？	灰黄褐 (10YR 6/2)	
356		第11土壙B 土壙Ⅱ	弥生	壺	沈線２条 剥落して調整不明	ヘラミガキ	浅黄橙 (10YR 8/3)	
357	D I 54	第11土壙B	弥生	甕	口縁部に刻目、頸部にヘラ描沈線３条、 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	
358		P 2	弥生	壺	ナデ？ 剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙（7.5YR 7/6)	
359		P 2	弥生	壺	頸部横方向ﾍﾗﾐｶﾞｷ? ﾍﾗ描沈線２条、横方向ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ヘラミガキ？	褐（7.5YR 4/6)	
360		P 2	弥生	壺	頸部に沈線１条、ヘラミガキ？ 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい橙 （7.5YR 7/3)	
361		P 2	弥生	壺	剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
362		P 2	弥生	壺	沈線１条、調整不明 刻の圧痕あり	ヘラミガキ	灰 (5Y 4/1)	
363		P 2	弥生	壺	口縁部横方向ヘラミガキ	横方向ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	口縁部に穿孔１ヶ所確認
364		P 2	弥生	壺	沈線２条 ヘラミガキ	ヘラミガキ？	灰黄褐 (10YR 4/2)	
365		P 2	弥生	壺	ヘラミガキ？頸部沈線１条 剥落して調整不明瞭	剥落して調整不明	にぶい橙 (5YR 6/4)	粘土の接合痕？
366		P 2	弥生	壺	体部沈線１条 剥落して調整不明	剥落して調整不明 ナデ？	にぶい橙 （7.5YR 7/4)	
367		P 2	弥生	壺	ヘラミガキ？ わずかに重弧文が残存	剥落して調整不明	にぶい橙 （7.5YR 7/4)	
368		P 2	弥生	甕	わずかに沈線が残存 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	粘土の接合痕
369		P 2	弥生	壺	剥落して調整不明	剥落して調整不明瞭 ナデ？	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	ススあり
370		P 2	弥生	壺	沈線２条 剥落して調整不明	剥落して調整不明	黒褐 (2.5Y 3/1)	
371		P 2	弥生	壺	ヘラミガキ ヘラ描沈線、木葉文	ナデ？、ミガキ？	にぶい橙 （7.5YR 6/4)	黒斑あり
372		P 2	弥生	壺	木葉文？	ナデ？	にぶい橙 （7.5YR 7/4)	
373		P 2	弥生	壺	ヘラミガキ 重弧文	ナデ	にぶい橙 （7.5YR 6/4)	374，375と同一個体？
374		P 2	弥生	壺	ヘラミガキ 重弧文	ナデ	にぶい橙 （7.5YR 7/4)	373，375と同一個体？
375		P 2	弥生	壺	ヘラミガキ 重弧文	ナデ	にぶい橙 （7.5YR 6/4)	373，374と同一個体？
376		P 2	弥生	甕	口縁部に刻目 ナデ？	剥落して調整不明	灰褐 （7.5YR 4/2)	粘土の接合痕
377		P 2	弥生	甕	口縁部に刻目 ハケメ	剥落して調整不明	にぶい赤褐 (5YR 5/4)	ススあり
378		P 2	弥生	甕	口縁部に刻目 ナデ	剥落して調整不明	にぶい褐 （7.5YR 5/3)	
379		P 2	弥生	甕	口縁部に刻目 ハケメ後ナデ	剥落して調整不明	にぶい橙 （7.5YR 6/4)	
380		P 2	弥生	甕	頸部段を形成	ナデ？	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	
381		P 2	弥生	甕	沈線２条 剥落して調整不明	剥落して調整不明	灰黄 (2.5Y 6/2) ～灰 (N 5/)	
382		P 2	弥生	甕	頸部沈線１条 ナデ	ナデ 指ナデ	灰黄褐 (10YR 5/2)	
383		P 2	弥生	甕	体部に段を形成し刻目 ナデ？	剥落して調整不明	橙 (7.5YR 7/6)	粘土の接合痕
384		P 2	弥生	壺	ヘラミガキ？ 剥落して調整不鮮明	ナデ？	浅黄橙 （7.5YR 8/3)	胴部に赤色顔料？
385		P 2	弥生	壺	剥落して調整不明	剥落して調整不明	赤橙 (10YR 6/6)	ススあり 粘土の接合痕
386		P 2	弥生	壺	剥落して調整不明瞭 工具によるナデ？	剥落して調整不明瞭 ナデ？	淡橙 (5YR 8/4)	
387		P 2	弥生	甕	剥落して調整不明瞭 底部ナデ？	剥落して調整不明	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	
388		P 2	弥生	甕	ハケ状工具当たり痕、ナデ 剥落して調整不明瞭	剥落して調整不明	橙 (5YR 6/6)	底部に刻痕跡あり 粘土の接合痕
389		土壙Ⅲ	弥生	甕	口縁部に刻目 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
390		土壙Ⅲ	弥生	蓋	つまみ部ナデ	ナデ	褐灰 (10YR 5/1)	
391		土壙Ⅲ	弥生	甕	底部ナデ 剥落して調整不明瞭	剥落して調整不明	にぶい橙 (5YR 6/4)	
392	A-NW-7	(P 5)	弥生	壺	口縁部剥落 工具によるナデ（工具の当たり残存）	ナデ	にぶい褐 (7.5YR 6/3)	外面スス付着、粘土の接合痕
393	A-NW-7	(P 5)	弥生	壺	横方向ハケメ		にぶい橙 (7.5YR 7/4)	外面丹塗り、粘土の接合痕 (丹) 赤 (10R 5/6)
394	A-NW-7	(P 5) 半？	弥生	壺	ハケ状工具によるナデ（横方向） 頸部に段形成	口縁部の内面3本/13㎜の ヘラ描文	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	丹塗りか？

掲載番号	地区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
395	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	口縁部欠損、ヘラミガキ 横方向の沈線？ヘラ描文？	指押サエ後ナデ (横方向)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
396	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデの後横方向ヘラ描文	指押サエ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	粘土の接合痕
397	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデ後横方向線刻文 (木葉文)	指押サエ後ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/3)	粘土の接合痕
398	A-NW-7	(P5) 半？	弥生	壺	2.5㎜程のミガキ（横、斜め方向）	丁寧なナデ 指押サエ	にぶい橙 (7.5YR 7/3)	内面黒斑
399	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデ 沈線	指押サエ後ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	粘土の接合痕 403，419と同一固体？
400	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデ、横方向ヘラ描文	指押サエ後ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/3)	粘土の接合痕
401	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	指押サエの後ナデ 横方向のヘラ描文	指押サエ後ナデ	浅黄橙(7.5YR 8/3) ～にぶい橙(7.5YR 7/3)	外面丹塗り、粘土の接合痕 (丹) 橙 (5YR 6/6)
402	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデの後ヘラ描文（木葉文？） 全体に剥落している	指押サエ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3) ～にぶい橙(5YR 6/4)	外面丹塗り、粘土の接合痕 (丹) 明赤褐 (5YR 5/6)
403	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデ、ヘラ描文3条 木葉文	指押サエ後ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	外面丹塗り、粘土の接合痕 399，419と同一固体？
404	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	丁寧なナデの後ヘラ描文（木葉文）	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	外面丹塗り (丹) にぶい赤橙 (2.5YR 4/4)
405	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデの後ヘラ描文（木葉文）	指押サエ後ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/3)	粘土の接合痕
406	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ヘラ描文（木葉文）	指押サエ後ナデ	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	粘土の接合痕
407	A-NW-7	(P5)	弥生	壺		指押サエ後ナデ	灰黄褐 (10YR)	粘土の接合痕
408	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデ、横方向のヘラ描文3条	指押サエ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	粘土の接合痕
409	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデの後ヘラ描文（木葉文）	指押サエ後ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	外面丹塗り、粘土の接合痕 (丹) にぶい赤褐 (5YR 5/4)
410	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデの後ヘラ描文（木葉文）	指押サエ、ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	外面丹塗り (丹) にぶい赤橙 (5YR 5/4)
411	A-NW-7	(P5) ？	弥生	壺	ナデの後ヘラ描文 (横方向と弧を描く)	指押サエ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	
412	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデの後ヘラ描文 (木葉文)	指押サエ後ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
413	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデの後ヘラ描文 (木葉文)	ナデ 一部植物痕跡あり	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	外面丹塗り (丹) にぶい赤褐 (2.5YR 4/4)
414	A-NW 1	(P5)	弥生	壺	ﾅﾃﾞ後木葉状のヘラ描文	指押サエ及びﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	丹塗り？、粘土の接合痕
415	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデの後ヘラ描文（木葉文）	指押サエ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	外面丹塗り、粘土の接合痕 (丹) 橙 (5YR 6/6)
416	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデの後ヘラ描文	指押サエ後ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	外面丹塗り、黒斑あり (丹) にぶい赤褐 (2.5YR 4/4)
417	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデの後ヘラ描文（木葉文）と横方向のヘラ描文	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
418	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ナデ後ヘラ描文 (木葉文)	指押サエ後ナデ	浅黄橙(10YR 8/3) もう少しにぶい色をしている	外面丹塗り (丹) にぶい赤褐 (2.5YR 5/4)
419	A-NW-7	(P5)	弥生	壺	ヨコナデ ヘラ描文（横方向)2条	指押サエ後ナデ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	399，403と同一個体か？
420	A-NW-7	(P5)	弥生	甕	ヨコナデ、1㎜幅の凹線状のヘラ描文？ 横方向2～3条	ナデ	にぶい黄橙 (7.5YR 7/4)	
421	A-NW-7	(P5)	弥生	甕	口縁部に刻目、ヨコナデ 全体に剥落している	ヨコナデ 全体に剥落している	にぶい褐 (7.5YR 5/3)	粘土の接合痕
422	A-NW-7	(P5)	弥生	甕	横方向線刻文 ミガキ？	指押サエ後ナデ	にぶい褐 (7.5YR 6/3)	
423	A-NW-7	(P5)	弥生	深鉢	口縁部に貼付突帯刻目	指押サエの後ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	外面スス付着、粘土の接合痕 426と同一個体か？
424	A-NW-7	(P5)	弥生	深鉢	口縁部欠損、刻目？ 調整不明瞭	指押サエ、ナデ？ 調整不明瞭	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	粘土の接合痕
425	A-NW-7	(P5)	弥生	甕	ナデの後横方向線刻文2条	ナデ 指押サエ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	粘土の接合痕
426	A-NW-7	(P5)	弥生	深鉢	口縁部に貼付凸帯刻目 ヨコナデ、調整不明瞭	指押サエの後ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	外面スス付着、粘土の接合痕 423と同一個体か？
427	A-NW-7	(P5) 半？	弥生	？	ナデ？ミガキ？面取り？ 全体に剥落している	ナデ？ 全体に剥落している	橙 (5YR 7/6)	粘土の接合痕
428		東北土壙	弥生	壺	肩部に段を形成、文様喪失か？ 剥落して調整不明	剥落して調整不明 わずかに指押サエ残る	橙 (5YR 6/6)	黒斑あり
429		17土壙	弥生	壺？	横方向ヘラミガキ 貼付突帯	ナデ？	橙 (7.5YR 7/6)	粘土の接合痕
430		17土壙	弥生	甕	口縁部に刻目、ヨコナデ 頸部に突帯のなごり、ナデ	ヨコナデ 剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	口縁部に丹塗り痕跡 橙 (2.5YR 6/6)、スス？
431		17土壙	弥生		底部ヘラミガキ 指押サエ、ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	内面スス？
432		17土壙	弥生	壺	底部ナデ 剥落して調整不明	工具によるナデ？ 剥落して調整不明	浅黄橙 (10YR 8/3)	
433		土壙Ⅳ	弥生	甕	口縁部に刻目 ヨコナデ、頸部に段を形成	ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
434		東西土壙	弥生	甕	口縁部に刻目 ヨコナデ？	ヨコナデ？	灰褐 (7.5YR 5/2)	粘土の接合痕、内面黒色 口縁部ススあり

観　察　表

掲載番号	地　区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
435		15土壙B	弥生	壺？	頸部に沈線２条、口縁部指押サエ後ナデ、ヘラミガキ	口縁部指押サエ後ナデ ヘラミガキ	にぶい橙 （7.5YR 6/4）	
436		15土壙C	弥生	甕	口縁部ヨコナデ 剥落して調整不明	ヨコナデ ナデ？	灰黄褐 (10YR 5/2)	
437	B G46	土壙	弥生	壺	口縁部ヨコナデ 頸部に沈線１条、段を形成	ヨコナデ	橙(7.5YR 7/6)	
438		P9−9土壙?	弥生	壺	頸部に段を形成 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい橙 （7.5YR 7/4）	
439	B G46	土壙	弥生	壺	肩部にヘラ描沈線 ヘラミガキ？	ナデ？	橙(5YR 6/6)	表面丹塗り
440	B G46	土壙	弥生	壺	肩部に太い沈線２条 ヘラ描沈線文、剥落して調整不明	剥落して調整不明	浅黄橙 （7.5YR 8/6）	
441	B G46	土壙	弥生	壺	肩部に段を形成 剥落して調整不明	ナデ？	にぶい橙 （7.5YR 7/3）	
442	B G46	土壙	弥生		底部ヘラミガキ？ ナデ	剥落して調整不明	橙(5YR 6/6)	
443	B G46	土壙	弥生		底部にわずかにハケメ残る ヘラミガキ？	ヘラミガキ？	にぶい褐 （7.5YR 5/4）	
444		P21	弥生	甕	口縁部に刻目、ヨコナデ 胴部に沈線２条、剥落して調整不明	ヨコナデ 横方向ヘラミガキ	浅黄橙 (10YR 8/3)	粘土の接合痕
445	D C54	P 6	弥生	甕	口縁部ナデ、刻目 指押サエ、沈線１条	口縁部ﾅﾃﾞ 指押サエ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	外面スス付着
446		P30	弥生	壺	沈線１条、木葉文、調整不明	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	黒斑あり
447		P30	弥生	壺	重弧文？ ヘラミガキ？	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
448	B-5E-4	D 6	弥生	甕	口縁部凹線3条、ヨコナデ 肩部縦方向ハケメ	ヨコナデ ナデ	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	外面スス付着
449		D 6	弥生	甕	ヨコナデ 口縁部に凹線５条	ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	粘土の接合痕
450	G、B−5 E−4	D 6	弥生	高杯	口縁部ヨコナデ 杯部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 7/3)	粘土の接合痕
451	GT-2(5)	D 6	弥生	甕	口縁部ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
452	G　1(SP)	D 6	弥生	壺	口唇部欠損、ヨコナデ 口縁部に凹線３条	ヨコナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/3)	粘土の接合痕
453	GT−2（S）	D 6	弥生	台付 直口壺	ﾐｶﾞｷ（単位不明） 部横方向ミガキ	ナデ 指押サエ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
454	G？−2（S）	D 6	弥生	高杯	口縁部ヨコナデ 杯部ヘラミガキ（縦方向）	ヨコナデ ヘラミガキ	褐灰 (10YR 4/1)	粘土の接合痕
455	G、B−5 E−4	D 6	弥生	鉢	剥落して調整不明瞭 ヨコナデ？	剥落して調整不明瞭 ヨコナデ？	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
456		D 6	弥生	鉢	ヨコナデ 剥落して調整不明瞭	ヨコナデ 剥落して調整不明瞭	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	粘土の接合痕
457	GT-1(8)	D 6	弥生	鉢	体部から底部指ナデ、ナデ	ナデ	灰　(7.5Y 6/2)	
458	B-C	D6−部外	須恵器	蓋	つまみ部指ナデ、ナデ	ナデ	灰白 (7.5Y 7/1)	粘土の接合痕
459	S区	住居跡 ノウメ土中		手づくね 土器	体部指押サエ、ナデ	指押サエ、ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
460		P11	弥生	壺	口縁部に凹線４条 ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
461		P11	弥生	直口壺	口縁部に沈線３条、ﾖｺﾅﾃﾞ、剥落して調整不明、わずかにヘラミガキ残る	剥落して調整不明	にぶい橙 (5YR 6/4)	
462		P11	弥生	甕	口縁部に凹線２条 ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ 調整不明	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	ススあり
463		P11	弥生	甕	口縁部に凹線２条 ヨコナデ	ヨコナデ ヘラケズリ？	にぶい黄褐 (10YR 5/3)	
464	B−SE	2−3	弥生	甕	口縁部ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙 （7.5YR 7/4）	
465	B−S-？	P11	弥生	鉢	口縁部に強いヨコナデ 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄 (2.5Y 6/4)	
466		P11	弥生	高杯	口唇部に沈線１条、ヘラミガキ 杯部に沈線１条	ヘラミガキ	にぶい橙 （7.5YR 6/4）	
467	B−SE−4	P10　土器2	弥生	甕	口縁部ヨコナデ 剥落して調整不明	ヘラミガキ？	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
468	D F58	溝３A埋土	弥生	壺	口縁部に凹線１条 ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	灰白 (10YR 7/1)	粘土の接合痕
469	D F58	溝３A埋土	弥生	甕	口縁部に凹線１条、ハケ状工具による ヨコナデ、ハケメ　縦方向（10本/1cm）程	ハケ状工具によるヨコナデ ケズリ（約8mm幅）	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	外面スス付着、粘土の接合痕 472と同一個体か？
470	D F58	溝３A埋土	弥生	高杯	口縁部ヨコナデ、 杯部縦方向ミガキ（２mm程）	口縁部横・斜め方向ミガキ (1.5mm程)、ナデ、縦方向ミガキ(1mm程)	にぶい褐 (7.5YR 6/3)	粘土の接合痕
471	D H58	溝３B埋土	弥生		底部ナデ及びハケメ　横・斜め方向 面取り痕、ナデ、一部刺し込み痕？	横方向ケズリ(16mm程) 剥落して調整不明瞭	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	外面黒斑 粘土の接合痕
472	D F58	溝３A埋土	弥生		底部ﾊｹﾒ（縦方向）９本/1cm、及びナデ	指押サエ及びナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	外面黒斑、粘土の接合痕 469と同一個体か？
473	D F58	溝３A埋土	弥生		底部ハケ状工具でナデ	剥落して調整不明瞭	暗灰 (N 3/0)	外面黒斑？
474	D F58	溝３A埋土	弥生	高杯	脚柱部沈線？３条 剥落して調整不明瞭、穿孔あり？	絞り目 ナデ？	にぶい橙 (5YR 7/4)	器表面全体が剥落している

掲載番号	地区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
475	DH57	溝3B埋土	弥生	高杯	脚部ヨコナデ 脚裾部欠損	ヘラケズリ	灰褐 (7.5YR 5/2)	粘土の接合痕
476		上東溝 D3	弥生	壺	口縁部ヨコナデ、沈線3条、刻目、胴部縦方向ハケメ、ナデ、沈線19条確認	ヨコナデ、ハケメ しぼり目、ナデ	灰白 (2.5Y8/2) ～淡黄 (2.5Y8/3)	粘土の接合
477		上東溝 D3	弥生	甕	口縁部ヨコナデ ナナメ方向粗いハケメ6本／1cm	ヨコナデ、ナデ ヘラケズリ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	ススあり
478		斜溝 D3	弥生	甕	口縁部ヨコナデ、縦方向の細かなハケメ	ヨコナデ ヘラケズリ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	ススあり
479		斜イチミゾ D3	弥生	甕	口縁部凹線2条？ 剥落して調整不明	剥落して調整不明 ヘラケズリ	浅黄橙 (10YR 8/3)	
480		斜溝 D3	弥生	鉢	口縁部歪みあり、ヨコナデ 剥落して調整不明	ヨコナデ わずかに指押サエ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
481	CP53	上東溝 D3	弥生	鉢	口縁部ヨコナデ 胴部ハケメ後ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、ナデ？ 調整不明瞭	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
482	CO53	斜溝 D3	弥生	鉢	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ 10～8本／1cm、底部ナデ	口縁部ヨコナデ 調整不明	にぶい橙 (5YR 7/4)	黒斑あり
483	CP53	上東溝 D3	弥生	鉢	口縁部ヨコナデ 胴部ナデ後縦方向ヘラミガキ、底部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ ナデ後ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/3) ～にぶい橙 (7.5YR7/4)	黒斑あり
484		斜溝 D3	弥生	高杯	口縁部透かし孔（推定4方向？） ﾍﾗﾐｶﾞｷ、沈線1条？	ヨコナデ ハケメ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
485	GN55	斜溝 D3	弥生		縦方向ヘラミガキ ナデ	ヘラケズリ	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	黒斑あり
486		斜溝 D3	弥生		剥落して調整不明	剥落して調整不明	灰黄褐 (10YR 6/2)	
487		斜行ミゾ D3	弥生		ハケメ、指押サエ ナデ？	ナデ？	にぶい黄褐 (10YR 5/4)	
488	DEライン	東西壁 溝ⅢA	弥生	高杯	脚部ヘラ描沈線文、ヨコナデ	ヨコナデ 剥落して調整不明	橙 (5YR 6/6)	
489		D4	弥生	鉢	口縁部剥落して調整不明瞭 波状文が少し残っている	剥落して調整不明瞭 ハケメ？（斜め方向）	橙 (5YR 6/6)	外面黒斑 粘土の接合痕
490		D4	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ	ハケ状工具によるヨコナデ ヘラケズリ、ナデ	灰黄褐 (10YR 6/2)	外面スス、内外面黒斑
491		D4	土師器	鉢	口縁部ナデ？（少し剥落している） 体部ケズリ	ハケメ(横・縦方向11本/12㎜) 剥落して調整不明	にぶい褐 (7.5YR 6/3)	粘土の接合痕 外面黒斑
492		D4	弥生	鉢	ナデ 指押サエ及びナデ	ナデの後ハケメ 工具の当たり痕	にぶい橙 (7.5YR 7/3)	粘土の接合痕
493		D4	弥生	高杯	口縁部ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐 (10YR 6/2)	粘土の接合痕
494		D4	弥生	高杯	杯部ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄 (2.5Y 7/2)	全体に剥落して調整不明瞭
495		D4	土師器	高杯	脚部ﾐｶﾞｷ（横方向1㎜程） 透かし孔4個？（3個残存）	しぼり目、丁寧なﾅﾃﾞ後ﾊｹﾒ（斜め方向）	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
496		溝2埋土	弥生	壺	口縁部ヘラミガキ 指押サエ	ヘラミガキ ナデ	灰黄 (2.5Y 6/2)	ススあり？
497		溝2	弥生		底部ハケメ、ナデ	剥落して調整不明	黄灰 (2.5Y 4/1)	外面ススあり
498		溝1埋土	弥生	甕	口縁部にヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐 (10YR 6/2)	
499		溝1埋土	弥生	甕	口縁部に刻目 頸部に段と刻目	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	粘土接合痕
500		溝1埋土	弥生	壺	肩部に沈線1条、刺突文 斜め方向ヘラミガキ	ヘラケズリ	灰黄 (2.5Y 6/2)	ススあり
501		D5	須恵器	蓋	口縁部ヨコナデ	ヨコナデ	灰（N5/）	
502		D5	弥生	甕	口縁部ヨコナデ 沈線2条	ﾖｺﾅﾃﾞ、剥落して調整不明 ヘラケズリ？	橙 (5YR 6/6)	
503		D5	弥生	甕	剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	
504		D5	弥生	甕	口縁部ヨコナデ	ヨコナデ？ ナデ、ヘラケズリ？	橙 (2.5YR 6/6)	ススあり
505		D5	弥生	甕	口縁部ヨコナデ、沈線3条？	ヨコナデ ヘラケズリ？	浅黄橙 (10YR 8/4)	
506		D5	弥生	甕	口縁部指押サエ後ナデ	ナデ？	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
507		D5	弥生	壺	口縁部ヨコナデ、沈線2条？ 剥落して調整不明	ヨコナデ 剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
508		D5	弥生	甕	口縁部ヨコナデ、凹線6条 頸部に貼付、突帯文（圧痕）	ヨコナデ	浅黄橙 (10YR 8/4)	粘土の接合痕
509		D5	弥生	高杯	剥落して調整不明	しぼり目	橙 (5YR 7/8)	粘土の接合痕
510		D5	弥生	高杯	剥落して調整不明 ナデ？	ナデ？、ヘラケズリ？ しぼり目	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	粘土の接合痕
511		P15	弥生	鉢	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、胴部ﾍﾗﾐｶﾞｷ？底部ﾅﾃﾞ 剥落して調整不明瞭	ﾖｺﾅﾃﾞ、剥落して調整不明 ヘラミガキ？	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
512		P15 土器1	弥生	鉢	口縁部ヨコナデ 横方向ヘラミガキ、ハケメ	ﾖｺﾅﾃﾞ剥落して調整不明	橙 (5YR 6/6)	
513		P09 (土器10)	弥生	壺？ 器台？	口縁部に棒状浮文3本確認、竹管文2段3個確認、沈線6条、ﾖｺﾅﾃﾞにより摩滅	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	(断) オリーブ黒 (7.5Y 3/1)
514		P09 (土器10)	弥生	壺？	口縁部欠損あり、ヨコナデによる線 ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	

観 察 表

掲載番号	地　区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
515		P09 (土器3)	弥生	甕	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、沈線2条? ナデによる線?	ナデ ヘラケズリ?	灰黄褐 (10YR 5/2)	
516		P09 (土器10)	弥生	甕	口縁部にヨコナデによる線 ヨコナデ	ナデ?、ヘラケズリ?	にぶい褐 (7.5YR 5/3)	表面スス?
517		P09 (土器4)	弥生	鉢	口縁部ナデ? 剥落して調整不明	ヘラミガキ? 剥落して調整不明	灰黄褐 (10YR 5/2)	
518	CN55	斜前期溝	弥生	壺	口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ? 頸部沈線1条、指押サエ、ナデ	ヨコナデ ナデ	灰黄褐 (10YR 6/2)	
519	CR51	斜溝	弥生	高杯	口縁部ヨコナデ 調整不明	ヨコナデ、横方向ヘラミガキ? 縦方向ヘラミガキ?	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	内面黒色
520	3T－S	溝内	弥生	甕	口縁部ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ ナデ、ヘラケズリ	浅黄橙 (10YR 8/3)	
521	3T－S	溝内	弥生	甕	口縁部ヨコナデ 凹線3条、調整不明	ヨコナデ、ナデ ヘラケズリ?	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
522	3T－S	溝内	弥生	甕	口縁部ヨコナデ 凹線3条	ヨコナデ、ナデ ヘラケズリ	浅黄橙 (10YR 8/3)	丹塗り 橙 (5YR 6/8)
523	3T－S	溝内	弥生	高杯	脚柱部ヘラミガキ?、脚裾部透かし孔 2方向確認、推定4方向	ナデ? 剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
524	T4 (Ⅱ)	拡張区溝中溝	弥生	甕	口縁部ヨコナデ、ヘラ描沈線3条 肩部ヘラミガキ?	ヨコナデ、ヘラケズリ	黒褐 (10YR 2/2)	ススあり
525	T4 (Ⅱ)	拡張区溝中	弥生	高杯	口縁部ヘラミガキ?	ヘラミガキ?	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	粘土の接合痕 内面黒斑あり
526	B－S-?	P17	弥生	甕	口縁部ヨコナデ	ヨコナデ ヘラケズリ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
527		P08	弥生	甕	剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙 (7.5YR 7/6)	黒斑あり
528		P08	弥生	鉢	口縁部ヨコナデ、ナデによる線 斜め方向ハケメ	ナデ 横方向ハケメ	灰黄 (2.5Y 7/2)	スス?
529		P19	弥生	甕	口縁部ナデによる線、ヨコナデ 横方向ヘラミガキ	ヨコナデ ヘラミガキ後ヘラミガキ	橙 (5YR 7/6)	二次焼成によるスス
530		P19	弥生	高杯	口縁部細かなヘラミガキ	細かなヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	粘土の接合痕
531		P19	製塩	台付鉢	脚部指押サエ、ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
532		?	弥生	甕	口縁部ヨコナデ、刻目、指押サエ ハケメ縦方向、ナデ縦方向	口縁部ヨコナデ 指押サエ後ナデ、斜め方向	にぶい黄橙 (10YR 7/2) ～褐灰 (10YR5/1)	口縁部に歪みあり、器表面に凸凹あり　ﾀﾀｷ
533	NW-1		弥生	甕	ヨコナデ?口縁部に刻目 ヘラミガキ	ヨコナデ? 剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
534	A-NC-1		弥生	甕	口縁部に刻目、指押サエ 頸部沈線2条、ナデ	指押サエ、ナデ	浅黄橙 (10YR 8/3)	
535		65?	弥生	鉢	口縁部ヨコナデ、刻目、頸部指押サエ ヘラ描沈線1条、ハケメ縦方向	口縁部ヨコナデ、ハケメ横方向 ナデ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
536		?	弥生	甕	ナデ、指押サエ、ナデ 調整不明	ナデ 剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	ススあり
537		不明	弥生	甕	ヨコナデ、口縁部に刻目 頸部半截竹管による沈線2条	ヨコナデ 剥落して調整不明	橙 (7.5YR 6/6)	
538	T2		弥生	甕	口縁部に刻目、頸部に沈線2条 指押サエ、剥落して調整不明	ナデ?	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
539		?	弥生	甕	口縁部に刻目、頸部凹線3条 ﾅﾃﾞ	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 指押サエ後ﾅﾃﾞ	灰白 (10YR 7/1)	外面スス付着
540		不明	弥生	甕	ヨコナデ、口縁部に刻目、ヘラ描沈線 3条ナデ	剥落して調整不明	ヨコナデ (7.5YR 5/3)	にぶい褐
541		不明	弥生	甕	ヨコナデ、口縁部に刻目 頸部ヘラ描沈線3条、ナデ	ヨコナデ、ナデ?	灰黄褐 (10YR 5/2)	
542	79		弥生	甕	口縁部に刻目、ナデ 胴部沈線3条	指押サエ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	粘土の接合痕 334と同一固体?
543		不明	弥生	甕	ヨコナデ、口縁部に刻目 頸部沈線2条、わずかにハケメ残る	ヨコナデ、ナデ?	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	段を形成 粘土の接合痕
544	70		弥生	甕	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、刻目 沈線3条	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 指押サエ	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	粘土の接合痕
545	T1南部		弥生	鉢?	口縁部粘土の接合による段 ヘラミガキ?	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	
546	A-NW-1		弥生	甕	沈線1条、刻目 ナデ	ヘラミガキ	黄灰 (2.5Y 4/1)	段を形成
547	NW-1		弥生	甕?	段を形成、太い沈線3条 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
548	45(Ⅲ)		弥生	壺	ﾐｶﾞｷ斜め・横方向 (2.5mm)、ﾅﾃﾞ	剥落して不明瞭、ﾅﾃﾞ? 指押サエ?	明褐灰 (7.5YR 7/2)	外面黒斑、外面5/6剥落している
549	〔1204〕		弥生	壺	ﾖｺﾅﾃﾞ、指押サエ、ナデ、頸部に段を形成 剥落して調整不明、底部欠損あり	剥落して調整不明 指押サエ、ナデ?	灰白 (10YR 8/2)	黒斑あり
550	82		弥生	壺	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、指押サエ 工具による沈線?	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	粘土の接合痕 内外面丹塗りか?
551		不明	弥生	壺	口縁部指押サエ、ナデ 体部沈線1条、調整不鮮明	指押サエ、ナデ ヘラミガキ?調整不鮮明	浅黄橙 (10YR 8/3)	口縁部著しく歪んでいる
552	A-NW-1		弥生	壺	口縁部ナデ、調整不鮮明	ヘラケズリ	浅黄橙 (10YR 8/4)	粘土の接合痕
553	A-NW-1		弥生	壺	剥落して調整不明 頸部ナデ、貼付突帯文	剥落して調整不明	橙 (5YR 6/8)	粘土の接合痕
554	T1南部		弥生	壺	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、横方向細かいﾍﾗﾐｶﾞｷ 段を形成、粘土の接合	ヨコナデ ヘラミガキ?	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	

掲載番号	地　区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色　調	備　考
555	A-NW-1		弥生	壺	口縁部ナデ、ヘラミガキ？ 沈線２条	ヘラミガキ？ 剥落して調整不鮮明	橙(5YR 6/6)	
556	NW-1		弥生	壺	口縁部指押サエ、ﾅﾃﾞ、頸部ﾍﾗﾐｶﾞｷ 沈線１条	調整不鮮明、ヘラミガキ ナデ？	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
557	A-NW-1		弥生	壺	頸部沈線１条 剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	粘土の接合により段を形成
558	A-N		弥生	甕	口縁部に刻目 頸部刻目、ナデ？	ナデ？	浅黄橙 (10YR 8/4)	
559		？ 不明	弥生	壺	ヘラミガキ？ 剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙(5YR 6/6)	丹塗り 段を形成
560	A－NW－？		弥生	壺	口縁部ヨコナデ？ 剥落して調整不明	剥落して調整不明	浅黄橙 (10YR 8/3)	
561	A-NW-1		弥生	甕	剥落して調整不明	剥落して調整不明	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	粘土の接合により段を形成
562		？	弥生	壺	横方向ヘラミガキ後木葉文 沈線１条	横方向ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
563		？	弥生	壺	横方向ヘラミガキ 太い沈線３条	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	ススあり
564	A-NW-7	（Ｂ５）	弥生	壺	ﾅﾃﾞ後木の葉状の線刻文 (木の葉状文)	指押サエ及びﾅﾃﾞ	にぶい橙(7.5YR6/4) ～にぶい黄橙（10YR5/3)	丹塗り？ 外面に一部黒斑
565		？	弥生	壺	太い沈線２条、細い沈線４条、重弧文 ヘラミガキ？	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	段を形成，ススあり
566	A-NW-1		弥生	壺	ヘラミガキ？沈線３条 木葉文	ヘラミガキ？	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	段を形成
567	T2E16～20	最下ｼﾙﾄ	弥生	壺	ナデ？木葉文	ナデ？	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
568	A-NW-1		弥生	？	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	粘土の接合により段を形成
569		39	弥生	？	口縁部指押サエ及びﾅﾃﾞ 刻目、頸部工具によるﾅﾃﾞ	口縁部指押サエ及びﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ及び工具によるﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	口縁部スス付着？
570		26(Ⅱ) 11（Ⅱ）	弥生	甕	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、刻目 剥落して調整不明瞭、ﾅﾃﾞ？	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 指押サエ後ﾅﾃﾞ	にぶい橙(7.5YR6/4) ～にぶい黄橙（10YR 7/2)	粘土の接合痕 外面黒斑あり
571		49	弥生	？	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、刻目 工具によるﾅﾃﾞ	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 指押サエ後ﾅﾃﾞ	灰白(10YR7/1) ～褐灰（10YR5/1)	
572	A-NW-1		弥生	甕	口縁部に刻目？ナデ？	剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	ススあり
573		？ 不明	弥生	甕	ヨコナデ、口縁部に刻目 ナデ？	ヨコナデ 剥落して調整不明	にぶい褐 (7.5YR 5/3)	
574	NOE T2F20～22	Siltと砂層の混層中	弥生	甕	口縁部に刻目、ヨコナデ 指押サエ、剥落して調整不明	ヨコナデ、ナデ？ (10YR 7/3)	にぶい黄橙 体部に黒斑あり	口縁部にススあり
575		？ 不明	弥生	甕	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、刻目、指押サエ、ナデ 体部横方向ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ハケメ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ヨコナデ、ナデ	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	工具により段を形成
576	A-NW-1		弥生	甕	剥落して調整不明	剥落して調整不明	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	粘土の接合により段を形成
577	A-NW-1		弥生	甕	口縁部に刻目、ナデ？	ナデ？	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
578	A-NW-1		弥生	壺	口縁部にわずかに刻目？ 指ナデ、指押サエ	剥落して調整不明	明黄褐 (10YR 7/6)	
579	A-NW-1		弥生	甕	口縁部に刻目 ヘラミガキ？	ナデ 剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	
580		？ 不明	弥生	深鉢	口縁部ヨコナデ、刻目 指押サエ、ナデ	剥落して調整不明	灰黄褐 (10YR 5/2)	粘土の接合痕
581	A-NW-1		弥生	甕	ヨコナデ？口縁部にわずかに刻目 剥落して調整不明	ヨコナデ？ 剥落して調整不明	灰黄褐 (10YR 6/2)	
582	NW-1		弥生	深鉢	口縁部ナデ、刻目	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	
583	B-S E-3		弥生	器台	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、凹線３条 貼付棒状浮文３個、刻目凸帯	ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	粘土の接合痕
584	S-20～25，E12～13攪乱 "S20～26,E-12～18"		弥生	壺	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、葡萄沈線5条、貼付棒状浮 文４個残存、棗部ﾊｹﾒ縦方向、凹線３条、ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ?	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 指押サエ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	粘土の接合痕
585	S20～26 E12～13、ＳＥ、攪乱		弥生	高杯	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、杯部横縦方向ﾍﾗﾐｶﾞｷ、脚部ﾍﾗﾐｶﾞｷ? 調整不明、脚柱部沈線7，5条、脚裾部透かし孔７推定９?，ﾖｺﾅﾃﾞ、凹線2条	脚部絞り目、ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	黒斑あり 粘土の接合痕
586	S20～26 E12～13、SE		弥生	高杯	口縁部ヨコナデ 杯部斜め方向ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ 杯部斜め方向ヘラミガキ	橙(5YR 7/6)	
587	S20～26 E12～13、SE		弥生	高杯	口縁部ヨコナデ 杯部斜め方向ﾍﾗﾐｶﾞｷ	口縁部ヨコナデ 杯部ﾅﾃﾞ？	橙(5YR 7/6)	
588	S20～26 E12～13、SE		弥生	高杯	口唇部沈線?口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、凹線2条?　杯部多角形? ﾍﾗﾐｶﾞｷ(8方向?)脚柱部沈線3条残存	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、杯部縦横方向? ﾍﾗﾐｶﾞｷ	浅黄橙 (10YR 8/3)	粘土の接合痕
589	S-20～16 E-12～13		弥生	高杯	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、凹線1条ずつ2本 ﾍﾗﾐｶﾞｷ（6㎜程の工具痕）	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ ﾍﾗﾐｶﾞｷ横方向	にぶい橙 (7.5YR 7/3)	
590	S20～26 E12～13、ＳＥ、攪乱		弥生	高杯	脚部ﾍﾗﾐｶﾞｷ?調整不明、脚柱部沈線6，4，3条 脚裾部透かし孔6方向推定9方向？貫通未完遂あり、ﾖｺﾅﾃﾞ、凹線2条	杯部調整不明、脚部ﾍﾗﾅｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	黒斑あり 粘土の接合痕
591	S20～26 E12～13、SE		弥生	高杯	杯部縦方向ﾍﾗﾐｶﾞｷ、脚部摩滅して調整不明、脚柱部 "沈線8,5条、脚裾部透かし孔7推定9?、ﾖｺﾅﾃﾞ、凹線2条	杯部多角形ﾍﾗﾐｶﾞｷ、脚部 絞り目、ﾍﾗﾅｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	浅黄橙 (10YR 8/3)	粘土の接合痕
592	S20～26 E12～13、SE		弥生	高杯	杯部縦方向ﾍﾗﾐｶﾞｷ?脚部ﾍﾗﾐｶﾞｷ?調整不鮮明、脚柱部 "沈線7,4～5条、脚裾部透かし孔10推定11?ﾖｺﾅﾃﾞ、凹線2条	杯部ﾊｹﾒ、脚部絞り目、ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	粘土の接合痕
593	S20～26 E12～13攪乱		弥生	高杯	杯部ﾍﾗﾐｶﾞｷ?調整不明、脚柱部沈線6～7条、5～6条 脚裾部透かし孔9方向確認、ﾖｺﾅﾃﾞ、凹線2条	杯部ナデ？調整不鮮明 脚部ﾍﾗﾅｽﾞﾘ、ﾅﾃﾞ？	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	黒斑あり 粘土の接合痕
594	ＳＥ区Ｔ	東ヘキ攪乱	弥生	高杯	脚部ﾍﾗﾐｶﾞｷ?縦方向?直線平行文４条横方向、線刻３条 横方向、直線平行文２条残存、透かし窓?	絞り後ﾅﾃﾞ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	

観　察　表

掲載番号	地　区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色　調	備　考
595	S20～26 E12～13攪乱		弥生	高杯	脚部ヘラミガキ、脚柱部沈線5，5条、脚裾部透かし孔9方向確認推定14方向?ヨコナデ、沈線2条	杯部ナデ？脚部ヘラケズリ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	粘土の接合痕
596	S.O～26 E12～13攪乱		弥生	高杯	脚柱部ﾐｶﾞｷ?面取り?直線平行文4条、線刻文4条残存（完結は不明瞭）	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ杯部多角形ﾍﾗﾐｶﾞｷ工具によるﾅﾃﾞ及び絞り目	にぶい橙 (7.5YR 7/3)	
597	SE区	TⅥ 東ヘキ攪乱	弥生	高杯	脚柱部ﾐｶﾞｷ、直線平行文5～6条、直線平行文5条、透かし窓4個残存（推定7個?）	円盤充填の跡、ﾐｶﾞｷ？剥落している、絞り及び工具によるﾅﾃﾞ?	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	
598		?	弥生	器台	脚部ﾖｺﾅﾃﾞ、透かし窓未貫通2個残存（推定10個?）植物の繊維痕	ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	粘土の接合痕
599	S-20～26 E-12～13攪乱		弥生	高杯	脚部ﾐｶﾞｷ縦方向、ﾅﾃﾞ、直線平行文7条、直線平行文5条、透かし窓6個残存（推定11個?未貫通含む)脚部ﾖｺﾅﾃﾞ凹線1条	ﾅﾃﾞ、指押ﾅ後ﾅﾃﾞ後ﾐｶﾞｷ?(円盤充填)	橙(5YR 7/6)	粘土の接合痕
600	S-20～25 E-12～13攪乱		弥生	高杯	脚部ﾖｺﾅﾃﾞ、直線平行文3条（完結している）、透かし窓6個残存（推定11個?）	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
601	S-20～25 E-12～13攪乱		弥生	高杯	脚部ﾖｺﾅﾃﾞ、工具によるナデ、直線平行文2条、透かし窓5個残存（推定8個?）	ﾍﾗｹｽﾞﾘ　横方向 工具痕もあり	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	粘土の接合痕 脚部に歪みがみられる
602	B-5E－466 ?		弥生	高杯	脚部ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、直線平行文4条（1本ずつ完結）、透かし窓6個、ﾊｹﾒ縦方向	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	
603	SE区 TⅥ	?ヘキ攪乱	弥生	高杯？	脚部凹線2条、ﾖｺﾅﾃﾞ、直線平行4条（1条ずつ完結?）、透かし窓11個	ﾊｹ状工具によるナデ？ 横・斜め方向	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	
604	S20～26 E12～13、SE		弥生	器台	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、縦3個1組と2個1組の竹管文が交互に連続している連続竹管文、胴部ハケメ？風化が著しく調整不鮮明、凹線10条、8条、透かし孔7方向、推定8、個数不明、透かし孔2方向確認	6条1組の波状文2列 ヘラケズリ	浅黄橙 (10YR 8/3)	粘土の接合痕
605	SE区 T	東ヘキ攪乱	弥生	台付鉢	剥落して調整不明瞭、竹管文6個組が3ヶ所残存、推定4ヶ所？　ﾅﾃﾞ	剥落して調整不明瞭	橙(5YR 7/6)	
606	E-14 S-24		弥生	器台	胴部透かし窓個数不明、凹線6条、透かし窓6個、ﾊｹﾒ縦方向（8本/14）凹線9条	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	
607	S20～26 E12～13、SE		弥生	器台	胴部僅かにﾊｹﾒ?剥落して調整不鮮明、凹線7条、9条 ﾐ透かし孔（貫通孔3方向確認、推定6方向,7方向確認、推定15方向?脚裾部凹線10,3条、ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ？ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ナデ？	浅黄橙 (10YR 8/3)	黒斑あり 径　歪んでいて不正確
608		?	弥生	器台	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、竹管文上下2段 指押サエ、ﾊｹﾒ8本/14	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ ナデ及び工具によるナデ？	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
609	SE区 TⅥ	東ヘキ	弥生	器台	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、竹管文2段と貼付棒状浮文4個1組、ﾊｹﾒ縦方向、凹線5条、透かし窓？	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい橙 (7.5YR 7/3)	粘土の接合痕
610	S-20 E-12-13攪乱		弥生	器台	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、竹管文縦2個と3個の交互に連続、ﾊｹﾒ 指押サエ、凹線11条、8条、透かし窓7個残存、凹線17条、脚部工具によるﾖｺﾅﾃﾞ	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、波状文2段5条、ｹｽﾞﾘ横方向(12　程) にぶい黄橙(10YR7/2)	粘土の接合痕 補修痕	
611	SE区 S=20～25 F?-12-13攪乱 TⅥ	東ヘキ攪乱	弥生	器台	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、櫛描沈線6条、貼付棒状浮文5個1組2組残存（推定6組?）及び竹管文、ハケメ縦方向、凹線8条、ﾊｹﾒ縦方向、透かし窓3個残存（推定9～10個？）、凹線9条ハケメ縦方向、透かし窓14個残存（推定20個?）、貫通、未貫通あり、凹線8条、脚裾部ヨコナデにより凹線1条	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、指押サエ ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	
612	S20～26 E12～13 SE		弥生	器台	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、沈線7条、4本1組の棒状浮文と3個1組の円形浮文が交互に6組連続貼付してある、胴部ﾊｹﾒ ﾐ摩滅して調整不鮮明、凹線7,8,10,2条、透かし孔6方向、推定25、ﾖｺﾅﾃﾞ	口縁部ヨコナデ 胴部ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ（縦方向？）	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	黒斑あり
613		?	弥生	壺	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ	欠損の為不明	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	粘土の接合痕
614	T4（Ⅱ）		弥生	甕	口縁部ヨコナデ、沈線2条？ 頸部に貼付指頭圧痕文突帯	ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	粘土の接合痕
615	A45	ﾗｲﾝｾｸｼｮﾝ	弥生	甕	口縁部ヨコナデ、凹線4条 剥落して調整不明	ヨコナデ ヘラミガキ？	橙(5YR 6/6)	
616	CL55－L	上半	弥生	壺	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、頭部沈線9条　螺旋状ハケメ、肩部刺突文、ヘラミガキ？	ヨコナデ、ナデ ヘラケズリ	浅黄橙 (10YR 8/4)	
617		? 不明	弥生	壺	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、凹線4条、頸部凹線2条 ナデ？剥落して調整不明	ヨコナデ、ハケメ？	橙(2.5YR 6/8)	
618	BS－1		弥生	壺	口唇部ヨコナデ 口縁部凹線3条	ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	粘土の接合痕
619		南端層(Ⅱ) 溝中	弥生	甕	口縁部沈線5条 ヨコナデ、摩滅して調整不鮮明	ヨコナデ 剥落して調整不明	橙(7.5YR 7/6)	
620	BS－1		弥生	壺	ヨコナデ？ 全体に著しく風化していて調整不明	調整不明	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	
621	B－SE－4		弥生	壺	口縁部ヨコナデ、ナデ ﾍﾗﾐｶﾞｷ、頸部に沈線1条確認	ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	著しく歪んでいる為、径不明
622	第2T南	Pit16の崩壊	弥生	直口壺	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 頸部に沈線1条、ヘラミガキ	ヨコナデ ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
623	T－4		弥生	台付壺	指押サエ後ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	粘土の接合痕
624		後期溝	弥生	台付壺	体部縦方向ヘラミガキ、指押サエ ナデ	横方向ヘラミガキ 指ナデ、指押サエ	浅黄橙 (10YR 8/3)	水漉粘土 粘土の接合痕
625		? 不明	弥生	壺	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	
626		? 不明	弥生	甕	口縁部～体部ハケメ？ 摩滅して調整不明	ハケメ？ ナデ？	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	水漉粘土
627	B－SE－4	一括土器	弥生	甕	口縁部ヨコナデ、沈線2条 頸部ハケメ？	ヨコナデ、ナデ ヘラケズリ	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	
628		? 不明	弥生	甕	口縁部ヨコナデ 肩部ヘラミガキ	ヨコナデ、ナデ ヘラケズリ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
629		? 不明	弥生	甕	ヨコナデ、凹線3条 剥落して調整不明	ヨコナデ、横方向ハケメ ヘラケズリ	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	
630	BSE-4	一括	弥生	甕	口縁部ヨコナデ	ヨコナデ ナデ、ヘラケズリ	橙(7.5YR 7/6)	

掲載番号	地　区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
631	ＢＥ５		弥生	甕	ハケメ、透かし孔４方向確認 ヨコナデ、調整不明瞭	ナデ、ヘラケズリ	橙(5YR 6/6)	
632	BSE-4	一括	弥生	甕	口縁部ヨコナデ	ヨコナデ ナデ、ヘラケズリ	橙(7.5YR 6/6)	
633	ＢＥ５		弥生	甕	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	橙(5YR 6/6)	
634		? 不明	弥生	甕	口縁部ヨコナデ 調整不明瞭	ヨコナデ、ナデ ヘラケズリ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
635	BSE-4	一括南端拡張区 鉄板層上土器面	弥生	甕	口縁部ヨコナデ 剥落して調整不明	ヨコナデ ナデ、ヘラケズリ	淡黄 (2.5Y 8/3)	
636	B-S-2		弥生	甕	口縁部ヨコナデ、凹線２条 頸部ヘラミガキ？	ヨコナデ ヘラケズリ	橙(7.5YR 6/6)	黒斑あり
637		? 不明	弥生	甕	口縁部ヨコナデ	ヨコナデ ヘラケズリ	黒褐 (10YR 3/1)	ススあり
638	ＢＥ５		弥生	甕	口縁部ヨコナデ 杯部ハケメ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	ススｰ？
639		南端層(Ⅱ) 溝中	弥生	甕	口縁部ヨコナデ ヘラミガキ？	体部ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	
640	ＢＥ５		弥生	甕	口縁部にヨコナデによる沈線２条？	ヨコナデ ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
641	ＢＥ５		弥生	甕	口縁部ヨコナデ 肩部ハケメ？	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	橙(7.5YR 7/6)	
642	Ｔ２		弥生	甕	ヨコナデ、口縁部にナデによる線 ハケメ	ヨコナデ、ナデ ヘラケズリ	浅黄橙 (10YR 8/4)	内面に黒斑？
643	第２Ｔ南	Pit16の崩壊	弥生	甕	口縁部ヨコナデ 剥落して調整不明	ヨコナデ、ナデ ヘラケズリ？	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
644		? 不明	弥生	甕	口縁部ヨコナデ、櫛描沈線７条 肩部ハケメ	ヨコナデ、ナデ？ ヘラケズリ	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	
645	ＩＤ51 Ｅ2-Ｓ18		弥生	甕	ナデ？ 剥落して調整不明	ナデ、ヘラケズリ？	橙(5YR 7/6)	
646	ＢＥ５		弥生	甕	口縁部ヨコナデ 肩部ナデ？調整不明	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	口縁部にわずかに黒斑あり
647		CL55－ Ｌ上半	弥生	高杯	口縁部ヨコナデ 杯部斜め方向ヘラミガキ	ヨコナデ 縦方向ヘラミガキ	橙(7.5ＹＲ 7/6)	
648	ＢＥ５		弥生	高杯	口縁部ﾅﾃﾞ後縦方向ヘラミガキ 杯部縦方向ヘラミガキ？	口縁部横方向ヘラミガキ 杯部縦方向ヘラミガキ	にぶい褐 (7.5YR 6/3)	粘土の接合痕
649	ＢＥ５		弥生	高杯	口縁部ナデ、縦方向ﾍﾗﾐｶﾞｷ、杯部縦方向 ﾍﾗﾐｶﾞｷ、脚柱部ﾍﾗﾐｶﾞｷ、脚裾部	杯部横・縦方向ﾍﾗﾐｶﾞｷ? 脚柱部ﾍﾗｹｽﾞﾘ、	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	粘土の接合痕
650	ＢＥ５		弥生	高杯	"口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ,杯部調整不明、脚部ﾊｹﾒ?" 脚部透かし孔３個確認、推定４方向	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、杯部縦方向 ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
651	B-SE		弥生	高杯	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、杯部ﾐｶﾞｷ?縦方向、脚部面 取り痕、ﾐｶﾞｷ斜め方向、ﾖｺﾅﾃﾞ、穿孔３個	剥落して調整不明瞭 絞り目後ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	橙(5YR 7/6) ～橙(2.5YR 6/6)	全体に剥落している 粘土の接合痕
652	ＢＥ５		弥生	高杯	口縁部ヨコナデ？、脚部ハケメ？後 ヘラミガキ、透かし孔４方向確認	ﾍﾗﾐｶﾞｷ、脚柱部ﾍﾗｹｽﾞﾘ 脚裾部ハケメ	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	
653	ＳＴ－Ｓ	青灰色粘土	弥生	高杯	脚部ヘラミガキ縦方向ハケメ 透かし孔１方向確認、個数不明	しぼり目、ナデ ヨコナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
654	Ｔ4（Ⅱ） 南端拡張区	溝中	弥生	高杯	脚部ヘラミガキ、透かし孔１方向確認 推定４方向、ハケメわずかに残る	ヘラケズリ しぼり目	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	
655	Ｔ２		弥生	鉢	ﾖｺﾅﾃﾞ、口縁部に浅い沈線1条、ナデ 残し、ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ、指ﾅﾃﾞ、ナデ	ヨコナデ、ナデ ケズリ後ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
656	64Ⅲ、67Ⅱ、21 50、50、46、ｸﾞﾗﾝﾄﾞ		弥生	鉢	口縁部～杯部ﾅﾃﾞ、指押ｻｴ、底部ﾍﾗﾐｶﾞｷ ハケメ少し残る	ナデ、ハケメ？ヘラミガキ？ 剥落して調整不明	灰白（10YR 8/2）～ にぶい黄橙(10YR7/2)	丹塗り痕跡　ススあり (丹）にぶい橙（2.5YR 6/4）
657		? 不明	弥生	鉢	口縁部ヨコナデ、強いヨコナデ 体部ナデ後ヘラミガキ	ヨコナデ、ナデ ヘラケズリ、ヘラミガキ？	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	黒斑あり
658		? 不明	弥生	鉢	口縁部ヨコナデ、凹線１条 ヘラミガキ	ヨコナデ ヘラケズリ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	ススあり
659	第２Ｔ南	Pit16の崩壊	弥生	鉢	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、体部ﾊｹﾒ？、指押ｻｴ ﾅﾃﾞ、剥落して調整不明	ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	底部歪みあり
660		? 不明	ﾐﾆﾁｭｱ 土器	台付鉢	指押サエ、ナデ	指押サエ、ナデ	灰黄褐 (10YR 6/2)	
661		? 不明	ﾐﾆﾁｭｱ 土器	鉢	指押サエ、ナデ	ナデ	灰白 (10YR 8/2)	
662		? 不明	弥生 手づくね?	鉢	指押サエ、ナデ	指押サエ、ナデ	灰黄褐 (10YR 5/2)	粘土の接合痕
663		?	須恵器	蓋	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	ヨコナデ	灰(6/　)	ロクロの回転不鮮明 反時計回り？
664	ＤＨ57	Ｓ層	須恵器	杯	口縁部ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 (N 7/　)	
665		津島3次 の箱	須恵器	壺	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、わずかにタタキ目あり	ヨコナデ、ナデ	灰(N 6/　)	
666	ＤＨ57	Ｓ層	須恵器	杯	高台部ヨコナデ、ナデ	タタキ目後ナデ	灰白 (N 7/　)	貼付高台
667	Ｂ区北側	土手内	土師器	椀	高台部ヨコナデ、ナデ？ 剥落して調整不明	ナデ	にぶい橙 (2.5YR 6/4)	貼付高台 内黒
668	第２Ｔ南	Pit16の崩壊	中世	椀	高台部ﾖｺﾅﾃﾞ ナデ	ナデ	灰白 (2.5YR 8/2)	貼付高台
669	Ｔ２	内ノ攪乱土	土師質 土器	椀	口縁部～体部ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	灰白 (10YR 8/2)	貼付高台 (早島式土器？)
670		? 不明	須恵器	こね鉢	口縁部ヨコナデ 自然釉	ヨコナデ ナデ	灰白 (N 7/　)	東播系

観　察　表

掲載番号	地　区	遺構・層位	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色　調	備　考
671		? 不明	須恵器	こね鉢	底部ヨコナデ ナデ	ヨコナデ、ナデ 線刻、使用痕跡あり	灰色	東播系
672		E層上面	弥生	壺	口縁部ヨコナデ、指押サエ後ナデ 段を形成	ヨコナデ 剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
673	G，D区	69E層	弥生	壺	口縁部剥落して調整不明瞭 ヨコナデ？	剥落して調整不明瞭 ヨコナデ？	橙(5YR 6/6)	粘土の接合痕
674	DC66	E層	弥生	壺	ナデ 貼付凸帯？	ナデ？	にぶい橙 (7.5YR 7/3)	粘土の接合痕
675	D区	西側E層 上半	弥生	壺	ヨコナデ、沈線3条 斜格子文	指押サエ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	粘土の接合痕
676	DI55	E層	弥生	壺	剥落して調整不明瞭 凹線3条、ナデ？	工具によるナデ？ﾐｶﾞｷ？ ナデ	褐灰(10YR 6/1) ~にぶい黄橙(10YR 7/3)	
677	D区 西拡張区		弥生	壺	肩部に凹線2条 ナデ	ナデ、指押サエ後ナデ	にぶい褐 (7.5YR 6/3)	外面スス付着、内面黒斑
678	BJ48	E上半	弥生	壺	ミガキか？ 横方向沈線4条	工具によるナデ 横方向ナデ	灰黄褐 (10YR 6/2)	粘土の接合痕
679	DC66	E層東溝	弥生	壺	肩部に段を形成 剥落して調整不明	剥落して調整不明	浅黄 (2.5Y 7/3)	粘土の接合痕
680	D区66	E層	弥生	壺	凹線2条	指押サエ後ナデ	灰白 (10YR 8/2)	粘土の接合痕
681	DC66	E層	弥生	甕	口縁部に刻目 ヨコナデ、頸部凹線1条	ヨコナデ	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	全体に剥落している 外面スス付着
682	D区	西拡張層 E層	弥生	甕	口縁部に刻目、ヨコナデ？ 頸部凹線2条	ヨコナデ？ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	内面黒斑
683		E層Pit	弥生	甕	口縁部に刻目、ヨコナデ 頸部に段を形成、粘土の接合	ヨコナデ 剥落して調整不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	
684		E層Pit	弥生	甕	口縁部に刻目 剥落して調整不明	剥落して調整不明	橙(7.5YR 7/6)	
685	DC66	E層東溝	弥生	甕	口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ 頸部にﾍﾗ描沈線3条、文様3条僅かに残る	ナデ？	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
686	DC65	E層	弥生		底部ナデ、指ナデ	ナデ	にぶい赤褐 (5YR 5/4)	
687		E層上面	弥生		指押サエ、底部ナデ？ 剥落して調整不明	ナデ 剥落して調整不明	橙(7.5YR 6/6)	
688	DH57	E層	弥生		底部剥落して調整不明瞭 少し面取りか？指押サエ？	剥落して調整不明瞭	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	
689	DH55	E層上面	弥生		底部剥落して調整不明瞭	工具によるナデ、ナデ	にぶい橙(5YR 7/4) ~にぶい黄橙(10YR 7/3)	内面黒斑
690	D？55	E層	弥生		底部横方向ミガキ	横・斜め方向ミガキ？	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	外面黒斑 粘土の接合痕

・掲載番号は、本報告書に掲載された土器の番号である。

・地区、遺構、層位の項目は土器に注記されているとおりを記入している。したがって、遺構名は旧名称であるから、新名称は新旧遺構名称対照表で確認すること。

表3　土製品一覧表

番号	地　区	遺　構	層位	器　種	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（g）	備　考
C1		P6		?	89.0	20.0	21.5	28.4	粘土紐状
C2		土壙１（第10土壙）	B－７上	円板形土製品	38.5	36.0	8.5	14.5	土器片転用
C3		土壙Ⅱ	B	円板形土製品	41.5	33.5	11.0	15.4	土器片転用
C4	DH57	溝３A	埋土	紡錘車		47.0	10.0	16.7	孔径7.3㎜
C5	103ⅢA-NW-4	P4		紡錘車		36.0	12.5	17.1	孔径6.0㎜
C6	津島３次の箱			土錘	61.5	14.0	14.0	10.3	孔径4.5㎜
C7		不明		?	49.0	37.0	25.0	－	

表4　石製品一覧表

番号	地　区	遺　構	層位	器　種	石材	長さ(㎜)	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（g）
S1		D1		円板形未製品	頁岩	73.0	75.0	15.0	104.8
S2		D1		石包丁未製品	頁岩	47.0	43.0	7.0	15.0
S3		D1		石包丁未製品	頁岩	81.0	43.0	7.5	30.4
S4		D1		石包丁未製品	頁岩	67.5	28.5	5.0	12.0
S5		D１		楔形石器	サヌカイト	12.5	12.5	4.0	0.7
S6		P６		砥石	細粒砂岩	141.5	168.0	125.0	268.0
S7		P６		調整のある剥片	サヌカイト	54.0	18.0	50.5	35.5
S8		P６		スクレイパー	サヌカイト	45.5	20.5	7.5	8.0
S9		P６		石鏃	サヌカイト	15.0	16.5	2.5	0.6
S10		土壙Ⅳ		楔形石器	サヌカイト	25.5	32.5	6.5	6.2
S11	DH55	土壙１（第10土壙）		石包丁未製品	結晶片岩	131.0	81.5	11.5	170.1
S12	DH55	土壙１（第10土壙）	C10上層	スクレイパー	サヌカイト	33.0	25.0	5.0	5.0
S13		D２		石包丁未製品	頁岩	57.5	61.0	6.0	29.7
S14		D２		石鏃	サヌカイト	18.5	19.0	3.5	1.1
S15		P４		石鏃	サヌカイト	23.0	19.5	3.0	1.1
S16		P４		楔形石器	サヌカイト	29.0	22.5	11.0	10.0
S17	A－NW－４	P４		楔形石器	サヌカイト	27.5	19.0	6.5	3.3
S18		P１		石包丁未製品	頁岩	61.0	44.0	7.0	26.9
S19	DI55	第11土壙B		スクレイパー	サヌカイト	21.5	44.0	6.0	6.4
S20	DI55	第11土壙B		スクレイパー	サヌカイト	35.5	29.0	5.0	6.7
S21		P２		スクレイパー	サヌカイト	40.5	27.5	6.0	7.1
S22		P２（D２）		スクレイパー	サヌカイト	44.0	30.0	7.0	7.9
S23		P２		スクレイパー	サヌカイト	40.5	38.0	7.0	13.0
S24		P２		スクレイパー	サヌカイト	40.0	34.0	8.7	12.5
S25		P２		石鍬？	結晶片岩	69.0	77.0	18.5	111.6
S26		P２		石包丁未製品	頁岩	39.5	46.0	6.0	12.8
S27	ANW	P５		円板形未製品	頁岩	96.0	73.5	13.0	117.3
S28	ANW	P5		円板形未製品	頁岩	53.0	63.0	14.5	68.5
S29	ANW	P5		石包丁未製品	頁岩	74.5	31.0	6.7	15.4
S30	D5			石鏃	サヌカイト	39.5	12.5	5.5	2.8
S31		P30		円板形未製品	頁岩	35.5	55.5	11.0	25.5
S32	CN55	LP11		円板形未製品	頁岩	52.0	64.0	7.5	33.8

観 察 表

番号	地 区	遺 構	層位	器 種	石材	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
S33	CN55	LP11		スクレイパー	サヌカイト	58.0	38.5	7.0	15.3
S34	DH56	溝02		円板形未製品	頁岩	7.0	48.0	51.0	23.1
S35	DH56	溝02		円板形未製品	頁岩	10.0	73.0	62.0	53.0
S36	DH56	溝02		円板形未製品	頁岩		82.5	7.5	75.4
S37	CN55	斜前期溝		錐	サヌカイト	39.5	8.0	5.5	2.2
S38	CN55	斜前期溝		調整のある剥片	サヌカイト	33.0	25.0	5.5	3.4
S39	CN55	斜前期溝		石鏃	サヌカイト	19.0	20.5	3.0	1.3
S40	CM59		CM下半(C3)	敲石	花崗岩	62.0	67.0	47.0	252.4
S41	CM59		CM下半(C3)	楔形石器	サヌカイト	25.0	21.5	6.0	3.6
S42	CM59		CM下半(C3)	調整のある剥片	サヌカイト	24.5	26.0	7.5	3.8
S43		住居1号CQ60		調整のある剥片	サヌカイト	69.0	54.5	21.0	68.7
S44	DI55		D	楔形石器	サヌカイト	18.0	29.0	4.5	2.8
S45	DI55		D	石鏃	サヌカイト	35.0	13.0	7.0	2.3
S46	DF56		D層	調整のある剥片	サヌカイト	39.5	21.5	8.0	7.4
S47	DI55		D層	調整のある剥片	サヌカイト	28.0	19.0	7.0	4.1
S48	西側拡張区		D層下部	スクレイパー	サヌカイト	85.5	72.0	19.0	111.0
S49			D層下半	調整のある剥片	サヌカイト	23.0	17.0	3.5	1.2
S50	DF58		D層B	調整のある剥片	サヌカイト	29.5	31.0	6.0	7.6
S51	DC68		E層上半	石包丁未製品	頁岩	62.5	48.5	4.7	18.6
S52	D区西拡張区		E層	スクレイパー	サヌカイト	56.5	50.0	17.0	46.5
S53	CN55		E層上	スクレイパー	サヌカイト	44.5	32.0	9.0	13.3
S54	DB56		E層上面	調整のある破片	サヌカイト	51.5	25.5	5.5	7.3
S55	DI54		E層	調整のある剥片	サヌカイト	23.5	20.5	4.0	2.2
S56	CM53		P1層	石包丁未製品	結晶片岩	69.0	64.0	10.0	53.5
S57	A－NW－1			石鏃	サヌカイト	37.5	14.5	5.5	2.7
S58	A-NW-1			石包丁未製品	頁岩	82.0	47.0	14.0	78.6
S59	B地区(鬣)トよこ			石鏃	サヌカイト	21.0	16.0	3.3	1.0
S60	BSW1表面			石鏃	サヌカイト	14.0	13.0	2.0	0.3
S61	A－NW－2			石包丁未製品？	頁岩	121.0	49.5	16.5	139.4
S62	NW－1			円板形未製品？	頁岩	29.5	49.5	6.4	12.4
S63	A－N			石包丁未製品	頁岩	62.0	48.0	7.5	33.9
S64	T2			石鏃	サヌカイト	25.5	18.0	3.6	1.4
S65	B－W2			石包丁	頁岩	70.5	39.0	6.0	18.7
S66	CP58	穴2		石錐	サヌカイト	16.0	18.5	3.6	1.0
S67	B地区S－E			石錐	サヌカイト	37.5	9.5	5.2	1.5
S68	A－NW－3			スクレイパー	サヌカイト	45.5	36.5	7.0	9.7
S69	第2ﾄﾚﾝﾁ26～30G		黒色土層	調整のある剥片	サヌカイト	70.0	55.5	15.0	58.5
S70	B地区S－E			スクレイパー	サヌカイト	56.0	46.0	5.5	15.6
S71	1Tの北部			調整のある破片	サヌカイト	43.5	36.0	6.0	9.7
S72	AA′			すれ石	サヌカイト	35.5	24.0	4.0	4.3
S73	B地区S－2			紡錘車	頁岩	48.5	7.5	8.5	34.4
S74	T2－E 20-22		黒色Silt層	スクレイパー	サヌカイト	65.5	63.0	13.0	46.6
S75	CO50清掃			調整のある破片	サヌカイト	49.0	40.5	7.5	14.3
S76	T2の南部			使用痕のある破片	サヌカイト	39.0	30.0	7.0	4.9
S77	B地区S－2			管玉	碧玉	4.0	2.0	23.7	0.54
S78	不明			石鏃	サヌカイト	21.5	18.5	3.7	1.0
S79	不明			石鏃	サヌカイト	25.5	15.5	3.5	0.9
S80				石鏃	サヌカイト	25.0	16.5	4.5	2.0

番号	地　区	遺　構	層位	器　　種	石材	長さ(mm)	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）
S81	不明			楔形石器	サヌカイト	27.0	31.5	9.0	7.8
S82	不明			楔形石器	サヌカイト	31.5	29.5	9.0	8.1
S83	不明			楔形石器	サヌカイト	18.0	50.0	13.0	10.2
S84	不明			楔形石器	サヌカイト	16.0	40.5	13.5	11.3
S85	不明			調整のある破片	サヌカイト	30.0	24.5	3.5	2.8
S86	不明			調整のある破片	サヌカイト	37.0	32.0	4.3	4.7
S87	不明			石包丁未製品？	頁岩	122.0	83.0	20.0	248.3
S88	不明			石製円板未製品	頁岩	74.0	80.0	8.5	69.6
S89	不明			石包丁未製品	頁岩	52.0	45.5	9.0	28.0
S90	不明			敲石	花崗岩	103.0	95.0	49.0	627.5
S91	不明			石包丁未製品	結晶片岩	61.5	47.0	9.0	34.7
S92	土壙10付近			砥石		146.0	70.0	54.0	759.5
S93		pit25	E層・F層？	砥石		97.0	31.5	35.0	107.1
S94				石鏃	サヌカイト	20.0	12.5	3.8	0.8

表5　鉄製品一覧表

No.	遺　構	層　　位	器　　種	長さ(mm)	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）
M1			のみ状鉄器	〔160.5〕	〔21.5〕	〔10.0〕	
M2			大刀	〔814.5〕	〔43.0〕	〔16.0〕	

表6　新旧遺構名称対照表

新遺構名	旧遺構名				実測図の有無		遺物との照合	備考
	遺構実測図	調査概要	調査概報	発掘ニュース	平面(位置)図	個別図		
竪穴住居1		円形住居址状の落込み	住居址	H1	奈文研	なし	不明	弥生後期
竪穴住居2			建物Ⅰ		奈文研	なし	不明	弥生前期
掘立柱建物1			建物Ⅳ		奈文研	県	不明	弥生前期
掘立柱建物2			建物Ⅲ		奈文研	なし	不明	弥生前期
掘立柱建物3			建物Ⅱ		奈文研	なし	不明	弥生前期
壁立建物1			建物（小屋）		奈文研	なし	不明	弥生前期
舟形土壙1	D1	溝状遺構	舟形土壙	D1	奈文研	県		弥生前期
舟形土壙2	P6		土壙Ⅵ	P6	奈文研	県		弥生前期
舟形土壙3			土壙Ⅰ		奈文研	県		第10土壙　弥生前期
舟形土壙4	D2	溝状遺構	舟形土壙	D2	奈文研	県		
舟形土壙5	P4		土壙Ⅳ	P4	奈文研	県		弥生前期
土壙墓1		墓壙状	墓壙状	墓壙群？	県ほか略図	なし	不明	古代
土壙墓2		墓壙状	墓壙状	墓壙群？	県ほか略図	なし	不明	古代
土壙列1			条理		奈文研	なし	不明	古代
土壙列2						なし	不明	
土壙1					奈文研	なし	不明	
土壙2			土壙Ⅸ		奈文研	なし	不明	CL55　pit？
土壙3					奈文研	なし	不明	
土壙4					奈文研	なし	不明	
土壙5	前期土壙				奈文研	県	不明	
土壙6					県	県	不明	
土壙7					奈文研	なし	不明	
土壙8					奈文研	なし	不明	
土壙9					奈文研	なし	不明	
土壙10					奈文研	なし	不明	
土壙11					奈文研	なし	不明	
土壙12					奈文研	なし	不明	
土壙13					奈文研	なし	不明	
土壙14	P30				なし	県		
土壙15	pit26	祭祀遺構	祭祀遺構	祭祀穴群	県	なし	不明	祭祀穴群（県史）か？
土壙16	pit25	祭祀遺構	祭祀遺構		県	なし	不明	
土壙17	pit24	祭祀遺構	祭祀遺構	祭祀穴群	県	なし	不明	祭祀穴群（県史）か？
土壙18	pit23	祭祀遺構	祭祀遺構	祭祀穴群	県	なし	不明	
土壙19	pit22	祭祀遺構	祭祀遺構	祭祀穴群	県	なし	不明	
土壙20					県史の略図	なし		P21（県史）
土壙21					なし	県		P20　位置不明
土壙22				P22か？	県史の略図	県		P19（県史）か？
土壙23	P18			P18か？	県史の略図	なし		P18（県史）か？
土壙24	P16			P16か？	奈文研、県史の略図	県		P16（県史）か？
土壙25	P15			P15か？	県史の略図	県		P15（県史）か？
土壙26	P13（原図）			P13か？	県、県史の略図	県		P13（県史）か？
土壙27	P12（原図）			P12か？	県、県史の略図	県		P12（県史）か？
土壙28	P11（原図）			P11か？	奈文研	県		P11（県史）か？
土壙29	第10pit			P11か？	県史の略図	県		P10（県史）か？
土壙30	第9pit			P9か？	県史の略図	県		P9（県史）か？
土壙31				P5か？	県史の略図	なし		P5（県史）か？
土壙32	P1			P1	奈文研	県		
土壙33	P3		土壙Ⅴ	P3	奈文研	県		
土壙34			土壙Ⅱ		奈文研	なし		第11土壙
土壙35	第1土壙				奈文研	県	不明	第10土壙
土壙36	P2			P2	奈文研	県		
土壙37			土壙Ⅲ		奈文研	なし	不明	第9土壙
炉1			炉		奈文研	なし	不明	
炉2					奈文研	なし	不明	
炉3				炉址	県史の略図	なし	不明	炉址（県史）か？
溝1				D8か？	奈文研	なし	不明	D8・古墳時代（県史）
溝2					奈文研	なし	不明	
溝3	D3			D3	奈文研	県	不明	

新遺構名	旧遺構名				実測図の有無		遺物との照合	備考
	遺構実測図	調査概要	調査概報	発掘ニュース	平面(位置)図	個別図		
溝4	D4			D4	奈文研	県	不明	弥生後期
溝5	D7			D7	奈文研	県	不明	弥生後期
溝6	D5			D5	奈文研	県	不明	古墳時代
溝7	D6			D6	奈文研	県	不明	弥生中期（仁伍）
溝8					奈文研	なし	不明	
溝9					奈文研	なし	不明	
溝10					奈文研	なし	不明	
溝11					奈文研	なし	不明	
溝12			溝Ⅴ		奈文研	なし	不明	
溝13			溝Ⅳ		奈文研	なし		現説付図溝ⅢC
溝14			溝ⅢB		奈文研	なし		
溝15			溝ⅢA		奈文研	なし		
溝16			溝Ⅱ		奈文研	なし		
溝17			溝Ⅰ		奈文研	なし		
矢板状の杭痕跡1		矢板状の柵				なし	不明	弥生前期
矢板状の杭痕跡2		矢板状の柵		矢板の跡	岡大	岡大	不明	弥生前期
杭痕跡1		Ⅳトレンチ南端の杭列			倉敷考古館	倉敷	不明	
杭痕跡2							不明	
杭痕跡3							不明	
杭痕跡4					奈文研	なし	不明	
杭列1		第Ⅳトレンチ南端の杭列		杭列	なし	県	不明	弥生前・中期
杭列2					奈文研	なし	不明	弥生中期
杭痕跡5		第Ⅲトレンチ3の杭痕						

・新遺構名は本報告書作成に際し付けた名称である。

・旧遺構名は下記の資料に付けられていた名称である。

遺構実測図…・個々の遺構実測図

調査概要…・…岡山県津島遺跡発掘調査団「岡山県津島遺跡調査概要」『岡山県津島遺跡調査概報』（岡山県教育委員会）昭和45年3月

調査概報…・…昭和44年津島遺跡調査団「昭和44年岡山県津島遺跡調査概報」昭和44．5．17　『岡山県津島遺跡調査概報』（岡山県教育委員会）昭和45年3月

現説資料…・・・昭和44年津島遺跡調査団『津島遺跡昭和44年調査現地説明資料』昭和44．4．5

発掘ニュース・・津島遺跡発掘調査団『津島遺跡発掘ニュース』2　1968年9月19日

・実測図の有無

平面（位置）図は全体図（遺構配置図）作成のための図である。

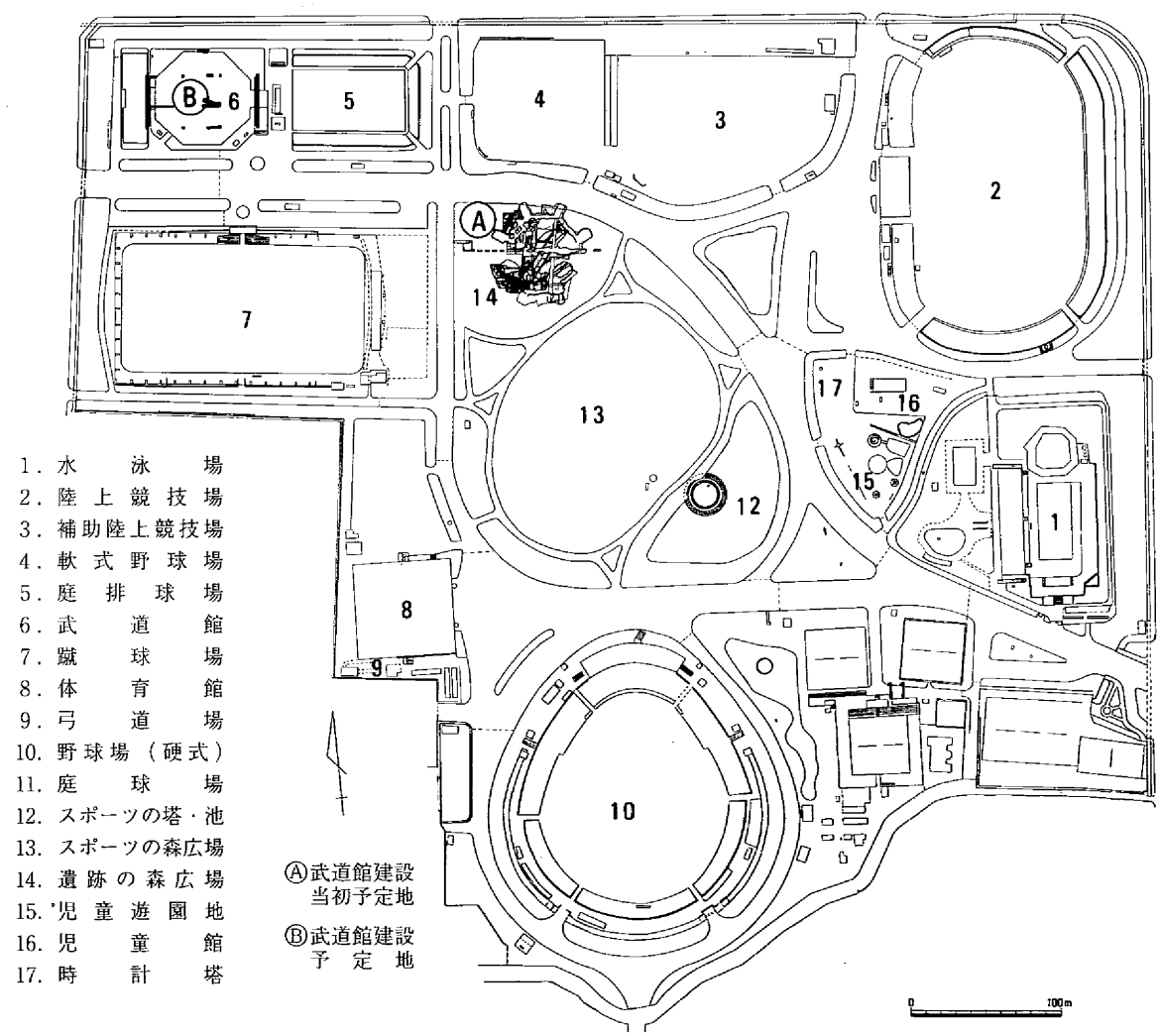
個別図は個々の遺構実測図（平面・横断面等）である。

・遺物との照合は、遺構名と土器の注記名を検討し、両者が合致するものを正しいものとし、それ以外は不明とした。

付載　武道館建設予定地の確認調査

1　調査の契機および経過

昭和43年１月12日の武道館建設場所の決定発表、そして５月18日の武道館当初予定地における弥生時代土器片の発見に端を発した津島武道館事件（註１）は、岡山県教育委員会、津島遺跡発掘調査団、津島遺跡発掘調査委員会による、第１次～第３次の発掘調査を経て、昭和44年８月１日の文化庁通知「津島遺跡について」により新たな局面に向う。その通知内容は「岡山県総合グランド内における武道館建設予定地にかかる発掘調査成果を慎重に検討した結果、当該予定地は弥生時代前期の重要な遺跡であることが判明しましたので、当該個所を含む地域について、史跡に指定すべきものと判断いたしました。ついては、貴教育委員会におかれては、武道館は現予定地をさけられ、同グランド内に建設する場合は、その西北隅に変更して建設されるよう要望します。なお、工事の実施にあたっては、事前調査を実施してくださるようお願いします。」と言うものであった。



第１図　岡山県総合グラウンド調査位置図（１／5,000）

2　調査の概要

岡山県教育委員会は文化庁通知を受け、調査員３名でもって昭和44年８月18日から10月10日まで確認調査を実施した。当該地は総合グラウンドの西北隅にあたり、テニスコートとして利用されていた場所である。調査は東西82m、南方41mのテニスコート敷地内周縁に８か所（B1～B8）のグリッド(2.0×2.0m)、それらを結ぶ格好で８か所（T１～T８）のトレンチ（1.0×16m～3.0×33m）を第２図のように設定し、浅い所で150cm、深い所で約250cmまでを掘削し、土層の観察ならびに遺構、遺物の具体的な把握に努めた。調査面積は323m²である。なお、T２～６・８のトレンチに関しては雨等による崩壊のため記録にとどめることが不可能であった。ここではその他のグリッド、トレンチについての土層を中心とする概要をのべる。

Ｂ２（第３図）

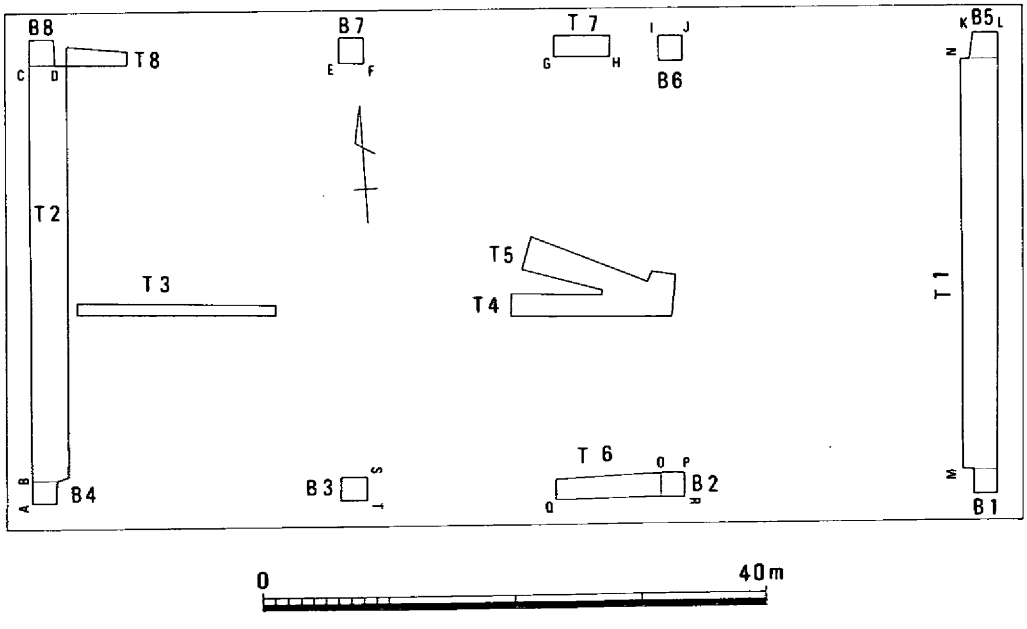
テニスコートの海抜高は約345cmをはかり、そこより下位50cmまでが石炭ガラ、真砂土を使用した造成が行なわれている。第４層～第６層が明治40年以前（註２）の水田、畑耕作土の可能性があり、コート内全域に認められる。第10層の微砂を除いた第９層から第15層まで粘土が基調となっており、色調は第９層の灰白色粘土から下位に向い灰褐色、灰色、黒色と変化をしている。第15層が黒色粘土層となっている。

居住域に関係する遺構は認められないが、各層が水田に利用された可能性が考えられ、水田域として機能していたようである。遺物は第９層下部から弥生時代前期の土器小片が出土している。

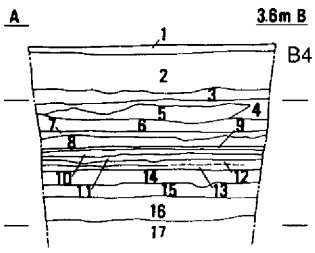
Ｂ３（第３図）

Ｂ２の西側約23mに位置し、表土面から215cmを掘り下げている。基本的な層序はＢ２と大差は認められない。第１層から第12層まではＢ２と同一層であるが、第９・10層間にはＢ２でみられた第10層（洪水砂）が認められない。ほぼ水平な堆積ではあるが、第11・12層はＢ２の同一層である第12・13層より５～10cm低く、西方に緩かに傾斜していることが判明した。

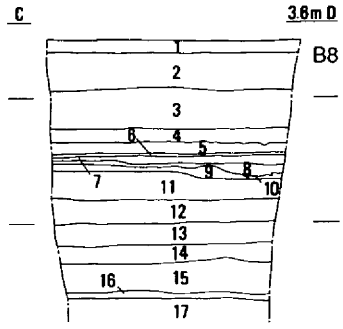
遺物は第５層から弥生時代前期の土器小片、第４・５層から備前焼、伊万里焼が出土している。



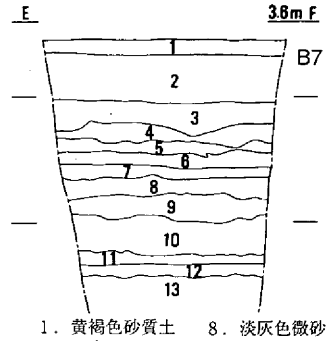
第２図　武道館建設予定地確認調査トレンチ位置図（S=１／600）



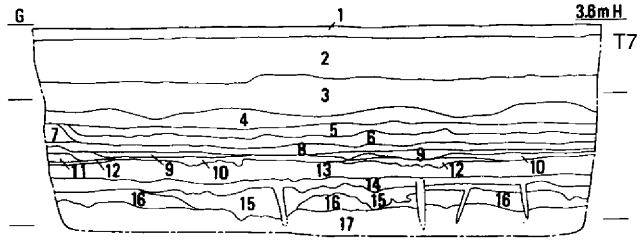
1．黄褐色砂質土
2．石炭ガラ
3．茶褐色粘土
4．黄褐色粘土
5．石炭ガラ
6．明茶褐色微砂
7．暗茶褐色微砂
8．耕作土
9．酸化鉄
10．淡灰茶褐色土
11．茶褐色土
12．茶褐色土（Mn）
13．茶褐色土
14．淡灰茶褐色土
15．灰茶褐色土
16．暗灰茶褐色土
17．濃茶褐色粘土



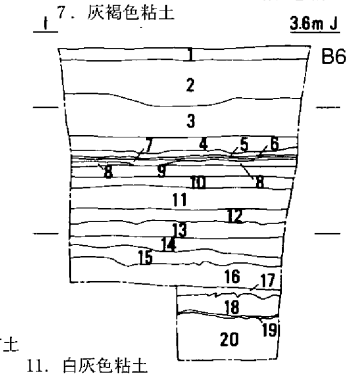
1．黄褐色砂質土
2．石炭ガラ
3．褐色砂礫土
4．褐色砂質粘質土
5．灰色粘土
6．酸化鉄
7．淡茶褐色土
8．茶褐色土
9．淡灰褐色微砂
10．細砂
11．淡灰褐色粘土
12．微砂まじり粘土
13．淡灰色粘土
14．紫系暗灰色粘土
15．暗灰色粘土
16．黒色粘土
17．灰色粘土



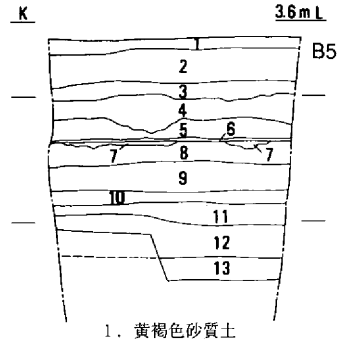
1．黄褐色砂質土
2．石炭ガラ
3．褐色砂礫土
4．灰色微砂
5．褐色微砂粘質土
6．灰色粘土
7．灰褐色粘土
8．淡灰色微砂
9．灰褐色微砂
10．紫暗灰色粘土
11．暗灰色粘土
12．黒色粘土
13．暗灰色粘土



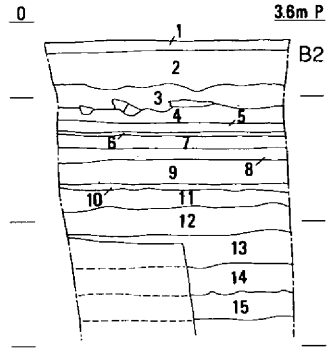
1．茶褐色砂質土
2．石炭ガラ
3．褐色砂礫土
4．灰褐色細砂
5．黄褐色細砂
6．淡灰色細砂まじり粘土
7．鉄はん，マンガン大結核
8．灰褐色粗砂まじり粘土
9．灰褐色粗砂まじり粘土
10．淡灰色細砂まじり粘土
11．砂
12．淡灰色砂
13．淡灰色微砂まじり粘土
14．淡灰色細砂まじり微砂
15．淡灰色微砂まじり細砂
16．淡灰色微砂まじり粘土
17．灰色粘土



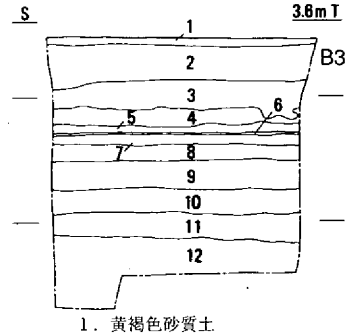
1．黄褐色砂質土
2．石炭ガラ
3．褐色砂礫土
4．灰褐色微砂粘質土
5．灰色粘土
6．灰褐色粘質土
7．黄灰褐色砂土
8．灰褐色粘土（Mn）
9．灰褐色微砂粘土
10．黄灰色粘土
11．白灰色粘土
12．灰褐色粘質微砂
13．淡灰褐色粘土
14．紫灰色粘土
15．紫暗灰色粘土
16．暗灰色粘土
17．黒色粘土
18．暗灰色微砂粘土
19．灰色細砂
20．灰色微砂



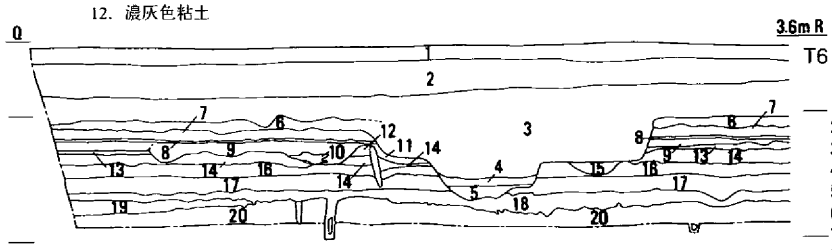
1．黄褐色砂質土
2．石炭ガラ
4．褐色砂礫土
5．灰褐色細砂まじり微砂
6．酸化鉄
8．暗茶色土（Mn）
9．灰茶色土
10．淡灰茶色土
11．微砂質白灰粘土
12．濃灰色粘土



1．黄褐色砂質土
2．石炭ガラ
3．石炭ガラ
4．褐色砂礫土
5．褐灰色粘質土
6．黄色粘質土
7．淡茶褐色砂混り粘土
9．灰白粘土色
10．微砂
11．灰褐色粘土微砂混入
12．暗灰褐色粘土（Mn. Fe）
13．灰色粘土
14．灰色粘土
15．黒色粘土



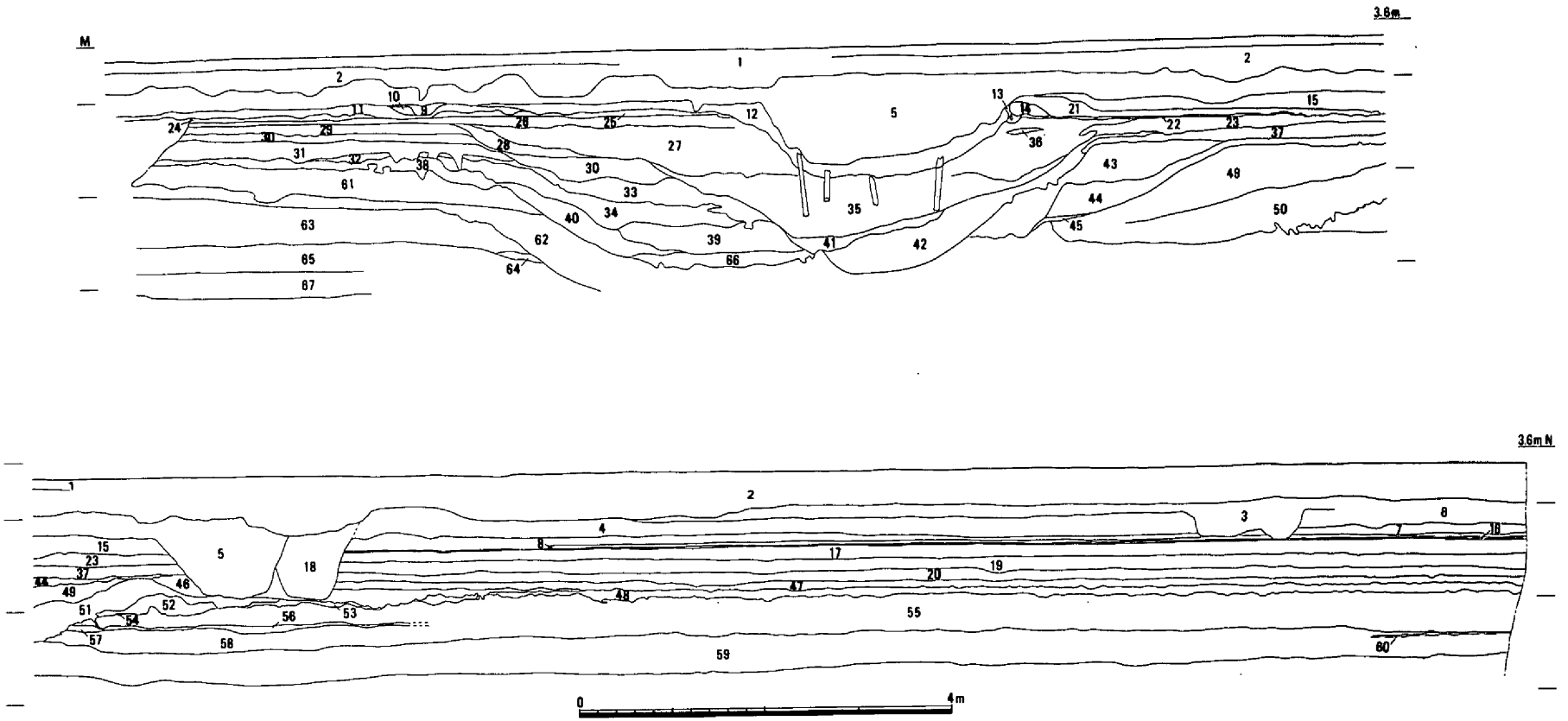
1．黄褐色砂質土
2．石炭ガラ
3．茶褐色土（土器片）
4．灰褐色微砂まじり土
5．灰色微砂まじり粘質土
6．黄褐色土（Fe）
7．褐色土（Mn）
8．淡褐色微砂まじり粘土
9．灰褐色粘土
10．淡黄灰色粘土
11．淡暗灰色粘土
12．黄灰色粘土



1．黄褐色砂質土
2．石炭ガラ
3．褐色砂礫土
4．灰色やや微砂
5．灰褐色粘土
6．褐色細砂
7．灰色粘土
8．黄褐色土（Fe）
9．黄灰色やや微砂
10．細砂ブロック
11．灰色微砂質粘土
12．灰褐色粘土（Mn）
13．褐色やや微砂
14．明黄灰色微砂質粘土
15．灰色微砂質粘土
16．灰色微砂
17．灰色粘土（Mn）
18．微砂
19．淡灰色微砂
20．灰色粘土（Mn）

0　2m

第3図　A～L・O～Tトレンチ断面（S=1／60）



1．黄褐色砂質土
2．石炭ガラ
3．石炭ガラ
4．褐色砂礫土
5．撹乱
6．褐色砂礫土
7．褐灰色粘質土
8．灰色粘土
9．灰色微砂
11．灰色微砂
12．灰色砂
13．山土落込み
15．灰褐色微砂
16．黄色粘質土
17．淡茶褐色砂混り粘土
18．シバと花崗土の互層
19．灰色粘土（Mn）
20．灰色粘土
21．灰色粗砂まじり粘土
22．黄褐色粘土（Fe）
23．撹乱
24．灰色細砂まじり粘土
25．青灰色粘土まじり微砂
26．酸化鉄層黄褐色粘土
27．黄褐色粗砂まじり粘土
29．灰色微砂まじり粘土
30．淡灰色粘土
31．灰色粘土
33．灰色微砂
34．暗灰色微砂
35．青灰色粘土
36．褐色砂礫土
37．灰色粘土
38．褐色微砂
39．灰黒色微砂（植物）
40．暗灰色粘土まじり微砂
41．青灰色粘土まじり微砂
42．暗灰色微砂
43．暗灰色微砂
44．暗灰色微砂
45．粗砂
46．淡褐色細砂
47．白灰色微砂（Mn）
48．微砂質白灰色粘土
49．灰色細砂
50．暗灰色細砂
51．淡灰色細砂
54．細砂のブロック
55．紫系灰色粘土
56．暗灰褐色粘土
57．暗灰褐色粘土
58．灰色粘土
59．黒色粘土
60．細砂ブロック
61．灰色粘土
62．黄褐色土
63．褐色細砂
64．炭
65．青灰色微砂
66．灰色粗砂
67．暗灰色粘土

第４図　Ｍ～Ｎ南北トレンチ断面（S=１／70）

Ｂ４（第３図）

Ｂ３の西側約25ｍに位置し、テニスコートの西南隅にあたる。表土面から約160cmの掘り下げを行い、海抜高約270cmで明治40年頃の水田耕作土を確認する。そこより上位はＢ２・３等と同様に造成土である。第14～第17層はＢ３にみられる第８～第11層に匹敵すると考えられ、Ｂ３よりも約5.0cm下降している。Ｂ２～Ｂ４の土層形状から東側が少し高く、西側に向って緩かに傾斜する地形がよみとれる。

遺物は第９層下位で早島式土器の椀小片、土鍋小片等が出土している。

Ｂ５（第３図）

テニスコートの東北隅に位置し、南北トレンチＴ１の北側に接する。表土面から約65cmにて明治40年頃の水田耕作土上面に達し、海抜高は、284cmをはかり、西南側のＢ２に比べると約5.0cm低位となる。下位の第８～第13層はＢ２の第８～第13層に対応する可能性があり、第９層はＢ２・３・５と同じ海抜高150cmを示している。

遺物は第７層より下位で土師器の小片がみられたのみである。

Ｂ６（第３図）

Ｂ５から西側に25ｍ、南側のＢ２とは35ｍの距離をおいて対面する。表土面から約250cmと最も掘り下げたグリッドであり、底部海抜高100cmをはかる。ここでは第６層の鉄分、第７層のマンガンの集積が顕著であり、明治時代の乾田構造を良好に留めている。Ｂ５と比べると第14層まではほぼ同様で西に緩かに傾斜をしているが、第15層以下が東に下降する状況を呈している。海抜高150～158cm、幅約5.0cmの黒色粘土層中には炭粒が含まれている。

Ｂ７（第３図）

Ｂ６の西側25ｍに位置する。Ｂ６との層序に大差は認められないが、各層はＢ６に向い緩かに傾斜をしている。海抜高167cmをはかる第12層はＢ６の第17層と同じく黒色粘土中に炭粒を含み、同質の層と考えられるが、Ｂ６第17層より約10cm高所に位置している。

遺物はB5・6と同じく土師器小片のみである。

Ｂ８（第３図）

Ｂ７の西側25ｍに位置する。表土面から明治時代の水田までの80cmが造成土であり、水田層下位の各層もＢ７の土層との大差は認められない。海抜高145cmをはかる位置に、ここでも炭粒を含む第16層黒色粘土層が所在する。この黒色粘土層はＢ６の黒色粘土層より21cm低く、Ｂ５の黒色粘土層より11cm低い所にある。Ｂ６の黒色粘土層が最も高く、海抜高166～168cmをはかる。

遺物は早島式土器小片、備前焼の小片が出土している。

Ｔ１（第４図）

テニスコート東側に北端のＢ５、南端のＢ１をつなげた格好で設定された3.0×32.5ｍをはかる大形の南北トレンチである。調査面積に比例し、遺構・遺物の数が少し多くなっている。

遺構は東西に貫流する溝が認められ、それらの位置はＴ１北端から約22ｍ南に下がった付近を中心に集中する傾向が認められる。その断面形状は下位の大規模な自然河道と考えられる凹部の切り合い、重複の上位に河道を一部踏襲する状態で溝が掘削されている。河道および溝の北肩口は他のグリッドにみられる土層を切断し、南肩口は河道内堆積層を切断して溝の掘り方としているようである。

溝は上部から、第12層を溝内下層堆積土とする幅2.8ｍ、深さ0.65ｍの近代溝（明治40年以前）、ほ

ぼ同一場所の下位で第42層を溝内下層堆積層とする幅4.9m、深さ1.25mの中世～近世溝、若干南に寄り第66層を溝内下層堆積土とする幅9.0m、深さ1.15mの溝に大別できる。条里の坪境となる溝群と考えられる。

遺物は中世～近世溝から備前焼摺鉢、土鍋の小片、最下層溝第39層灰黒色微砂中から内黒椀が出土している。この溝内からは弥生時代後期後半の高杯、奈良時代の須恵器・土師器、瓦器、早島式土器等の小片が認められた。トレンチ内からは石鏃、砥石、弥生時代前期、古墳時代中期、中世の備前焼、近世の陶磁器等々の土器小片が出土している。

ちなみに、B2・B5～B8で見られた黒色粘土層はT1では第59層の下層に対応するものと考えられる。

T6・7（第3図）

コート中央線の南・北側に設けた東西トレンチである。掘削深度が約160cmと浅いために下層については不明であるが、上層の基本層序はT1の南端部（河道）を除く他のグリッド、トレンチとほぼ一致をする。T6の第18・19層の洪水砂がT7の第14・15層、そして第20層のマンガン粒を含む灰色粘土がT7の第17層に対応している。これらの土層から判断すると、地形は北側に向って緩かに下降をしている。また、両トレンチともに海抜高230cm付近より木質を残す杭痕跡が認められる。T6の溝西肩部にもみられることから、両トレンチをつないだ南北線上に溝護岸として打込まれた可能性も考えられる。

3　調査の結果

津島遺跡は旭川の右岸に形成された沖積地に所在し、岡山県総合グラウンドは西側に京山、東側に南流する旭川とのほぼ中間に位置する。調査対象となったテニスコートはグラウンド内の西北にあたる。従前のいずみ町派出所等の建設においても遺構、遺物の発見はほとんどなく、土層の堆積状況より低地と推定されていた場所である。しかし、周辺地形、文献等（註3）から備前国御野郡の津島郷楠本里と伊福郷高山里の南北境の存在が指摘されていたところでもある。

さて、テニスコート内（3,360m²）のトレンチ調査（323m²）では、トレンチ1・2の中央より少し南寄り部分に集中する数条の溝断面を検出しており、形状と位置関係から郷境の溝になる可能性が考えられる。すべてが東西方向に配置されたと考えられる溝であり、溝の北側肩口そのままが生活域に継続し、T1では南側肩口が河道堆積層を掘削して造られている。具体的に何条の溝が機能していたかは不明であるが、幅約13m内で規模のそれぞれ異なる溝が上下、左右に少しづつ位置を変化させながら近代まで存在している。溝の幅は2.8～9.0m、深さ0.65～1.25mの規模である。これらは中世から近代まで、あるいはさらに古くから踏襲されていた可能性も考えられるが、掘削時期は明らかにできていない。なお、海抜高90cm以下については調査掘削が及んでいないため、古い溝であるのか、あるいは河道であるのかは不明であり、時期についても把握できていない。

次に、土層断面の観察から古地形の復元に目を向けてみる。まず、本調査区のT1内南側にみられる自然河道とおぼしき場所以外の層序に大きな差は認められない。その概要は上層より表土、石炭ガラ、真砂土等の盛土による平均70cmの造成土が明治40年の田、畑、溝等の生活跡を被覆している。表土の海抜高は約350cmにてほぼ平坦面を形成している。造成土より下部の土層は水平堆積の形状をとどめており、灰色系の粘土が主体となっている。一部の木杭の痕跡、土層の凹凸がみられるが、居住

域の証拠となる竪穴住居、土壙等の遺構断面は認められない。しかし、海抜約160cmから明治水田層の間にみられる粘土の水平堆積層中には、鉄分とマンガンの薄い層序が認められ、乾田の構造を示している。さらに、条里溝の存在等からも周辺は水田域として利用されていた可能性が高く、また海抜高160cmより下位の海抜140cm前後まで粘土層を認めることができる。これらの粘土層間に時期は不明であるが、洪水により同時に堆積した微砂層がみられる。Ｔ１の第38・第47層、Ｂ２の第10層、Ｂ６の第12層、Ｔ６の第18・第19層、Ｔ７の第14・第15層、Ｂ８の第９層である。Ｂ３・４にはこの微砂層は認められない。微砂層を基準に地形の高低差を求めると、調査区の南辺では微砂層の堆積のない西側が最も高く、東側（海抜230cm）に向って緩かに下降している。北辺でも西側（海抜248cm）が高く、東側（海抜226cm）に向って緩かに下降しており、その差22cmをはかる。全体では調査区の西南部が高所にあたり、そこより北・東に下降し東北部に向う状況が看取できる。この微砂層より下層でも同一層と考えられる黒色粘土層がみられ、Ｔ１の第59層の下位層、Ｂ２の第15層、Ｂ６の第17層、Ｂ７の第12層、Ｂ８の第16層等である。調査区北辺ではＢ７（海抜168cm）が最も高く、西側のＢ８（海抜148cm）と東側のＢ６（海抜159cm）・Ｔ１（海抜140cm）へと緩かに下降している。黒色粘土層の場合は上位の微砂層の傾きと異なり西北が高く、東南部に向う状況が看取できる。大きな比高差ではないが、各時代によって地形の変化が存在し、弥生時代の前後は東南部が低く、それ以降の時代は東北部が低くなる状況が認められる。

当該地域は弥生時代から近代まで主に水田として利用されていた場所であろう。（高畑）

註

註１　近藤義郎「津島遺跡と武道館事件」『岡山史学』22　岡山史学会　1968

註２　宗森英之「軍隊と警察」『岡山県史　近代Ⅰ』岡山県　1988

日露戦争中には多数の部隊の臨時編成が行なわれたが、戦後これらの増設された師団をそのまま残して第13～第16師とし、さらに第17、第18師団の２箇師団を増設している。これは、1907年（明治40）9月17日軍令陸第３号をもって陸軍管区表の改正が行なわれ、第17師団は岡山県御津郡伊島村（現・岡山市）に創設することが決定した結果である。用地の整地工事は同年８月に着手し、最初に騎兵営舎が12月10日に竣工し、次いで1908年に工兵営舎、司令部、歩兵営舎が完成し、11月上旬の歩兵部隊の収容を最後に第17師団が完成としている。

註３　石田　寛「岡山市域の条里」『岡山市史　古代編』岡山市史編集委員会　1962

総合グラウンドはほぼ方六町、つまり、一里の面積をしめて条里の基線にも沿うている。比定されている伊福郷高山里のほとんどがそのまま総合グラウンドになっている。

◎今回の条里線に想定される溝群は、津島郷楠本里と伊福郷高山里との境界（郷・里）として存在した可能性が高いものと考えられる。

◎文化庁の指示に基づいた西北部の発掘調査結果は、弥生時代以後の低湿地であると判断された。八幡一郎氏ら文化財保護審議会委員による現地視察後、文化庁は報告に基づき、北西部については記録保存の後、武道館建設を承認した。

報告書抄録

ふりがな	つしま いせき
書名	津島遺跡２
副書名	武道館建設当初予定地の発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	151
編著者名	正岡睦夫・高畑知功・平井　勝
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701－0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　ＴＥＬ086－293－3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700－8570　岡山県岡山市内山下2-4-6　ＴＥＬ086－224－2111
発行年月日	西暦　2000年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
つしま 津島遺跡	おかやましいずみちょう 岡山市いずみ町 2番1号 おかやまけんそうごう 岡山県総合グラウンド内	33201		34° 40′ 15″	133° 55′ 17″	680528～ 0624 680816～ 0925 690224～ 0422 690819～ 0930	約3,000	岡山武道館建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
津島遺跡	集落 水田 墓	弥生時代	竪穴住居　２軒 掘立柱建物　３棟 舟形土壙　５基 土壙　37基 溝　８条 水田	石包丁・石製円板 松菊里式土器	前期の遺構から石包丁・石製円板の未製品出土
		古墳時代	溝　2条		
		古代～中世	土壙墓　2基 土壙列　2基 水田（条里）		

1　現在の岡山県総合グラウンド
〈星印が武道館建設当初予定地〉
（北東から）

2　現在の津島遺跡
〈武道館建設当初予定地〉
（北から）

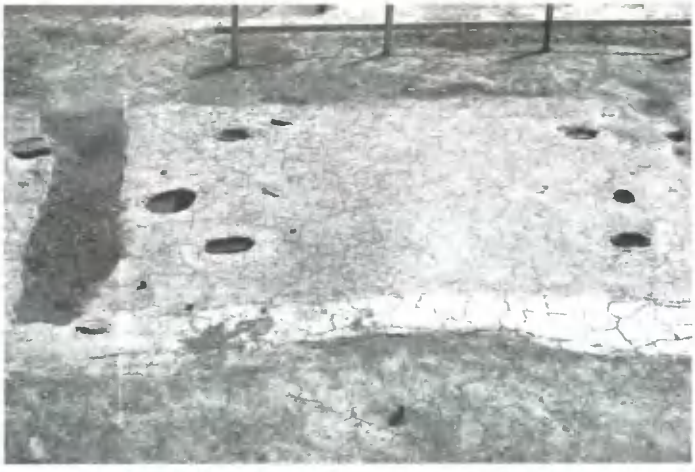
3　作業風景（昭和43年）

図版2

1　調査区の近景〈C・D区〉（南から）

2　調査区の近景〈A・B区〉（南西から）

1　掘立柱建物1
（西から）



2　掘立柱建物2
（北東から）

3　壁立建物1
（北から）

図版4

1　舟形土壙１（西から）

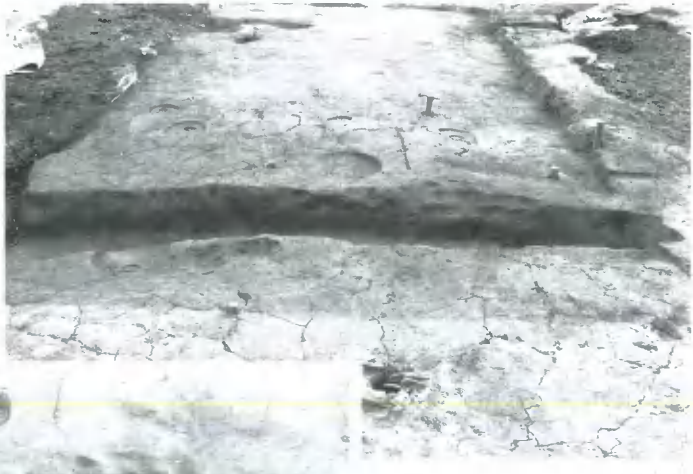
2　舟形土壙１の東半部遺物出土状態（東から）

3　舟形土壙２の遺物出土状態（南西から）

4　舟形土壙２（南から）

1　舟形土壙３
（北から）

2　舟形土壙４
（北から）



3　舟形土壙４の遺物出土状態
（北から）

図版6

1　舟形土壙５の遺物出土状態（北東から）

2　東南トレンチの微高地と杭痕跡４（南から）

1　杭列1の断面
（南から）

2　杭列1（東から）

3　杭列2（東から）

図版8

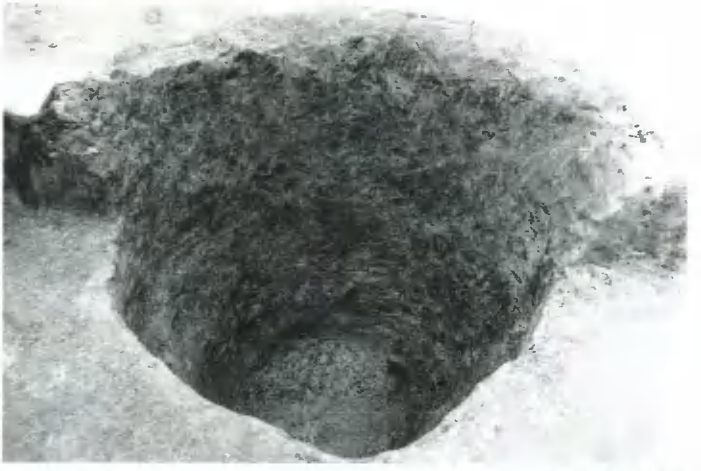
1　ＴⅢ－２の矢板状杭痕跡２（南から）

2　矢板状杭痕跡２の拡大（東から）

3　木器の出土状態

4　木器の出土状態

1　土壙24（北から）



2　祭祀土壙
（南から）

3　溝13～17
（南西から）

図版10

1　土壙墓１・２
（西から）

2　畦状遺構（東から）

3　畦状遺構と土壙列（西から）

25

26

27

28

24

29

52

34

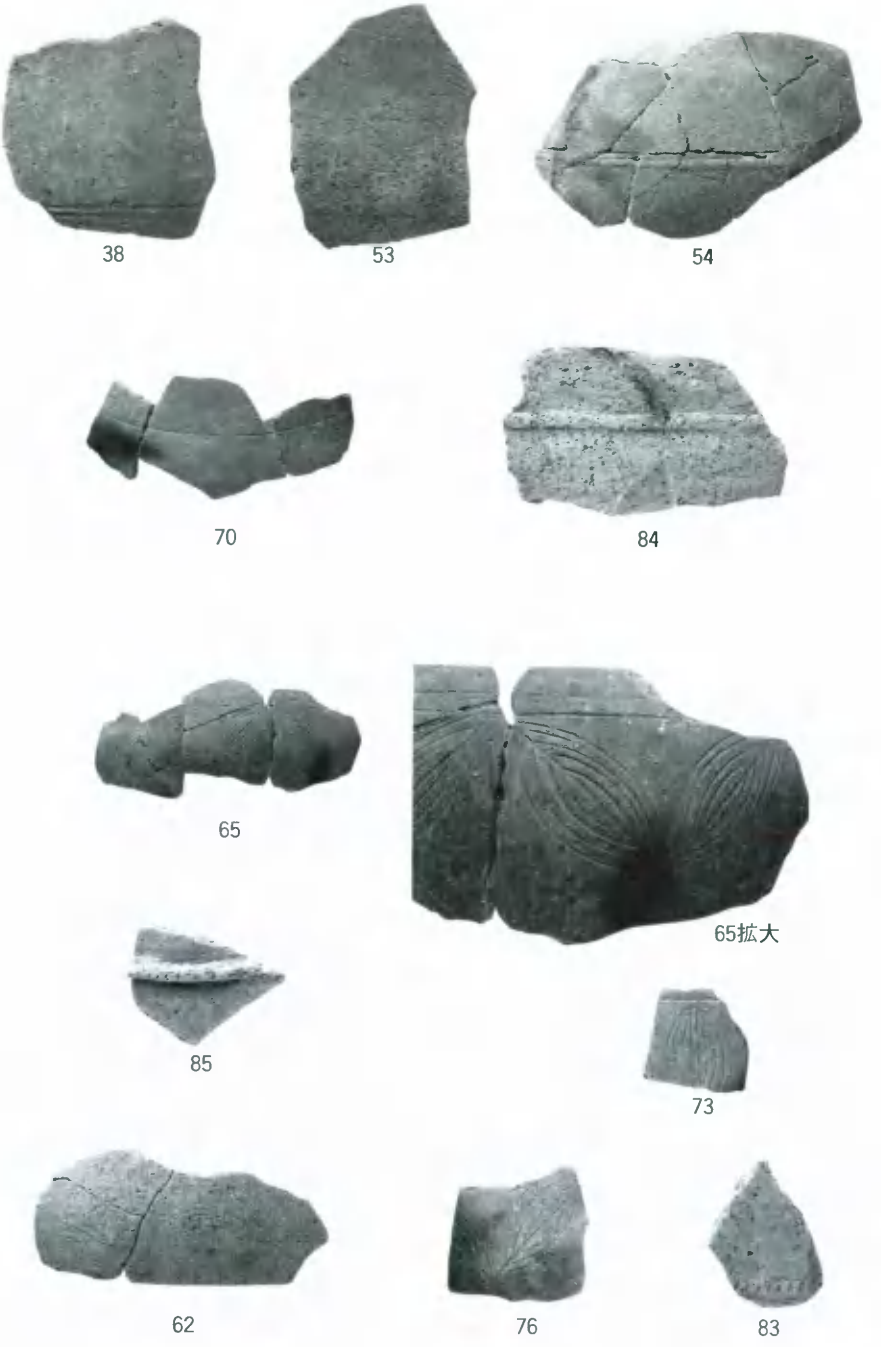
35

37

58

1　舟形土壙１出土の土器（１）

図版12



1　舟形土壙１出土の土器（２）

105

109

87

97

103

108

110

111

1　舟形土壙１出土の土器（３）

132

134

140

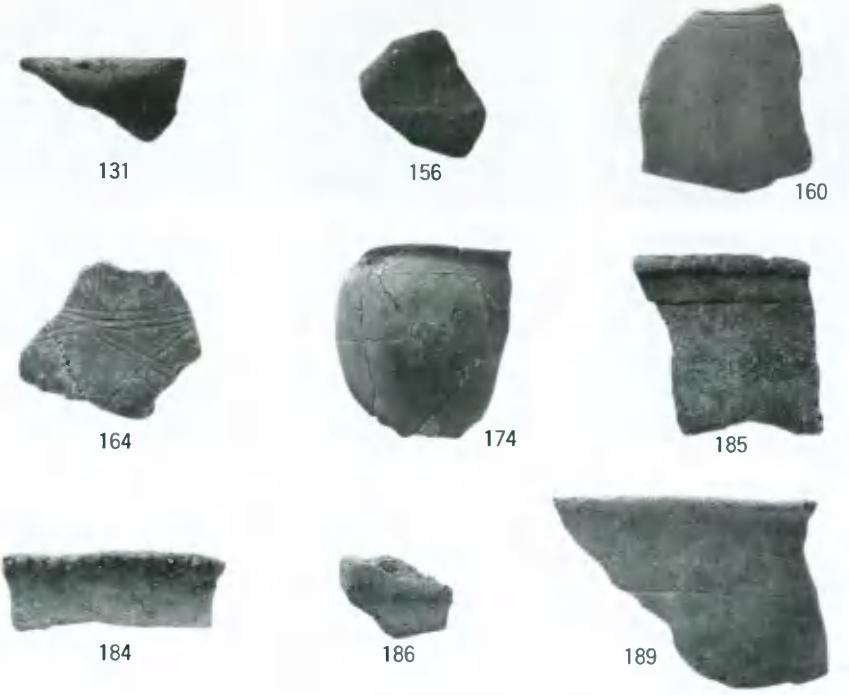
151

175

177

2　舟形土壙２出土の土器（１）

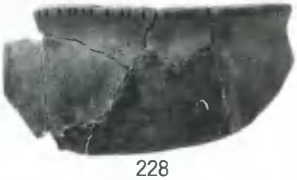
図版14



1　舟形土壙２出土の土器（２）

2　舟形土壙３出土の土器（１）

227


228

223

206

231

231拡大

1　舟形土壙３出土の土器（２）

272

253

253拡大

277

269

269拡大

2　舟形土壙４出土の土器（１）

図版16

255

258

287

276

280

289

290

292

284

297

297拡大

298

298拡大

1　舟形土壙４出土の土器（２）

283

286

303

303拡大

285

309

309拡大

308

313

304

1　舟形土壙４出土の土器（３）

図版18

317

318

319

324

328

334

326

332

332拡大

1　舟形土壙５出土の土器

392

394

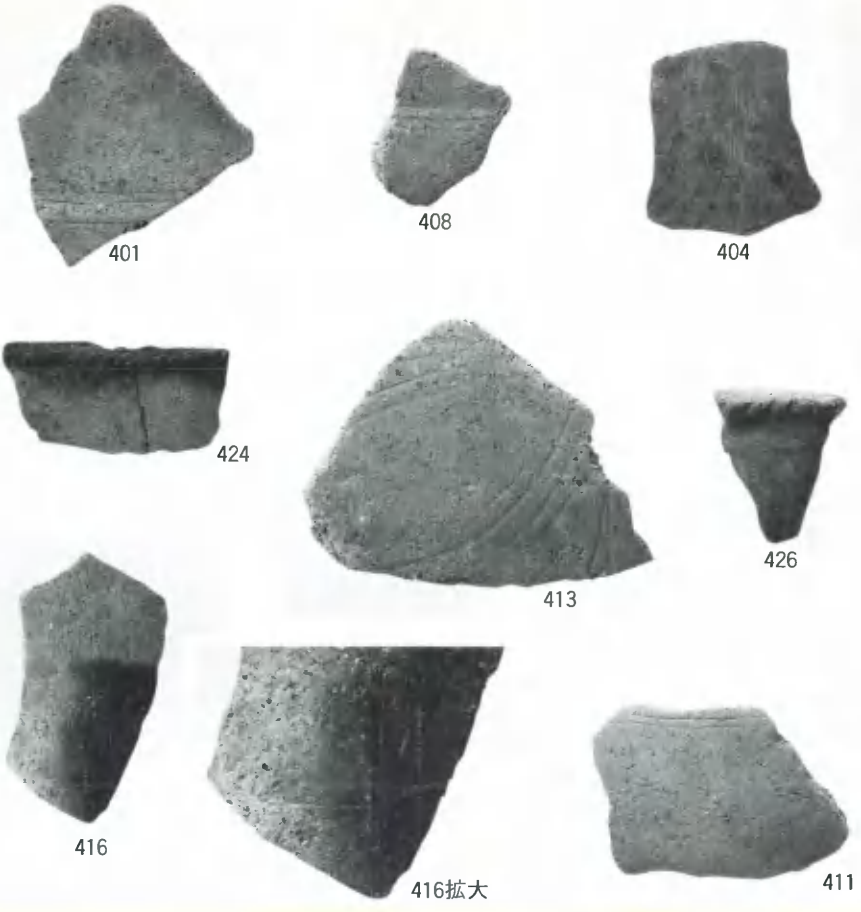
394口縁部内面の拡大

399

413

414

2　土壙31出土の土器（１）



1　土壙31出土の土器（2）

2　包含層出土の土器（弥生時代中期）（1）

図版20

588

590

591

605

604口縁部内面の拡大

592

604

604拡大

599

612

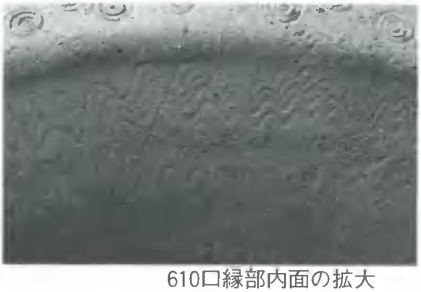
608

608拡大

1　包含層出土の土器（弥生時代中期）（２）

609

609拡大

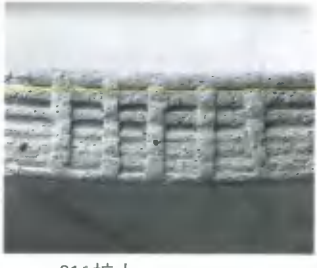


610口縁部内面の拡大

610

610拡大

611拡大



611拡大

611

1　包含層出土の土器（弥生時代中期）（３）

図版22

617

618

628

645

632

649

633

650

651

1　包含層出土の土器（弥生時代後期）

C1

舟形土壙 2

C2

舟形土壙 3

C3

土壙34

C4

C5

1　土製品

S1

S5

S2

S3

S4

舟形土壙 1

2　石製品（1）

S7

S6

S8

S9

S10

舟形土壙 2

S11

S12

舟形土壙 3

S13

S14

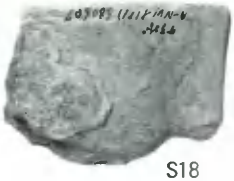
S15

S16

S17

舟形土壙 4　　舟形土壙 5

1　石製品（2）


S18

土壙32

S19

S20

土壙34

S21

S22

S23

S24

S25

S26

土壙36

S27

S28

S29

土壙31

S31

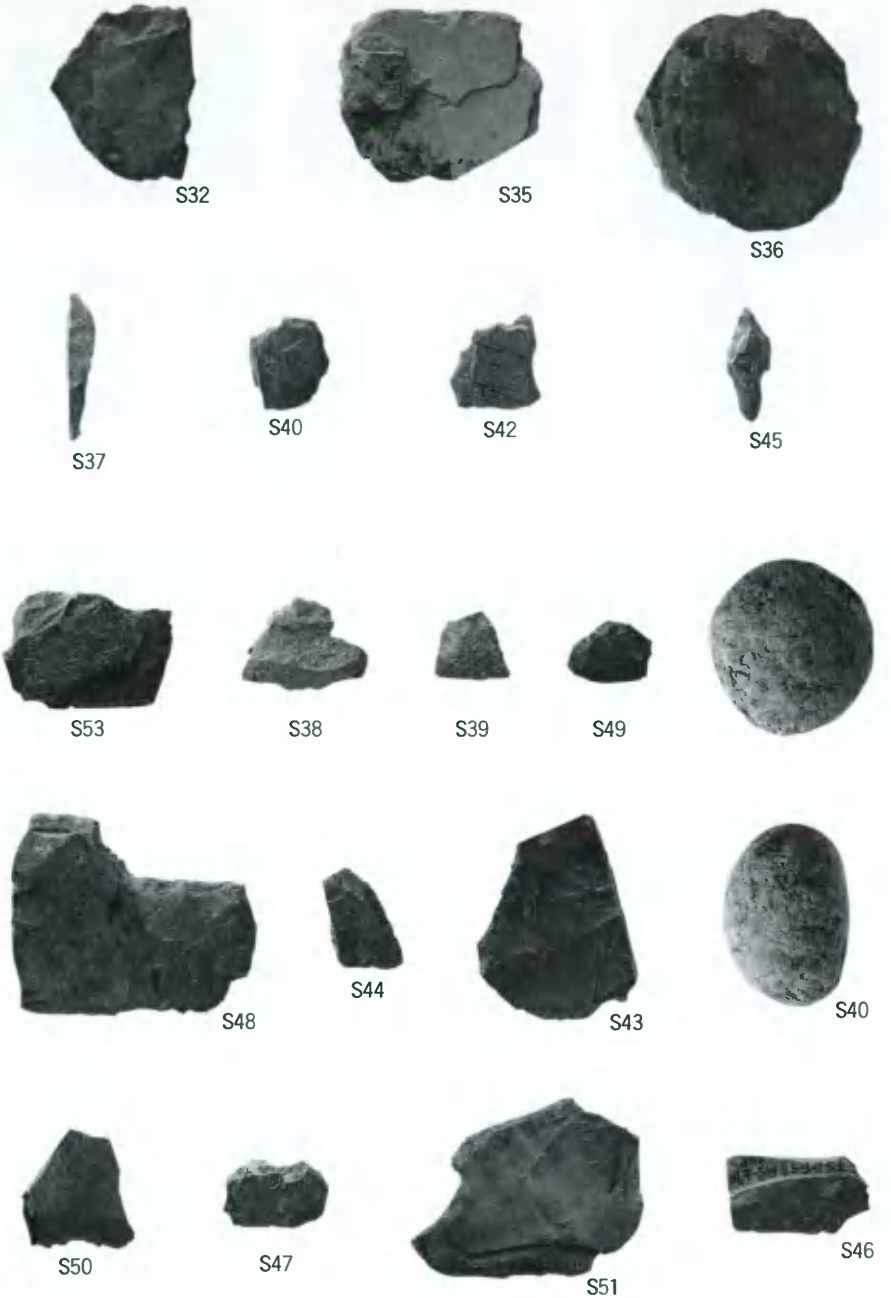
S33

S34

包含層

1　石製品（3）

図版26



包含層

1　石製品（4）

S54

S52

S55

S65

S73

S56

S77

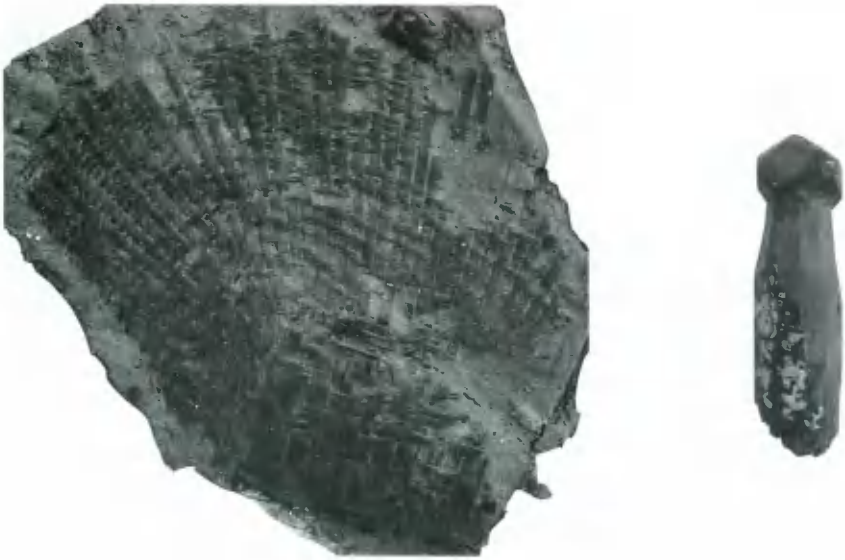
包含層

1　石製品（5）

2　舟形土壙２出土の磨製石包丁
（実物は現存していない）

3　土壙２出土のきぬた状木器
（実物は現存していない）

図版28



1　土壙２出土のカゴと木製品（実物は現存していない）

2　石製品（実物は現存していない）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151

津島遺跡2

武道館建設当初予定地の発掘調査

平成12年３月16日　印刷
平成12年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
　　岡山市西花尻1325－3
発　行　岡山県教育委員会
　　岡山市内山下２－４－６
印　刷　旭総合印刷株式会社
　　岡山市内山下２－10－３